風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書 23

魚見塚古墳・東淵寺古墳発掘調査報告書

－松江市東部における古墳の調査（２）－

2016. 3

島根県教育委員会

魚見塚古墳・東淵寺古墳発掘調査報告書

－松江市東部における古墳の調査（２）－

2016. 3

島根県教育委員会

序

島根県教育委員会では、県内に所在する重要遺跡の保護を図るため、遺跡の範囲及び性格を確認する調査を継続しておこなっています。

本報告書は国庫補助を得て平成23年度から26年度に実施した、松江市東部に所在するふたつの重要古墳に関する調査の記録です。このうち東淵寺古墳は、古代出雲の政治文化の中心地で貴重な遺跡が集中する八雲立つ風土記の丘地内に所在しています。同古墳は、古墳時代後期の大型古墳として知られていましたが、これまで墳丘形態や規模等については不明なままでした。今回の調査によって、前方後円墳であることが明らかとなりました。

また、魚見塚古墳は、風土記の丘地内に隣接する遺跡集中地区に所在しています。かねてから出雲を代表する前方後円墳として著名な存在でしたが、規模や築造年代など不明な点が多く、今回初めて発掘調査を実施いたしました。調査の結果、古墳時代後期に築造されたことが明らかとなりました。

いずれの古墳も、今回の調査により、将来的な遺跡の保護活用を図るための基礎資料を得ることができました。本書が、地域の人々や未来を担っていく若者たちの、歴史と文化財への理解と関心を深める一助となれば幸いです。

最後になりましたが、この調査を進めるにあたり、ご指導・ご協力を頂きました関係者・関係各位の方々に深く感謝の意を表します。

平成28年3月

島根県教育委員会

教育長　　藤　原　孝　行

例　言

1．本書は平成 23 年度から 26 年度にかけて実施した魚見塚古墳及び東淵寺古墳の調査結果をまとめたものである。調査は県内の重要遺跡の保護・活用を図ることを目的とし、文化財保存事業費埋蔵文化財調査費補助金（県内遺跡発掘調査等）を受け実施した。

2．本書で報告する遺跡は下記のとおりである。

魚見塚古墳（松江市朝酌町）

東淵寺古墳（松江市大庭町）

3．この調査事業は島根県教育庁埋蔵文化財調査センターと古代文化センターが実施した。調査組織は別記のとおりである。

4．本書に使用した東淵寺古墳の測量図および調査成果の一部は、松江市教育委員会、本庄考古学研究室が実施した成果を用いており、それぞれ作成者の許可を得ている。東淵寺古墳出土資料のうち松江市教育委員会調査時の出土遺物は松江市教育委員会所蔵であり、それ以外の図面、写真と出土遺物は埋蔵文化財調査センターで保管している。

5．魚見塚古墳及び東淵寺古墳の挿図中の北は測量法に基づく平面直角第Ⅲ系のＸ軸方向を指し、座標系のＸＹ座標は世界測地系による。レベル高は海抜を示す。また挿図には国土地理院発行 1/25,000 地形図を使用した。

6．調査にあたり、土地所有者の皆様をはじめ、松江市教育委員会、大庭公民館、朝酌公民館、朝酌矢田地区自治会など地元住民の皆様には物心にわたりご協力をいただいた。また、島根大学大橋泰夫氏、岩本崇氏、松江北高等学校大谷晃二氏、岡山市教育委員会乗岡実氏、愛媛大学ミュージアム吉田広氏、出雲弥生の森博物館渡邊貞幸氏には、多くのご助言をいただいた。また島根大学平郡達哉氏、松江市教育委員会飯塚康行氏、赤澤秀則氏、川上昭一氏、日野一輝氏、丹羽野輝子氏、出雲市教育委員会坂本豊治氏、安部百合子氏、八雲立つ風土記の丘松本岩雄氏、高屋茂男氏、今井智恵氏、今岡利江氏、鳥取県立博物館酒井雅代氏、米子市埋蔵文化財センター佐伯純也氏には、発掘調査資料の掲載や関連資料調査について便宜を図っていただいた。記して感謝の意を表します。

7．本書の編集は埋蔵文化財調査センター池淵俊一、岩本真実が行った。執筆者は目次に記した。

調査体制

【事務局】

平成 23 年度

松本岩雄（文化財課長）西尾克己（古代文化センター長）川原和人（埋蔵文化財調査センター所長）三島　伸（同総務グループ課長）丹羽野　裕（同管理グループ課長）

平成 24 年度

祖田浩志（文化財課長）丹羽野　裕（古代文化センター長）廣江耕史（埋蔵文化財調査

センター所長）三島　伸（同総務グループ課長）

平成 25・26 年度

野口　弘（文化財課長）丹羽野　裕（古代文化センター長）廣江耕史（埋蔵文化財調査センター所長）渡部宏之（同総務課長）

平成 27 年度

丹羽野　裕（文化財課長）佐藤正範（古代文化センター長）廣江耕史（埋蔵文化財調査センター所長）渡部宏之（同総務課長）

【調査担当者】

平成 23 年度

（古代文化センター）西尾克己、椿　真治、角田徳幸

（埋蔵文化財調査センター）丹羽野　裕、宮本正保、勝部智明、神柱靖彦、稲田陽介（東淵寺古墳調査主担当）

平成 24 年度

（古代文化センター）松尾充晶、仁木　聡

（埋蔵文化財調査センター）池淵俊一（東淵寺古墳・魚見塚古墳調査主担当）、宮本正保、勝部智明、稲田陽介

平成 25 年度

（古代文化センター）松尾充晶、仁木　聡

（埋蔵文化財調査センター）池淵俊一（魚見塚古墳調査主担当）、原田敏照（東淵寺古墳調査主担当）、勝部智明

平成 26 年度

（古代文化センター）間野大丞、松尾充晶

（埋蔵文化財調査センター）池淵俊一、岩橋孝典、神柱靖彦（東淵寺古墳調査主担当）

平成 27 年度

（古代文化センター）間野大丞、岩橋孝典、稲田陽介

（埋蔵文化財調査センター）池淵俊一（報告書作成担当）、是田　敦

【測量・発掘調査参加者】

（埋蔵文化財調査センター）川原和人、人見麻生、糸川（福田）沙織、岩本真実、飯塚由起、田中玲子

本文目次

第1章　調査の経過 ……（池淵）1
　第1節　調査に至る経緯 ……1
　第2節　調査の経過 ……3
　　1. 発掘調査の経過 ……3
　　2. 整理等作業の経過 ……4
第2章　位置と環境 ……（池淵）5
　第1節　遺跡の位置と地理的環境 ……5
　第2節　歴史的環境 ……5
第3章　魚見塚古墳の発掘調査 ……（池淵）9
　第1節　調査及び研究略史 ……9
　第2節　発掘調査の成果 ……11
　　1. 古墳の現況と測量調査結果 ……11
　　2. 第1トレンチ ……15
　　3. 第2トレンチ ……15
　　4. 第3・第9トレンチ ……19
　　5. 第3トレンチ拡張調査区 ……25
　　6. 第4トレンチ ……28
　　7. 第5・6トレンチ ……29
　　8. 第7トレンチ ……32
　　9. 第8トレンチ ……34
　第3節　小結 ……36
　　1. 調査知見のまとめ ……36
　　2. 墳丘形態・規模の復元について ……37
　　3. 墳丘構築法について ……39
　　4. 魚見塚古墳の築造年代について ……40
第4章　東淵寺古墳の発掘調査 ……43
　第1節　調査及び研究略史 ……（池淵）43
　第2節　発掘調査の成果 ……45
　　1. 古墳の現況と測量調査結果 ……（池淵）45
　　2. 平成23年度の調査 ……（稲田・池淵）45
　　（1）第1トレンチ ……46
　　（2）第2トレンチ ……51
　　3. 平成24年度の調査 ……（池淵）54
　　（1）第3トレンチ ……54
　　4. 平成25年度の調査 ……（池淵）62
　　（1）第4トレンチ ……62
　　（2）第5トレンチ ……63
　　（3）第6・7トレンチ ……63

5. 平成 26 年度の調査 ……………………………………………（神柱・池淵）69
（1）第 8 トレンチ ……………………………………………………70
（2）第 9 トレンチ ……………………………………………………71
（3）第 10 トレンチ …………………………………………………71
第 3 節　松江市教育委員会実施の調査 ……………………（飯塚康行・池淵）72
1. 平成 14 年度の確認調査 ……………………………………………72
2. 平成 26 年度八重垣神社竹矢線拡幅に伴う立会調査 ………………74
3. その他の松江市教育委員会による確認調査 ………………………75
第 4 節　小結 ……………………………………………………（池淵）76
1. 調査知見のまとめ ……………………………………………………76
2. 東淵寺古墳の墳丘形態について ……………………………………76
3. 東淵寺古墳の築造時期について ……………………………………78
第 5 章　自然科学分析 ………………………………………………………81
第 1 節　魚見塚古墳発掘調査に先立つ高密度電気探査 ………（渡辺正巳・岡田浩二）81
第 6 章　総括 …………………………………………………………………86
第 1 節　出土須恵器からみた魚見塚古墳・東淵寺古墳の年代的位置づけ …………（岩本）86
第 2 節　出雲東部における魚見塚古墳・東淵寺古墳の歴史的位置 …………（池淵）96

挿図目次 1

第 1 図　魚見塚古墳・東淵寺古墳の位置 ……1
第 2 図　東淵寺古墳の現地説明会（平成 23 年度）……3
第 3 図　魚見塚古墳の現地説明会（平成 25 年度）……3
第 4 図　魚見塚古墳の調査指導会（平成 24 年度）……4
第 5 図　東淵寺古墳の調査指導会（平成 25 年度）……4
第 6 図　調査古墳周辺の遺跡位置図 ……6
第 7 図　島根大学考古学研究会による魚見塚古墳測量図 ‥9
第 8 図　魚見塚古墳の測量図と出土遺物（渡辺 1986）‥10
第 9 図　昭和 37 年の魚見塚古墳 ……11
第 10 図　魚見塚古墳周辺地形測量図 ……12
第 11 図　魚見塚古墳トレンチ配置図 ……13
第 12 図　T1 実測図 ……14
第 13 図　T2 実測図 ……16
第 14 図　T2 出土遺物実測図（1）……18
第 15 図　T2 出土遺物実測図（2）……19
第 16 図　T3・T9 実測図 ……21
第 17 図　T3・T9 SD02 実測図 …… 22
第 18 図　T3・T9 SD02 遺物出土状況 …… 23
第 19 図　T3 出土遺物実測図 ……24
第 20 図　T3・T9 SD02 出土遺物実測図 ……25
第 21 図　T3 拡張調査区実測図 ……26
第 22 図　T3 拡張調査区出土遺物実測図 ……27
第 23 図　T4 実測図 ……28
第 24 図　T5・6 実測図（1）……29
第 25 図　T5・6 実測図（2）……30
第 26 図　T5・6 出土遺物実測図（1）…… 31
第 27 図　T5・6 出土遺物実測図（2）……32
第 28 図　T7 実測図 ……33
第 29 図　T7 出土遺物実測図 ……34
第 30 図　T8 実測図 ……35
第 31 図　T8 出土遺物実測図 ……36
第 32 図　その他出土遺物実測図 …… 36
第 33 図　魚見塚古墳墳丘復元図 …… 37
第 34 図　墳丘面と SD02 との関係（T3）……38
第 35 図　大型古墳の墳丘高の変化 ……40
第 36 図　出雲における大型古墳の墳頂平坦面の変化 ‥‥41
第 37 図　出雲における大型古墳の墳丘面傾斜の変化 ‥‥41
第 38 図　明治 8 年作成の旧大庭村切図 ……43
第 39 図　東淵寺古墳の測量図 ……44
第 40 図　東淵寺古墳周辺地形測量図 ……46
第 41 図　東淵寺古墳調査区配置図 ……47
第 42 図　T1 実測図 ……48
第 43 図　東淵寺古墳付近所在石造物 …… 49
第 44 図　T1 出土遺物実測図（1）……50
第 45 図　T1 出土遺物実測図（2）……50
第 46 図　T2 実測図 ……52
第 47 図　T2 出土遺物実測図（1）……53
第 48 図　T2 出土遺物実測図（2）……53
第 49 図　T2 と T3 との関係 …… 54
第 50 図　T3 実測図 ……55
第 51 図　T3 遺物出土状況 …… 56
第 52 図　T3 SK03・Pit1 実測図 ……57
第 53 図　T3 出土遺物実測図（1）……58
第 54 図　T3 出土遺物実測図（2）……59
第 55 図　T3 出土遺物実測図（3）……60
第 56 図　T3 出土遺物実測図（4）……61
第 57 図　T2・T3 出土遺物実測図 ……61
第 58 図　T4 出土遺物実測図 ……63
第 59 図　T4 実測図 ……64
第 60 図　T5 出土遺物実測図 ……65
第 61 図　T5 実測図 ……65
第 62 図　T6・7 実測図 …… 66
第 63 図　T6・7 遺物出土状況 ……67
第 64 図　T3 と T6・7 との関係 ……68
第 65 図　T6・7 出土遺物実測図（1）……69
第 66 図　T6・7 出土遺物実測図（2）……70
第 67 図　T8 ～ 10 調査区配置図 ……71
第 68 図　T8 ～ 10 実測図 …… 71
第 69 図　平成 14 年度松江市教育委員会調査 T-1・T-2 実測図 ……72
第 70 図　平成 14 年度松江市教育委員会調査 T-3 実測図 … ……73

挿図目次２・表目次

第 71 図　平成 14 年度松江市教育委員会調査出土遺物実測図 ……74
第 72 図　平成 26 年度松江市教育委員会立会調査区実測図 ……75
第 73 図　東淵寺古墳墳丘復元想定図 ……77
第 74 図　出雲型子持壺Ｃ型比較図 …… 79
第 75 図　測線の配置 ……81
第 76 図　２極法の電極配置 ……81
第 77 図　２次元逆開析フロー …… 81
第 78 図　減衰曲線 ……83
第 79 図　比抵抗（垂直）断面図 …… 84
第 80 図　比抵抗（垂直）断面図（補正済）……84
第 81 図　パネルダイアグラム（Ａ測線補正）……85
第 82 図　パネルダイアグラム（Ｂ測線補正）……85
第 83 図　比抵抗（水平）断面図 …… 85
第 84 図　各部位の計測位置 …… 86
第 85 図　たちあがり高と受け部径・内傾率の変化 ……88
第 86 図　出雲東部における須恵器の変遷と魚見塚古墳・東淵寺古墳（１）……90
第 87 図　出雲東部における須恵器の変遷と魚見塚古墳・東淵寺古墳（２）……91
第 88 図　直口壺の分類と変遷 ……92
第 89 図　無蓋高坏Ａ型の変遷 …… 93
第 90 図　手間古墳と中期前方後円墳との比較 ……97
第 91 図　出雲における古墳時代中期の主要古墳 ……97
第 92 図　意宇平野周辺の６世紀代の主要古墳 ……98
第 93 図　出雲東部における 5･6 世紀の首長墓の変遷 … 99
第 94 図　額田部臣氏関連地図 ……100
第 95 図　六重城南１号墳・地王砦出土鉄器 ……101
第 96 図　魚見塚古墳・手間古墳の比較 ……102
第 97 図　出雲における８～ 10 期の埴輪出土古墳の分布 ……104
第 98 図　東淵寺・上塩冶築山古墳出土の埴輪・子持壺 ……105
第 99 図　東淵寺・上塩冶築山古墳出土埴輪のハケメパターン …… 105

表１　墓制調査事業における年度別調査古墳一覧 ……2
表２　出雲型子持壺Ｃ型属性一覧 ……79
表３　測定データ ……82
表４　坏と高坏におけるたちあがり高の比較 ……87
表５　出雲の大型前方後円墳 ……96
表６　魚見塚古墳　遺物観察表 …… 108
表７　東淵寺古墳　遺物観察表 …… 111

図版目次 1

図版 1．1．魚見塚古墳遠景（南から）
2．魚見塚古墳近景（東から）
図版 2．1．T1 完掘時（東から）
2．T1 完掘時（西から）
3．T1 南壁セクション（北東から）
図版 3．1．T2 調査前（南から）
2．T2 盛土上面検出時（南から）
3．T2 墳裾付近検出状況（南から）
4．T2 須恵器出土状況（北から）
5．T2 須恵器子持壺出土状況（南から）
図版 4．1．T2 東壁セクション（南西から）
2．T2 東壁セクション拡大（西から）
図版 5．1．T2 西壁セクション（南東から）
2．T2 墳丘下遺構検出状況（南から）
3．T2 東壁墳端付近セクション（西から）
4．T2 調査風景（南から）
図版 6．1．T3 盛土上面検出時（西から）
2．T3 SD02 検出時（東から）
3．T3 北壁セクション（南西から）
図版 7．1．T3 SD02 完掘時（東から）
2．T3 SD02 須恵器出土状況（北東から）
図版 8．1．T3 SD02 須恵器出土状況（南から）
2．T3 南壁セクション（北から）
図版 9．1．T3 墳端付近（西から）
2．T3 南壁墳裾セクション（北から）
3．T4 遺構面検出状況（西から）
図版 10. 1．T4 完掘時（東から）
2．T4 完掘時（西から）
3．T4 南壁セクション（北から）
4．T3 拡張調査区盛土上面検出時（西から）
5．T5・6 中央ベルトセクション（北から）
図版 11. 1．T5・6 盛土上面検出時（西から）
2．T3・T5・6（南西から）
図版 12. 1．T3・T5・6（西から）
2．T5・6 東西たち割りセクション（西から）
3．T5・6 南北たち割りセクション（南から）
図版 13. 1．T7（北東から）
2．T7（南から）
図版 14. 1．T7 北壁セクション（南から）
2．T8 東壁セクション（西から）
3．T8 全景（北から）
4．T8 墳丘面検出状況（北から）
5．T8 SI02（西から）
6．T8 SI02 セクション（南から）
図版 15. 1．T8 墳丘たち割りセクション（西から）
2．T8 盛土下 SI03（南から）
3．T9 SD02 検出状況（東から）
図版 16. 1．SD02 完掘時（東から）
2．SD02（西から）
3．SD02 完掘時（北東から）
4．SD02 全景及びセクション（北東から）
図版 17. 1．魚見塚古墳　T2 出土須恵器
2．魚見塚古墳　T5・6 出土須恵器
図版 18. 1．魚見塚古墳　T2 出土須恵器
2．魚見塚古墳　T2 出土須恵器・土師器
図版 19. 1．魚見塚古墳　T3・T3 拡張調査区出土須恵器
2．魚見塚古墳　T3・T3 拡張調査区出土土師器・弥生土器
図版 20. 1．魚見塚古墳　T2・T3・T8・T9 出土須恵器
図版 21. 1．魚見塚古墳　T3・T3 拡張調査区・T5・6 出土遺物
図版 22. 1．魚見塚古墳　T3・T5・6 出土須恵器
2．魚見塚古墳　T5・6 出土須恵器
図版 23. 1．魚見塚古墳　T5・6・T7 出土遺物
図版 24. 1．魚見塚古墳　T3・T3 拡張調査区・T5・6 出土遺物
2．魚見塚古墳　T7・T8・その他出土遺物
図版 25. 1．東淵寺古墳の位置（昭和 23 年米軍撮影）
2．東淵寺古墳調査前（西から）
図版 26. 1．T1 表土除去時（西から）
2．T1 SK01 プラン検出時（南から）
3．T1 西付近所在地蔵（東から）

図版目次２

４．T1 周溝プラン検出状況（西から）

５．T1 周溝プラン検出状況（東から）

図版 27. １．T1 周溝内遺物出土状況（西から）

２．T1 周溝内遺物出土状況（南から）

３．東淵寺古墳安全パトロール巡視時

４．T1 墳丘盛土セクション（南西から）

図版 28. １．T1 東壁セクション（西から）

２．T1 墳丘盛土セクション（南西から）

３．T1 周溝内セクション（南西から）

４．T2 全景（西から）

５．T2 全景（東から）

図版 29. １．T2 周溝内遺物出土状況（東から）

２．T2 墳裾付近検出状況（南から）

３．T2 周溝内遺物出土状況（西から）

４．T2 周溝内埴輪出土状況（北から）

図版 30. １．T3 調査風景（西から）

２．T3 周溝内遺物出土状況（北東から）

図版 31. １．T3 周溝内遺物出土状況（北東から）

２．T3 周溝内遺物出土状況（南から）

３．T3 周溝内遺物出土状況（東から）

４．T3 周溝内埴輪出土状況（南から）

５．T3 南壁墳裾付近セクション（北西から）

図版 32. １．T3 北壁墳丘たち割りセクション（南西から）

２．T3 東・北壁セクション（西から）

３．T3 南壁墳丘たち割りセクション（北西から）

４．T3 ピット 1 遺物出土状況

５．T3 完掘時（西から）

図版 33. １．T3 完掘時（東から）

２．T3 盛土上面検出状況（北から）

３．T3 周溝底面検出状況（東から）

４．T3 SK04（北から）

５．T3 SK03 セクション（北から）

図版 34. １．T4 全景（南から）

２．T4 石材検出状況（北西から）

３．T4 石材検出状況（西から）

４．T4 サブトレ東壁セクション（北から）

図版 35. １．T4 サブトレ西壁南部セクション（南東から）

２．T4 サブトレ西壁北部セクション（南東から）

図版 36. １．T5 全景（南から）

２．T6・7 周溝内遺物出土状況（南から）

３．T6・7 周溝内遺物出土状況細部（南から）

図版 37. １．T6・7 周溝内遺物出土状況（北から）

２．T6・7 周溝内遺物出土状況細部（北から）

３．T6・7 完掘状況（南から）

４．T6・7 くびれ部細部（南から）

図版 38. １．T6・７完掘時（北西から）

２．T6・7 東側調査区（西から）

３．T6・7 西壁セクション（東から）

４．T6・7 南壁セクション（北西から）

５．第 3 次調査参加者

図版 39. １．平成 26 年度調査区 調査前（北から）

２．T8（東から）

３．T9（東から）

４．T10（北から）

５．松江市教育委員会立会調査区（南から）

６．松江市教育委員会立会調査区 SD01（南から）

図版 40. １．東淵寺古墳　T1 出土遺物

２．東淵寺古墳　T2 出土須恵器

図版 41. １．東淵寺古墳　T1・T2・T3 出土遺物

図版 42. １．東淵寺古墳　T3 出土須恵器

２．同上

図版 43. １．東淵寺古墳　T3 出土須恵器

図版 44. １．東淵寺古墳　T3 出土須恵器・埴輪

図版 45. １．東淵寺古墳　T2・T3・T4・T5・T6 出土遺物

図版 46. １．東淵寺古墳　T6・7 出土遺物

表紙　魚見塚古墳（南西から）

第 1 章　調査の経過

第 1 節　調査に至る経緯

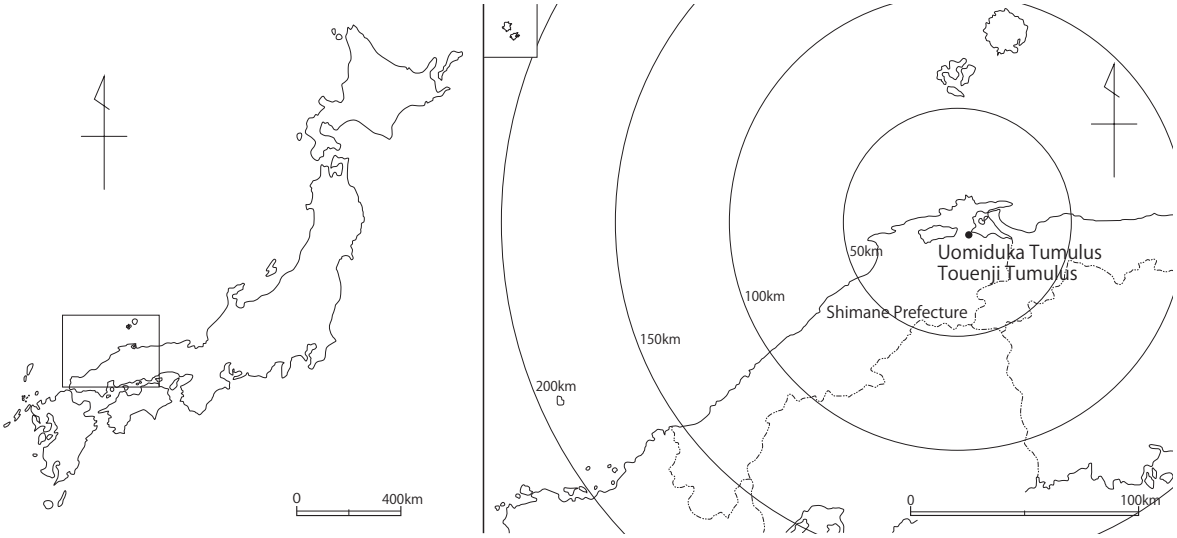
八雲立つ風土記の丘は松江市南部に広がる意宇平野の周辺一帯をエリアとし、ここには古代出雲の政治文化の中心であったことを如実に示す貴重な遺跡が数多く残されている。昭和 47 年に開所した時点においては、出雲国府跡や出雲国分寺、岡田山古墳などの史跡が整備・公開されたが、未指定・未整備の重要遺跡も少なくなかった。

このことから島根県教育委員会では、同地内の重要遺跡の保護を目的として継続的な調査を実施しており、そのなかで史跡山代郷正倉跡、史跡山代二子塚古墳、史跡山代郷北新造院跡（来美廃寺）などの重要遺跡の調査･整備を進めてきた。特に平成 11 年度からは史跡出雲国府跡の調査に着手し、平成 25 年度にはその成果を総括報告書として刊行し、現在に至っている。

近年当地内では、大橋川改修事業や大庭バイパスなどの大規模公共事業を契機として開発が急激に増加しつつある。開発の波は当該事業予定地内に所在する大庭町東淵寺古墳や地内隣接地である朝酌町魚見塚古墳近辺にも及ぶようになり、これら両古墳の保護と開発との調整を図る必要が生じてきた。

一方、島根県古代文化センターでは、「考古資料から見た地域間交渉調査事業」（その後「考古基礎資料調査研究事業」と改称）の一環として、県内の重要古墳についての測量・発掘調査を継続的に進めてきた。当事業では、主としてそれまで重要古墳でありながら詳細が不明であった松江市大橋川沿岸の大型古墳を対象として行い、その成果は平成 26 年度に島根県立古代出雲歴史博物館で開催された企画展「倭の五王と出雲の豪族」及びテーマ研究の報告書「前方後方墳と東西出雲の成立に関する研究」の刊行に結実している。

古代文化センターによる上記の大橋川流域の大型古墳の基礎調査が一段落した際に、新たな研究テーマとして俎上にあがったのは後期古墳である。当地域における後期古墳研究は、それまで実施してきた中期古墳と比較すると早い段階から研究者の関心を惹き、これまでに分厚い研究史が蓄積されている。しかし、その中でも古代出雲の中枢である意宇平野周辺に所在する 2 基の大型古墳、



第 1 図　魚見塚古墳・東淵寺古墳の位置

魚見塚古墳と東淵寺古墳については、その規模や内容からみて早い段階から注目されていたにもかかわらず、実態は不明なままであった。この二つの古墳が出雲の古墳時代史の実像を解明する大きな鍵を握っている点に関しては誰しも異論のないところであった。

このような経緯もあって、平成 23 年度からはこれら地内及びその隣接に位置する 2 基の大型古墳を対象として、その範囲内容を把握し今後の保護施策のための基礎資料を得ることを目的として調査に着手するに至ったのである。

調査は、平成 23 年度の東淵寺古墳の調査から着手した。当面は 2 ヶ年での調査計画を考えていたが、古墳周辺の地形改変が著しい点などから墳形確定に手間取り、結果として平成 26 年度までの延べ 4 年を費やすに至った。一方の魚見塚古墳については、東淵寺古墳の調査と併行しつつ平成 24 年度から 2 ヶ年の計画で調査に着手した。初年度である 24 年度は古墳の遺存状況の確認を行う程度のトレンチ数本の調査を実施し、2 年目の 25 年度には、これまで墓制調査で実施してきた古墳の範囲内容確認に加え、埋葬施設の位置や一部内容の確認を含めた、やや規模の大きい調査を実施する計画を立てた。埋葬施設探索を調査対象とすることに関しては、客員研究員の一部からは、中途半端な調査となり古墳の遺存状況にも影響を与えかねないといった意見もあったが、客員研究員も含め、これまでの墓制調査から一歩踏み込んだ調査を行い、さらには当古墳の保存活用につなげていくという意見が最終的には承認され、調査が実施される運びとなった。

表 1　墓制調査事業における年度別調査古墳一覧

年度（元号）	調査対象古墳	所在地	報告書名	調査の概要
8・9 年度	丹花庵古墳	松江市古曽志町	大谷晃二他 1998「丹花庵古墳の測量調査」『古代文化研究』6 島根県古代文化センター	墳丘測量調査及び過去の出土品等の整理
8 ～ 10 年度	上塩冶築山古墳	出雲市上塩冶町	島根県古代文化センター 1999『上塩冶築山古墳の研究』	過去の出土品の再整理等
11・12 年度	かわらけ谷横穴墓群	安来市植田町	島根県古代文化センター 2001『かわらけ谷横穴墓群の研究』	横穴墓の範囲内容確認調査及び過去の出土品の整理
13 年度	観音山古墳群	松江市西尾町	島根県古代文化センター 2004『松江市東部における古墳の調査』	墳丘の測量調査
13 ～ 14 年度	宮山古墳群	安来市西赤江町	島根県古代文化センター 2003『宮山古墳群の研究』	過去の調査の再整理
14 年度	廻田古墳群	松江市矢田町	島根県古代文化センター 2004『松江市東部における古墳の調査』	墳丘測量調査及び範囲確認調査
15 年度	大寺 1 号墳	出雲市東林木町	島根県古代文化センター 2005『大寺 1 号墳発掘調査報告書』	墳丘測量調査及び範囲確認調査
16 年度	北光寺古墳	出雲市東神西町	島根県古代文化センター 2007『北光寺古墳発掘調査報告書』	墳丘測量調査及び範囲確認調査
17 ～ 19 年度	大垣大塚古墳	松江市大垣町	島根県古代文化センター 2008『大垣大塚古墳群（附編 スクモ塚古墳）』	墳丘測量調査及び範囲確認調査
19 年度	平廻古墳	松江市大垣町	島根県古代文化センター 2012『松江市廟所古墳発掘調査報告書』	墳丘測量調査
19 年度	スクモ塚古墳	益田市久城町	島根県古代文化センター 2008『大垣大塚古墳群（附編 スクモ塚古墳）』	墳丘測量調査
10 年度・20 ～ 22 年度	廟所古墳	松江市西尾町	島根県古代文化センター 2012『松江市廟所古墳発掘調査報告書』	墳丘測量調査及び範囲確認調査
23 年度	金山古墳	益田市久城町	島根県古代文化センター 2015『益田市内における古墳の調査』	墳丘測量調査及び範囲確認調査
22 ～ 24 年度	鵜ノ鼻古墳群	益田市遠田町	島根県古代文化センター 2015『益田市内における古墳の調査』	墳丘測量調査
23 ～ 27 年度	北長迫横穴墓群	益田市赤城町	島根県古代文化センター 2015『益田市内における古墳の調査』	過去の調査の再整理
23 ～ 26 年度	東淵寺古墳	松江市大庭町	本書所収	墳丘測量調査及び範囲確認調査
24・25 年度	魚見塚古墳	松江市朝酌町	本書所収	墳丘測量調査及び範囲確認調査
25 年度	古天神古墳	松江市大草町		墳丘保護工事に伴う範囲内容確認調査
25 年度	安部谷古墳群	松江市大草町		墳丘測量調査
26 年度	上竹矢 7 号墳	松江市竹矢町		墳丘測量調査及び範囲確認調査
26 ～ 27 年度	東百塚山古墳群	松江市大草町		墳丘測量調査及び範囲確認調査

第 2 節　調査の経過

1. 発掘調査の経過

平成 23 年度　平成 23 年度は 11 月 8 日から東淵寺古墳の調査に着手した。第 1 トレンチは主丘部西側の畑地に墳端及び周溝確認を目的として設定した。調査の結果、幅 6.5 mにも及ぶ大規模な周溝を検出し、少なくとも古墳の西側には周溝がめぐることが明らかとなった。くびれ部の検出を目指して設定した第 2 トレンチでは、墳端付近でそれらしき屈曲点を検出したが、調査区が狭小なため、その全容解明は次年度に持ち越しとなった。11 月 26 日には地元住民向けの現地説明会を実施し、11 月 30 日に全ての調査を終了した。

平成 24 年度　まず魚見塚古墳については、6 月 5 日から墳丘測量調査に着手した後、6 月 11 日から第 1 トレンチの調査に着手した。当初は後円部東側に設定した第 1 トレンチの調査のみの予定であったが、当トレンチは大きく削平を受けて表土直下で地山が露出しており、十分な調査成果が得られなかった。調査指導者からは追加調査を指示され、急遽後円部南東部に第 2 トレンチを設定して調査を実施した。調査の結果、当トレンチについても墳裾部は後世の改変を大きく受けており、また周溝も検出されなかったことから墳端を確認するには至らなかったが、墳丘構造や出土須恵器から当古墳の実態を知る上で貴重な資料を得ることができた。7 月 28 日には現地説明会を開催し、約 50 名の参加を得ている。

一方の東淵寺古墳については、前年度確認できなかったくびれ部の検出を目的として、第 2 トレンチの南側を拡張する形で第 3 トレンチを設定し、10 月 15 日から調査に着手した。調査の結果、前年度にくびれ部として認識していた屈曲箇所は初期流土層であったことが判明し、調査区内ではくびれ部を確認することができなかった。さらに、調査区での墳端は緩やかなカーブを描いているようにも見えたが調査区が狭小なため断定できず、前方部の有無どころか主丘部の形状の確定も次年度以降への持ち越すこととなってしまった。11 月 18 日には現地説明会を実施し、あいにくの悪天候のなかであったが、40 名の参加を得た。12 月 1 日には全ての調査を終了した。

第 2 図　東淵寺古墳の現地説明会（平成 23 年度）

なお、年が明けた 1 月 22 日から 3 月 30 日にかけて、次年度の埋葬施設の位置を確認する調査区設定の資料を得るため、魚見塚古墳で電気探査を実施した。

平成 25 年度　平成 25 年度は墓制調査は 2 班体制で実施し、1 班は松江市大草町の安部谷古墳群の測量調査終了後の 9 月 24 日から魚見塚古墳の調査に着手した。魚見塚古墳の調査は、

第 3 図　魚見塚古墳の現地説明会（平成 25 年度）

第 4 図　魚見塚古墳の調査指導会（平成 24 年度）

第 5 図　東淵寺古墳の調査指導会（平成 25 年度）

墳丘規模確認のために墳丘各所にトレンチを設定するとともに、後円部西側については、埋葬施設の確認のため面的に調査を行った。調査の結果、埋葬施設を確認することはできなかったが、古墳築造時に関連すると思われる溝状遺構や墳丘祭祀に使用した多量の須恵器子持壺を検出し、古墳築造の年代を知る重要な手がかりを得ることができた。11 月 23 日には現地説明会を実施し、約 70 名の参加を得た。12 月 5 日から埋め戻し工事に着手し、12 月 6 日にすべての調査を終了した。

もう一班は、松江市大草町の古天神古墳の調査を実施した後、10 月 5 日から東淵寺古墳の調査に着手した。調査区はくびれ部検出を目指して、過去の調査結果をもとに第 3 トレンチ北側を中心として設定した。その結果、第 6・7 トレンチにおいてくびれ部を検出することができ、懸案であった墳形の確定を達成することができた。12 月 21 日には現地説明会を開催し、50 名の参加を得た。現地説明会終了後に調査を再開したが、埋め戻し作業及び調査予定地に所在した廃棄物の処分に手間を要し、年を越した 1 月 15 日に埋め戻し及び機材撤収を完了してすべての調査を終了した。

平成 26 年度　東淵寺古墳の墳形に関しては平成 25 年度の調査で一応の結論を導くことができたが、調査指導者からは前方部の墳丘構造や残存状況についても確認すべきとの指導があり、平成 26 年度には現在倉庫によって削られている前方部崖面の断面確認調査を行うこととなった。調査は 12 月 1 日から着手し、12 月 25 日まで小規模な補足調査を行った。建物の裏の狭小な位置に設定したトレンチのため、十分な成果をあげることはできなかったが、古墳築造前の旧地形や前方部の成形に関する有意な情報を得ることができた。

2. 整理等作業の経過

整理作業については、現地調査の着手と併行して進め、各年度ごとに遺物の注記・接合及び遺構図面の整理作業を順次進めていった。平成 26 年度には他事業の整理作業と併行しつつ、遺物の実測作業と遺構トレース作業を進め、平成 27 年度後半に報告書作成作業を行った。

第２章　位置と環境

第１節　遺跡の位置と地理的環境

魚見塚古墳は松江市朝酌町、東淵寺古墳は松江市大庭町に所在する。この両古墳が所在する松江市東部の意宇平野周辺一帯は、奈良時代には出雲国府や出雲国分寺が置かれた古代出雲の中心地であり、魚見塚古墳と東淵寺古墳はその古代出雲中枢付近に位置していると言える。ここでは、両古墳を包括する意宇平野周辺の地理的・歴史的環境について概略を述べてみたい。

松江市南郊に屹立し『出雲国風土記』に「神名樋野」と呼ばれた標高 172 mの茶臼山を中心とする当地域は、地理的には茶臼山の南に広がる意宇川によって形成された意宇平野と呼ばれる沖積地帯、茶臼山の西に広がる山陰では珍しい乃木段丘（島根県 1974）と呼ばれる標高 20 ～ 25 m の河成段丘地帯、及び茶臼山北の中海と宍道湖を結ぶ大橋川沿いの狭隘な谷地帯に大別される。

魚見塚古墳は大橋川沿いの谷地帯に立地し、北の和久羅山と南の茶臼山から続く丘陵が大橋川に迫って川幅が最も狭くなる箇所に立地しており、『出雲国風土記』に描かれた古代南北路の要衝である朝酌渡はまさに当古墳に隣接する位置に推定されている。古代における大橋川が内海交通の要衝であることは言を俟たず、当古墳がその中でも最も狭隘な内海交通の要衝に立地している意義は強調しすぎることはない。

一方の東淵寺古墳は乃木段丘地帯の一角に立地する。当地帯は細かく見ると、馬橋川やその支流の小河川によって開析された多くの小規模な開析谷とその間に残された段丘部から構成されている。東淵寺古墳は開析谷に挟まれた南北に延びる低位段丘の先端部に立地しており、東からの眺望には比較的優れている点は注目される。当古墳の南側には古代山陰道が東西に走っていたと推定されており（勝部 1993）、後述するように当古墳の性格を陸路交通の要衝に立地している視点から把握する視座も重要であるといえる。なお、当地域は、小規模な開析谷が点在する他にまとまった可耕地に乏しく、山代二子塚古墳をはじめとする山代・大庭古墳群を築いた首長の直接的生産基盤とは考えにくい。この地域に墓域を求めた首長の直接的生産基盤は、東の意宇平野を中心とする地域が主であったと考えた方が妥当であろう。

第２節　歴史的環境

当地域周辺の歴史は旧石器時代まで遡る。茶臼山西麓に広がる乃木段丘地帯は火山灰層が良好な状態で残存しており、県内でも良好な旧石器時代研究のフィールドとなる可能性を秘めた地域である。現在までのところ調査例は少ないが、下黒田遺跡では後期旧石器時代の玉髄・瑪瑙製の剥片・石核がまとまって出土しているほか（丹羽野 1994）、市場遺跡では黒曜石製の細石核が出土している。また、発掘資料ではないが、大草町の上立遺跡では、東北地方から搬入された可能性の高い頁岩製掻器が採集されており、当該期における当地と東北地域との交流を物語る（丹羽野 2001）。

縄文時代の遺跡は主に意宇平野の縁辺部で発見されている。主な遺跡としては、上小紋遺跡、鵜貫遺跡、布田遺跡、石台遺跡などがあげられる。これらの遺跡は縄文時代後～晩期に属する例が大半であり、いずれも丘陵に程近い平野縁辺部に立地する。布田遺跡の砂礫層から出土した木片の

第６図　調査古墳周辺の遺跡位置図

C^{14} 年代から、約 3,000 年前には意宇平野のかなりの部分は陸地化していたことが知られている（林 1991）。これらの遺跡では打製石斧等も出土していることから、おそらく縄文海進が終了し、意宇平野が陸地化したこの時期に縄文人が植物採集や雑穀栽培のため平野部へ進出していった状況を物語るものであろう（島根県立八雲立つ風土記の丘 2015）。一方大橋川の谷でも、米坂遺跡や米坂古墳群で黒曜石・安山岩製の石鏃や打製石斧が出土しており、当該期の遺跡の存在が知られる。

弥生時代の遺跡としては、意宇平野では布田遺跡、上小紋遺跡、馬橋川流域では石台遺跡や勝負遺跡が存在する。このうち布田遺跡は意宇川旧河道河口部に展開した出雲を代表する弥生時代前半期集落の一つであるが、意宇平野における遺構・遺物の分布を見る限り、弥生時代における意宇平野の開発は未だ十分なものではなく、おそらく布田遺跡の位置する意宇川旧河道河口付近と茶臼山山麓の扇状地周辺に限定されていた可能性が高い。後者で発見された上小紋遺跡や向小紋遺跡の水田跡は布田遺跡を母村とする集団が進出した子村集団による開発地であったのであろう。

このように、当該期までの当地の歴史的環境は出雲のその他の地域と大きな違いは認められないが、こうした様相が大きく変化するのは、古墳時代前期後葉以降のことである。その嚆矢として茶臼山東麓に築かれた廻田 1 号墳の存在があげられる。当古墳は大和北部型と呼ばれる埴輪を備える現在のところ出雲最古の前方後円墳であり（島根県古代文化センター 2004）、その墳丘規模はその後の出雲の首長墓の規範となった可能性がある。5 世紀に入ると、大橋川の谷の南北両岸において、廟所古墳（82m）や石屋古墳（42m）といった大形方墳が累代的に築造される。特に廟所古墳の築造は出雲地域において大きなインパクトであり、大型方墳という墳形や王陵系埴輪の存在から、倭王権の直参的首長という性格が想定されている（仁木 2015）。ほぼ同時期には意宇平野中心部に立地する出雲国府下層で首長居館状の方形区画遺構が確認されており、これを水利開発拠点として、当該期には意宇平野の大規模な開発が進められていた可能性が高い（池淵 2015）。先の大橋川の谷の大型古墳群の出現の背景の一つとして、当該期における意宇平野の開発の進展といった事象を指摘することができよう。

このような大橋川沿岸の大形方墳は古墳時代中期末には、井ノ奥 4 号墳（全長 57 m）のような前方後円墳や竹矢岩舟古墳（全長 50 m）のような前方後方墳へと墳形を変化させつつ、6 世紀に入ると墓域を大橋川沿岸から内陸部の茶臼山西麓の乃木段丘地帯へと移動する。その背景については不明と言わざるを得ないが、一つの要因としては、柳堀遺跡など当該地区における近年の調査事例などを勘案すれば、当地域の開発を企図した墓域移動であった可能性も想定されるかもしれない（松江市教育委員会ほか 2014）。6 世紀後半に築かれた山代二子塚古墳はそれまでの出雲の在地首長墓の規格であった全長 60 mを遙かに上回る全長 94 mの規模を誇り、既存の在地首長の支配領域を複数包括する、より広域的首長の墓であり、当古墳の築造が出雲の古墳時代政治史上において極めて大きな画期であったことは多くの先学の指摘するとおりである。その他、当該期の古墳としては既存の在地首長墓クラス（50 ～ 60 m級）として東淵寺古墳、手間古墳が、中小首長墓として、岡田山 1 号墳、御崎山古墳、団原古墳、岩屋後古墳、古天神古墳が築かれ、短期間のうちに極めて多数の首長墓が集中的に築造されている状況を看取することができる。こうした当該期の特異な古墳の築造状況の背景を如何に読み取っていくかが今後の大きな課題の一つであると言え、当報告の目的の一つも、この問いに対する手掛かりを提示することにある。

一方の大橋川北岸では、6 世紀代に入ると首長墓は、朝酌岩屋古墳や朝酌小学校校庭古墳、廻原

１号墳など朝酌平野周辺に継続的に築かれ、それまでの西尾町周辺に築かれていた首長墓系列とは明らかに断絶する。そして魚見塚古墳はこれらの首長墓群からさらに離れた朝酌矢田地区に単独墳として孤立的に築かれているのである。このように、大橋川北岸地域における首長墓の築造状況から見た場合、魚見塚古墳の立地は特異であると言え、この場所に墓域を選定するに至った何らか特別な事情を考慮すべきであろう。

奈良時代に入ると、意宇平野南部には出雲国府がおかれ、当地域は名実ともに古代出雲の中心地となる。この時期の遺跡としては、官衙関係として出雲国府跡のほか、大型倉庫群が検出された山代郷正倉跡、「云石（飯石）」の墨書土器が出土し、首長居館の一角である可能性が指摘されている黒田畦遺跡などがあり、寺院関係としては出雲国分寺、国分尼寺をはじめ、『出雲国風土記』に記載されている山代郷北新造院跡（来美廃寺）、山代郷南新造院跡（四王寺跡）が実際に発掘調査で確認されており、これらに瓦を供給した出雲国分寺瓦窯跡や小無田Ⅱ遺跡なども明らかになっている。

一方、大橋川北岸の大井町周辺では、古墳時代後期から奈良時代にかけて出雲最大の須恵器窯跡群である大井窯跡群が所在する。近年の発掘調査でその一端が明らかにされつつあり、付近ではイガラビ遺跡など須恵器工人の居住域または工房と推定される遺跡も確認されている。なお、この時期における意宇平野一帯の様相については、これまでの発掘調査成果や『出雲国風土記』の研究に基づきその歴史的景観の復元的研究が行われているので（島根県古代文化センター 2009）、詳しくはそちらを参照されたい。

中世に入っても、当地一帯は中世出雲府中として出雲の政治的中枢としての地位を維持し、実際に天満谷遺跡など当該期の遺跡もかなりの数が確認されているが (西尾・広江 2015)、詳細については不明な点が多い。戦国期に入り守護であった京極氏が没落し尼子氏が勃興するに至って、当地は出雲の政治的中心地の座を明け渡したものと考えられる。

〈参考文献〉
池淵俊一 2015「意宇平野の開発史」『前方後方墳と東西出雲の成立に関する研究』島根県古代文化センター
勝部　昭 1993「正西道の検討」『出雲古代史研究』3 出雲古代史研究会
島根県 1974『土地分類基本調査松江』
島根県古代文化センター 2004『松江市東部における古墳の調査 廟所古墳・観音山古墳群・廻田古墳群』
島根県古代文化センター 2009『出雲国府周辺の復元研究』
島根県立八雲立つ風土記の丘 2015『古代文化の発祥の地 意宇の開発史』
仁木　聡 2015「巨大方墳の被葬者像」『前方後方墳と東西出雲成立に関する研究』島根県古代文化センター
丹羽野裕 1994「松江市下黒田遺跡出土の石器群」『古代文化研究』2 島根県古代文化センター
丹羽野裕 2001「松江市出土の石器 3 点」『松江考古』9 松江考古談話会
林　正久 1991「意宇平野の微地形とその形成過程」『一般国道 9 号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ（布田遺跡）』島根県教育委員会
西尾克己・広江耕史 2015「遺跡から見た出雲府中」『松江市史研究』6　松江市教育委員会
松江市教育委員会・公益財団法人松江市スポーツ振興財団 2014『柳堀遺跡・大庭原ノ前遺跡』

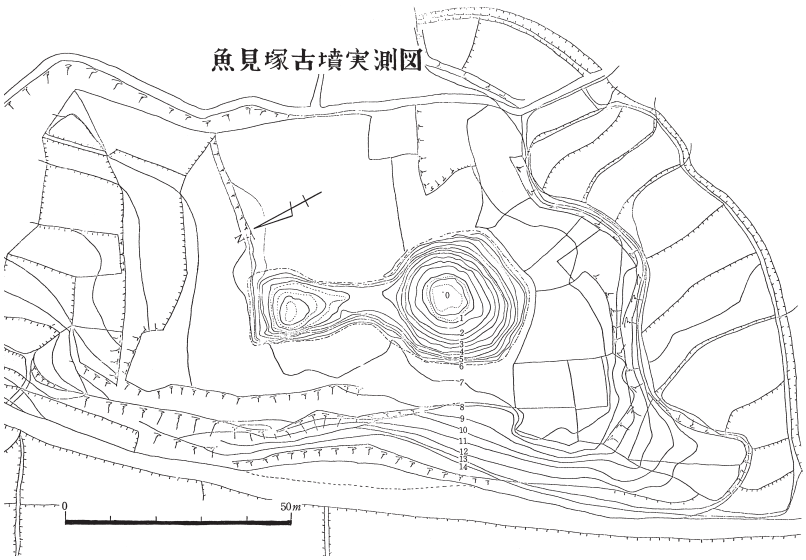
第 3 章　魚見塚古墳の発掘調査

第 1 節　調査及び研究略史

魚見塚古墳は松江市大橋川北岸の橋北地域（以下、橋北地域と略す）を代表する前方後円墳であるにもかかわらず、当古墳を対象とした研究は乏しい。戦前の『島根縣史』の古墳地名表においては、「朝酌村大字朝酌 朝酌下神社社有地 魚見塚大小二處接近ス」との記載があり、既にその存在が知られていた（野津 1924）。ただその記述にあるように、当時は前方後円墳ではなく大小 2 基の別の古墳が隣接していたと認識されていたようである。

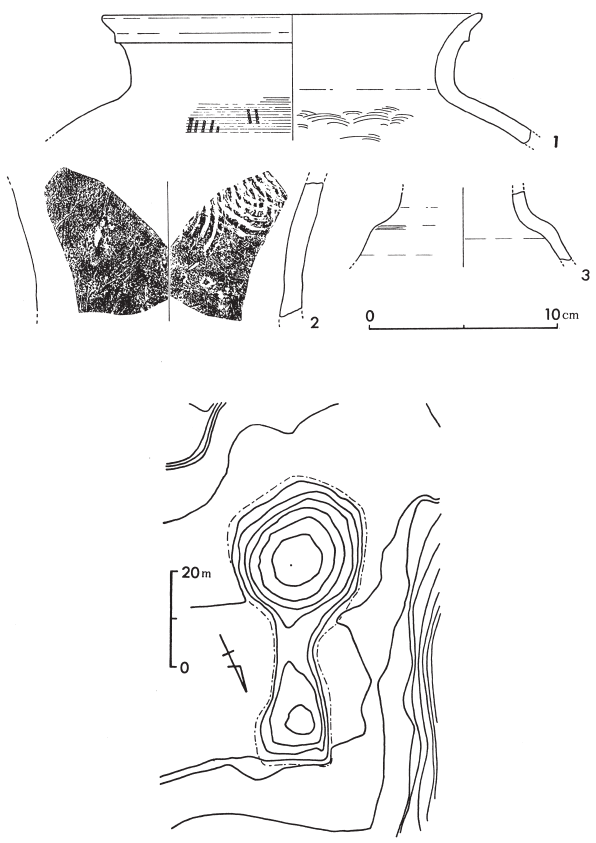
当古墳がいつから前方後円墳と認識されたかは定かではないが、『新修島根県史』には山本清によって全長 62 mの前方後円墳として紹介されており、この頃までには既に前方後円墳としての認識が定着していたことがわかる。この段階では、立地や外形からみて古墳時代中期に比定されていた（山本 1968）。1970 年には東森市良によって当古墳が紹介され、立地条件や前方部があまり高くなくかつ幅広にならない墳丘形態が注目されている。築造年代については、立地や墳形から山本の認識を継承して中期古墳に位置付けている。この論文では、当古墳が対岸の意宇平野勢力との関連において存在したこと、さらに、『出雲国風土記』の「枉北道」上に立地するという主要交通路との関わりが研究史のかなり早い段階で注目されている点は慧眼に値する（東森 1970）。

当古墳の調査・研究史上で大きな画期となるのは、島根大学考古学研究会による測量報告である（島根大学考古学研究会 1972）。この成果により、当古墳の立地や墳丘形態についての具体的な議論を行うことが可能となった。特に墳丘測量図が当時にしては珍しく墳丘だけでなく古墳が立地する台地一帯を対象に広域に作成されている点は特筆される。築造年代に関しては、前方部の高さや開き具合から中期型という従来の理解を踏襲している。なお、測量時に須恵器片、特に子持壺片を採集したことが記述されているが、この年代に関する言及はない。70 年代の出雲の古墳時代研究をリードした前島己基は、「前方後円墳の築造という新興勢力と伝統的な方墳系祭祀を墨守する豪族が大橋川周辺の内海・陸路の支配をめぐってはげしいせりあいと熾烈な葛藤を繰り広げた」との自説に基づき、魚見塚古墳を新興勢力の代表として取り上げている。時期については明言はされてないものの、文脈上概ね 5 世紀代のことと推定されているようである（前島 1979）。また内田律雄は子持壺の存在から当古墳の年代を下げる見解を既にこの段階で示しており、注目される（内田 1980）。



第 7 図　島根大学考古学研究会による魚見塚古墳測量図

1986 年には渡辺貞幸が大橋川の谷の諸古墳の再検討を



第８図　魚見塚古墳の測量図と出土遺物（渡辺 1986）

行うなかで、当古墳の位置付けについても言及している（渡辺 1986）。このなかで、従来から知られていた当古墳表採資料を紹介し、その中には埴輪は認められず、須恵器は大甕片や子持壺片で６世紀後半ないしは後葉に下がるものと位置付けている。その一方で墳丘形態に関しては、古墳周辺部が畑によって削平されているとはいえ、「墳丘形態を甚だしく変えるような削平があったとは考えにくく、現状の形態が本来のそれに近いものだったとすれば、この古墳の築造を六世紀後半まで下げるのに躊躇せざるをえない。」とし、従って「採集資料は古墳の二次的な祭祀用品であった可能性を考える必要があろう」という見解、すなわち当古墳の築造は古墳時代中期以前であり、周辺出土の須恵器は後の追善供養的な祭祀遺物であるとの見解を提示したのである。渡辺の見解は古相を呈する墳形と出土遺物の年代観との乖離に関する整合的解釈を試みたもので、現在でも一仮説としてその命脈を保っている。

90 年代に入ると、『前方後円墳集成』など、各地の大型古墳の動向が整理されるに至り、出雲の大型古墳の位置付けも再度検討が加えられるようになる。渡辺貞幸・松本岩雄・内田律雄・曳野律夫による『前方後円墳集成』中の出雲地域の解説には、当古墳は手間古墳とともに明確な位置づけは避けられている（渡辺ほか 1991）。これは先の渡辺の見解に対して、新しい須恵器が表採されていることからの批判を受けての慎重な態度を示したものと言え、墳丘形態よりも出土遺物の年代観を優先する見解がより強まってきたと言えよう。これは一つには須恵器特に子持壺の編年研究が進展し（柳浦 1993）、より明確な年代観を示すことが可能となってきたこと、渡辺の指摘したような追善供養的な須恵器祭祀儀礼の明確な事例が当地域では他に見出しにくいことが大きな理由としてあげられる。1995 年の島根大学考古学研究会による大橋川の谷の古墳群の再検討のなかでは表採須恵器の年代観から当古墳の築造時期を６世紀中葉～後葉頃に比定している（島根大学考古学研究会 1995）。また 1996 年から開始された、当古墳の大橋川を挟んだ対岸に位置する手間古墳の発掘調査によって、これまで魚見塚古墳と同様に墳形から中期型とされていた手間古墳の築造年代が６世紀後葉に降ることが明らかとなり、当古墳の年代観に少なからず影響を与えた。当報告の中で、渡辺貞幸は手間古墳の被葬者は山代二子塚古墳の被葬者と同族で彼を補佐する立場にあった人物で、魚見塚古墳についても「仮に前後する時期のものとすれば、同様な被葬者像を想定できる」と言及している（渡辺 2002）。

このように、当古墳の位置付けは近年揺らぎつつあると言えるが、いずれにせよ基礎的な調査・研究が十分に行われていない現状では不確定的な部分も多く、まずは個別的実証を積み上げていく地道な取り組みが当地の地域史解明のために求められていると言えよう。

第２節　発掘調査の成果

1. 古墳の現況と測量調査結果

古墳の現況　魚見塚古墳は松江市朝酌町 1293 番地外に所在する。墳丘部は現在多賀神社の所有地となっており、後円部は山林、前方部は草地となっている。古墳の周囲は東側は茶畑、北・西側は畑地、南側は竹林となっている。研究史で述べたとおり、当古墳の周囲は畑・茶畑による開墾で墳丘裾部をかなり削平されているが、墳丘自体は比較的良好な状況を保っており、出雲を代表する前方後円墳の外観を現在に伝えている。

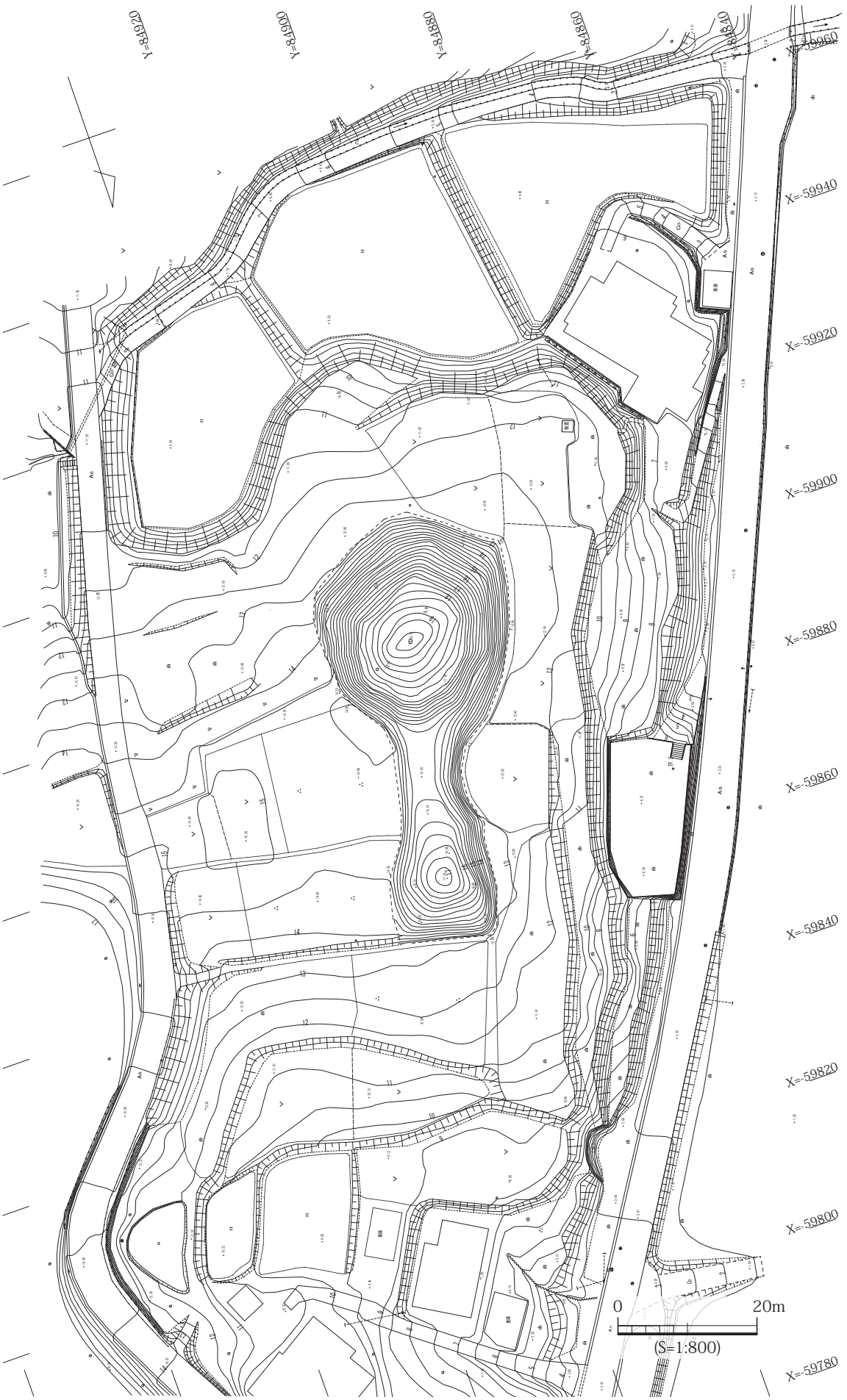
既に述べたとおり、当古墳は朝酌川と大橋川の合流点に立地している。古墳は南北に延びる標高 15 m前後の台地上に立地しており、古墳の西約 15 mで急な崖となり朝酌川岸に至っている。この台地は地形分類上砂礫台地とされ、後述する火山灰層の類似性からみても松江市南郊に広域に広がる乃木段丘に対比される地形と考えられ（島根県 1974）、東の丘陵地とは明確に地形を異にしている。台地上は南から北へ緩やかに傾斜している。古墳の南側には東西に延びる幅 30 mの谷があり、谷を挟んだ南側には『出雲国風土記』に「朝酌下社」（加藤 1957）と記載された多賀神社が鎮座しており、神社の南側には小規模な古墳が点在している。

調査・研究史で述べたとおり、当古墳の測量は島根大学考古学研究会によって行われているが、国土座標に基づく測量ではなく、等高線も 50㎝コンタで絶対高ではないため、正確な測量図の作成が求められていた。このため、平成 23 年度に古墳を含めた周辺の地形測量を測量会社に委託して実施し（第 10 図）、平成 24 年度に平板測量により墳丘部とその周辺部について S=1/100 の測量図を作成した（第 11 図）。

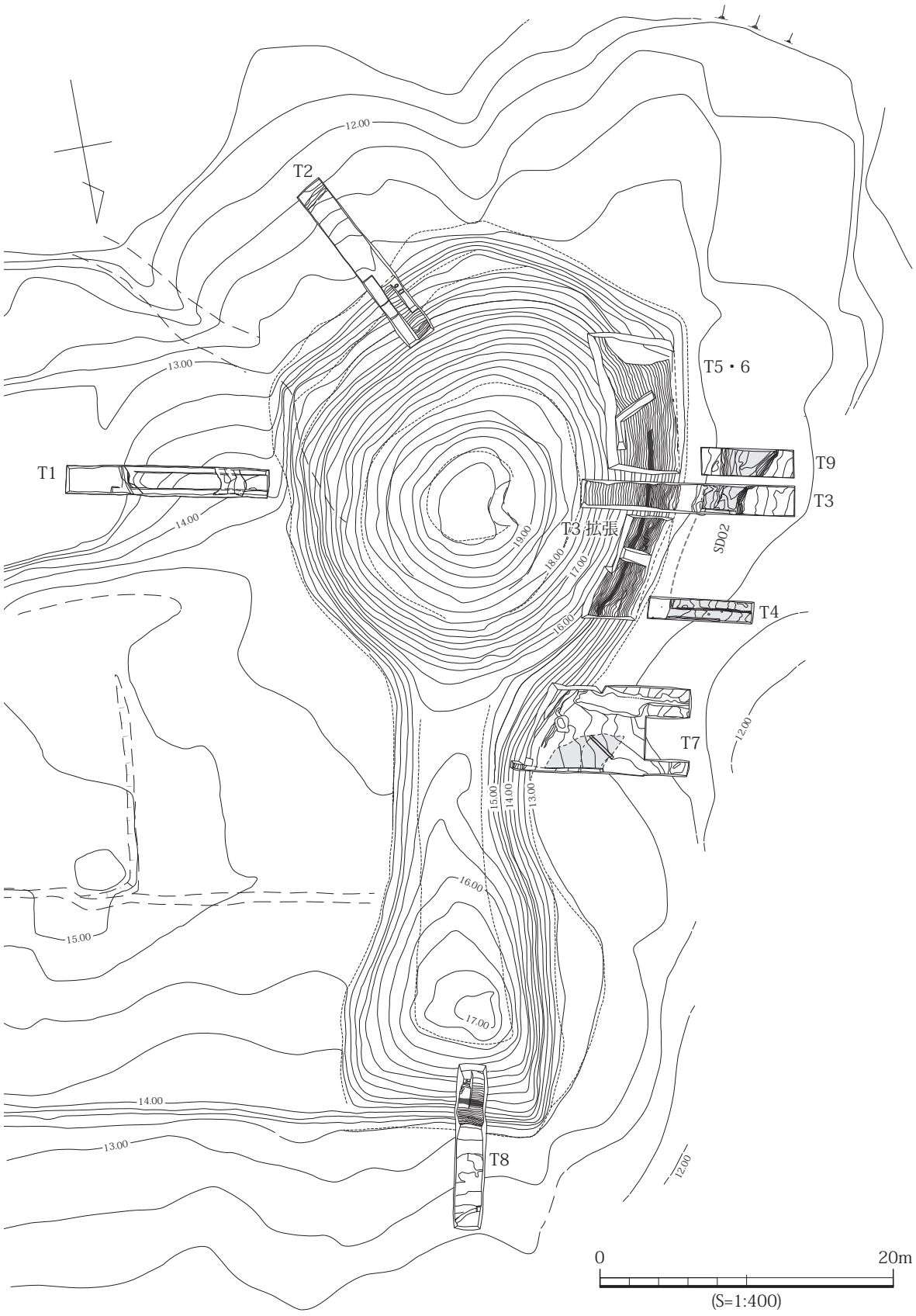
墳丘の形状（第 11 図）　古墳は前述のとおり段丘上の南から北へ傾斜する緩斜面に立地し、前方部を北に向け、見かけ上の主軸は N-10° - E を測る。古墳が立地する段丘幅は東西約 70 mを測るが、古墳は段丘中央ではなくやや西寄りに位置しており、これは西を流れる朝酌川側からの景観を意識しているためと想定される。墳端部は畑によって削平されているほか、後円部南側から前方部西側にかけては墳裾沿いに近世以降の里道が走っており、これによっても墳丘はかなりの改変を受けている。見かけ上の墳丘の全長は 62.0 mを測り、従来言われていた当古墳の規模とほぼ一致する。

後円部は現状で東西 28 m、南北 32 mのややいびつな楕円形状を呈している。後円部墳頂部の高さは 19.5 mで、見かけ上の墳裾からの墳丘高は西側で 6.5 m、東側で 5 mを測り、規模に比べ墳丘高が高い印象を受ける。後円部南東側では標高 14.0 ～ 14.25 m付近で幅約 1m 程のテラスが認められ、下段の段築状に観察されるが、後円部のそれ以外の場所では削平などのため定かではない。後円部の標高 18.0 m～ 18.5 m付近にも緩やかなテラス状地形が観察され、このテラスはほぼ後円部を全周していることから後円部最上段のテラスを反映していると考え

第９図　昭和 37 年の魚見塚古墳（松浦勉氏提供）



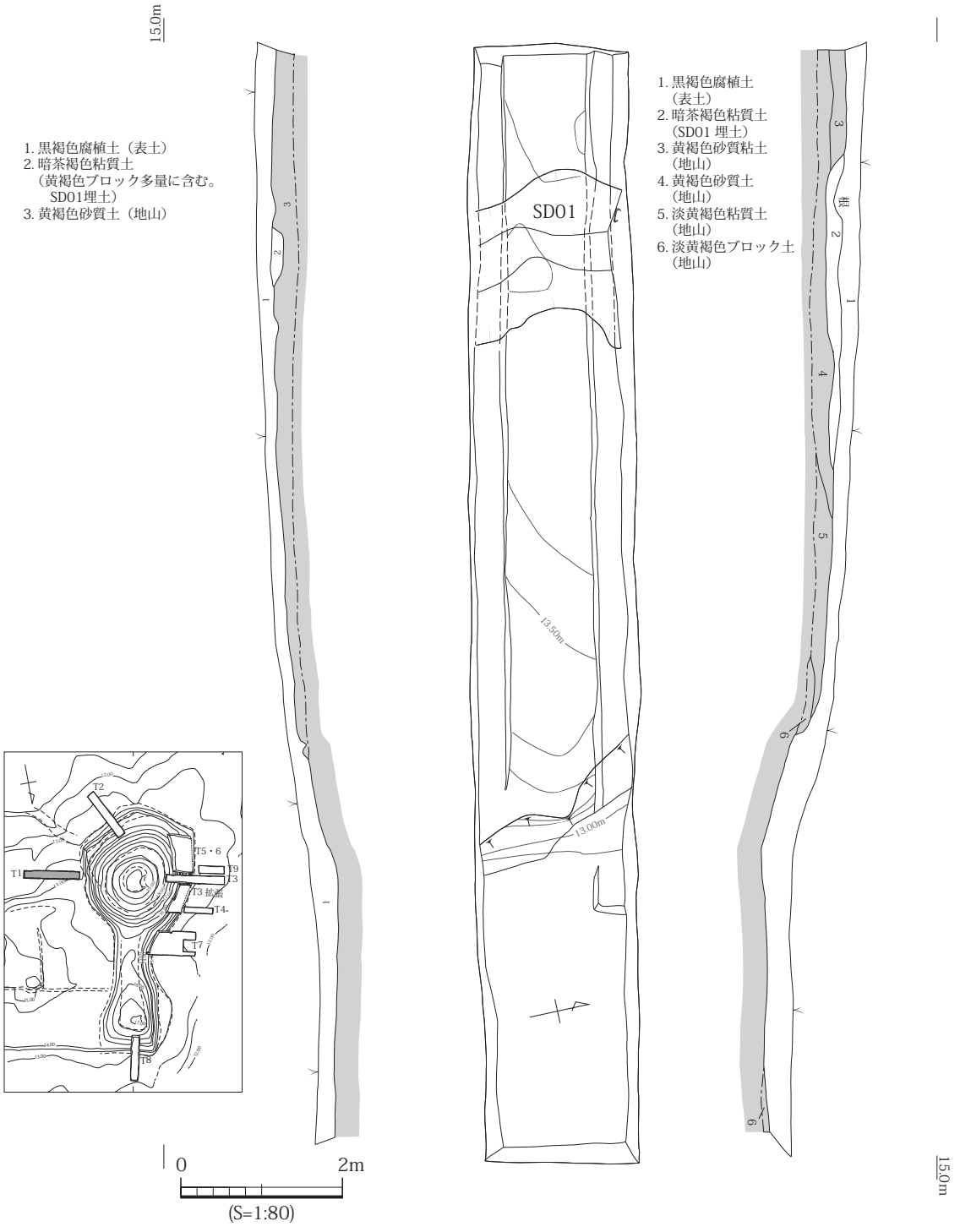
第 10 図　魚見塚古墳周辺地形測量図



第 11 図　魚見塚古墳トレンチ配置図

てよい。最上段部には径約 12 mの円丘部が載り、墳頂部には径 6.5 mの平坦面を形成している。このように、墳裾部は大きく改変を受けているものの、本来後円部は 3 段築成であった可能性がある。また、墳丘規模に比べて墳頂平坦面が狭い点も当墳丘の特徴の一つと言える。

前方部は見かけ上の規模で、くびれ部から計測して長さ 31.6 m、前方部幅 15.2 m、高さ 3.75 m（西側）、くびれ部幅 10 mを測り、従来から指摘されているように狭長な前方部であるといえるが、周辺の状況から勘案してやはり墳裾部の削平の影響を相当量見積もらねばならない。後円部



第 12 図　T1 実測図

から前方部への隆起斜道はそれほど明確ではないものの確実に存在し、前方部前端部へ向けて次第に高くなり、前方部頂の標高は 17.0 mを測る。また、見かけ上の墳裾の標高は前方部西側の方が東側に比べて１m以上低い。つまり朝酌川側を古墳の正面ととらえた場合、背面に相当する墳丘東側については、後円部と同様に前方部も最下段が省略化されているものと想定される。

2. 第１トレンチ（第 12 図）

トレンチの概要　後円部東側に墳丘主軸に直交して設定した長さ 13.8 m、幅２mのトレンチである。調査前は元が畑の荒地であった。当初のもくろみでは墳端及び周溝を検出する筈であったが、予想に反して地表下約 20㎝の深さで黄褐色砂質土の地山が検出され、当古墳には周溝が伴わないことが判明した。また、墳端に関しても当トレンチ内では明瞭な痕跡は確認できず、後世の削平によって墳端は失われてしまったものと想定される。なお、調査区の東側は近年の畑造成によって大きく削平されており、東へ向けて現状で約 50㎝の段差をなしている。

トレンチ西側においては、幅 1.7 m、深さ 15㎝程の不整形な浅い溝状遺構（SD01）を検出した。溝内の埋土は地山ブロックを含んだ暗茶褐色粘質土が堆積しており、僅かながら土師器細片が出土している。当遺構の性格は正確には不明だが、当遺構の約 1.5 m西に当たる現在の後円部外周付近には現在も里道が存在することから、近世以降の里道の可能性が高いと考えている。とすれば、ある段階までにはこの溝状遺構付近までは後円部の墳裾が及んでいた可能性が高く、現在の残存する墳丘傾斜から復元される墳裾想定位置とも概ね一致している。なお、葺石に相当する川原石などの転石はトレンチ内では確認されていない。

出土遺物　溝状遺構内から土師器細片が若干出土しているのみである。

3. 第２トレンチ（第 13 ～ 15 図）

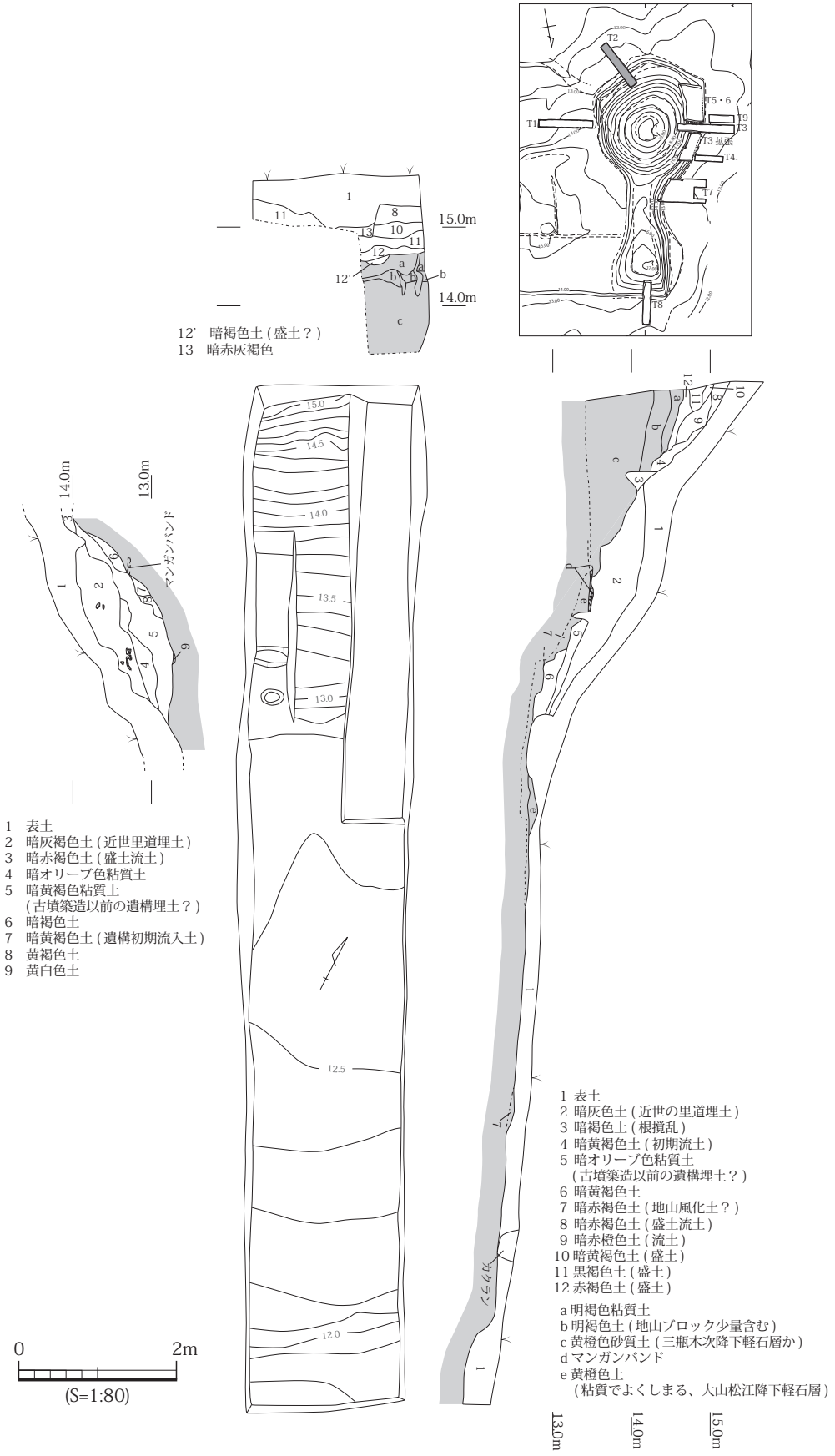
トレンチの概要（第 13 図）　第１トレンチ（以下 T1 と略す。他トレンチも同じ）の調査終了後に後円部南東に設定した２m× 13 mのトレンチである。トレンチが墳丘主軸ライン上に設定されていないのは､追加調査の実施を急遽決定したために当該箇所の同意書が得られなかった理由による。

当トレンチも T1 と同様に墳裾付近は近世以降の畑地や里道などによってかなり改変を受けており、現状での見かけ上の墳裾は本来の墳裾を反映していない。また、トレンチ南側の墳丘外の部分についても T1 と同様に表土直下で地山を検出し、周溝は検出されなかった。トレンチ南端から北へ 1.2 mの地点では南側に向けて段状の落ち込みが検出されたが、落ち込み内の埋土は表土と同じであり、近世以降の加工に伴うものである可能性が高い。

墳丘部の土層堆積状況は、厚さ約 20㎝の表土直下に締まりのない暗灰色土（２層）が比較的厚く堆積していた。この層からは子持壺や大甕を主体とする須恵器がまとまって出土しているほか、自然礫や近世陶磁器も出土している。この土層が堆積している付近の現地形は、幅１m前後のテラス面を形成しており、またこの土層の上面も同様な平坦な地形をなしていた。近世陶磁器の出土を勘案すれば、当該テラス面は T1 で検出した溝状遺構と同様に近世の里道であった可能性が高い。当初は須恵器のうち、子持壺は古墳築造時に立てられた可能性も考慮したが、倒立状態で出土したものもあり（図版 3-5）、陶磁器の出土から礫などとともに里道造成時に土留めとして転用したものと判断した。

この２層の下層には墳丘下半部では黄橙色砂質土の地山（三瓶木次降下軽石層か）が検出され、墳丘下半部は地山削り出しによる墳丘造成と考えられる。トレンチの北端部ではたち割り調査の結

果、一部ではあるが盛土を確認した。盛土は地山である明褐色粘質土の直上に堆積する地山ブロック混じりの赤褐色土や黒褐色土の互層で構成されていて、いわゆる旧表土は当トレンチ内では確認



第 13 図　T2 実測図

できていない。部分的なたち割り調査のため不確定な部分が大きいが、山代二子塚古墳の調査で確認したような土嚢状の盛土単位も確認できていない。また、当トレンチ内においては、葺石や段築の痕跡は一切確認できなかった。ただ、後述するように当トレンチで確認した近世里道跡がこの墳丘傾斜の緩やかな場所に設定されたとすれば、本来はこの場所に後円部最下段のテラスがめぐっていた可能性は否定できない。

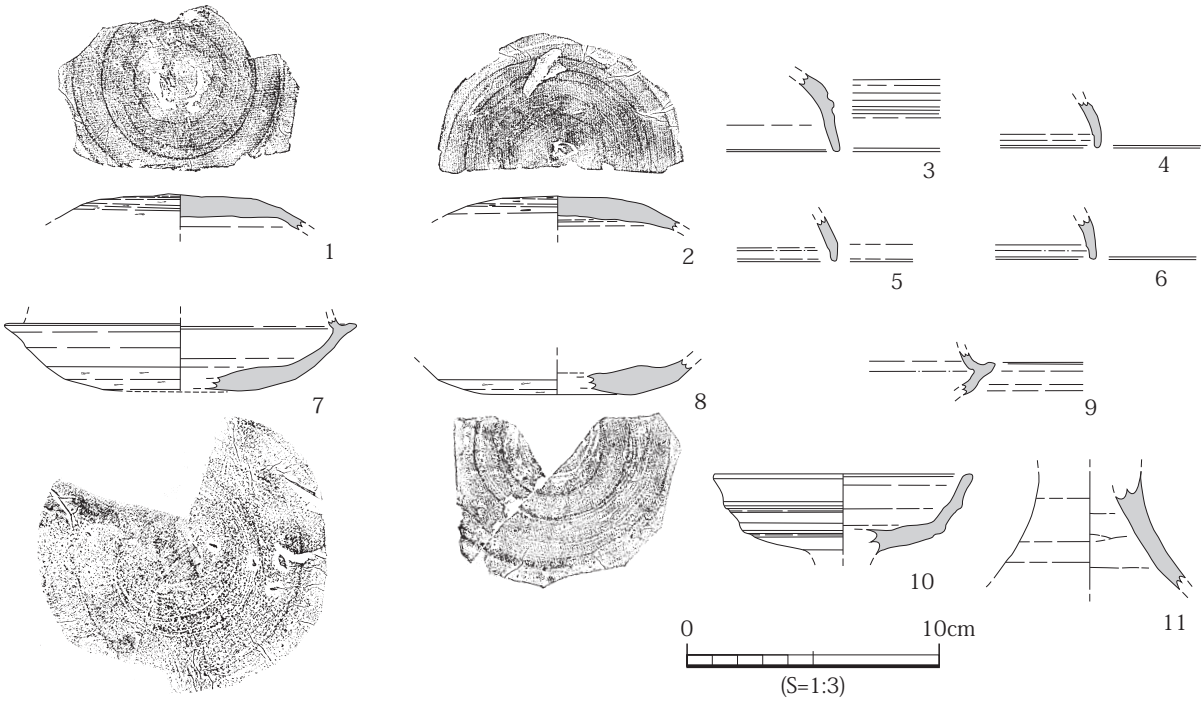
なお、墳丘下半部の一部には地山と異なる色調のやや濁った黄褐色土が存在したためトレンチ西壁沿いに追加のたち割り調査を行った。その結果、須恵器は一切検出されなかったが弥生土器が若干出土した。この点から、当該土層（西壁５層）は古墳築造以前の何らかの遺構埋土である可能性が高い。なお、５層を除去した地山面においてもピットまたは溝状プランを検出している。他のトレンチの状況を鑑みれば、弥生時代後期の集落に伴う遺構と考えられる。

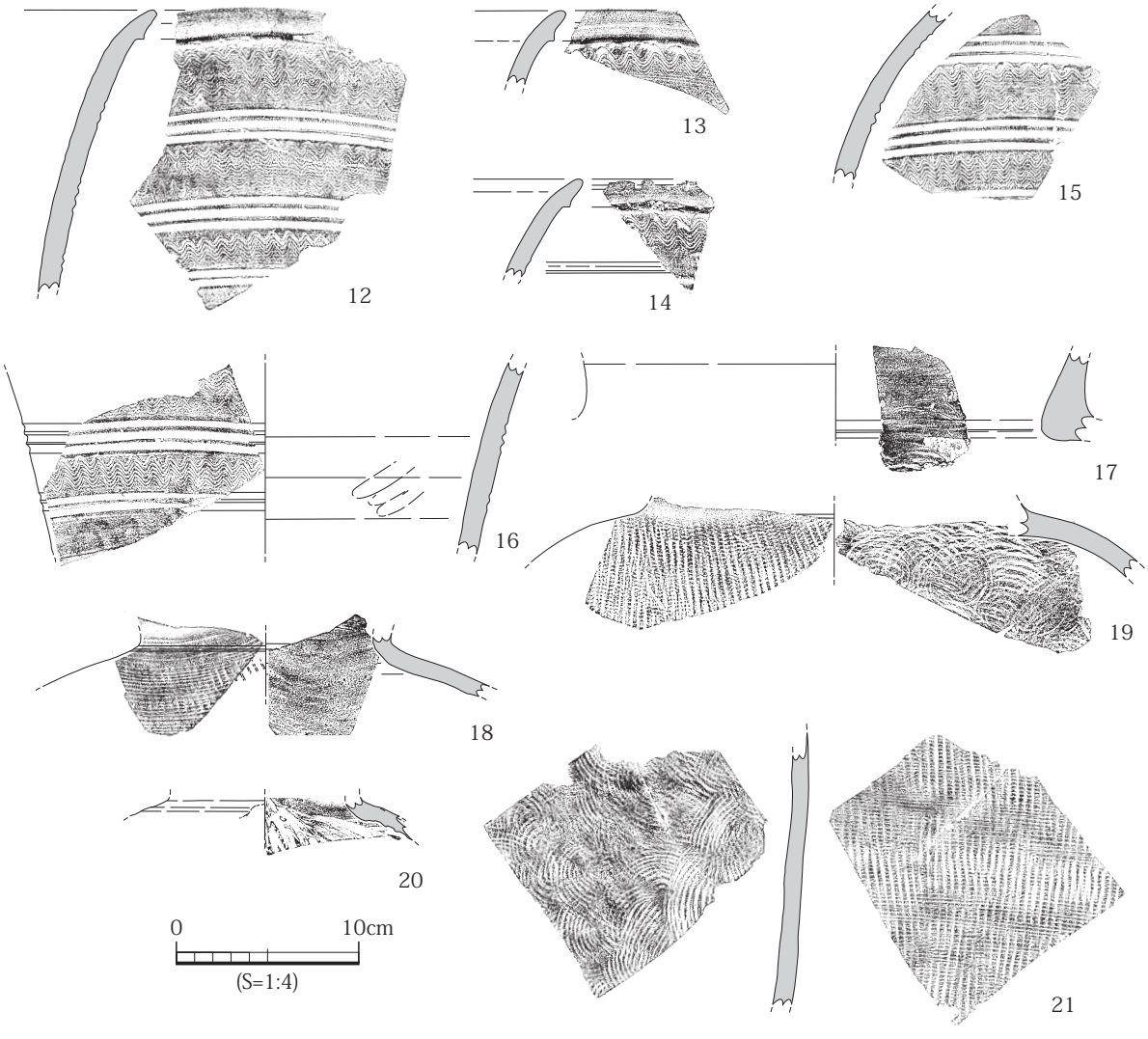
第２トレンチ出土遺物（第 14・15 図）　第 14 図１～６は須恵器坏蓋である。1、２は坏蓋の天井部で、いずれも天井頂部付近まで回転ヘラケズリが及ぶ大谷分類Ⅰ類またはⅡａ類に属する（大谷 1994）。３～６は坏蓋口縁部の小片である。３は大谷分類γ１類またはγ２類、４はβ類、5、6はα３～４類に属する。７～９は坏身として図化したが、8 は坏蓋かもしれない。7･8 は底部で、いずれも丁寧な回転ヘラケズリが施されている。なお、８・９は胎土に黒色粒子を多量に含み、後述する子持壺と共通する胎土を呈するタイプのものである。

10・11 は須恵器高坏である。10 は小形の無蓋高坏坏部として復元したが、他にあまり例を見ないタイプである。12～16 は大甕の口縁部及び口頸部である。口縁部はいずれも段状口縁を呈し、端部は丸く収めている。頸部は２条または３条１組の区画帯により３分割し、その内部に波状文を充填する。これら大甕の資料の胎土には黒色粒子はほとんど含まれず、後述する子持壺とは対照的なあり方を示す。

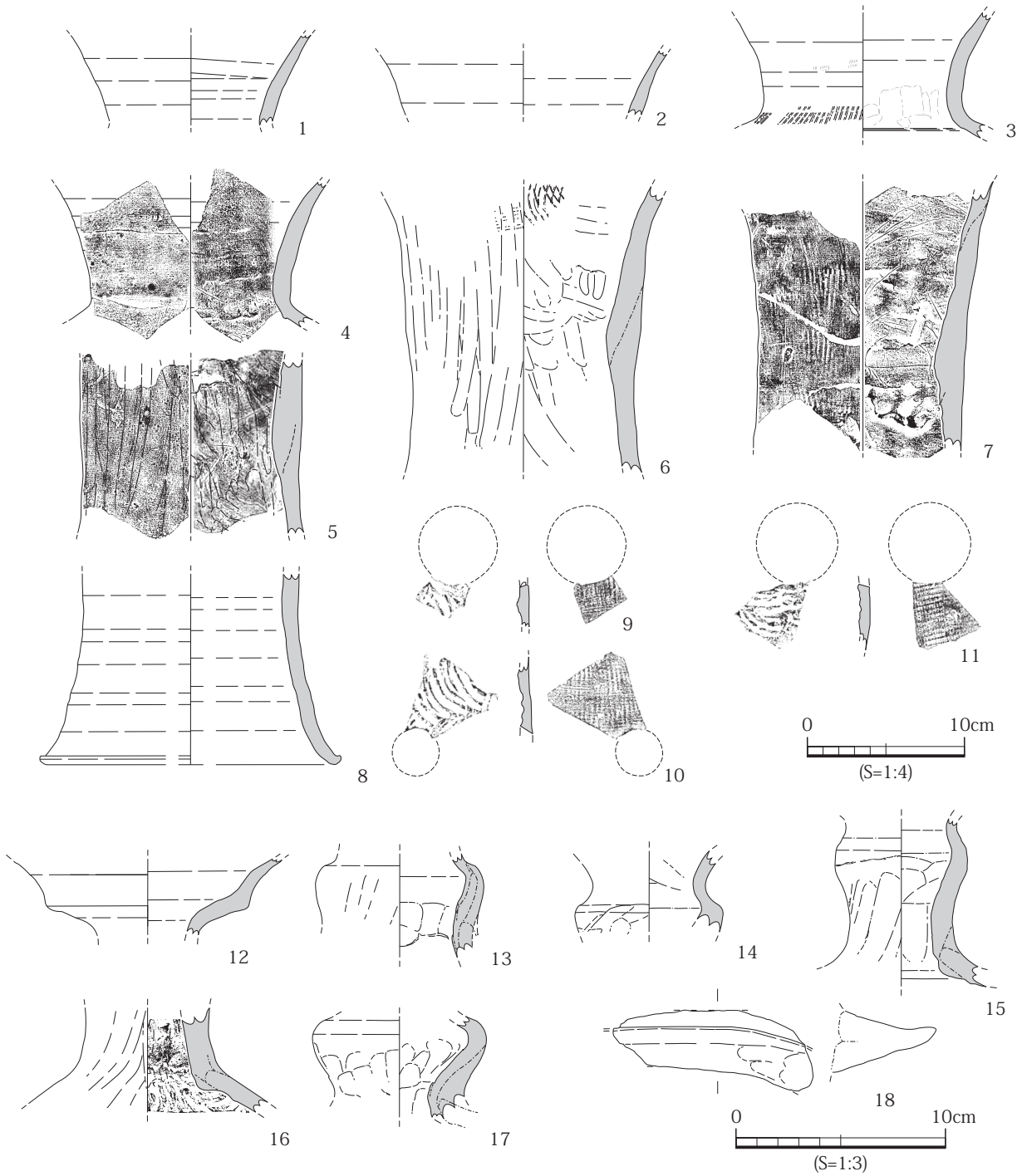
第 15 図１～ 17 は T2 から出土した須恵器子持壺である。当古墳出土の子持壺は基本的には池淵分類のＢ型に属する（池淵 2004）。いずれの資料も粗いつくりで、特に脚部の破片は小片であっても他の須恵器とは明瞭に区別できる。また胎土に黒色粒子を大量に含んでいる点も大きな特徴である。１～４は親壺の頸部資料である。頸部は長くやや直線的に外反するＢ型に通有する形状をなし、内外面は回転ナデによって仕上げる。５～８は脚部の資料である。基本的には外面は粗いタテナデ、内面はユビオサエ、不定方向のナデによって仕上げる。7 は近世里道の土留めに転用されて倒立した状態で出土した脚部資料である。外面にはナデ調整以前の成形痕である平行タタキが部分的に認められ、内面には粘土紐接合痕が観察される。総じて脚部でも親壺付近にはタタキや当具痕を残す場合が多い。親壺との接合は観察可能な資料は総て内傾接合による。８は脚端部が残存する資料で、脚端部はやや外反し幅狭の平坦面を形成している。９～ 11 は親壺胴部の小片である。外面に平行タタキ、内面に同心円当具痕を残し、通常の壺甕と見分けがつかないが、円形スカシが認められる。親壺にスカシを穿つ例はＣ型に特有の要素であり、Ｂ型では今のところ当古墳例以外には知られていない。

12～ 17 は子持壺子壺である。接合の判明している資料はいずれも柳浦ａ手法に属する（柳浦 1993）。形態的には口縁部と頸部、体部の区分が明瞭であり、口縁部と頸部が一体化した資料はない。調整は粗く、口縁部と頸部はヨコナデで仕上げ比較的整っているが、体部は不整方向のナデで仕上げ、非対称を呈する資料が多い。接合は親壺を刳り貫き底抜けの子壺を挿入するａ手法である





第 14 図　T2 出土遺物実測図（１）（1 ～ 11: S = 1/3、12 ～ 21：S = 1/4）



第 15 図　T2 出土遺物実測図（2）（1 ～ 11: S = 1/4、12 ～ 18: S = 1/3）

が、接合痕を観察する限り別作りの子壺を挿入するのではなく、親壺刳貫部で粘土紐を重ね、接合と子壺の成形を同時に行っていたようにも見受けられる資料も存在する（17）。

18 は竈の庇部の資料と思われ、断面三角形状を呈する。古墳とは直接関係ない資料と考えられる。

4. 第 3・第 9 トレンチ（第 16 ～ 20 図）

T3 トレンチの概要（第 16・17 図）　T3 は墳丘主軸に直交して後円部西側に墳裾及び周溝検出を目的として設定した長さ 14.6 m、幅 2 mのトレンチである。T9 は T3 の調査後に T3 で検出した SD02 の性格追求を目的として T3 墳丘外の南に隣接して設定した 6.3 m× 2 mのトレンチである。

T3 の墳丘部では、厚さ約 20㎝の表土下に暗灰黄色土、その下に黄褐色粘質土や黒褐色土が認められた。これらの土層からは子持壺をはじめとする須恵器が若干出土しており、流土層と考えられ

る。流土を除去すると、標高 14.3 m付近で帯状の黒色土層を面的に検出した（第 16 図墳丘網掛け部）。その下層は明確な地山層であることから、墳丘築造以前の旧表土層と考えられる。黒色土層より上には、地山ブロック混じりの暗黄褐色・褐色系のやや締まった土層が堆積しており、盛土層と考えられる。墳丘部は標高 15 mより上は約 33°前後の傾斜で、本来の墳丘の形状をある程度保っていると考えられるが、標高 15 mより下は非常に急傾斜となっており、この部分は確実に後世の削平を受けている。なお、墳丘部は墳丘保護のため断ち割り調査は実施していない。

当トレンチについても、T1、T2 と同様に墳裾付近は近世以降の里道や耕作によって削平されており、明確な墳端は確認することはできなかった。現在の見かけ上の墳端付近では、幅 1.7 m、深さ 15㎝前後の溝状遺構を検出した。溝内埋土からは近世陶磁器が出土し、墳丘側には幅 30㎝前後の溝を伴っている点から、切図にある近世里道と考えられる。

このように墳裾付近は大きく改変を受けていたが、近世里道の西側でこれに接するような状態で SD02 を検出した。この SD02 は幅約 3 m、深さ約 50㎝を測り、マンガンバンド硬化面を底面としている。当初周溝の可能性も考えたが、60 m級の前方後円墳の周溝としては小規模である点、後述するように溝は後円部をめぐらずに南西方向へと延びていく点、溝内の埋土は土層の観察からみて人為的に埋め戻したもので、通常の周溝埋土とは大きく様相が異なることから、周溝ではないと判断した。また、溝内からは後述するように墳丘流土中から出土する子持壺が全く出土していない点も、このことを傍証する。

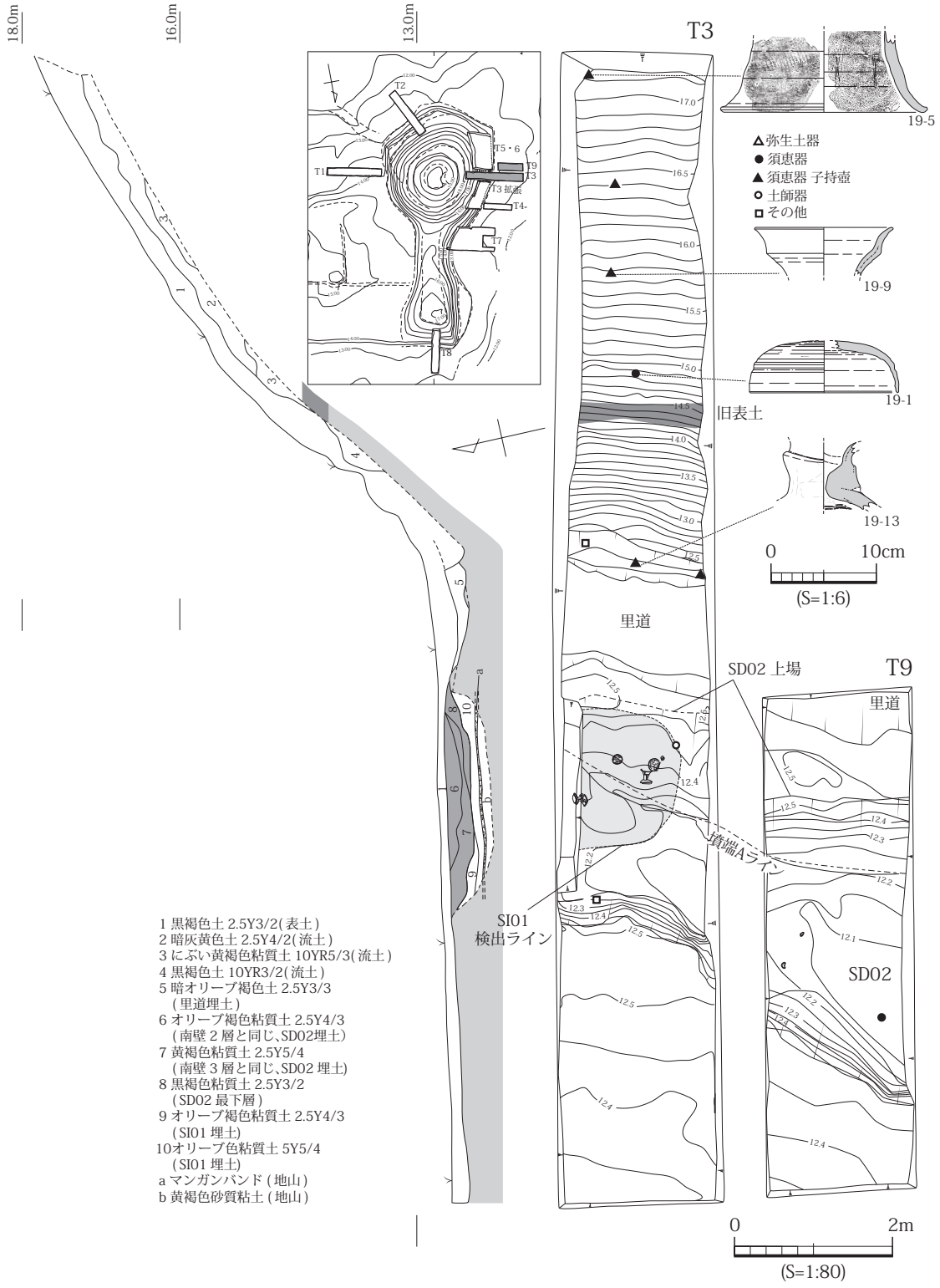
T3 内の SD02 の埋土は、地山ブロックを多く含むオリーブ褐色粘質土や黄褐色粘質土によって構成され、通常の周溝埋土のような黒色土は認められず自然堆積状を呈さないことから人為的に埋め戻したものと考えられる。後述するように T9 内で検出した須恵器直口壺は溝底付近と埋土上層で出土した破片が接合したことから、極めて短期間で埋め戻されたものと推察される。また、SD02 の床面には竪穴住居状の古い落ち込み（SI01）が認められたが、遺構保護のため一部たち割り調査にとどめている。

遺物の出土状況（第 17・18 図）　遺物は墳丘部流土中より子持壺などの須恵器片が出土しているほか、SD02 の床面付近から須恵器有蓋高坏 2 セットが一括出土している。有蓋高坏はいずれも SD02 の墳丘側の溝下場付近のほぼ床面直上から出土している。1 セットはほぼ同一箇所から出土しているが、もう 1 セットは高坏と蓋が約 80㎝ほど離れた位置から出土した。その他、中央付近の有蓋高坏 2 セットの近くから低脚坏（20-6）が出土している。SD02 からはこれらの遺物の外、黒曜石製石器や土師器・弥生土器が出土しているが、先述の有蓋高坏 2 セットの外は墳丘部から出土している子持壺などのような古墳に伴う遺物が全く出土していない点は特筆される。つまり、SD02 から出土した有蓋高坏は、墳丘に立て並べられた子持壺が転落する以前には既に埋没していたと考えられ、古墳築造の上限年代を知る上での重要な手掛かりと言える。このほか当トレンチ出土の遺物としては、墳丘部から須恵器子持壺が多数出土したほか、弥生土器、土師器、陶磁器、鉄器片が出土している。

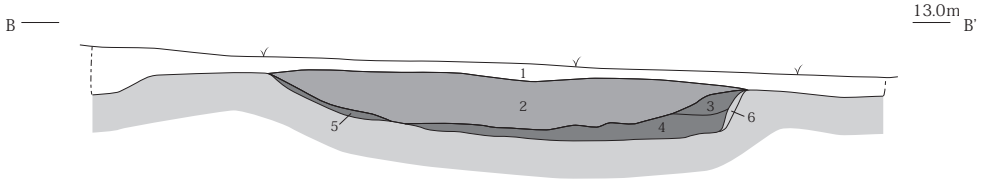
T9 トレンチの概要（第 16･17 図）　T3 で検出した SD02 の性格を明らかにするため、T3 の南に隣接して設定したトレンチである。表土直下より SD02 の延長部を検出した。T9 内の SD02 は、西側立ち上がりラインは南西部方向へ延びていくのに対して、東側立ち上がりラインは後円部を一見周溝状にめぐるように南側へむけて延びており、その結果 T9 内における SD02 の平面形態は末

広がりの形状をなしている。SD02 の埋土は大きく 2 層に分層され、下層の黄褐色粘質土は西壁付近にしか存在しない。このことから、本来は SD02 に先行し南西側にめぐる溝が存在し、そののちに後円部に沿うように SD02 が掘削された可能性も考慮される。溝内の埋土は地山ブロックを多く含みよく締まった土層で、先述のように SD02 底面付近と最上面から出土した須恵器壺の破片が接合したことから、SD02 上層の褐色粘質土は、ほぼ同時期に意図的に埋められたものと推察される。

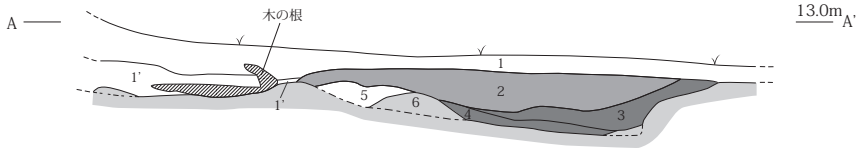
第 3・第 9 トレンチ出土遺物（第 19・20 図）　第 19 図は T3 のうち SD02 以外の出土遺物である。1・



第 16 図　T3・T9 実測図

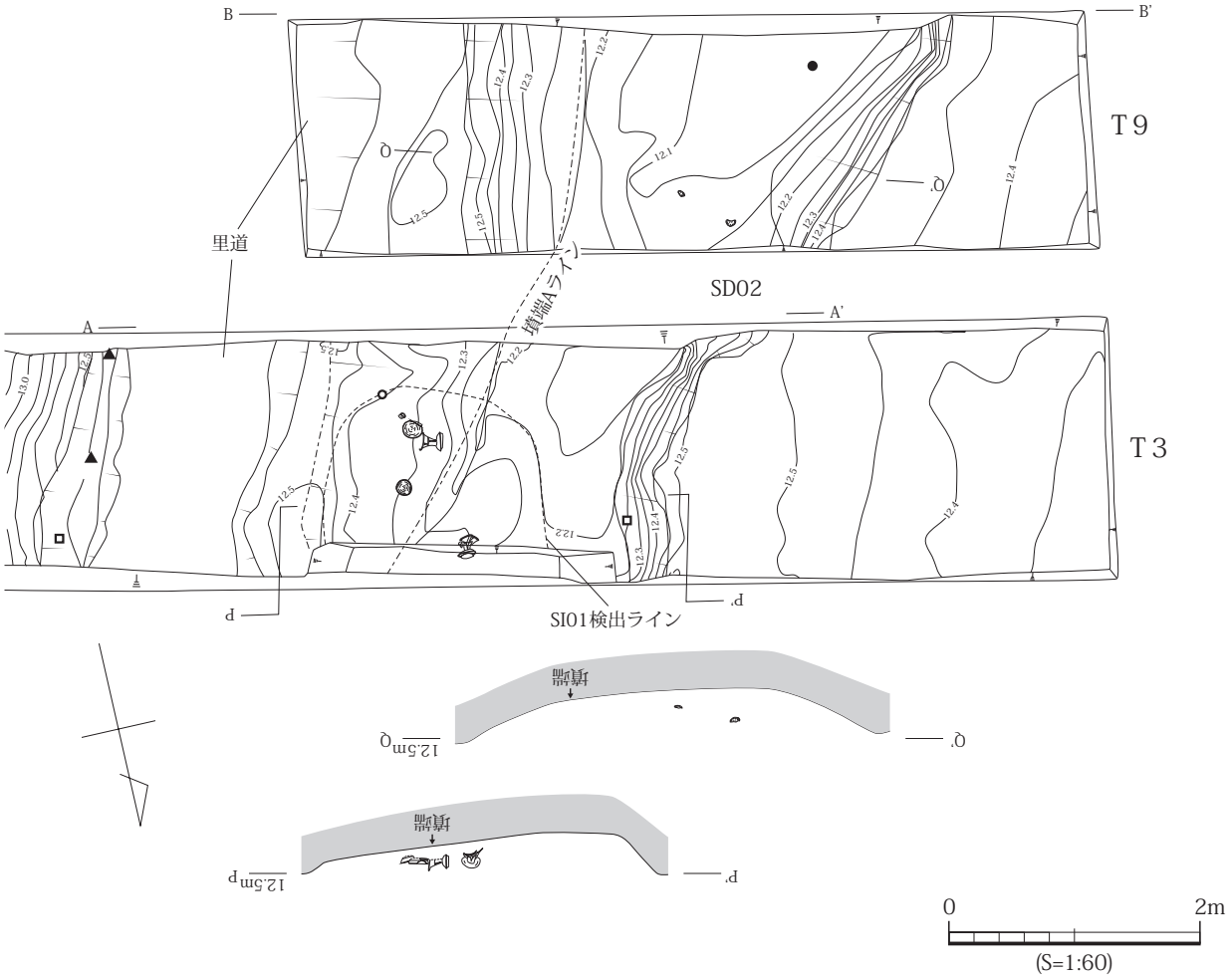


1 黒色土7.5YR3/1(表土)
2 にぶい褐色粘質土7.5YR5/3(一度に埋めた土、SD02埋土)
3 灰褐色砂質粘土7.5YR5/2(SD02埋土)
4 にぶい黄褐色粘質土10YR5/3(SD02埋土)
5 にぶい橙色粘質土7.5YR6/4(SD02初期流入土)
6 にぶい褐色土7.5YR5/4(地山か？)



1 黒褐色土 10YR3/2(表土)
2 オリーブ褐色粘質土 2.5Y(炭・地山ブロックを若干含み、よくしまる。SD02 埋土)
3 黄褐色粘質土 2.5Y5/4(炭をやや多く含み、弥生土器片を含む。SD02 埋土)
4 明黄褐色砂質粘土 2.5Y7/6(地山ブロックを多く含み、よくしまる。SD02 埋土)
5 黄褐色砂質土 2.5Y5/3(地山の根撹乱土、大型地山ブロックを多く含む)
6 明黄褐色砂質土 2.5Y7/6(地山風化土か？大型地山ブロックに粘質土が貫入)
1' 暗オリーブ褐色土 2Y3/3(しまりなく近世陶磁器を含む、里道埋土)

△弥生土器
● 須恵器
▲ 須恵器 子持壺
○ 土師器
□ その他



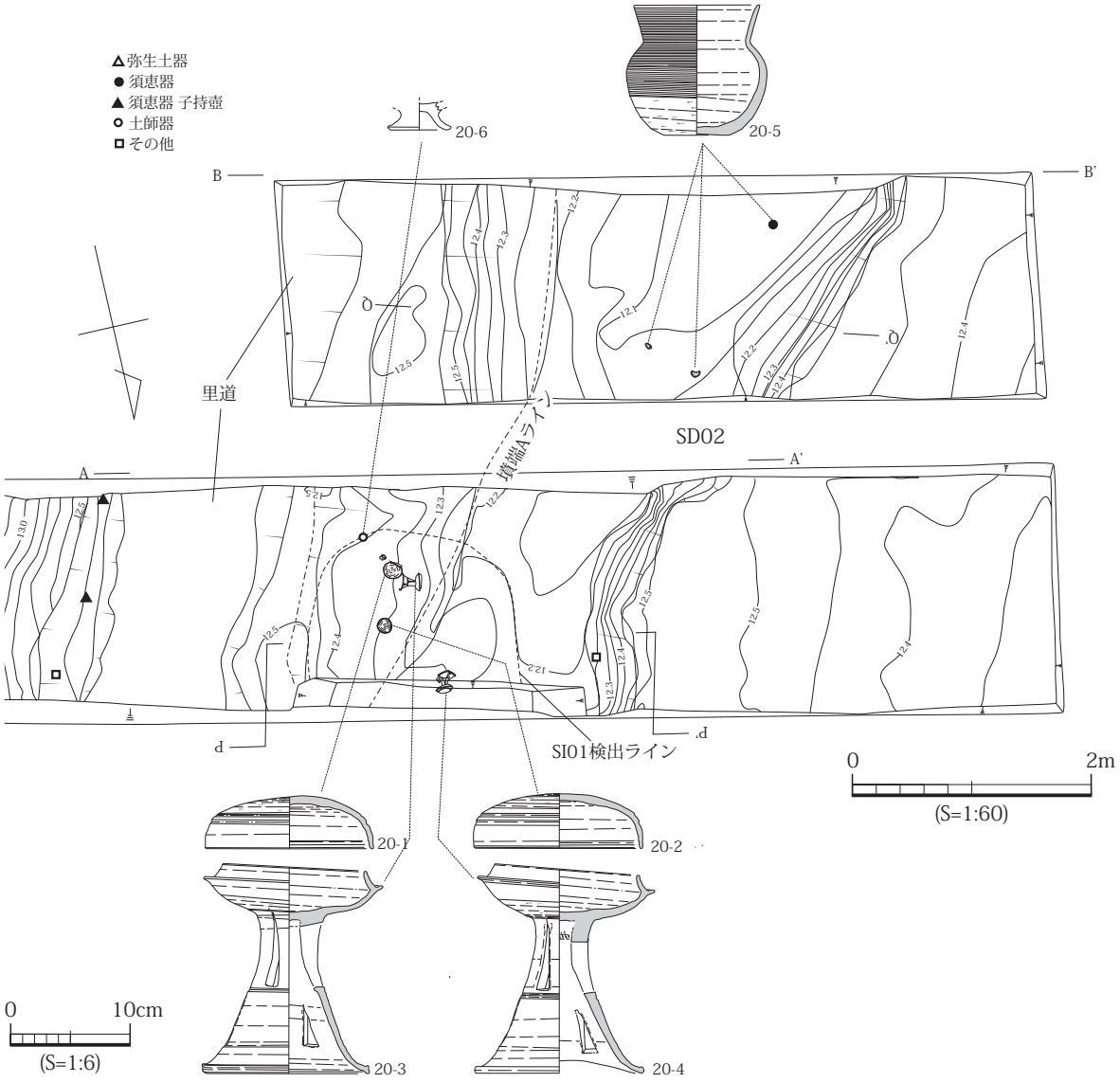
第 17 図　T3・T9 SD02 実測図

2 は坏蓋である。口縁端部を肥厚させ内面に浅い沈線を入れてなでており、大谷分類α 3・4 類に相当するのものか。1 の天井部は丁寧なヘラケズリを施す。

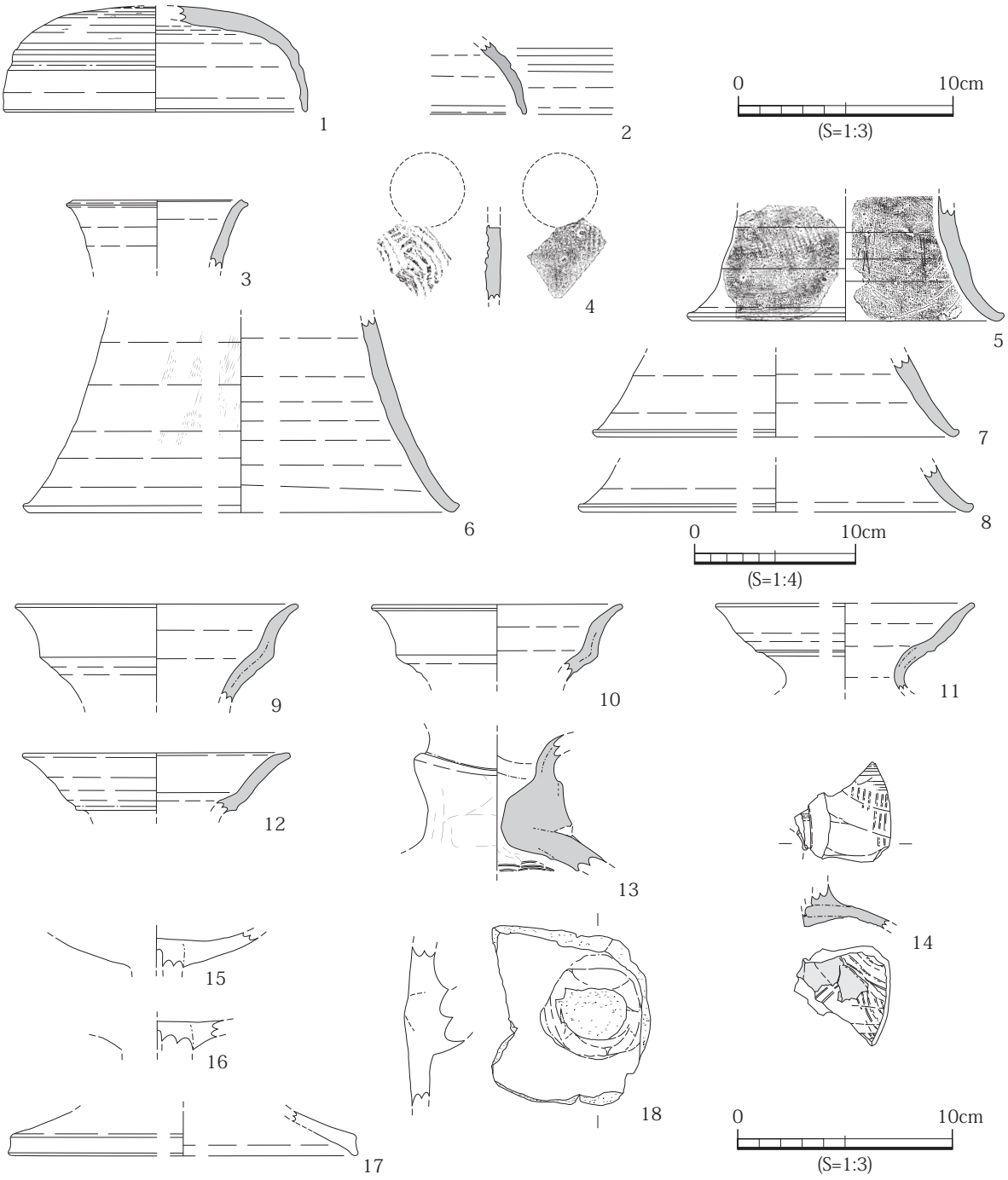
3 ～ 14 は子持壺である。3 は親壺口縁部で直線的に長く外反し、端部はヨコナデによって狭い平坦面を形成する。4 は親壺胴部で一部円形スカシが認められる。5 ～ 8 は脚部として復元したが、7 は親壺口縁部の可能性がある。9 ～ 12 は子壺口縁部で、段を持ち強く外反して端部は丸く収めており、本来の蕨の形状をよく残している。13 は子壺体部で肩部が強く張り、胴部は縦方向のナデによる成形でかなり不整形な形状をなしている。親壺との接合部は焼成時に伴う亀裂が生じている。14 は子壺と親壺の接合状況が良好に観察できる資料である。

15 ～ 18 は古墳築造以前の遺物である。15･16 は土師器高坏である。坏部底面には接合法γ（松山 1991）が認められ、古墳時代中期後半に属する資料と考えられる。17 は弥生時代後期前半の高坏か器台の脚部と想定される資料で、脚端部に幅狭の拡張部を設ける。18 は山陰型甑形土器の取手装着部で、縦方向の取手を装着するため胴部穿孔を行っている状況が観察できる。

第 20 図は SD02 から出土した遺物である。1 ～ 4 はセットで出土した有蓋高坏で、蓋、本体ともに非常に類似した同工品である。蓋（1・2）は、口径 13.9㎝前後とやや大型で、天井部は丁寧



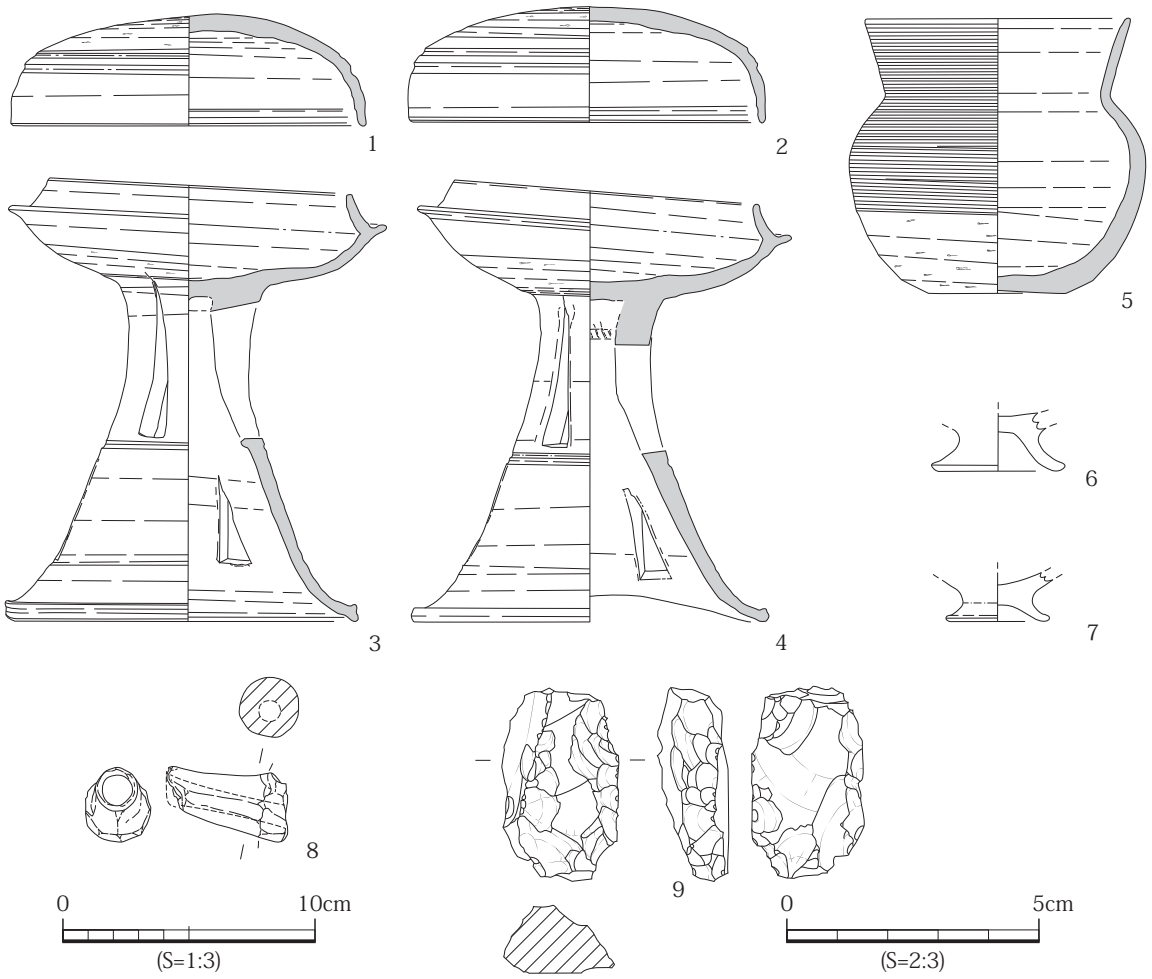
第 18 図　T3・T9 SD02 遺物出土状況



第 19 図　T3 出土遺物実測図（1 ～ 2・9 ～ 18: S ＝ 1/3、3 ～ 8: S ＝ 1/4）

なヘラケズリを施す大谷Ⅰ類またはⅡａ類に属するものである。口縁部内面には浅い沈線を 1 条施し、β類に属する。3・4 の高坏本体は口径 11.9㎝、器高 17.6㎝前後を測り、脚部高が比較的高いのが特徴である。坏部端部は丸く収め、脚部は 1 ～ 2 条の沈線で上下に区画し、三角形スカシを千鳥に 3 方向に穿つ。脚端部は強く屈曲し、直立する幅狭の平坦面を形成する。5 は T9 から出土した直口壺である。形態的には体部がやや寸詰まりで頸部の締まりが緩く、口頸部が外反するのが特徴である。外面には口縁部から胴部にかけてはカキメを施し、胴部下半から底部にかけては回転ヘラケズリで仕上げている。

6 ～ 9 は SD02 掘削以前の遺物である。6･7 は低脚坏でいずれも脚端部が強く外反する特徴から、草田 5 期以降の資料である（赤澤 1992）。8 は注口土器の注口部で、先端に向かって先細りにな



第 20 図　T3・T9 SD02 出土遺物実測図（1 ～ 8: S ＝ 1/3、9: S ＝ 2/3）

る形状から、やはり草田 4 ～ 6 期に属する資料である（池淵 2007・松山 2010）。これらは T3 の SD02 床面でプランを検出した SI01 に伴う遺物である可能性が高い。9 は黒曜石製のエンドスクレーパー状の石器で、先端から両側辺にかけて急角度の二次調整が施されている。

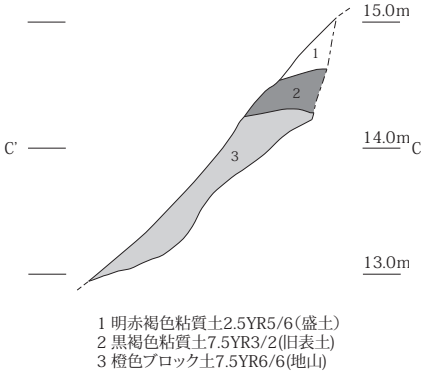
遺構の性格　SD02 と古墳墳丘との関係については、土層的には切り合い関係を持たないため、その直接的な前後関係については言及できない。しかし、先述のとおり墳丘流土が発生する以前に既に当溝は埋め戻されている点、後述するように出土した須恵器群と墳丘出土の須恵器群とは近接する時期である点などからみて、古墳築造に伴う何らかの遺構であった可能性が高い。当初は魚見塚古墳本体に従属する小円墳の周溝である可能性も考えたが、墳丘想定部付近から埋葬施設的な遺構が確認できない点や先述の SD02 内出土須恵器の年代観、さらに SD02 内に墳丘本体から転落した子持壺が全く出土していない点から、魚見塚古墳より後出する従属小墳とは考えにくい。ここでは、墳丘築造時に伴う遺構であり、出土須恵器からみて何らかの儀礼行為が行われた可能性を想定しておきたい。

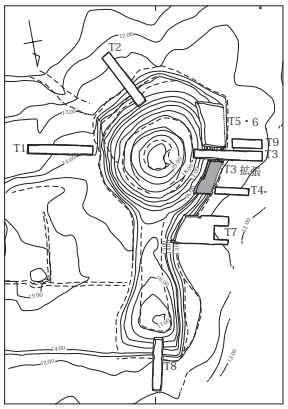
5. 第 3 トレンチ拡張調査区（第 21・22 図）

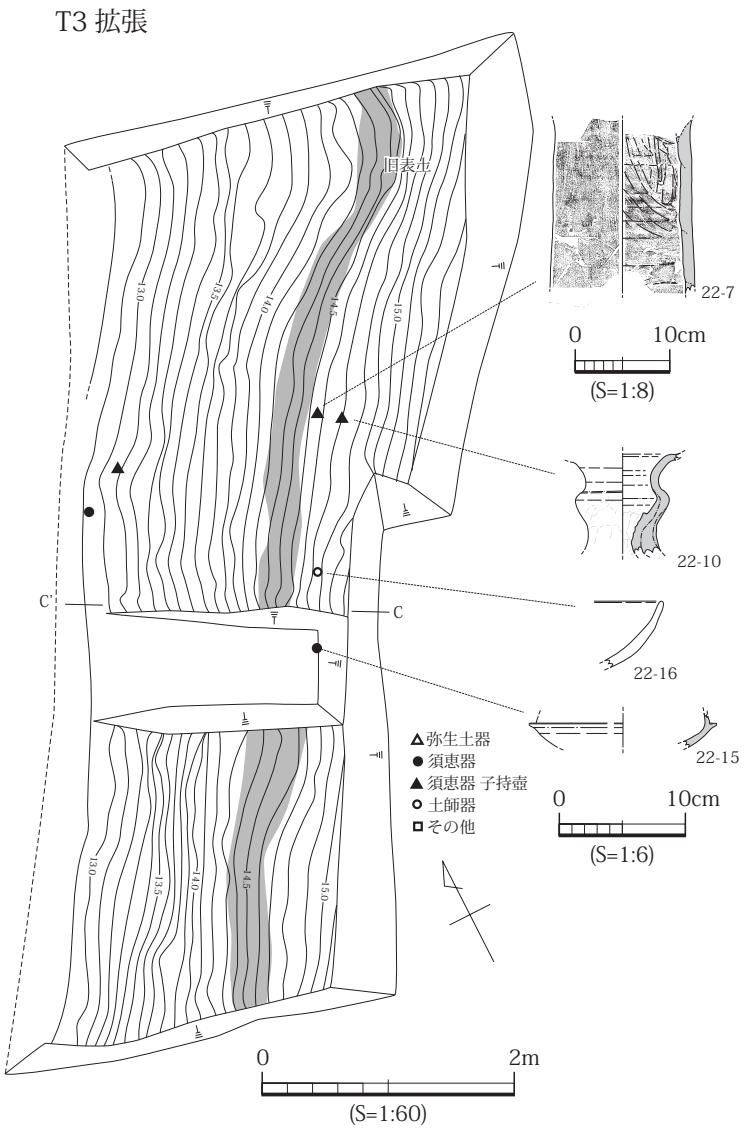
トレンチの概要（第 21 図）　平成 24 年度末に実施した電気探査の結果に基づき、横穴式石室の開口方向の確認を目的として T3 の北側に設定した調査区である。現況は他の調査区と同じく墳裾付近は大きく削平されて急傾斜をなしている。調査区内の表土を除去したところ、T3 と同様に標高

14.2 ～ 14.5 m付近で旧表土層と想定される黒褐色土層を検出した。中央部付近で旧表土が不明な箇所があったため、部分的にサブトレンチでたち割り調査を行ったところ、一部が攪乱されていたにすぎず、基本的には旧表土は当調査区内では途切れずに続いていることが判明した。このことから、当調査区内では横穴式石室の開口部は存在しないと判断した。

当調査区は基本的には表土を除去しただけの調査にとどめているが、先述のとおり調査区中央付近にサブトレンチを設けて部分的に墳丘たち割り調査を行ない、その結果、盛土及び旧表土層を確認した。旧表土層は厚さ 30㎝前後の黒褐色粘質土層で、弥生土器、須恵器、土師器を含む。また、焼土ブロックも若干含んでいる。当然古墳築造以前の生活痕跡に伴うものと考えられるが、場合によっては墳丘築造時の盛土工程以前に何かしら火を焚いた可能性も考慮される。この上層には黄色地山ブロックを含む明赤褐色粘質土が堆積しており、盛土と考えられる。







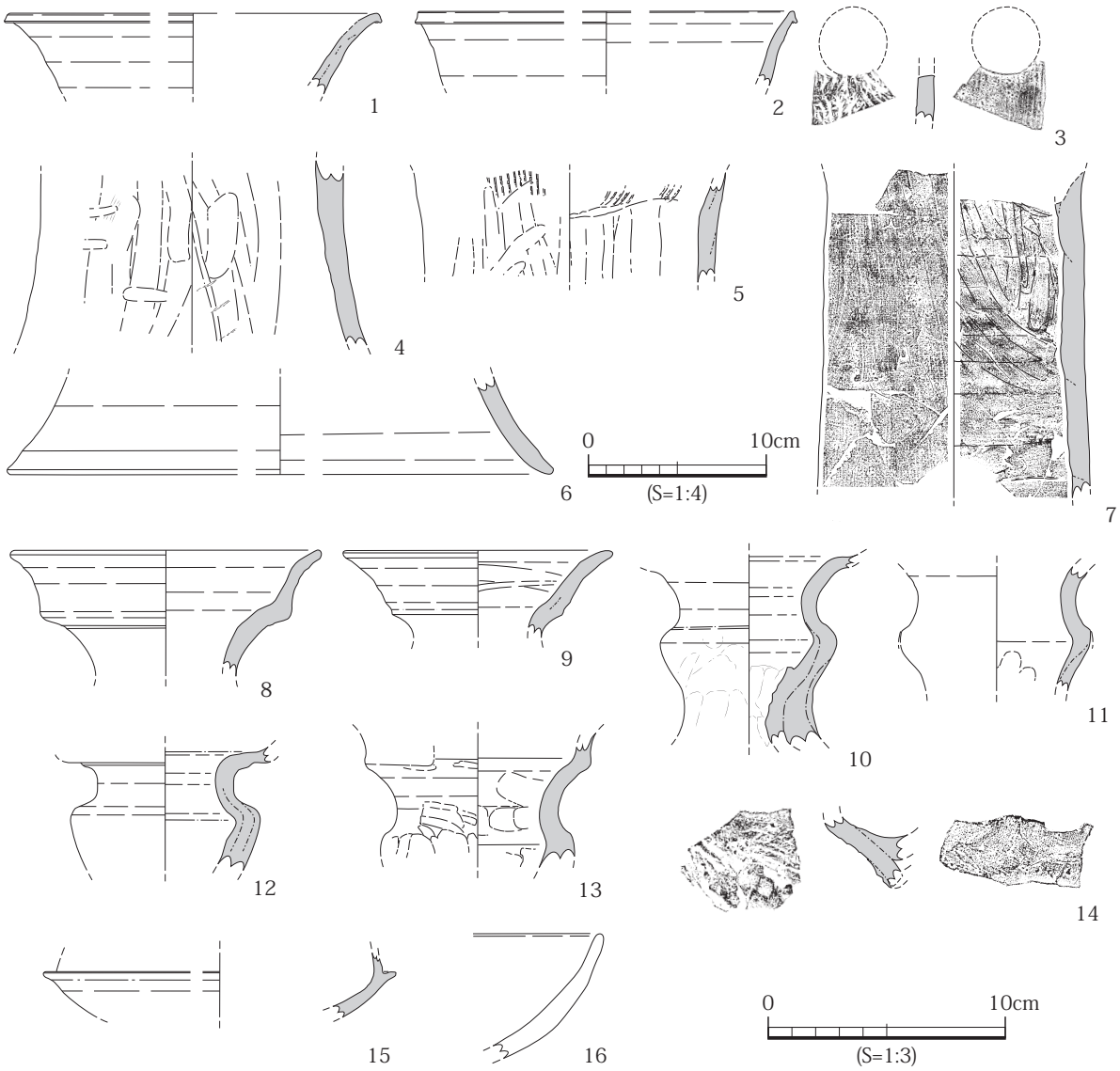
第 21 図　T3 拡張調査区実測図

遺物の出土状況（第 21 図）

表土層中からは散発的に須恵器が出土している。須恵器は大半が子持壺である。また、サブトレンチ内では、旧表土中より須恵器坏身と土師器が出土している。特に須恵器は小片であるが当古墳築造時期を検討する上での重要な資料である。

第３トレンチ拡張調査区出土遺物（第 22 図）

1 ～ 14 は表土中から出土した遺物で、総て子持壺である。1・2 は親壺口縁部



第 22 図　T3 拡張調査区出土遺物実測図（1 ～ 7: S ＝ 1/4、8 ～ 16: S ＝ 1/3）

と想定される資料で、1 は口縁部が直線的に外反し、口縁端部はヨコナデによって下方へわずかに拡張する。2 も同様な資料であるが、口縁部端部の下方への拡張がより顕著な資料である。とはいえ、いわゆる意宇型子持壺（C 型）の口縁部とは明瞭に区分できる。3 は胴部資料でやはり円形スカシが認められる。

4 ～ 7 は子持壺の脚部資料である。いずれも粗い縦方向のナデによって内外面を仕上げている。5 は親壺付近の資料で外面に平行タタキ、内面に当具痕を部分的に残す。7 は比較的大型の資料で、表面には粘土紐積み上げ時の凹凸が観察され、それによれば粘土紐の幅は 3㎝前後に復元できる。また、脚部には区画線やスカシの痕跡は一切認められない。

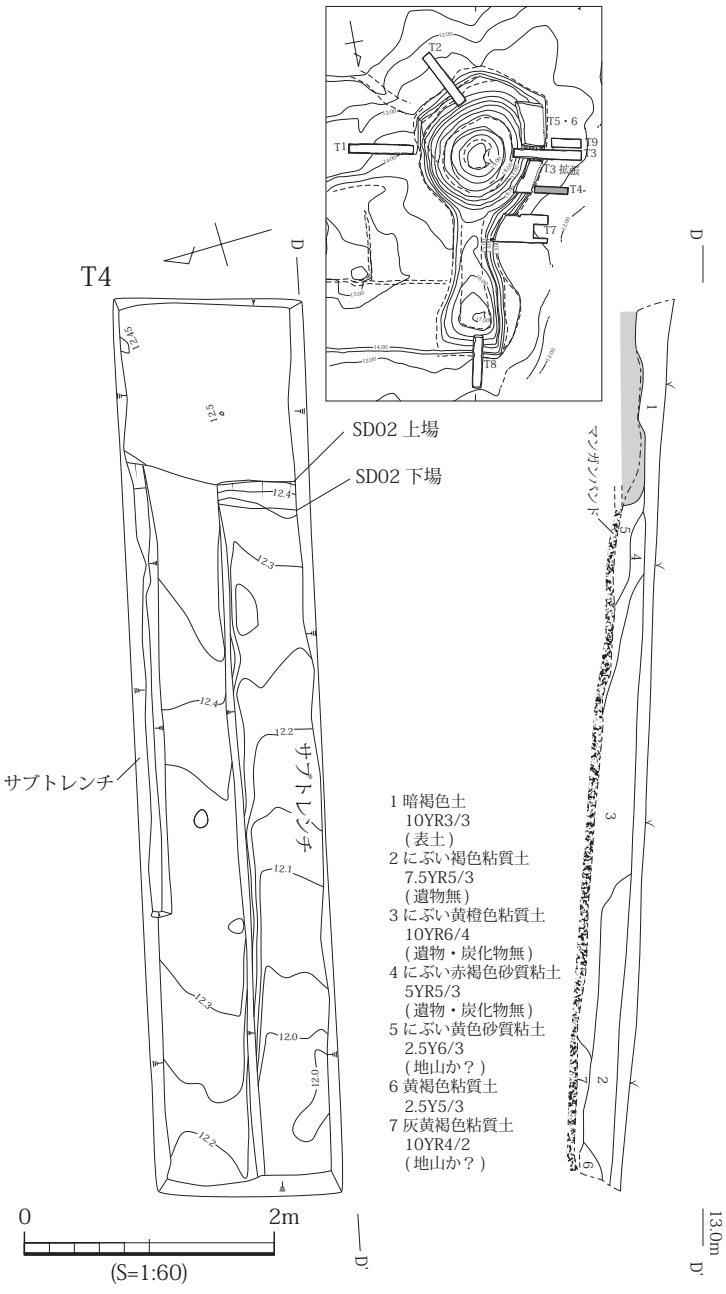
8 ～ 14 は子壺資料である。8・9 は子壺口縁部で、段部を明瞭に表現し、内外面はヨコナデによって比較的精美に仕上げている。10 ～ 13 は子壺体部資料である。他のトレンチの資料と同様に、頸部までは丁寧なヨコナデで仕上げるが、体部はヨコナデを多用せず、不整方向のナデによって仕上げており、結果的にやや不整形な形態を呈する。10 は親壺との接合部がわかる資料である。これによると、まず親壺の穿孔部に高さ 5㎝程度の円筒状の粘土帯を差し込み接合して子壺の芯部分を成形し、その外面を被覆するように粘土帯を接合して　[illegible]の形状に成形しており、親壺上で子壺

を成形している様相が窺える。14 は子壺の芯部分が剝離して脱落し、親壺と子壺の外皮部分のみが残存する資料である。

15・16 はサブトレンチ中の旧表土（黒褐色土粘質土）中から出土した遺物である。15 は坏身である。小片で口縁部を欠いており、詳細な位置づけは不明であるが、立ち上がりの角度からみて大谷 3 期前後に属する可能性が高い。16 は同じく旧表土層から出土した土師器の椀形高坏の坏部又は坏の口縁部である。小片であるが、やや厚手の大型品で、口縁部が内湾せずやや開き気味の形態をなす。外面にはわずかに赤彩痕を残す。

6. 第 4 トレンチ（第 23 図）

トレンチの概要　T3 で検出した SD02 の広がりを確認するため、後円部北西側のくびれ部に近い箇所に設定した、幅 1.5 m、長さ 7.2 mのトレンチである。他のトレンチと同様に墳裾付近は大きく削平をうけており、トレンチ東端では約 10㎝の表土を除去した段階ですぐに凝灰岩質風化土の地山を確認した。この地山はトレンチ東端から西へ約 1.5 m付近で急激に落ち込んでいる状況が確認された。この落ち込みのラインは T3 で検出した SD02 の溝底東側下場部の延長ラインとほぼ一致し、見かけ上の後円部の墳裾推定ラインと概ね一致する。



第 23 図　T4 実測図

このように、この落ち込みは SD02 に関連する何らかの遺構である可能性が想定されたため、トレンチの南壁沿いにサブトレンチを設定し、この落ち込みの性格を追求した。落ち込み内には暗黄褐色系のよく締まった土が堆積しており、SD02 と同じくマンガンバンド硬化面を床面としている。この落ち込みの埋土中からは遺物は全く出土していない。また、西側での立ち上がりはトレンチ内では確認できなかった。

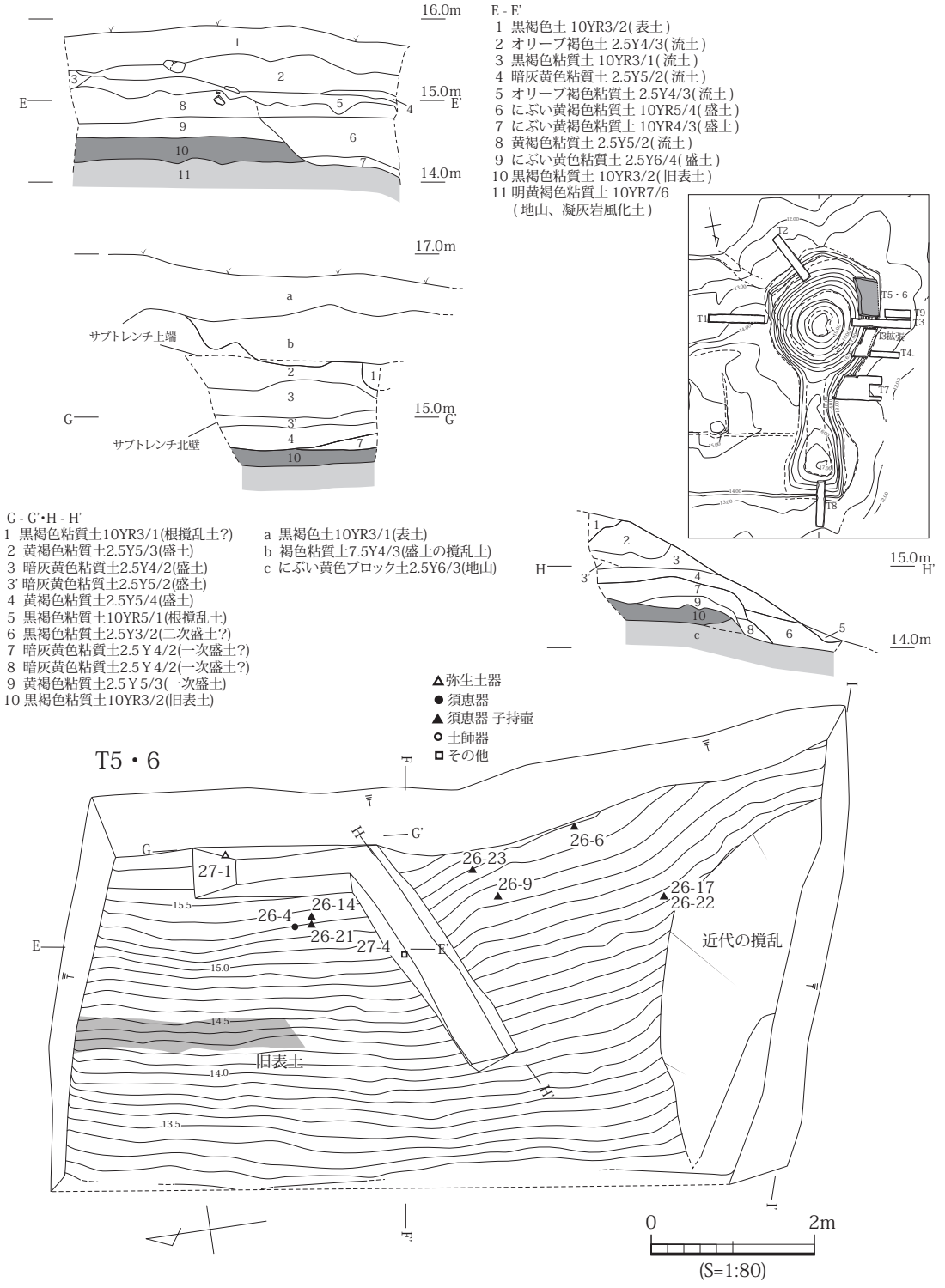
以上の点から、この落ち込みは自然堆積である可能性も考慮されるが、地山ブロック小粒を多く含んでいる点から地山とは見なし難く、SD02 と同様に意図的に埋めた人為的な整地土である可能性を考えてい

る。性格については現段階では不明と言わざるを得ないが、この落ち込み下端ラインが見かけ上の墳端ラインとほぼ一致していることから、墳丘整地時の墳丘割り付け線的な性格であった可能性も考慮される。

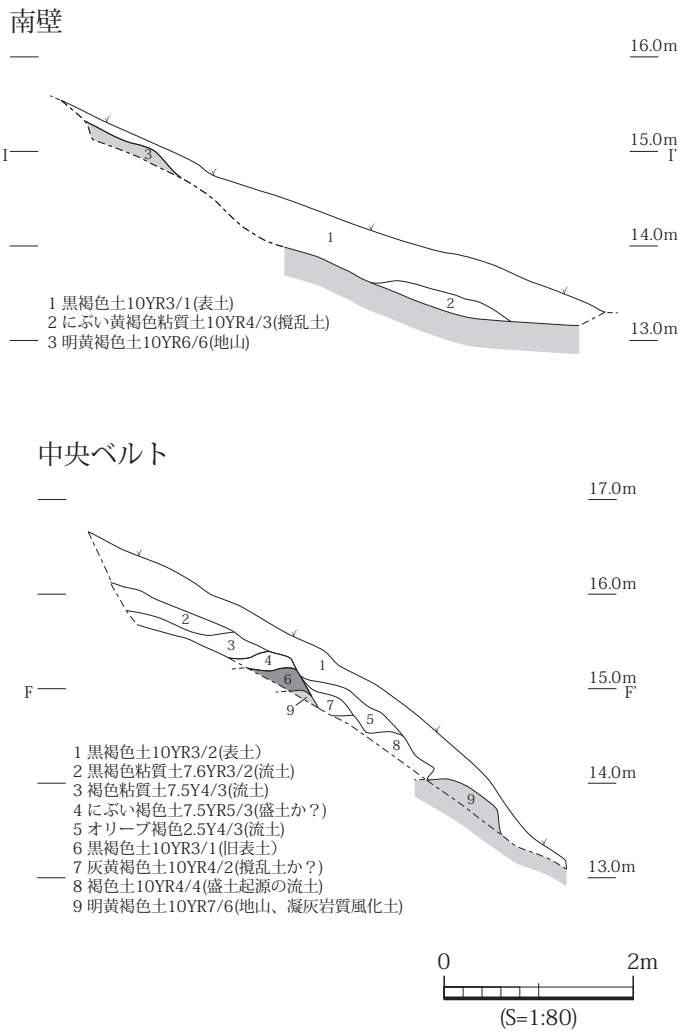
遺物は表土中より子持壺などの須恵器や土師器の細片が少量出土しているが、先述のとおり落ち込み内からは遺物は全く出土していない。

7. 第 5・6 トレンチ（第 24~27 図）

トレンチの概要（第 24・25 図）　T3 墳丘部の南側に埋葬施設開口部検出を目的として面的に設定



第 24 図　T5・6 実測図（1）



第 25 図　T5・6 実測図（２）

した調査区である。当初 T3 南側に T5 を設定して調査し、その追加調査でさらに南に設定した T6 を最終的に一つの調査区としてまとめて面的に墳丘面の精査を行った。

既に述べたように後円部墳裾部は後世の削平を受け、かなり墳丘が削られているが、調査区を設定した後円部南西部は比較的後世の削平の影響が少なく、このため現状では後円部西側はほぼ直線的な形状をなし、T5・6 の南で強く屈曲する形状を呈している。

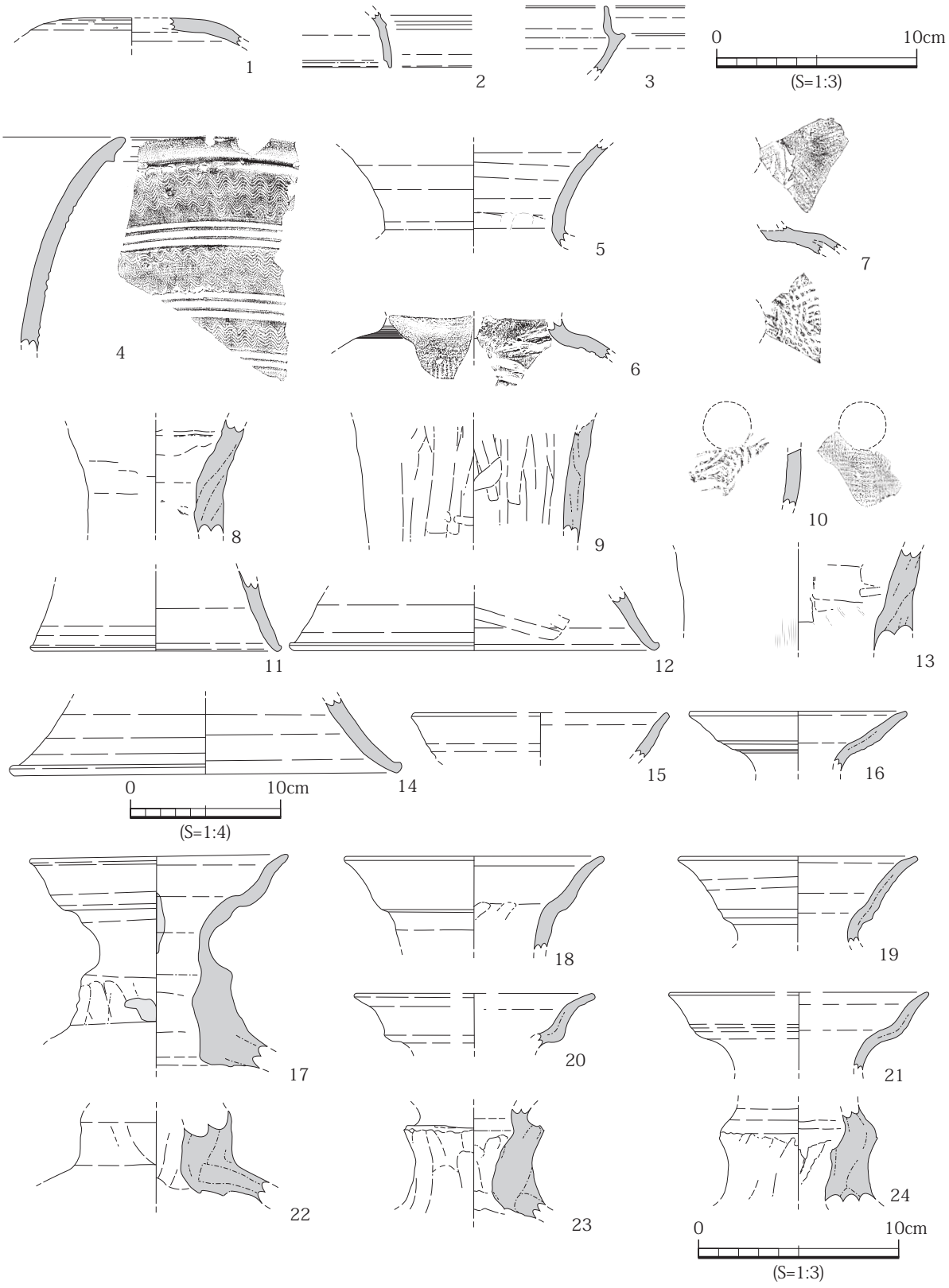
調査区内では南側は近代の攪乱を受けているが、T3 や T3 拡張調査区と同様に表土を除去した時点で旧表土層を確認した。旧表土層は概ね標高 14.5 m付近をめぐっているが、調査区中央付近で旧表土層が途切れ、旧表土を切り込むような土層（第 24 図 E ライン土層図 6･7 層）を確認した。ただし、この土層の切り込み面が盛土層上面であるかどうかが不明確であったため、墳丘に直交する方向（H ライン）と調査区東壁沿い（G ライン）にサブトレンチを設定し、その性格把握に努めた。

断ち割り調査の結果、H ラインでは盛土層の下から旧表土を検出し、当初石室開口部の存在が想定された旧表土層が途切れている部分は、この部分が後世の削平を免れて旧表土が露出していなかった為に、旧表土が見かけ上途切れているように見えていたことが判明した。断ち割り調査では埋葬施設に関連する遺物・遺構は一切確認できなかったことから、当調査区内における埋葬施設の開口部は存在しないものと考えられる。

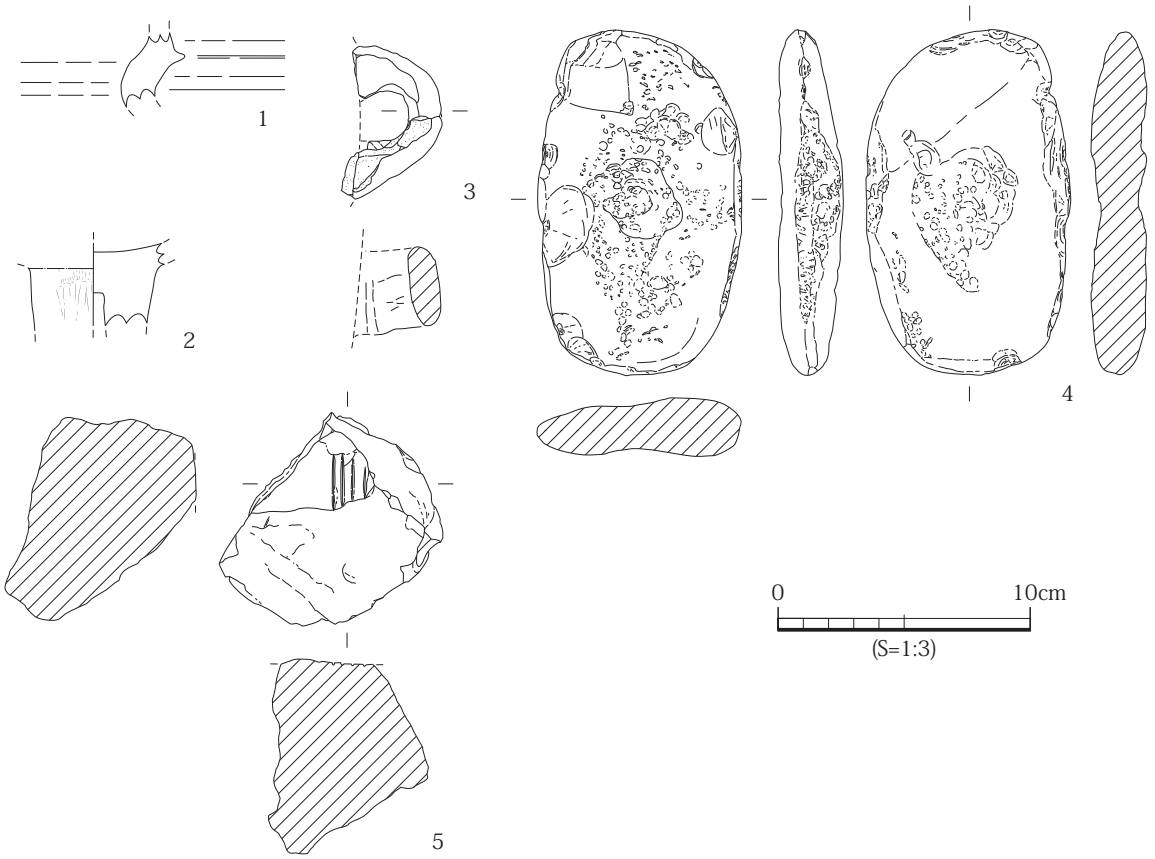
H ラインにおける墳丘構築状況を観察すると、大きくは、①墳丘外周付近を整形する段階、②旧表土層の上に黒色ブロックを多く含む灰・黄褐色系粘質土の盛土（7 ～ 9 層）を 40㎝前後水平に積み上げる一次盛土工程、③さらにその上に黄橙色ブロックを多く含む盛土（3・4・6 層）を積み上げる二次盛土工程に大別できる。最初の墳丘周囲を整形する段階では、トレンチ西側においては旧表土層を切り込み墳丘下段付近を平坦に整えている状況が観察された。その後旧表土層を被覆するように一次盛土を行い、次の二次盛土工程では、まず墳丘外側に黒褐色土（6 層）を盛った後に 3・4 層を水平に盛土している。なお、当調査区内では土嚢状の盛土単位や土堤状盛土工程は、調査区が狭小なこともあり確認できていない。

遺物は表土及び流土中から子持壺を中心とする須恵器が出土しているほか、断ち割り調査時に墳丘内から弥生土器・石器が若干出土している。

第 5・6 トレンチ出土遺物（第 26・27 図）　第 26 図は表土・流土中から出土した須恵器である。1 は坏蓋の小片で天井部は浅いが丁寧な回転ヘラケズリが施されている。2 は坏蓋の口縁部で、端部内面は沈線により段状に仕上げ α 3 ～ 5 類に属する。3 は坏身小片だが立ち上がりが比較的高い。1 ～ 3 はいずれも小片だが出雲 3 期に属すると考えられる（大谷 1994）。



第 26 図　T5・6 出土遺物実測図（1）（1 ～ 3・15 ～ 24: S = 1/3、4 ～ 14: S = 1/4）



第 27 図　T5・6 出土遺物実測図（2）（S = 1/3）

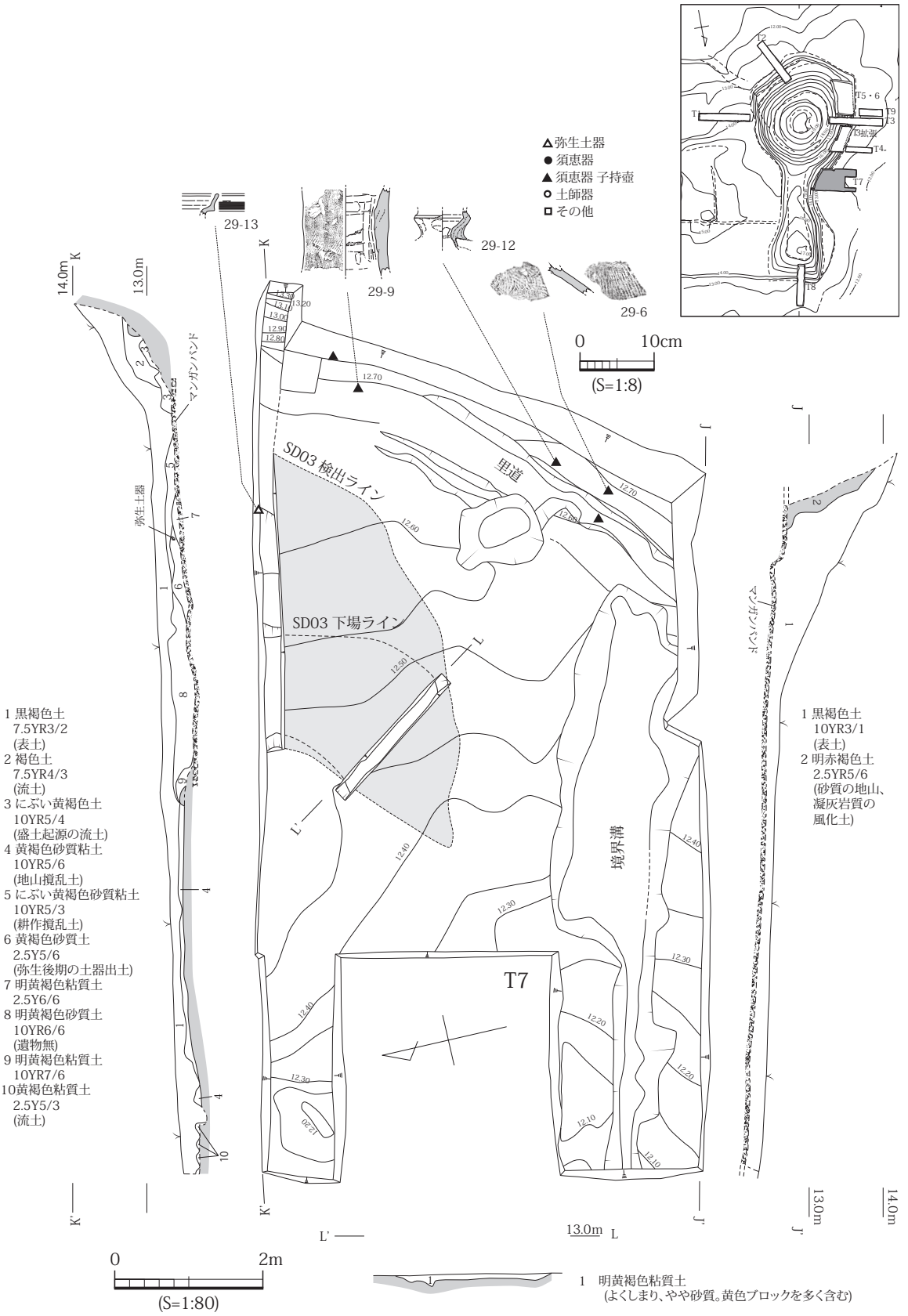
5 ～ 24 は子持壺である。5 は頸部だがやや大型であり、子持壺でない可能性もある。10 は親壺胴部片で円形スカシを部分的に残す。8・9、11 ～ 14 は脚部資料である。8 は小型品の脚部上半部の資料で、親壺との接合付近は比較的薄い粘土紐を数回内傾接合して親壺接合のプラットホームを形成している。脚端部は幾つかのバリエーションがあり、あまり開かないタイプ（11）と裾部が大きく開き、端面がやや上方に突出するタイプ（12・14）が存在する。15 ～ 24 は子壺資料である。17 はほぼ全体の形状がわかる資料で、外面には自然釉とともに窯壁状の黒色飛沫や炭化物が付着する。22 は親壺と子壺の接合部がよくわかる資料で、親壺穿孔部に子壺基部を挿入し、接合部内外面に粘土を貼り付けている様相が良好に観察できる。第 27 図は墳丘断ち割り調査時の出土遺物である。1 は旧表土層中から出土した弥生土器で小片だが大型の壺甕である。弥生後期前半頃であろうか。2 は高坏脚部で坏底部外面に棒状刺突痕が観察される。3 は山陰型甑形土器の取手部で横方向に装着するタイプのものである。4 は敲石で、側縁及び両面中央部に顕著な敲打痕が認められる。5 は不明石製品で、平滑な 1 面に 4 条の鋭利な直線が彫り込まれている。

8. 第 7 トレンチ（第 28・29 図）

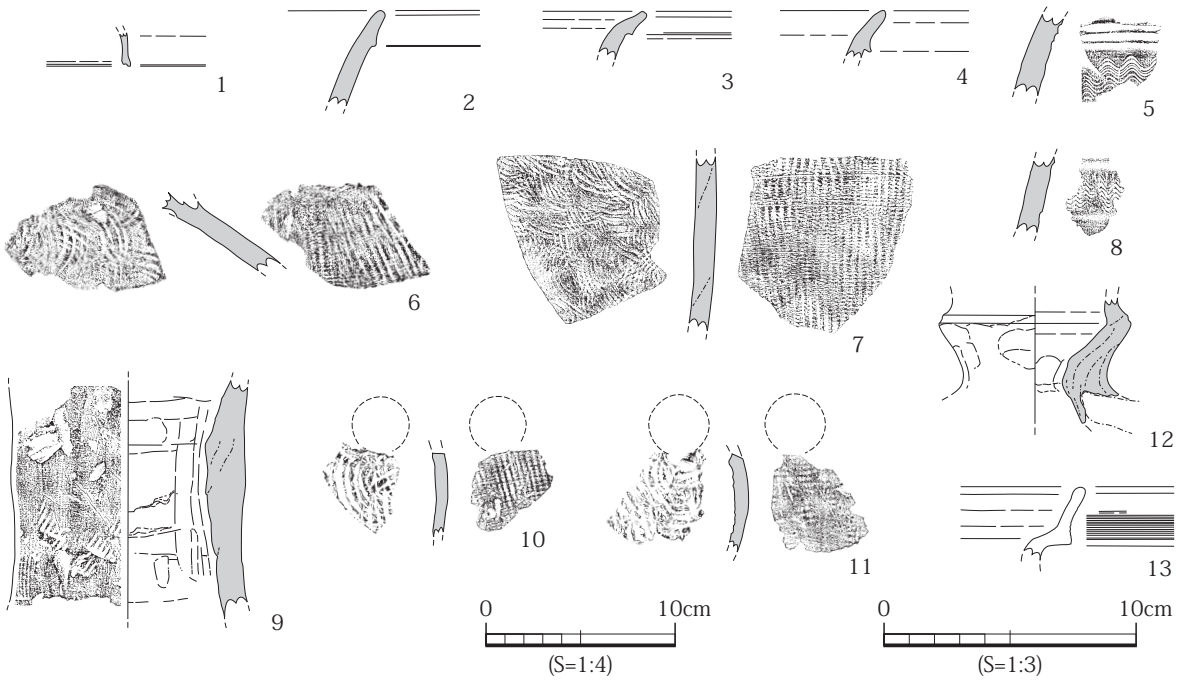
トレンチの概要（第 28 図）　西側くびれ部の確認を目的として設定した東西 12 m、南北 6.2 mのトレンチである。他の調査区と同様に、表土直下でマンガンバンド及び凝灰岩風化土面である地山面を検出し、周溝は確認できなかった。調査区内は墳丘部付近に近世以降の里道が、調査区南側には近世以降の土地境界と思われる東西方向の溝などにより大きく改変されており、殆ど旧状をとどめていない。

なお、調査区北側においては、北東から南西へ向かう周溝状のプランを検出し、SD03 と命名し

た。当遺構の埋土は部分的にサブトレを入れたのみの調査にとどめたが、T4 落ち込み埋土によく似た締まった暗黄褐色系の土であり、弥生時代後期の土器が 1 点出土している。性格については不明と言わざるを得ないが、T4 の場合と同様に、墳丘築造時の割付線であった可能性も想定される。



第 28 図　T7 実測図



第 29 図　T7 出土遺物実測図（2 ～ 11: S ＝ 1/4、1・12・13: S ＝ 1/3）

なお、この SD03 は地山が凝灰岩風化土の部分のみに存在し、調査区南側のマンガンバンド硬化面が露出する区域まで延びていない。このマンガンバンド硬化面は現在の鍬・スコップでも歯が立たない程硬く、乃木段丘に立地する後期の大型古墳ではいずれもこのマンガンバンド面を周溝底面に設定している。つまり、当 SD03 についても、南側のマンガンバンド硬化面分布域については、地山が非常に堅緻なため割付溝の掘削が放棄された可能性も一案としては想定されよう。

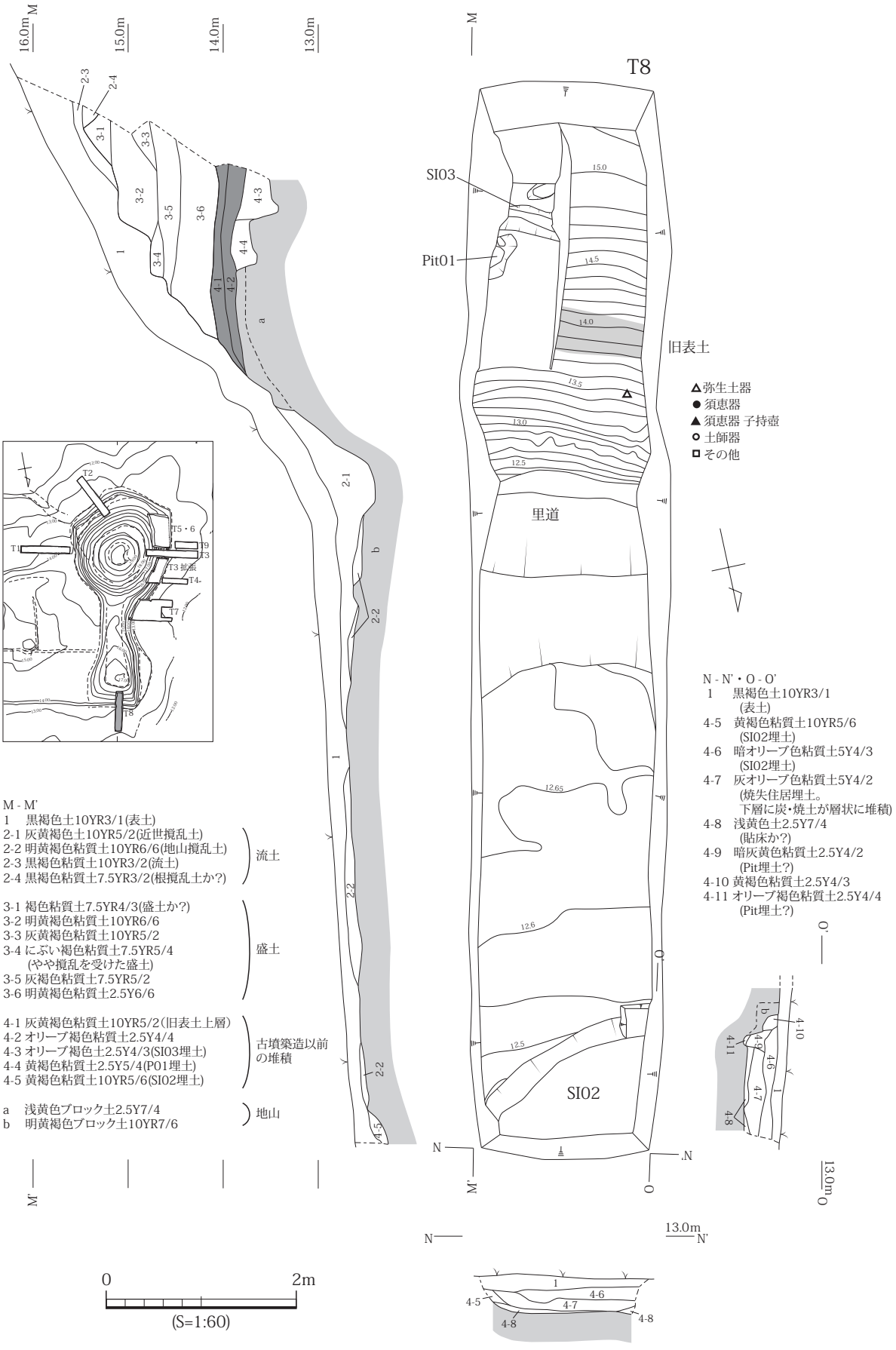
遺物は先述の SD03 から出土した弥生土器のほか、表土中より子持壺等の須恵器が出土しているがその出土は概ね墳裾付近に限定される（第 28 図）。

第 7 トレンチ出土遺物（第 29 図）　1 は坏蓋の口縁部小片で、端面に沈線を入れてなでている。2 ～ 4 は甕の口縁部である。いずれも段状口縁を呈するが、4 はやや小型品の可能性がある。5 ～ 8 は甕の頸部及び胴部資料である。6 は甕としたが、胎土の特徴からみて子持壺親壺の可能性もある。9 ～ 12 は子持壺である。9 は脚部で内面は仕上げが十分でなく内傾接合痕が明瞭に観察される。10･11 は親壺胴部で円形スカシが認められる。12 は子壺で親壺との接合部で剥離した資料である。13 は SD03 サブトレ中から出土した弥生土器で、草田 2 期に位置づけられる。

9. 第 8 トレンチ（第 30・31 図）

トレンチの概要（第 30 図）　前方部前面の墳丘主軸ライン上に設定した、幅 2 m、長さ 11 mのトレンチである。他のトレンチと同様に周溝は検出されず、また墳裾部は里道や近年の耕作によって改変されており、墳端を知りうるデータは得られていない。墳丘傾斜からみて標高 14.5 m以下は削平のため本来の形状を失っていると想定される。墳丘部では、後円部と同様標高 14.0 m付近で旧表土を検出し、前方部も後円部と同様に下半部は地山削り出し、上半部は盛土によって構築されている。盛土はやや大きな単位の灰褐色～黄褐色系の土層をほぼ水平に盛り上げており（3 層）、トレンチ内では所謂土堤状盛土や土嚢状の小工程は確認できない。

なお、墳丘外のトレンチ北端部と墳丘内の旧表土下層から弥生時代後期と想定される竪穴住居 2 棟（SI02・03）を検出した。このうち墳丘外で検出された SI02 は部分的に検出したにすぎないが


T8
SI03
Pit01
旧表土
里道
SI02
△弥生土器
● 須恵器
▲ 須恵器 子持壺
○ 土師器
□ その他
M - M'
1　黒褐色土10YR3/1(表土)
2-1 灰黄褐色土10YR5/2(近世撹乱土)
2-2 明黄褐色粘質土10YR6/6(地山撹乱土)
2-3 黒褐色粘質土10YR3/2(流土)
2-4 黒褐色粘質土7.5YR3/2(根撹乱土か?)
流土
3-1 褐色粘質土7.5YR4/3(盛土か?)
3-2 明黄褐色粘質土10YR6/6
3-3 灰黄褐色粘質土10YR5/2
3-4 にぶい褐色粘質土7.5YR5/4
(やや撹乱を受けた盛土)
3-5 灰褐色粘質土7.5YR5/2
3-6 明黄褐色粘質土2.5Y6/6
盛土
4-1 灰黄褐色粘質土10YR5/2(旧表土上層)
4-2 オリーブ褐色粘質土2.5Y4/4
4-3 オリーブ褐色土2.5Y4/3(SI03埋土)
4-4 黄褐色粘質土2.5Y5/4(P01埋土)
4-5 黄褐色粘質土10YR5/6(SI02埋土)
古墳築造以前の堆積
a　浅黄色ブロック土2.5Y7/4
b　明黄褐色ブロック土10YR7/6
地山
N - N' ・ O - O'
1　黒褐色土10YR3/1
(表土)
4-5　黄褐色粘質土10YR5/6
(SI02埋土)
4-6　暗オリーブ色粘質土5Y4/3
(SI02埋土)
4-7　灰オリーブ色粘質土5Y4/2
(焼失住居埋土。
下層に炭・焼土が層状に堆積)
4-8　浅黄色土2.5Y7/4
(貼床か?)
4-9　暗灰黄色粘質土2.5Y4/2
(Pit埋土?)
4-10 黄褐色粘質土2.5Y4/3
4-11 オリーブ褐色粘質土2.5Y4/4
(Pit埋土?)
0
2m
(S=1:60)

第 30 図　T8 実測図

円形プランと想定され、床面付近には焼土・炭を多量に含む層（4-7 層）が堆積しており、焼失住居とみられる。墳丘断ち割りで確認した SI03 では壁帯溝と思われる溝とピットを検出している。

遺物は墳丘部表土・流土中より子持壺が出土し、少なくとも前方部頂部付近には子持壺が一定数配置されていた可能性が高い。その他、旧表土中や竪穴住居内から弥生土器が出土している。

第８トレンチ出土遺物（第 31 図）　１～３は子持壺である。1 は脚部上半の資料で断面には内傾接合が観察される。2 は子壺が親壺から剥離した資料で、頸部に強いヨコナデを施すことにより肩が強く張る。4 は坏蓋口縁部の小片で大谷 1 期に属する資料であり、古墳築造以前の遺物である。5 は SI02 から出土した弥生土器高坏で円盤充填で外面に接合法 α が認められる。草田 5 期以降の資料であろう。6・7 は墳丘断ち割り時に出土した弥生土器甕で、6 は外面に 5 条以上の擬凹線が認められる。草田２～３期の資料であり、SI03 の年代の一端を示している。

第３節　小結

1. 調査知見のまとめ

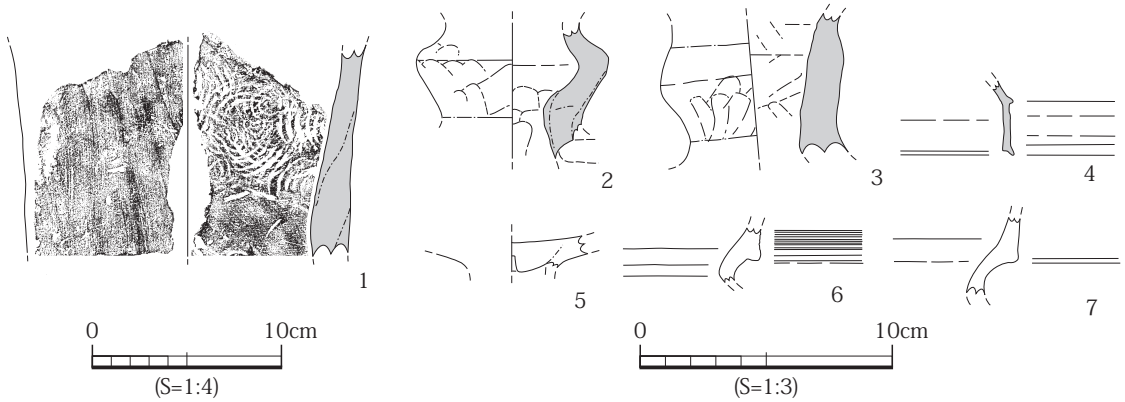
当古墳の調査目的は墳丘規模の確定と埋葬施設の位置確認であったが、残念ながら所期の目的を達することはできなかった。以下、発掘調査で明らかになったことを簡単にまとめておく。

①墳丘は、下半部は地山を削り出して造成し、その上に盛土を行って墳丘を構築する。盛土は部分的な調査の為詳細は不明だが、基本的には黒色土と地山起源の赤・黄褐色土の互層から構成される。盛土は比較的粗く、いわゆる土嚢積み的な様相は認められない。

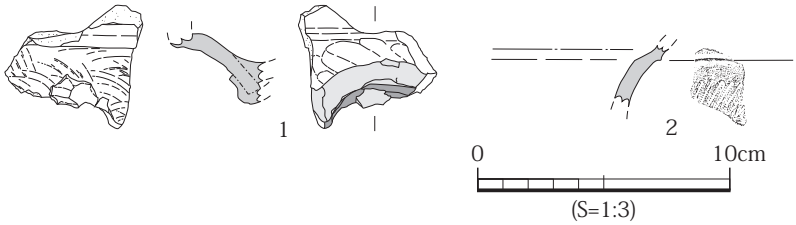
②周溝は存在しない。また墳端はいずれのトレンチでも後世の削平により残存していない。

③段築はトレンチ内では確認できないが、地表観察では後円部は３段築成の可能性がある。

④各トレンチでは川原石が点在していたことから葺石があった可能性がある。ただし量的には乏し



第 31 図　T8 出土遺物実測図（1: S ＝ 1/4、2 ～ 7: S ＝ 1/3）



第 32 図　その他出土遺物実測図 （S ＝ 1/3）

く、少なくとも下段には葺かれていなかった可能性が高い。

⑤各トレンチで須恵器子持壺・大甕が出土し、前方部からも出土していることから古墳全体に配置されていたと考えられる。埴輪は出土していない。

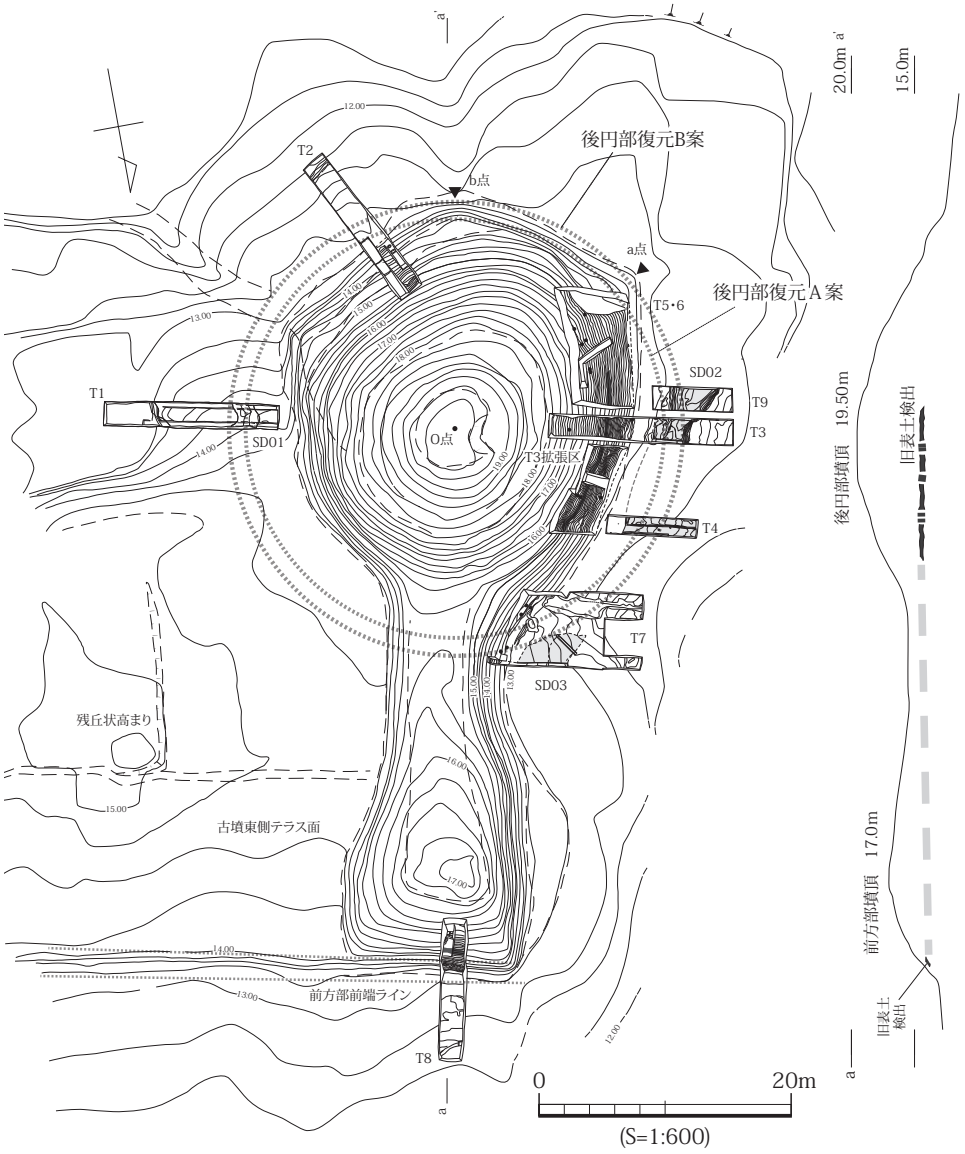
⑥後円部西側には幅３ｍの溝が存在し、墳丘構築時に関連する何らかの遺構である可能性が高い。

⑦埋葬施設が横穴式石室であると想定した場合、後円部西側に開口部が存在した可能性は低い。

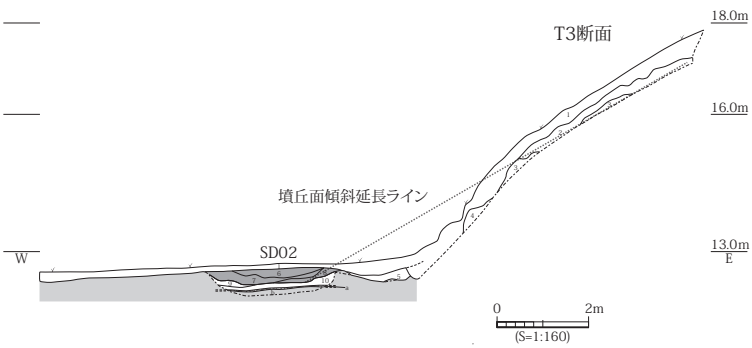
2. 墳丘形態・規模の復元について

先述のとおり墳端は全く残っていないので、詳細な墳丘規模や形態に関する復元は困難である。ただ墳丘規模については調査所見に基づき若干の検討を試みておく。

既に述べたように、古墳の西側及び後円部東側の墳裾にはかつて里道があったことが地籍図から読み取れる。T1 で検出した SD01 も里道と見なしてよく、ある時点での墳裾を反映していると考えられる。よって後円部東端は SD01 よりは東にあったと考えてよい。一方、後円部西側の T3 で検出した SD02 の溝底墳丘側立ち上がりは、削平の影響を受けていない T3 墳丘上半部で検出した墳丘斜面の延長ラインとほぼ一致する（第 34 図）。



第 33 図　魚見塚古墳墳丘復元図



第 34 図　墳丘面と SD02 との関係（T3）

ここで、見かけ上の墳頂平坦面の中心点（Ｏ点）と SD02 の墳丘側立ち上がりまでの距離を後円部半径として円を描くと、東側墳端は SD01 の溝底墳丘側立ち上がりとほぼ一致する（第 33 図後円部復元Ａ案）。この場合、後円部径は 33 ｍ前後に復元される。ただしこの復元案には幾つかの問題がある。最大の問題は、Ａ案では後円部南西側から南側にかけての墳端が現状での表面観察上の墳端より内側に入り込んでしまう点である（ａ点・ｂ点）。特にｂ点は当古墳の墳裾では最も後世の改変の影響が少なく、見かけ上の墳端の位置が大きく変わっているとは考えにくい。

さらに、Ａ案のもう一つの問題は、墳丘下段の段築を想定していない点である。現状では後円部南東部から南西部にかけて等高線 14.0 ｍ～ 14.25 ｍ前後にテラス状の地形が観察される。このテラスは T2 の調査知見では近世の里道による改変であったことが判明しているが、元々存在した段築テラスを利用して里道が敷設された可能性は否定できない。出雲部における 6 世紀の大型古墳の墳丘構造を概観した場合、段築が確認できない事例は極めて少数である [(1)]。当該期の代表的な大型前方後方墳である山代二子塚古墳や造山２号墳は、二段築成で墳丘下段には低くかつ幅広のテラスを採用している。二段築成で下段が低い段築は先行する出雲東部の大形方墳に広く認められる特徴であり（大谷 2004）、その墳丘企画を継承したものであろう。当古墳と同時期でほぼ同規模の手間古墳は後円部４段（３段）築成であり、墳丘下半にはやはり段築を伴う。これらの点からみて、当古墳の場合も本来墳丘下半に段築を有していたのではなかろうか。

第 33 図Ｂ案はａ点及びｂ点がある程度墳端を反映しているものと想定して、Ｏ点からａ点の距離を半径として後円部径を復元したものである。この場合、SD02 の大半は墳丘下に埋もれることとなる。SD02 内からは墳丘から流出した子持壺が含まれておらず、土層堆積から短期間に埋め戻された調査所見とも矛盾しない。また、後円部東側の SD01 も墳丘下に埋没することとなるが、これは古墳の背面に相当する墳丘東側については最下段の施工が省略されたとみるのが妥当であろう。また T7 で検出した、くびれ部状の SD03 のプランともほぼ一致している点も注意される。以上の点から、後円部径についてはＢ案を暫定的に想定しておく。ただし、現状での墳丘測量図を見る限り、後円部が南北に長い楕円形状を呈していた可能性も否定できず、その場合、後円部東西径はＢ案よりかなり縮小したものとなる。

前方部の形状については調査していないこともあって､現段階では復元案を提示できない。ただ、前方部前端について一言述べておくと、前方部の墳裾は西側では標高 13.25 ｍ付近にあり、そのまま前方部前面につながっているが、前方部東側には廻らず、前方部前端の標高 13.25 ｍ～ 14.0 ｍの等高線はそのまま直線的に東へ延びていき、その南側上面に広いテラス面を形成している点が注意される。これは、墳丘を造成する際に墳丘本体部分とともに古墳東側を含めた広い範囲での地山整形が行われ、先述のとおり古墳東側については墳丘下段の造成が省略された結果、このようなテラス状の地形が形成されたと推察される。従って、前方部東側に残されている東西に延びる段差

は、古墳築造時の地山整形の形状を反映し、かつ前方部前端ラインと一致している可能性が高い。この段状地形の傾斜変換点は標高 13.25 m付近に求められ、ここを前方部前端ラインと想定しても大きな誤りはないものと思われる（第 33 図）。

以上の点から、当古墳の規模は、後円部径 35.8 m、全長 62 m前後と想定しておく。

3. 墳丘構築法について

冒頭にふれたように、当古墳は下半は地山削り出し、上段は盛土によって構築されている。調査区のうち、T3、T3 拡張調査区、T5・6、T8 では旧表土を検出しており、古墳築造以前の旧地形をある程度復元することが可能である。旧表土の標高は後円部南西の T5・6 で 14.5 m、前方部前端の T8 で 14.1m 前後で、ほぼ水平わずかに北へ向けて緩やかに傾斜している。また後円部南東に設置した T2 では旧表土は検出されていない。これは当地の地形が東から西へ傾斜し東が高い関係上、地山整形によって旧表土層は削平されてしまったことによる。この旧表土層の存在する標高 14.0 m～ 14.5 m付近は墳丘下段を設定する際の基準となっていた可能性、すなわち基本的には墳丘最下段は地山削り出し、上段は盛土によって構築しようとする設計意図があったものと思われる。

当古墳は丘陵頂部ではなく比較的平坦な台地上に立地しているにもかかわらず、周溝が形成されていない。大庭・山代古墳群や東淵寺古墳など、当該期の台地上に立地する古墳の中では特異であると言える。またその一方で、一見周溝状の SD02・SD03 等の溝が墳裾付近に設けられている点も他に例を見ない。この点について若干の検討を試みる。

当古墳が立地する地盤の地山層は、基本的に黄橙色砂質土と黄橙色粘質土で構成され、その間にはマンガン・鉄分の沈着したマンガンバンドが存在する。これらの地山構成は乃木段丘上に立地する大庭・山代古墳群の地山構成と同一であり、山代二子塚古墳や山代方墳、東淵寺古墳ではこのマンガンバンドを周溝底面に設定している。これは当層が現在の鶴嘴をもっても断ち割りが難渋する程硬く、当時の掘削工具では当層を掘削することが極めて困難だった点によるところが大きい。このマンガンバンド層は T2、T3、T4、T7 で確認している。その検出面は、墳丘西側でおおよそ 12.0 ～ 12.7 m、後円部南東の T2 で 13.4 mであり、現地形に沿って東から西へ向かって緩やかに下降している。この傾斜を単純に墳丘東側に延長すると、前方部東側墳裾付近でのマンガンバンド層のレベルは 13.4 m前後と、かなり高い位置にあった可能性が高い。

ここからは憶測に過ぎないが、当古墳設計当初は他の乃木段丘に築造された大型古墳と同様に周溝掘削が予定され、その土を墳丘盛土として使用する計画であったと推定される。ところが、地山整形着手時に当初の予定よりマンガンバンド層が高く位置していた為、周溝掘削を断念し、その替わりに古墳東側段丘のマンガンバンドより上面の地山を広く鋤き取りすることによって盛土を確保しようとしたのではなかろうか。先述の墳丘東側に広く拡がる平坦面の存在はこうした盛土確保のための地山整形過程の反映とも考えられる。前方部東側に残存する標高 15.2 m前後の高まりは地山鋤取りの際の残丘と見なすこともできる。そして、墳丘西側の T3、T4、T7 で確認した SD02・03 は築造当初に周溝掘削を試みた痕跡と見なすことも一案としては想定できよう。前方部東側を調査していない現時点では単なる憶測にすぎないが、今後当古墳の調査を進めるにあたっての一視点として注意を喚起しておきたい。

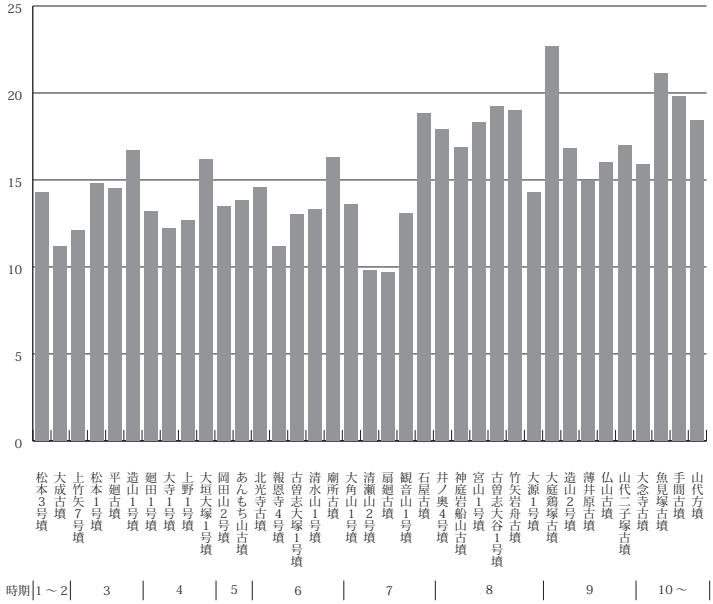
4. 魚見塚古墳の築造年代について

出土遺物からみた築造年代　当古墳の年代は、かつては墳形から中期以前と理解する見解が主流であったが、近年表採遺物の年代観から後期まで下げて考える見解が示されている（島根大学考古学研究会 1995）。今回の調査で墳丘全面に須恵器子持壺が樹立されていた可能性が高まり、さらに SD02 出土一括資料や T3 拡張部旧表土から出土した須恵器の存在から、当古墳が後期に属することはほぼ確実であると言える。出土遺物からみた当古墳の築造年代に関しては、第 6 章第 1 節に譲るが、結論を先取りすれば SD02 出土の有蓋高坏は大谷 3 期に位置付け可能であり（大谷 1994）、須恵器子持壺は池淵分類の B 型に属し、B 型は大谷 3 期が下限となる（池淵 2004）。以上の点から、当古墳の築造年代は 6 世紀第 3 四半期を中心とする時期と考えて問題ない。

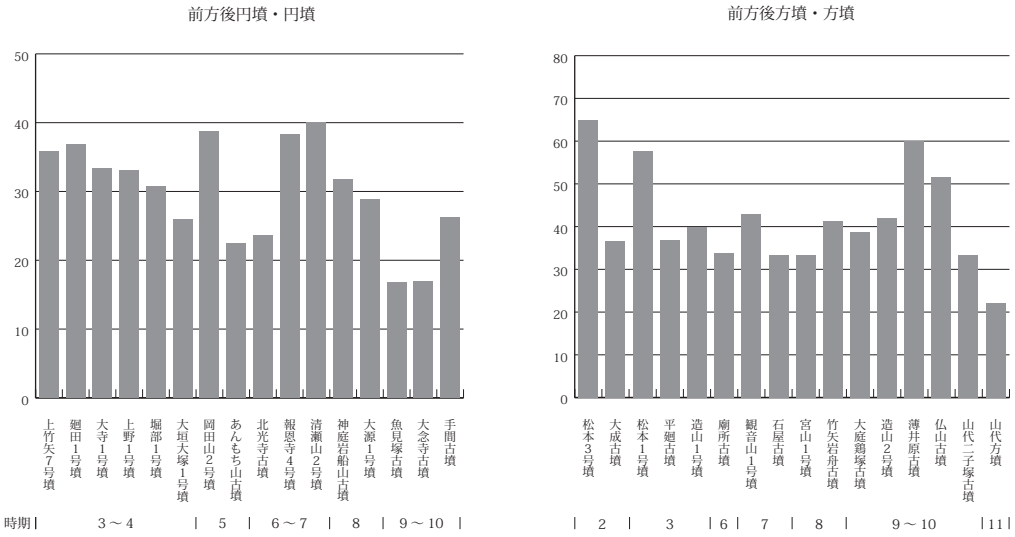
墳丘形態からみた築造年代について　ここで問題となるのは墳丘形態から導かれる年代観との齟齬である。当古墳の場合、低くて長い前方部やよく締まったくびれ部の形態は、従来から指摘されているように中期以前に遡る要素を備えている。本庄考古学研究室の検討によれば出雲における前方後円墳は時期が降るにつれ後円部径に対して前方部幅が拡がる傾向が認められ、中期においては 0.65 ～ 0.7、後期では 0.9 程度になるとされているが（内田ほか 2005）、当古墳の場合には 0.69 で中期型を呈し、こうした変遷観と合致しない。この点については第 6 章第 2 節で再論したい。ここでは、平面形態ではなく墳丘高に焦点を当て、当古墳墳丘の位置づけを試みる。

第 35 図は出雲の大型古墳の主丘部径又は一辺に対する高さの比率を百分比で示したものである[(2)]。これをみると、時期が降るにつれ墳丘高比率が高まる傾向を認めることができる。やや詳細に述べると、前期から中期前半（1 ～ 5 期）[(3)] は墳丘高率が 15％以下の資料が大半を占めているのがわかる。例外は造山 1 号墳と大垣大塚 1 号墳であるが、急峻な丘陵上に立地し、墳裾部が丘陵と一体化しているためと考えられる。

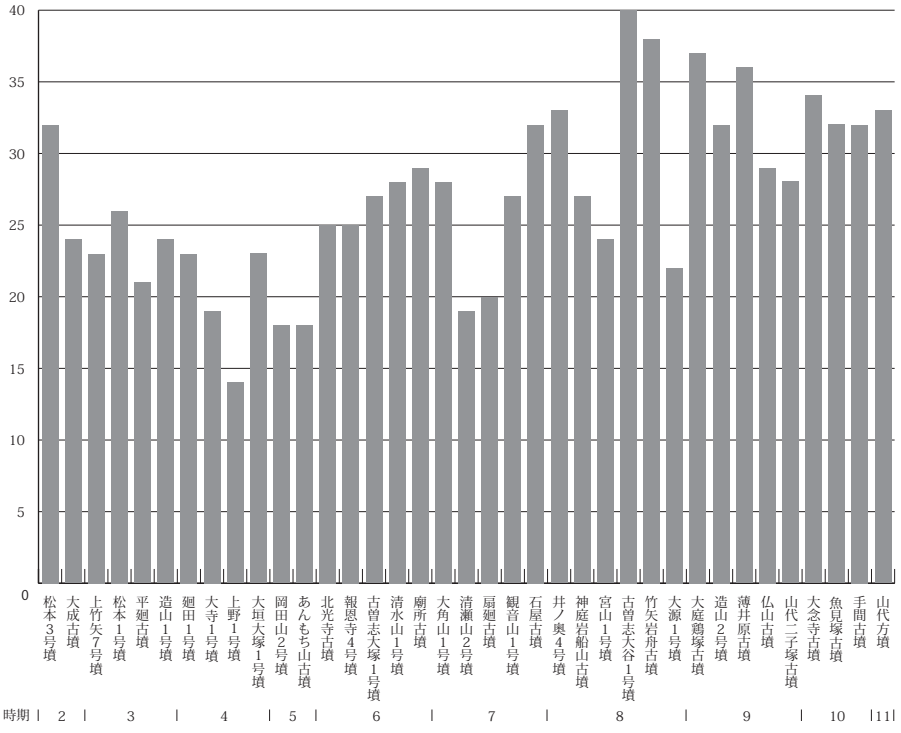
墳丘高が増す一つの画期となるのは、6 ～ 7 期の廟所古墳や石屋古墳といった大橋川の谷の大型方墳の出現である。これらの大型方墳は倭王権と極めて緊密な関係のもと成立した古墳と理解されており（仁木 2015）、こうした視認性の高い墳丘形態の導入もその一貫として解すべきであろう。そして 8 期以降は墳丘高率 15％を越す事例が一般的となり、9 期以降になると大庭鶏塚や魚見塚古墳のように 20％を越える事例も出現するようになる。このような古墳時代後半期における墳丘高の増大現象は、既に宇垣匡雅によって吉備南部の事例を中心に詳細な検討が行われているところであり、その背景として朝鮮半島の墓制の影響が指摘されている（宇垣 2010）。出雲においてもほぼ同じ状況を追認することができよう。ただし、吉備では 7 期以降にこうした傾向が顕著となり、8 期以降 20％以上の比率の古墳が多数を占めるのに対し、出雲では



第 35 図　大型古墳の墳丘高の変化（墳丘高 / 主丘部径× 100）



第 36 図　出雲における大型古墳の墳頂平坦面の変化（墳頂平坦面 / 主丘部径× 100）



第 37 図　出雲における大型古墳の墳丘面傾斜の変化 (縦軸は墳丘傾斜を示す)

6 期の大型方墳の出現に一つの契機があり、8 期に 18％前後を占める事例が主流を占め大きな画期となるが、吉備のように 20％を越える事例は少数に留まる点がやや異なる点と指摘できる。一般に、墳丘高の増大はテラスまたは墳頂平坦面を狭めるか、墳丘勾配の変更によって達成される。この点について出雲の事例について若干検討を試みる。第 36 図は主丘部に対する墳頂平坦面の比率の時期的推移を円墳系と方墳系とに分けて図示した。両者を比較すると、概して方墳系が墳頂平坦面の比率が高いことが窺える。方墳系では、松本 1・3 号墳のような特異な事例を除けば、各時期とは概ね 30 ～ 40％で推移し墳頂平坦面の縮小は顕著ではなく、7 世紀初頭の山代方墳の段階にようやく縮小化が達成される。一方の円墳系も 8 期までは 30％を越える事例が大半を占め、9 期以降に縮小化が進行する様相が認められる。

テラスについては良好な事例に乏しく十分な検討ができないが、例えば山代二子塚古墳は下段に非常に幅広で低いテラスを設けており、先述のとおり先行する大型方墳の特徴を継承しているものと考えられる。山代二子塚古墳や造山 2 号墳など当地の 8 期以降の方墳系で墳丘高率が 20％を越える事例が少ないのは、このような当地の方墳系墳丘形態の特徴によるところが大きい。

第 37 図は時期別の墳丘斜面角度の推移を示した。前期～中期前半（1 ～ 5 期）は基本的に 25°以下

の事例が大半を占めている。唯一松本 3 号墳が突出して墳丘斜面角度が急であるが、これは広い墳丘平坦面と墳丘高を両立するための措置と考えられる。そして大型方墳が出現する 6 期前後から 25°を越える事例が出現するようになるが、いわゆる 2 割勾配（26.5°）に近似する勾配で、畿内の前期大型古墳では通例の傾斜である。これが 7・8 期にはさらに傾斜を増して 30°を越える事例（石屋・井ノ奥 4 号）が出現し、部分的には 40°を越える事例（古曽志大谷 1 号）も存在する。そして 9 期以降は概ね 30°を越える事例が一般的になる。

以上の検討から、出雲でも吉備と同様に 8 期以降に墳丘高の増大が図られ、特に前方後円墳については墳頂平坦面の縮小と斜面勾配の変更により達成された状況を看取することができた。このように墳丘高という観点からみた場合、魚見塚古墳は 8 期以降の墳丘高増大を達成した、後期前方後円墳の特徴を備える典型例として位置付けることができよう。

問題は、こうした新たな施工企画やそれに伴う墳丘築造技術を導入しつつも、平面プランに関しては、何ゆえにいにしえの墳丘形態を採用するに至ったのか、という点である。そして、この点にこそ、出雲の後期前方後円墳の特質を理解する鍵が潜んでいるように思われるのである。

〈註〉

(1) 後期の 50 m以上の大型墳で段築の明瞭でない古墳は、薄井原古墳、妙蓮寺山古墳などがあるにすぎない。

(2) 対象とした古墳は全長 45 m以上の前方後円墳・前方後方墳、径又は一辺が 40 m以上の円・方墳のうち、墳丘面の遺存状況が良好な古墳で一定精度の測量図が公表されているものであるが、一部これより小規模な古墳も含んでいる。主丘部径または辺の計測値は基本的には主軸に直交する箇所で計測したが、遺存状況によってはそうでない場合がある。また主丘部が非対称の場合は原則として長軸方向で計測した。墳丘高は、調査が行われている事例は周溝底面から墳頂までの高さを示している。墳頂平坦面に関しては報告書中で言及がないものについては、測量図中からの読み取り値である。また、墳丘傾斜については調査が実施されている古墳は断面図から読み取り、その他は測量図から任意の点で距離と高さを求めて三角比により算出している。

(3) 古墳の時期区分は前方後円墳集成編年（広瀬 1992）、個別古墳の時期比定は池淵 2015 に基づく。

〈参考文献〉

赤澤秀則 1992『南講武草田遺跡』鹿島町教育委員会
池淵俊一 2004「出雲型子持壺の変遷とその背景」『考古論集』河瀬正利先生退官記念論文集刊行会
池淵俊一 2007「弥生時代後期の遺構・遺物に関する諸問題」『山持遺跡Ⅱ・Ⅲ区』島根県教育委員会
池淵俊一 2015「出雲の古墳編年について」『前方後方墳と東西出雲の成立に関する研究』島根県古代文化センター
宇垣匡雅 2010「古墳の墳丘高」『考古学研究』第 57 巻第 2 号
内田律雄 1980「出雲の前方後円墳について」『山陰史談』16
内田律雄・曳野律夫・松本岩雄 2005「松江市山崎 1 号墳墳丘測量報告」『島根考古学会誌』第 22 集 島根考古学会
大谷晃二 1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第 11 集 島根考古学会
大谷晃二 2004「宮山古墳群をめぐる諸問題」『宮山古墳群の研究』島根県古代文化センター
加藤義成 1957『修訂出雲国風土記参究』今井書店
島根県 1974『土地分類基本調査 松江』
島根大学考古学研究会 1972「魚見塚古墳実測報告」『菅田考古』第 13 号
島根大学考古学研究会 1995「「大橋川の谷の古墳群」をめぐって」『菅田考古』第 17 号
仁木　聡 2015「巨大方墳の被葬者像」『前方後方墳と東西出雲の成立に関する研究』島根県古代文化センター
野津左馬之助 1924「島根縣内の古墳」『島根縣史』第 4 巻　島根縣
東森市良 1970「朝酌の古墳文化」『研究紀要』第 1 号　松江市立女子高等学校
広瀬和雄 1992「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成　畿内編』山川出版社
前島己基 1979「発展期古墳の展開」『さんいん古代史の周辺＜中＞』山陰中央新報社
松山智弘 1991「出雲における古墳時代前半期の土器の様相－大東式の再検討－」『島根考古学会誌』8 島根考古学会
松山智弘 2010「最後の四隅突出型墳丘墓」『古代文化研究』№ 18 島根県古代文化センター
柳浦俊一 1993「島根・鳥取県出土子持壺集成」『島根考古学会誌』第 10 集 島根考古学会
山本　清 1968「古墳文化」『新修島根県史 通史篇 1』島根県
渡辺貞幸 1986「山代・大庭古墳群と五・六世紀の出雲」『山陰考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念論集刊行会
渡辺貞幸 2002「「大橋川の谷の古墳群」再考」『松江市手間古墳発掘調査報告・薬師山古墳出土遺物について』島根大学法文学部考古学研究室
渡辺貞幸・松本岩雄・内田律雄・曳野律夫 1991「出雲」『前方後円墳集成 中国・四国編』山川出版社

第 4 章　東淵寺古墳の発掘調査

第 1 節　調査及び研究略史

東淵寺古墳の調査研究史については曳野律夫らによる測量報告に詳しい(曳野ほか 1989)。以下、同文献と重複するがここで改めて概略を述べておきたい。

東淵寺古墳の存在については、大正 14 年に刊行された『島根縣史』第 4 巻には既に「大庭村大字大庭　東淵寺　前方後圓式南塚ト北塚トノ二處アリ」と記載され、古くからその存在が知られていた (野津 1924)。なお、この記述のとおり字東淵寺には南塚と北塚の 2 基が存在していたが、北塚については現在その所在を確認できない。地元古老の証言によれば、県道八重垣神社竹矢線建設の際に土取りのため削平されてしまったとのことである。明治 8 年の切図には東淵寺の北東 100 mには字二子塚という小字名が残っており（第 38 図)、低地に立地する前方後円墳の存在が想定されているが（曳野ほか 1989)、近年実施した大庭バイパス建設に伴う川原宮Ⅱ遺跡の発掘調査では古墳の基底部や周溝らしき痕跡は確認できていない (島根県教育委員会 2016)。戦後の『新修島根県史』においては山本清によって「前方後円（40 m？)」と報告されており、当古墳に対する認識はほぼ同様であったことが知られる（山本 1968)。

このように、当古墳は比較的規模の大きい前方後円墳として認識されつつも長らく測量すら行われていない状況であったが、1980 年代になって先述の曳野らによって当古墳の測量図が初めて作成されたことにより、大きく研究が前進することとなった（第 39 図)。既にこの段階において古墳の形状は大きく改変されており、本来の形状を窺い知るには困難な状況であったが、①墳丘が北側に向けて低くならず延びる点、②西側にくびれ部状の地形が認められる点、③周溝と想定される窪地が円形に廻らない点から前方後円墳と判断している（曳野ほか 1989)。当測量図には現在では宅地として現況をとどめていない古墳東側の周溝状の水田形状も表現されており、当古墳の復元

第 38 図　明治 8 年作成の旧大庭村切図（トーン部が東淵寺・二子塚）

を行う上で欠くことのできない重要な資料となっている。また当該報告では測量調査時に採集された埴輪・須恵器が図化されており、当古墳の年代は埴輪の川西編年のⅤ期（川西 1978）、須恵器山本編年のⅢ期（山本 1971）に位置づけられ、その年代観は基本的には現在にも受け継がれている。

この報告で重要なのは地元の古老である故小川幸一氏から破壊前の状況の聞き取り調査を行っている点である。当古墳の復元のため重要なので、墳丘復元に関する事柄をここで再録しておく。

①前方部はかなり開く形態であった。
②くびれ部から前方部にかけての凹み（周溝）は直線的であった。
③県道八重垣神社竹矢線を敷設する際に前方部が削られ、その際に前方部に沿う周溝を埋めて平らにして畑にした。
④その後、倉庫を新設するために前方部をさらに掘削し、その残土を周辺に盛り上げた。
⑤前方部先端は、ＪＡ倉庫 (第 39 図倉庫Ａ) の北端から 2 m程北側であった。
⑥後円部の南側に土手があったが削られた。
⑦墳頂部から多数の石材を取り出し、東側の水田の石垣に用いた。

当該報告においては、特に証言⑤から全長約 62 mの前方後円墳に復元しており、その認識は現在でも基本的に受け継がれている（渡邊ほか 1991・大谷 2011）。

前述のように当古墳は早い段階から改変を受けてきたが、近年は宅地造成や道路拡幅等の開発の波にさらされることになり、これに伴う試掘確認調査が松江市教育委員会によって継続的に実施されている。特に平成 14 年度に墳丘南側で実施されたトレンチ調査では周溝が確認され、さらにそれが円形に廻らないことが明らかとなり、当古墳の墳形復元に一石を投じることになった。また、平成 27 年には県道拡幅に伴う立会調査で前方部前面の周溝の可能性のある溝の痕跡が確認されている。松江市教育委員会によるこれらの調査成果については松江市教育委員会のご厚意によりその概要を本章第 3 節に掲載することができた。

さて、以上のように当古墳は古代出雲中枢の地である意宇平野周辺において 60 m超という当該期としては相当規模となる墳丘規模と、前方後円形という当地では例外的な墳丘形態により、従来よりその位置づけが問題とされてきた。渡辺貞幸は当古墳と山代二子塚古墳が近接する時期に築造されていると想定される点から、当古墳の被葬者像は「山代二子塚古墳を頂点とするヒエラルキーの中でとらえられなければならない…彼は山代・大庭古墳群造営者の一族であった可能性が高い」と、その被葬者像に関し具体的な評価を試み（渡辺 1986）、2002 年にも手間古墳・

第 39 図　東淵寺古墳の測量図（曳野ほか 1989 より転載）

魚見塚古墳とともに「山代二子塚古墳被葬者と同族で彼を補佐する立場の人物」とほぼ同様な見解を述べている（渡辺 2002）。大谷晃二は具体的に当古墳の位置づけには言及していないが、6 世紀後半の意宇平野中枢部には山代・大庭古墳群、有古墳群、大草古墳群の 3 つの首長系列が併存し、有・大草古墳群は出雲東部の最高首長を輩出した一族の傍系も含む有力成員の墳墓ととらえ、渡辺に比較的近い見解を述べている（大谷 1996）。

以上のように、6 世紀代における当地の政治構造はかなり複雑な状況であったことが窺え、その解明のための大きな鍵となるのが山代二子塚古墳に次ぐ規模を有する当古墳であることは明白である。今後出雲の古墳時代史像を具体化していくためには、当古墳の規模及び築造時期、そして何よりも墳形の確定が喫緊の課題であることは論を俟たず、今回の調査目的もそこにある。

第２節　発掘調査の成果

1. 古墳の現況と測量調査結果（第 40 図）

東淵寺古墳は松江市大庭町字東淵寺 714 番地外に所在する。古墳の現況は墳丘部が山林及び竹林で、古墳西側が畑地として利用され、墳丘の北と東は宅地によって大きく改変されている。第 39 図と 40 図を比較して一目瞭然のとおり、ここ 20 年間程でも周辺地形は大きく変貌しつつある。

第 2 章で述べたように、当古墳は標高 20 m程の低平な乃木段丘の一角に位置する。細かく見ると、当古墳は開析谷に挟まれた南北に延びる低位段丘の東側縁辺部に立地し、東側水田と段丘部との比高差は 3 m前後を測り、東側からの眺望を意識した立地をとっていると言える。

先述のとおり古墳の周辺は大きく破壊を被っているが、墳丘西側については比較的旧状をとどめている。現状の地形では上場幅約 15 m、深さ 1.2 mの周溝が遺存しているが、推定前方部付近までは廻らず、現状では一段高くなり竹林となっている。周溝の西側は現状では南北に直線的に延びる外堤状を呈しているが、言い伝えではかつて現ビニールハウス付近に東淵寺が存在しており、廃寺になった後に周溝を埋め立てて畑に改変したとされている。推定後円部の南側は果樹園として階段状に加工され、その南側の墳丘外は現在駐車場として利用されている。駐車場の南には東西に里道が走っているが、これは古代山陰道の候補の一つに推定されている（勝部 1993）。

前方部想定箇所は最も破壊を被っており、ほとんど旧状をとどめない。推定後円部から推定前方部に至る付近も大きく改変を受けているが、西側はくびれ部状の形状をとどめ、北側には隆起斜道状のコンタの流れも認められる。古墳東側は現在宅地となっているが、20 年前にはまだ水田として利用されており、当時は墳丘付近は弧状の水田区画が認められ（第 39 図）、墳丘形状を反映している可能性がある。また同じく墳丘東側の水田と段丘の境の形状は一見くびれ部の形状を反映しているかのようにも見えるが、現状では確認する術がない。

破壊された前方部の西側、倉庫Ａの裏側には一辺 15 m前後のマウンドが認められる。故小川幸一氏の証言によれば、前方部破壊時または倉庫Ａ建築時に残土を盛り上げたものと想定されるが、大型古墳に隣接する小古墳の可能性も否定できず、その確認も今回の調査目的の一つであった。

2. 平成 23 年度の調査

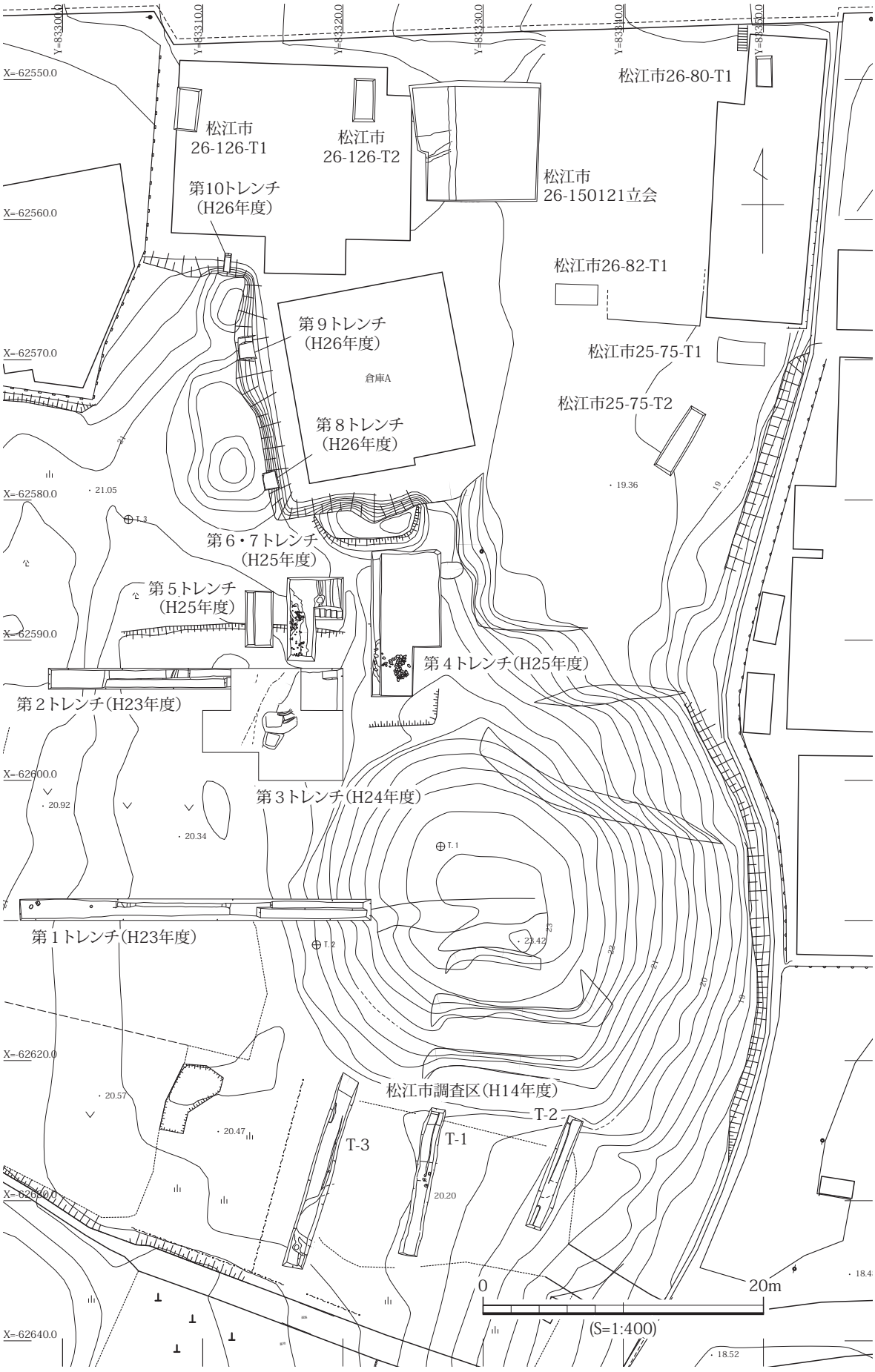
平成 23 年度の調査は、客員研究員共同検討会での指導を受け、当初は 3 箇所のトレンチ調査を計画した。すなわち当古墳を前方部を北に向けた前方後円墳と想定した場合の墳丘主軸に直交する

後円部西側（第 1 トレンチ、以下 T1 と略す。他のトレンチも同じ）、及び同じく推定前方後円墳の西側くびれ部（T2）、推定前方部の西側に所在するマウンドに設定したトレンチ、以上 3 箇所である。調査は T1 から着手し、続いて T2 の調査を行ったが、マウンドに設定した 3 番目のトレンチは予算と調査期間の都合上実施することができなかった。以下、T1、T2 の順でその概要について記す。

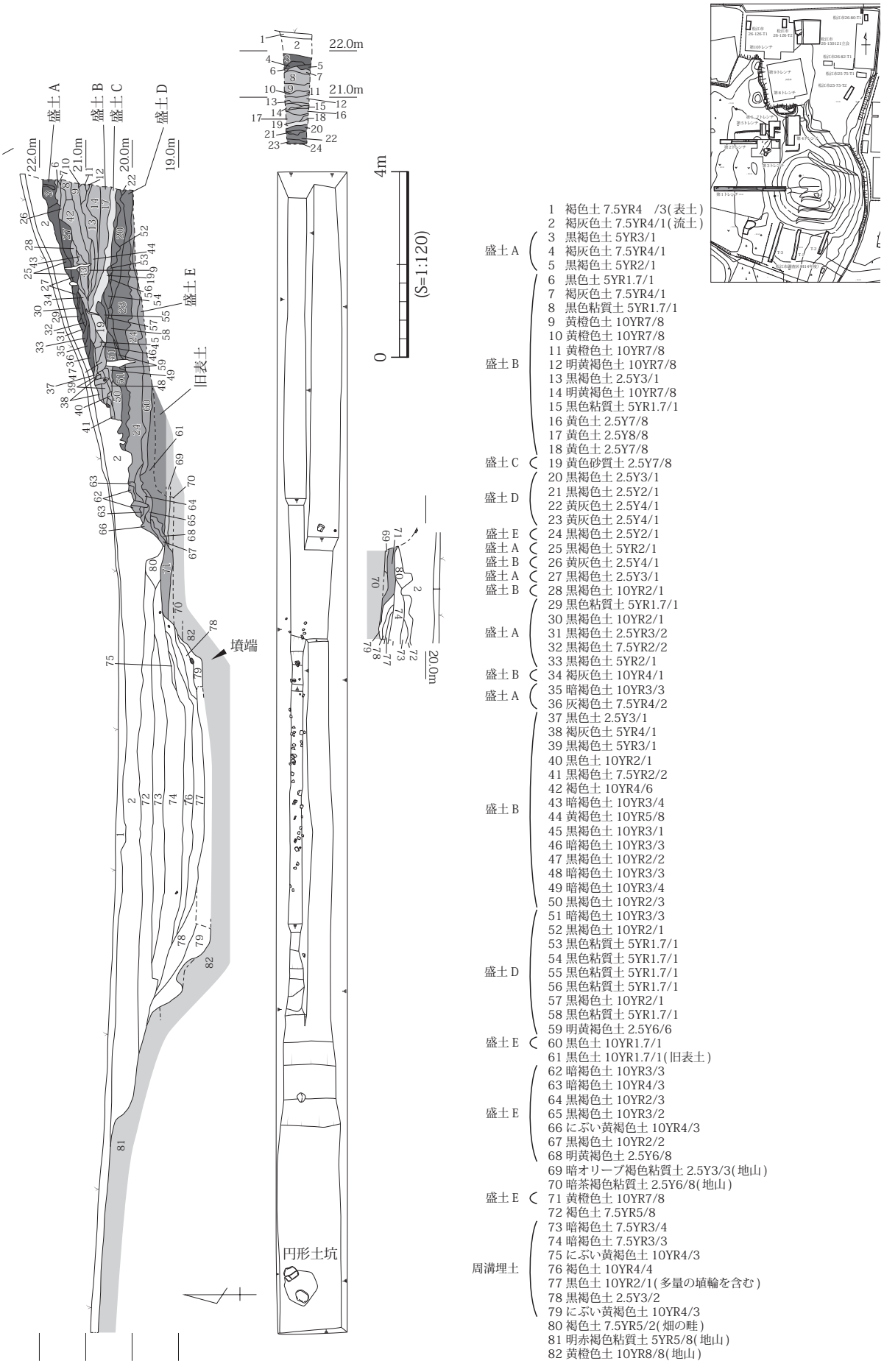
(1)第 1 トレンチ（第 42 ～ 45 図）

トレンチの概要（第 42 図）　後円部西側に、墳裾の確認と周溝の検出を目的として設定した、長さ 20 m、幅 1.5 mのトレンチである。トレンチ全面には、表土である褐色土（1 層）と流土と思われる褐灰色土（2 層）が堆積していた。これらを取り除くと、トレンチ東側に墳丘盛土、西側に

第 40 図　東淵寺古墳周辺地形測量図



第 41 図　東淵寺古墳調査区配置図



盛土 A
1 褐色土 7.5YR4　/3(表土)
2 褐灰色土 7.5YR4/1(流土)
3 黒褐色土 5YR3/1
4 褐灰色土 7.5YR4/1
5 黒褐色土 5YR2/1

盛土 B
6 黒色土 5YR1.7/1
7 褐灰色土 7.5YR4/1
8 黒色粘質土 5YR1.7/1
9 黄橙色土 10YR7/8
10 黄橙色土 10YR7/8
11 黄橙色土 10YR7/8
12 明黄褐色土 10YR7/8
13 黒褐色土 2.5Y3/1
14 明黄褐色土 10YR7/8
15 黒色粘質土 5YR1.7/1
16 黄色土 2.5Y7/8
17 黄色土 2.5Y8/8
18 黄色土 2.5Y7/8

盛土 C
19 黄色砂質土 2.5Y7/8

盛土 D
20 黒褐色土 2.5Y3/1
21 黒褐色土 2.5Y2/1
22 黄灰色土 2.5Y4/1
23 黄灰色土 2.5Y4/1

盛土 E
24 黒褐色土 2.5Y2/1

盛土 A
25 黒褐色土 5YR2/1

盛土 B
26 黄灰色土 2.5Y4/1

盛土 A
27 黒褐色土 2.5Y3/1

盛土 B
28 黒褐色土 10YR2/1

盛土 A
29 黒色粘質土 5YR1.7/1
30 黒褐色土 10YR2/1
31 黒褐色土 2.5YR3/2
32 黒褐色土 7.5YR2/2
33 黒褐色土 5YR2/1

盛土 B
34 褐灰色土 10YR4/1

盛土 A
35 暗褐色土 10YR3/3
36 灰褐色土 7.5YR4/2

盛土 B
37 黒色土 2.5Y3/1
38 褐灰色土 5YR4/1
39 黒褐色土 5YR3/1
40 黒色土 10YR2/1
41 黒褐色土 7.5YR2/2
42 褐色土 10YR4/6
43 暗褐色土 10YR3/4
44 黄褐色土 10YR5/8
45 黒褐色土 10YR3/1
46 暗褐色土 10YR3/3
47 黒褐色土 10YR2/2
48 暗褐色土 10YR3/3
49 暗褐色土 10YR3/4
50 黒褐色土 10YR2/3

盛土 D
51 暗褐色土 10YR3/3
52 黒褐色土 10YR2/1
53 黒色粘質土 5YR1.7/1
54 黒色粘質土 5YR1.7/1
55 黒色粘質土 5YR1.7/1
56 黒色粘質土 5YR1.7/1
57 黒褐色土 10YR2/1
58 黒色粘質土 5YR1.7/1
59 明黄褐色土 2.5Y6/6

盛土 E
60 黒色土 10YR1.7/1
61 黒色土 10YR1.7/1(旧表土)

盛土 E
62 暗褐色土 10YR3/3
63 暗褐色土 10YR4/3
64 黒褐色土 10YR2/3
65 黒褐色土 10YR3/2
66 にぶい黄褐色土 10YR4/3
67 黒褐色土 10YR2/2
68 明黄褐色土 2.5Y6/8
69 暗オリーブ褐色粘質土 2.5Y3/3(地山)
70 暗茶褐色粘質土 2.5Y6/8(地山)

盛土 E
71 黄橙色土 10YR7/8
72 褐色土 7.5YR5/8

周溝埋土
73 暗褐色土 7.5YR3/4
74 暗褐色土 7.5YR3/3
75 にぶい黄褐色土 10YR4/3
76 褐色土 10YR4/4
77 黒色土 10YR2/1(多量の埴輪を含む)
78 黒褐色土 2.5Y3/2
79 にぶい黄褐色土 10YR4/3
80 褐色土 7.5YR5/2(畑の畦)
81 明赤褐色粘質土 5YR5/8(地山)
82 黄橙色土 10YR8/8(地山)

第 42 図　T1 実測図 (S=1/120)

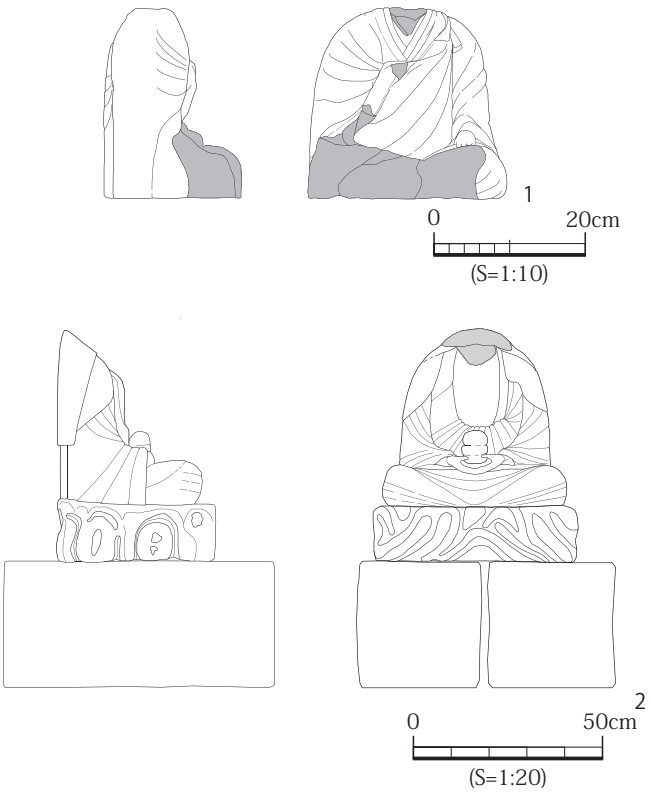
周溝を検出した。

墳丘盛土は、堆積の単位や角度、混入物などから３～60、62～68、71 層を想定している。これらは色調や土質、堆積状況から、盛土Ａ、盛土Ｂ、盛土Ｃ、盛土Ｄ、盛土Ｅにまとめることができる。盛土Ａは黒褐色土系の土をベースに、地山由来と思われる黄色土を少量含む。単位が細かく、傾斜に対して逆向きに堆積しているものも認められる。盛土Ｂは黒色系と黄色系が細かく混ざったものである。盛土Ａと比べ、やや大きな単位で堆積している。盛土Ｃは 19 層のみである。綺麗な黄色の砂層で、後述する土堤状の高まりを覆うように盛られている。盛土Ｄは、盛土Ｂと同じく黒色系と黄色系の混合土である。一部に土堤状に高く積まれた箇所があり、頂部には黒色の粘質土が盛られている（53～56 層）。盛土Ｅは、旧表土由来と思われる黒色土に黄色土を斑状に含んでいるものである。地形に沿って水平に堆積している。盛土Ｄとの境（23、51 層と 24 層）では、上面が細かく波打っている。墳端は周溝底面東端の 79 層付近を想定している。

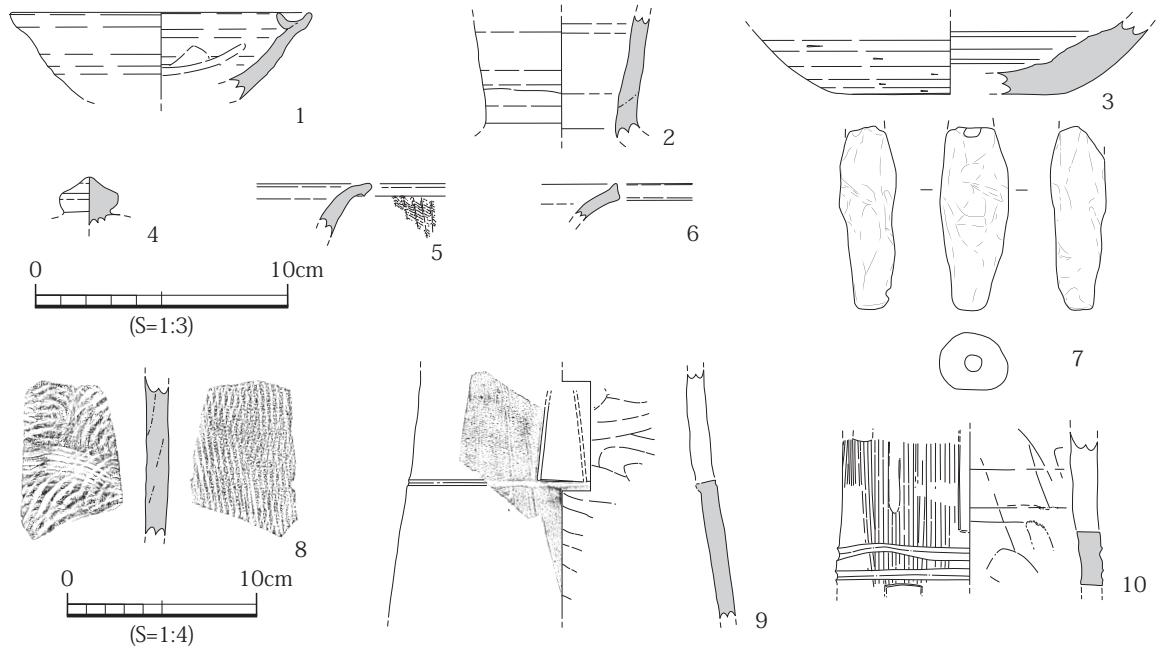
盛土の下には黒色土（61 層）を確認した。土中に混入物がないことから、古墳築造前の旧表土と判断した。黒色土はトレンチ東壁から西へ 7.5 mの地点より西では見られず、墳丘築造時に整形のため削平された可能性がある。69、70、81、82 層は、旧表土以前に堆積した粘質土である。西から東に向けて緩やかに傾斜している。以上墳丘築造工程をまとめると、まず周溝掘削や墳丘下部の地山整形を行った後、墳丘基底面に水平の盛土を行い（盛土Ｅ）、その後盛土Ｄによって土堤状盛土を築き、その内部を充填するように盛土Ｂを行い、最後に全体を被覆するように細かな工程で盛土Ａを行ったものと想定される。当然その上にも盛土が行われたと考えられるが、削平のため定かではない。なお、明確な葺石等は確認できていない。

周溝の幅は上場 8.6m、下場 6.5m、深さ 0.8～1.2m を測る。周溝内には 73 層～79 層がレンズ状に堆積していた。盛土との切り合い関係から、73 層～74 層は墳丘が削平された後、75～77 層はそれ以前で墳丘築造後に堆積したものと判断される。77 層からは、多数の埴輪、須恵器片を確認しているが、T2 で同様の黒色土内より中世土師器が出土しているため、中世以降の堆積と推測される。78 層・79 層は、安全上の配慮から両端の一部しか掘削していない。土中からは比較的大型の埴輪片が出土していることから初期の流入土と判断される。79 層の下で溝底面と思われる 82 層を検出した。溝底面のレベルは、西側 18.3m、東側 18.5m で、おおむねフラットに整形されている。

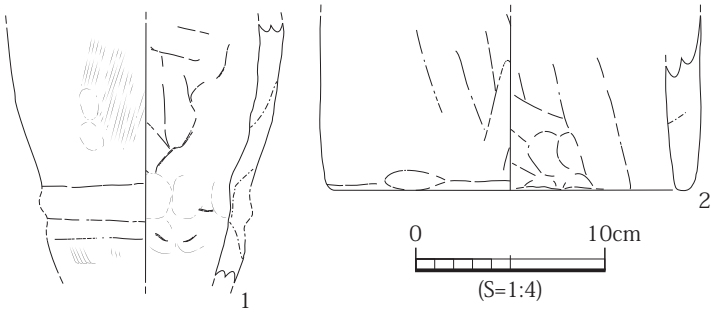
その他、トレンチ内西側で径 70㎝程度の円形土坑を 1 基検出した。上面に扁平な石を二枚載せているが（図版 26）、プラン検出にとどめ、遺構内の掘削は実施



第 43 図　東淵寺古墳付近所在石造物



第 44 図　T1 出土遺物実測図（1）（1 ～ 7：S=1/3、8 ～ 10：S=1/4）



第 45 図　T1 出土遺物実測図（2）

していない。また T1 の西側で、首のない石仏を 2 体確認した（第 43 図）。江戸時代の凝灰岩製で、廃仏毀釈時に首を壊されたもので、本来この場にあった東淵寺に伴うものである可能性が高い [(1)]。

第 1 トレンチ出土遺物（第 44・45 図）　第 44 図 1 ～ 6、8 ～ 10 は須恵器である。1 は周溝内から出土した坏身である。受部径が 10.7㎝とかなり小型化が進行したタイプで、出雲 6a 期頃（大谷 1994）のものと思われ、古墳築造時とは直接関係ない遺物と考えられる。2 は長頸壺の口頸部と想定される資料で、1 とほぼ同時期の所産と思われる。3 は 2 層中より出土したややや大型の壺底部で外面に回転ヘラケズリを施す。4 は坏蓋の宝珠つまみ部である。5 は中型壺の口縁部で、端部は段状を呈し頸部外面には波状文を施文する。法量的には子持壺の親壺口縁部に近い。6 は同じく壺口縁部だが段状口縁を呈さず端面は上下に若干拡張した凹面を形成する。7 は紡錘状の土製品で表面は凹凸が著しい。形象埴輪の可能性も考えたが、孔が貫通していることから土錘と判断した。

9・10 は子持壺の脚部である。9 は 1 条の沈線により脚部を上下に区画し、上段には長三角形または長台形状のスカシを穿つ。小片のためスカシの数は不明である。外面はタテ方向の粗いナデ、内面は不整方向のナデで仕上げる。10 は 2 条のやや太い沈線により上下に区画し、方形または長三角形状のスカシを千鳥方向に穿つ。外面は粗いタテハケが認められる。胎土は黒色粒子をほとんど含まず、魚見塚古墳出土の子持壺とは全く異なる。

第 45 図は埴輪である。1 は人物又は動物埴輪の脚部と想定される資料で、下方に向かってすぼまり途中で段状に括れる。括れ付近には帯状の突帯が剥離した痕跡が認められる。2 は円筒埴輪の基底部で復元底径 18.6㎝を測る。底部は底部調整によって断面先細り状を呈し、内面には円柱状

の当具痕が観察される。

(2)第２トレンチ（第 46 ～ 48 図）

トレンチの概要（第 46 図）　くびれ部西側想定部に設定した、幅 4 ～ 1.5 m、長さ 21 mのトレンチである。調査の結果、後円部と思われる盛土及び墳裾と周溝を確認した。T2 は攪乱が著しく、複数のゴミ穴や畑の耕作によって墳裾付近の盛土が大きく抉り取られていたが、トレンチの東側では、削平を免れた盛土が僅かに残っていた（12 ～ 16 層）。盛土は地山直上にほぼ水平に堆積しており、トレンチの北へ伸びている。下面に旧表土は認められなかった。

トレンチ西側では周溝を確認した。周溝幅は上場 9.6 m、下場 7.4 m、深さ 0.45 mである。T1 と比べ、溝全体が東側に寄っている。埋土は T1 と同様にレンズ状に堆積している。21 層の黒色土からは、多量の埴輪とともに中世土師器が出土している。22 層は一部しか掘削していないが、大型の埴輪片が出土した。遺物は 21 層と 22 層の境界付近からまとまって出土している。

なお、平成 23 年度調査の段階では、墳端ラインが北東－南西方向から西へ大きく屈曲するような状況に観察され、くびれ部の可能性が想定された。ただし調査区が狭小であったため、この段階ではくびれ部とは認定できず、結論は次年度へ持ち越しとなった。

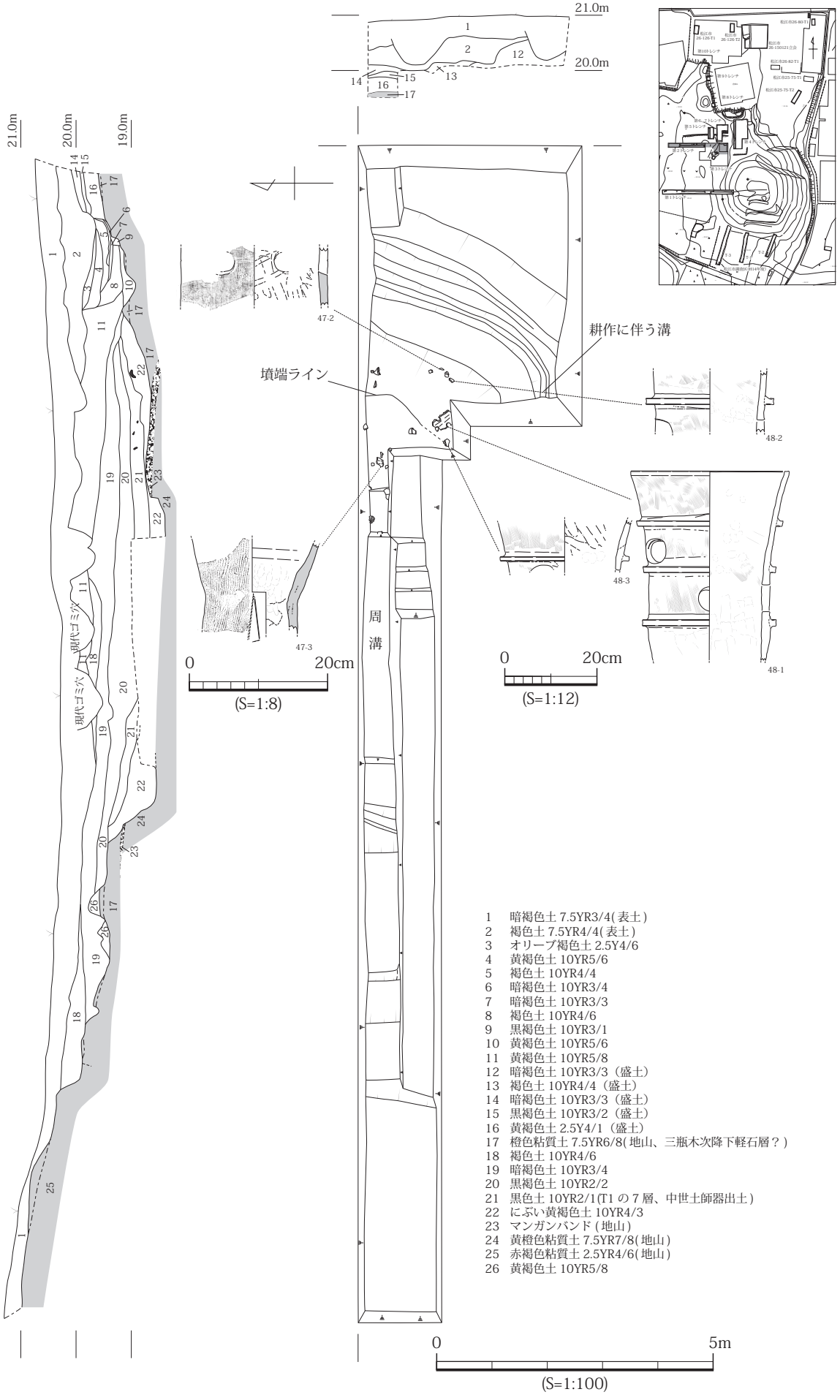
22 層の下層には、地山と思われる橙色土（17 層）が堆積しており、さらにその下にはマンガンバンドと呼ばれる鉄分の沈着層（23 層）が認められた。周溝の東側は、基本的にはこのマンガンバンドを底面としているが、西側ではマンガンバンドを掘り抜いて、黄橙色粘質土（24 層）を底面としていた。溝底面のレベルは､東側（墳丘側）が 18.6 m､西側が 18.54 mとほぼ同じであった。

第２トレンチ出土遺物（第 47・48 図）　T2 出土遺物は後述する T3 出土の遺物と接合するため、ここでは T2 のみから出土した遺物に限定して報告する。

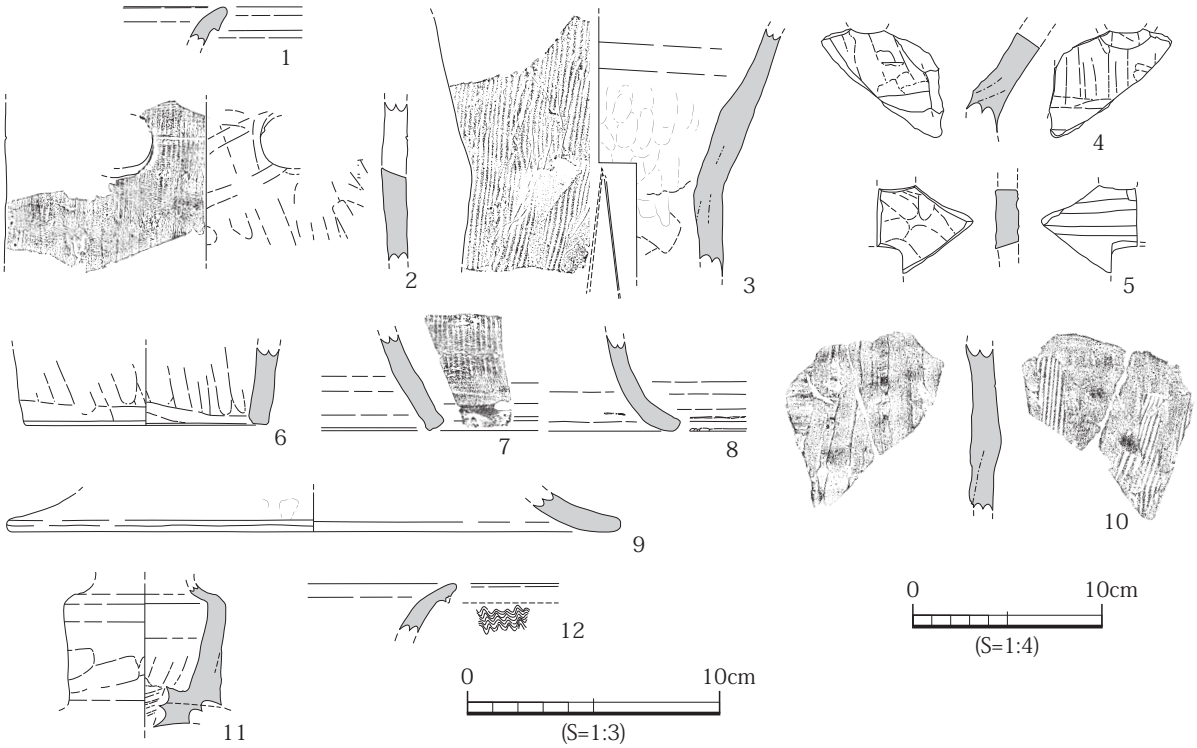
第 47 図は須恵器である。1 ～ 11 はいずれも子持壺で、総じて通常の須恵器より焼成が甘く調整も粗いため、小片でも判別できる。1 は親壺口縁部の小片で端部は段状を呈する。2 は脚部で区画沈線を切り込んで円形スカシが穿たれている。上半部外面には平行タタキ痕が認められることから、脚部上半の資料と思われる。3 は親壺胴部下半から脚部上半にかけての資料で、やや小形の資料である。親壺と脚部との境には突帯を設けないタイプで、外面は粗いタテハケによって仕上げている。脚部上半には長三角形または長台形状のスカシが穿たれているが数は不明。4 はやはり親壺下半部の小片で円形スカシが穿たれている。5 は脚部で、2 条の太い沈線により上下に区画し、上下とも同一方向に長方形状スカシを穿っている。

6 ～ 9 は子持壺脚端部の資料である。6 は端部が外反せず円筒状をなす。内外面ともタテナデで仕上げ、脚端部はカット後にヨコナデを施し平坦に整えている。7 は脚部がほぼ直線的に開くタイプで、端部は面取りする。8 はやや強く屈曲し、端部は丸く収めている。いずれも内外面はヨコナデで仕上げている。11 は子壺資料で、親壺に別作りの子壺を接合後、外から径 8㎜前後の孔を貫通させる柳浦ｂ手法が認められる（柳浦 1993）。子壺は肩部が稜をなし、外面を回転ヨコナデで丁寧に仕上げている。12 は壺の口縁部で段状を呈し、頸部に波状文を施文する。

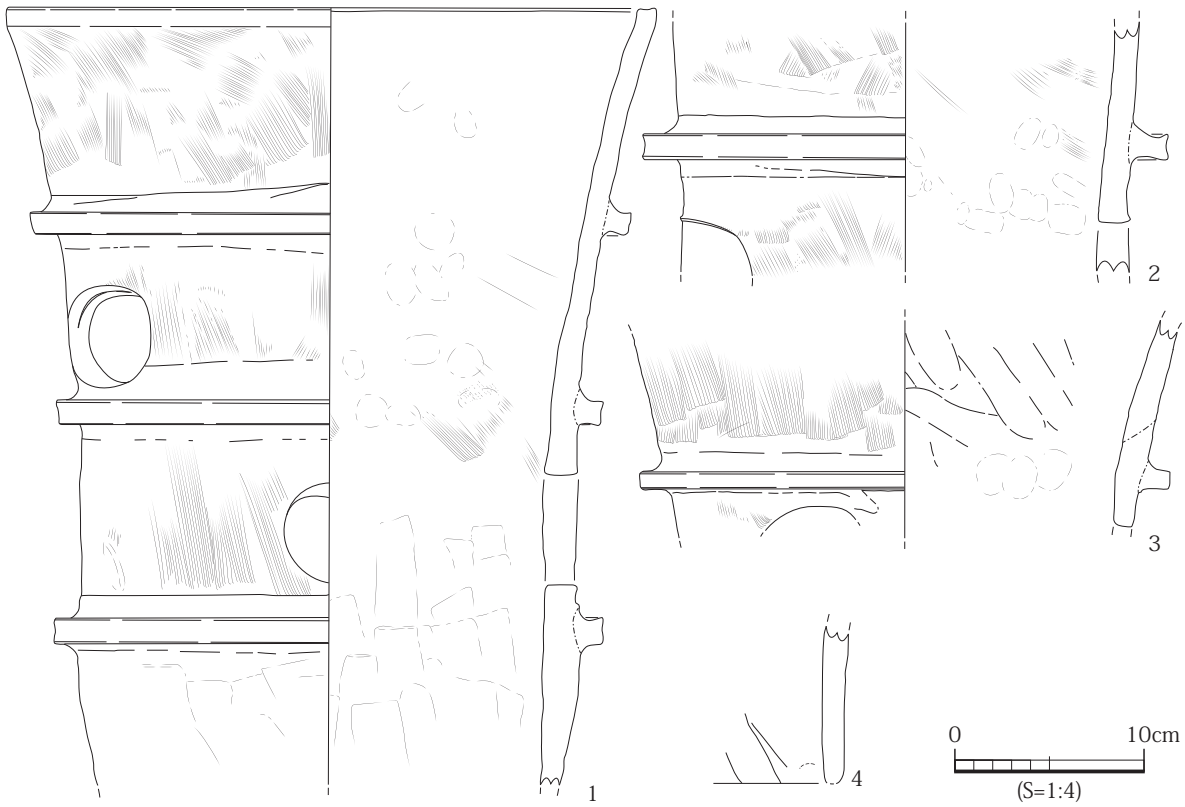
第 48 図は円筒埴輪である。1 は 3 条 4 段の大型品で口径 34.0㎝を測る。口縁部はほぼ直立し、口縁端部上面はヨコナデによる凹面を形成する。二段目と三段目に円形スカシを千鳥状に配している。基底部は欠損しているが比較的高いタイプと推測される。突帯は突出度が高い。調整は外面は基底部以外は一次タテハケ、ナナメハケで仕上げ、基底部には左上－右下方向の板状または円柱状



第 46 図　T2 実測図（S = 1/100）



第 47 図　T2 出土遺物実測図（１）（1 ～ 10：S=1/4　11・12：S=1/3）



第 48 図　T2 出土遺物実測図（２）（S=1/4）

工具によるタタキ痕が観察される。基底部内面にも板状工具による当具痕が観察される。２は円筒埴輪の胴部片で、突帯高が極めて高い資料である。突帯下面にはヨコナデによる稜が明瞭に形成されている。突帯形状やヨコナデ痕を考慮すれば、当資料は突帯貼り付け時には逆位により行われていた可能性がある。３も２とほぼ同様な特徴を持つ資料で、倒立技法による突帯貼り付けが行われ

ていたものと推測される。4 は基底部で内外面に板状工具によるアタリが観察され、端面は平滑に仕上げている。

3. 平成 24 年度の調査

平成 24 年度の調査は、前年度に確定できなかった西側くびれ部の確認のため、T2 南側を調査対象としてくびれ部の検出に努めた。なお、当該年度は予算・調査期間の都合より、調査を実施したのは当トレンチのみである。

調査区は、昨年度確認したくびれ部墳裾ラインを追跡することを目的として、T2 の南側に広く拡張し、第 3 トレンチと呼称することとしたが、当初設定した調査区では墳端は押さえられず、結果的には昨年度の T2 のかなりの部分を再発掘することとなった（第 49 図）。

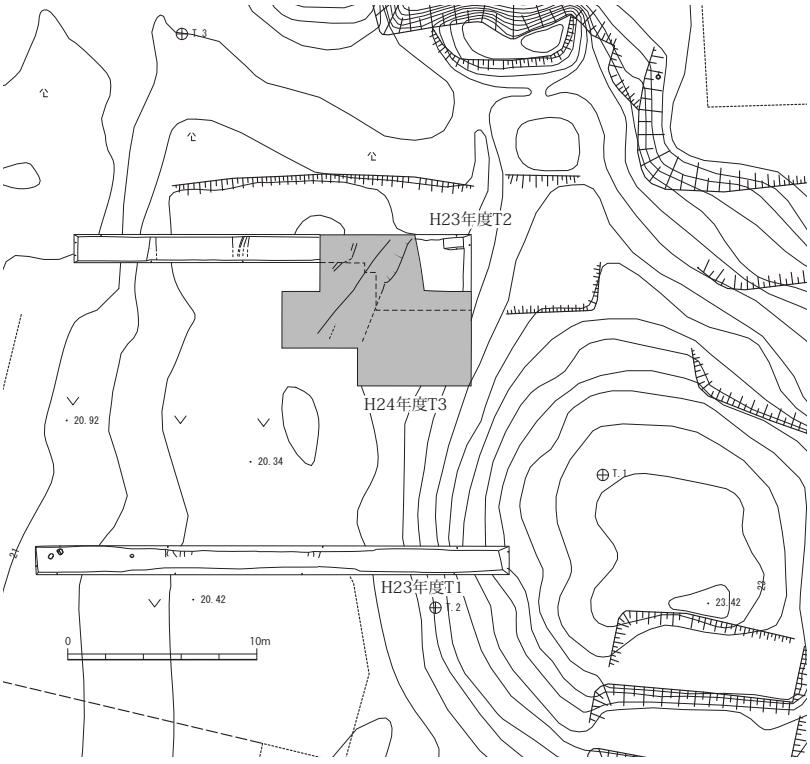
(1) 第 3 トレンチ（第 50 ～ 57 図）

トレンチの概要（第 50 図）　T3 は、先述のとおり昨年度の T2 を南側に拡張する形で設けた調査区で、東西 10 m、南北 8 mの変則的な調査区となっている。現況は西半部は畑地として利用され、東半部は山林となっている。

層位　表土下には約 40㎝の黒ボク土が堆積している（1 層）。これは近世の攪乱土であり、特に墳裾付近は攪乱が顕著で、SK01・02 など近代のゴミ穴が多数掘り込まれ、焼土坑も含まれていた。墳丘部は、表土を除去するとすぐに黄褐色土と黒ボク土の混合土を基調とする盛土に達した。墳丘表面は基本的に削平されており、築造時の様相を残す部分は残っていない。

調査区西半の周溝部は表土の下に黒褐色土系の土が 80㎝近く堆積していた（b ライン 2・3 層）。これらは近世陶磁器類を含んでおり、おそらく周溝の西に所在していた東淵寺が廃絶した際に西から押し出された造成土と想定される。その下には黒褐色粘質土が堆積し（同 5 層）、ここから多数の埴輪・須恵器が出土している。遺物はその下の暗オリーブ色土との境界付近から多く出土した。

その下の暗オリーブ色土（同 6 層）はほとんど遺物を含まないが、須恵器子持壺が 1 点出土しており、また 6 層下の土坑（SK03）から埴輪や須恵器が出土していることから流土と考えて間違いなく、墳丘築造当初の初期流入土と考えられる。

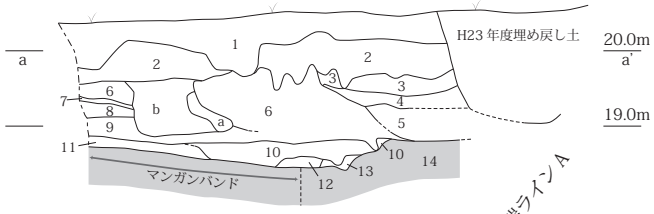


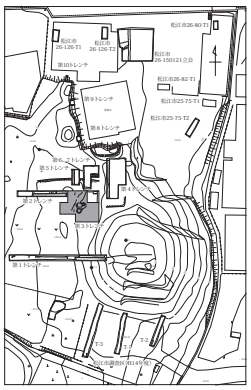
第 49 図　T2 と T3 との関係

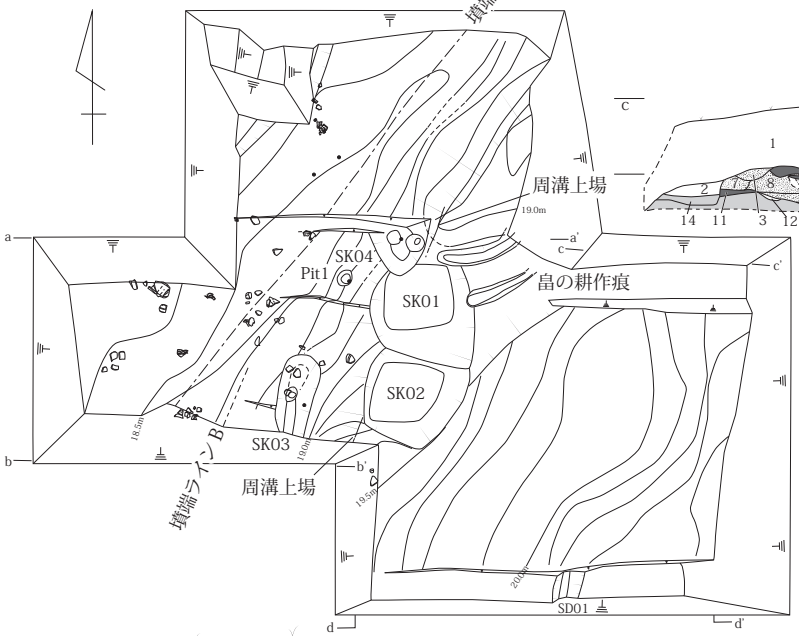
地山は部分で異なっているが、基本的には明黄褐色砂質粘土系の土層であり、長者原台地一帯に広がる三瓶木次降下軽石層と考えられる。その下にはマンガンバンド層が認められ、基本的にはこの層上面を周溝底面としている。

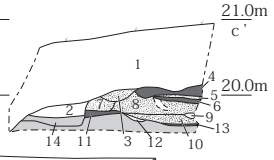
墳丘・盛土　墳丘の盛土は、標高 19.5 ～ 19.7 m付近より

a - a'
1　黒色土 (表土)
2　黒褐色土
3　暗褐色粘質土
4　暗黒褐色粘質土 (ゴミ穴埋土)
5　暗黄褐色粘質土
6　暗茶褐色粘質土
7　暗褐色粘質土
8　暗黒褐色粘質土
9　黒褐色粘質土 (埴輪・須恵器を多量に含む)
10 暗オリーブ色土 (初期流入土、遺物をほとんど含まない)
11 明オリーブ色粘質土 (初期流入土か？)
12 暗茶褐色粘質土 (整地土？)
13 淡黄灰色粘質土
14 黄褐色粘土 (地山)
a　赤褐色土 (ゴミ穴覆土)
b　暗褐色土 (ゴミ穴覆土)

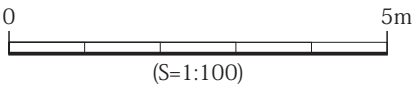


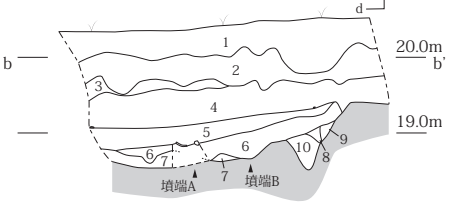


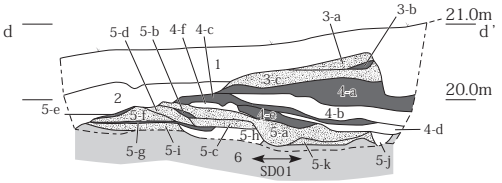




c - c'
1　黒褐色土 2.5Y3/2(表土、カクラン土)
2　暗灰黄色粘質土 2.5Y4/2(カクラン土？)
3　黄褐色土 2.5Y5/4(盛土)
4　黒褐色粘質土 2.5Y3/1(盛土)
5　明黄褐色粘質土 2.5Y6/6(盛土)
6　黒褐色粘質土 2.5Y3/2(盛土)
7　黄褐色粘質土 2.5Y5/4(盛土)
8　明黄褐色粘質土 2.5Y7/6(盛土)
9　暗オリーブ色土 5Y4/3(盛土)
10 明黄褐色粘質土 2.5Y7/6(盛土)
11 黒褐色粘質土 2.5Y3/1(盛土)
12 暗オリーブ褐色粘質土 2.5Y3/3(盛土)
13 黒褐色粘質土 2.5Y3/1(盛土)
14 黄色砂質粘土 2.5Y7/8(地山、三瓶木次層？)







b - b'
1　黒色土 7.5Y3/4(表土)
2　黒褐色土 10YR4/3
　(東淵寺廃絶寺の造成土)
3　暗茶褐色粘質土 10YR4/4
　(東淵寺廃絶寺の造成土)
4　暗黒褐色土 10YR4/3
　(埴輪片を含む)
5　黒褐色粘質土 10YR3/2
　(北壁 9 層)
6　暗オリーブ色土 10YR5/4
　(北壁 10 層)
7　明オリーブ色粘質土 2.5Y6/4
　(北壁 11 層)
8　明オリーブ色粘質土 10YR6/4
　(SK03 埋土)
9　暗赤橙色砂質土 10YR7/4
　(地山の汚れた土、SK03 埋土)
10 暗オリーブ色粘質土 10YR5/3
　(土質は 6 層に似る、SK03 埋土)

d - d'
1　暗褐色粘質土 7.5YR3/4(表土)
2　黒褐色粘質土 7.5YR3/2(流土、埴輪・須恵器含む)
3-a 黄褐色粘質土 2.5Y5/4
3-b 黒褐色粘質土 2.5Y3/2
3-c 黄褐色粘質土 2.5Y5/4
　} 3 層盛土 (黄褐色地山ブロック主体)
4-a 黒褐色砂質土 10YR3/2
4-b オリーブ褐色粘質土 2.5Y4/3
4-c 黒褐色粘質土 2.5Y3/2
4-d オリーブ褐色土 2.5Y4/3
4-e 黒褐色粘質土 2.5Y3/2
4-f 暗灰黄色粘質土 2.5Y4/2
　} 4 層盛土 (黒ボク主体)
5-a 黄色粘質土 5Y7/6(黒色ブロック少量含む、黄色ブロック主体、SD01 埋土)
5-b 黒褐色粘質土 2.5Y3/2(黒ボク)
5-c 明黄褐色粘質土 2.5Y6/6(黄色大形ブロック主体、黒色ブロック若干含む)
5-d 黄褐色粘質土 2.5Y5/6(やや汚れた黄色ブロック主体)
5-e 黒褐色粘質土 2.5Y3/2(黄色ブロック若干含む)
5-f 黄褐色粘質土 2.5Y5/4(黒・黄色ブロック小粒を多量に含む)
5-g 黒褐色粘質土 10YR3/2(黒ボク主体で黄色ブロックを若干含む)
5-h にぶい黄褐色粘質土 10YR5/4(黄色大形ブロックを多量に含みしまりない)
5-i 明黄褐色粘質土 2.5Y6/6(黄色大形ブロックを多量に含む)
5-j オリーブ褐色粘質土 2.5Y4/3(黄色中粒ブロックを若干量含む)
5-k 明黄褐色土 2.5Y7/6(地山と近いがやや汚れる、地山風化層か？)
　} 5 層土堤状盛土 (黄色ブロック主体)
6　明黄褐色砂質粘土 (地山、三瓶木次降下軽石層か？)

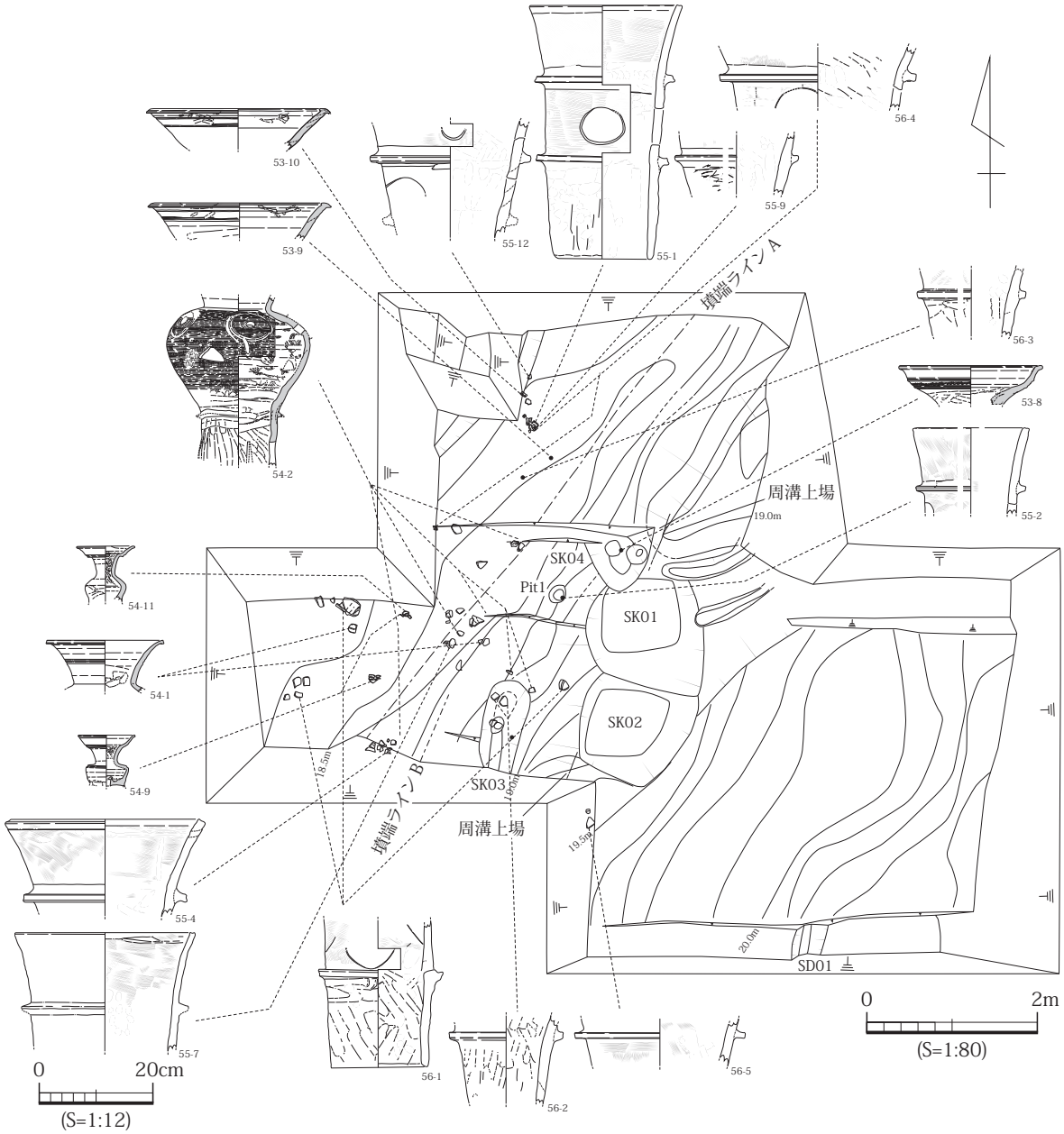
第 50 図　T3 実測図

上位に認められ、その下は地山削り出しによって整形されている。段築の有無は攪乱が著しいため不明だが、盛土レベルから判断して最下段は地山削り出しによって整形され、上段は盛土によって構築されていた可能性がある。

盛土は、黒ボク土と地山由来の黄褐色山との互層によって構築されている。旧表土は認められないことから、この付近は築造前に地山を削り出したと推察される。調査区南壁セクション（d ライン）では地山は墳丘中央部に向かって傾斜しており、後述する土堤状盛土を効率的に行うため、意図的にこのように整形した可能性も考慮されるが、本来の自然の傾斜の可能性もあり判断できない。

盛土はいわゆる土堤状盛土と呼ばれるもので、特に調査区南壁でその工程が顕著に観察された。基本的には墳丘外側に黄褐色系の土（d ライン 5 層）で土堤を整形し、その内部に墳丘外側から黒褐色系の土（同 4 層）を充填し、その上に黄褐色系の土（同 3 層）を水平方向に盛っている。盛土はさらに細分されるが、土嚢状の単位までは確認できず、比較的粗雑なつくりである。

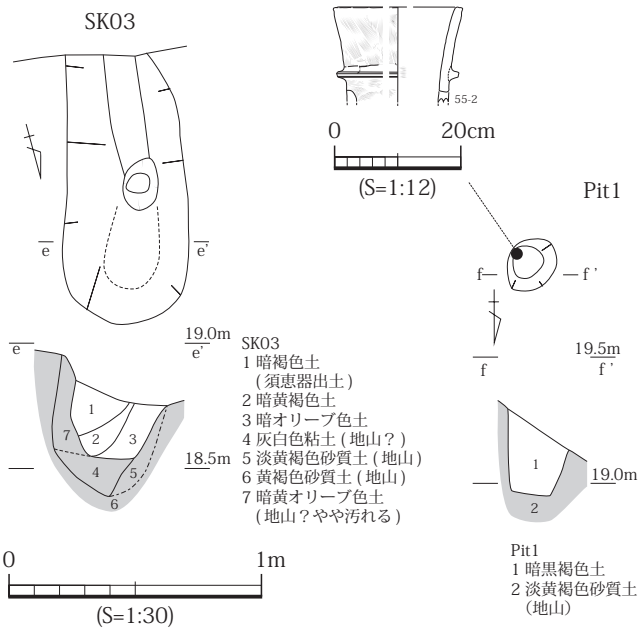
また、調査区南壁沿いの断ち割り部の地山上面には、幅 40㎝、深さ 15㎝程度の溝（SD01）が



第 51 図　T3 遺物出土状況

検出された。これは位置的にみて土堤状盛土の東端に相当する位置に存在する点からみて、盛土の際の割り付け線である可能性もある。

墳端・周溝　墳端ラインは墳裾付近が崩壊しているため明確には残っていないが、傾斜変換点から概ね標高 18.5 m付近と推定される。ただし、b ラインセクション観察上での墳端（墳端Ｂ）とプランで検出した墳端（墳端Ａ）とではやや齟齬がある。なお、葺石は当調査区内では一切検出されていない。調査区内における墳端ラインはほぼ直線状もしくは若干弧を描くように観察され、主丘部の形状については当調査区内では判断できない。なお、昨年度くびれ部と想定していた屈曲部は、精査の結果、流土と判断したため、第 50・51 図には除去した状態を図化している。



第 52 図　T3 SK03・Pit1 実測図

周溝及び遺物の出土状況（第 51 図）　周溝は前述のとおり基本的にはマンガンバンド上面を周溝底面としているが、部分的にはそうでない部分もある。墳端から周溝西側に向けてやや傾斜が上がっているが、これはマンガンバンドの自然地形に規制された結果と考えられる。周溝内は、前述のとおり、下層に初期流入土である暗オリーブ色土、上層に黒褐色土が堆積し、遺物は上層から多量に出土している。特に墳裾付近では上下層の境界付近で遺物が面的に検出され、埴輪や子持壺の大型破片がまとまって認められた。以上の点から、墳丘築造後の比較的早い段階に墳裾の崩壊が進行し、それに伴ってテラス上にあった遺物が周溝内に流入した結果と考えられる。

土坑・ピット（第 52 図）　墳裾付近では不整形なピット・土坑が検出された。このうち SK03・04、Pit1 は層位や出土遺物からみて古墳に伴う何らかの遺構である可能性が高い。

SK03（第 52 図左）　調査区南壁付近で確認した土坑で、ほぼ墳端ラインＢ付近に位置する。南端は南壁にかかっているが、長径 105㎝、短径 50㎝の長楕円形を呈し、深さ約 30㎝を測る。底面には径 20㎝程の小ピットが存在する。炭や地山ブロックを含む埋土中より須恵器が出土している。

SK04（第 50・51 図）　調査区中央付近で検出した径 80㎝前後の不整形な土坑で、約 1/3 はサブトレンチで失われている。埋土内より須恵器装飾付器台の坏部が出土している（第 51 図）。

ピット 1（第 52 図右）　SK04 の南西 0.5 mで検出した径 20㎝程の小ピットである。埋土である暗黒褐色土中より埴輪 1 点が出土している。

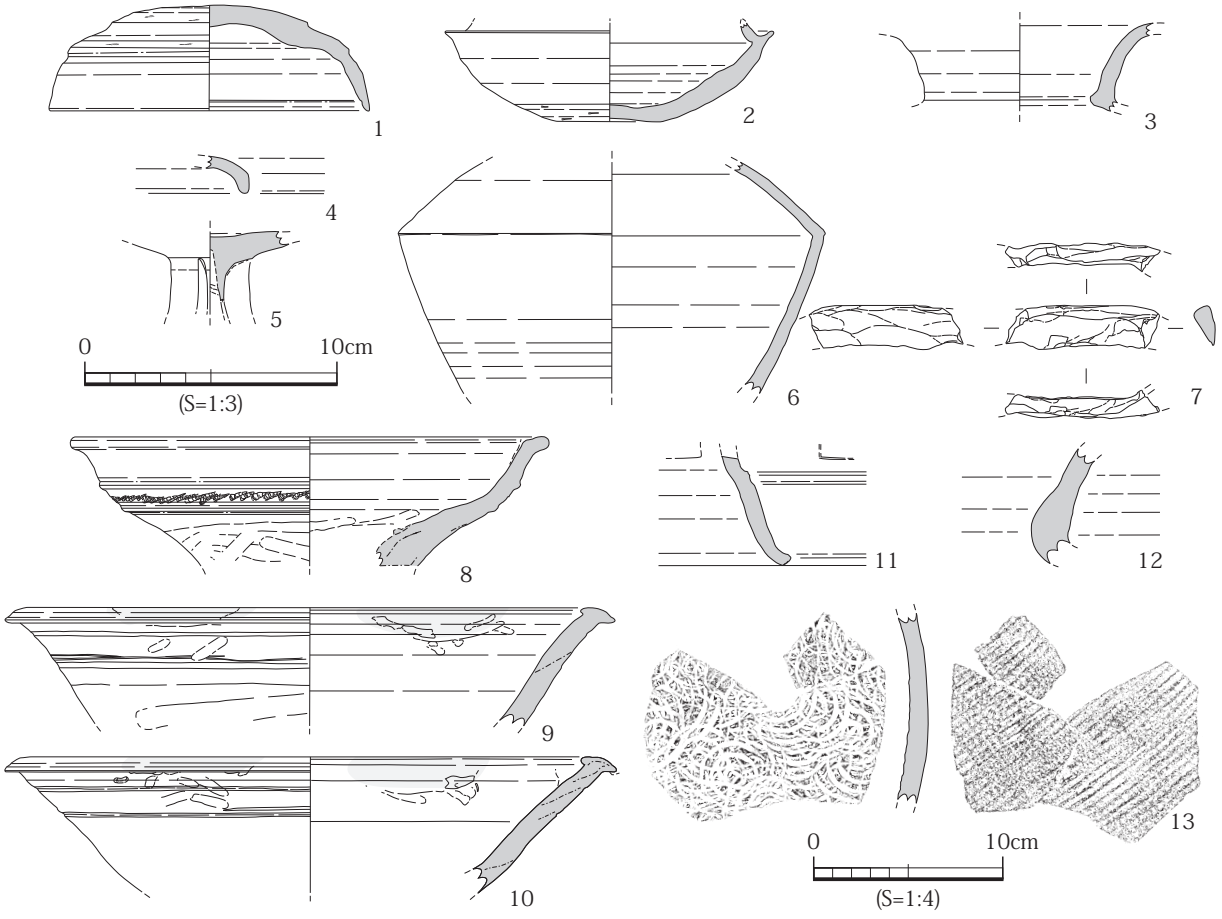
これらの遺構のうち、SK03 とピット 1 は周溝の初期流入土である暗オリーブ色土（b ライン 6 層）で被覆されており、層位的にみても古墳築造時に伴う遺構と考えられる。

第３トレンチ出土遺物（第 53 ～ 57 図）　T3 からは遺物が比較的まとまって出土しているが、その大半は周溝内の出土である。第 53 図 1 は周溝内から出土した坏蓋である。口径 12.6㎝を測り、胎土には黒色粒子を比較的多く含んでいる。天井部には丁寧な回転ヘラケズリを施すがやや浅い。口縁部は α 4 類又は β 類で大谷 3 期～ 4 期に位置付けられる。2 は坏身だが底部中心部のヘラケ

ズリはやや雑で 4 期まで降る可能性のある資料である。3 は壺の頸部で強く外反する。5 は高坏の脚部で、3 方向にスカシを穿ち、坏底面には径 5㎜前後の深い刺突痕が認められる。6 は流土中から出土した長頸壺の肩部資料で薄手のつくりのもので肩部は稜をなす。7 は本体から剝離した突帯状の須恵器片で、断面は低い三角形状をなす。形態的には子持壺の胴部と脚部の境の突帯に類似するが、ヨコナデ仕上げではなく、凹凸が著しい。後述する装飾付器台に伴う資料であろうか。

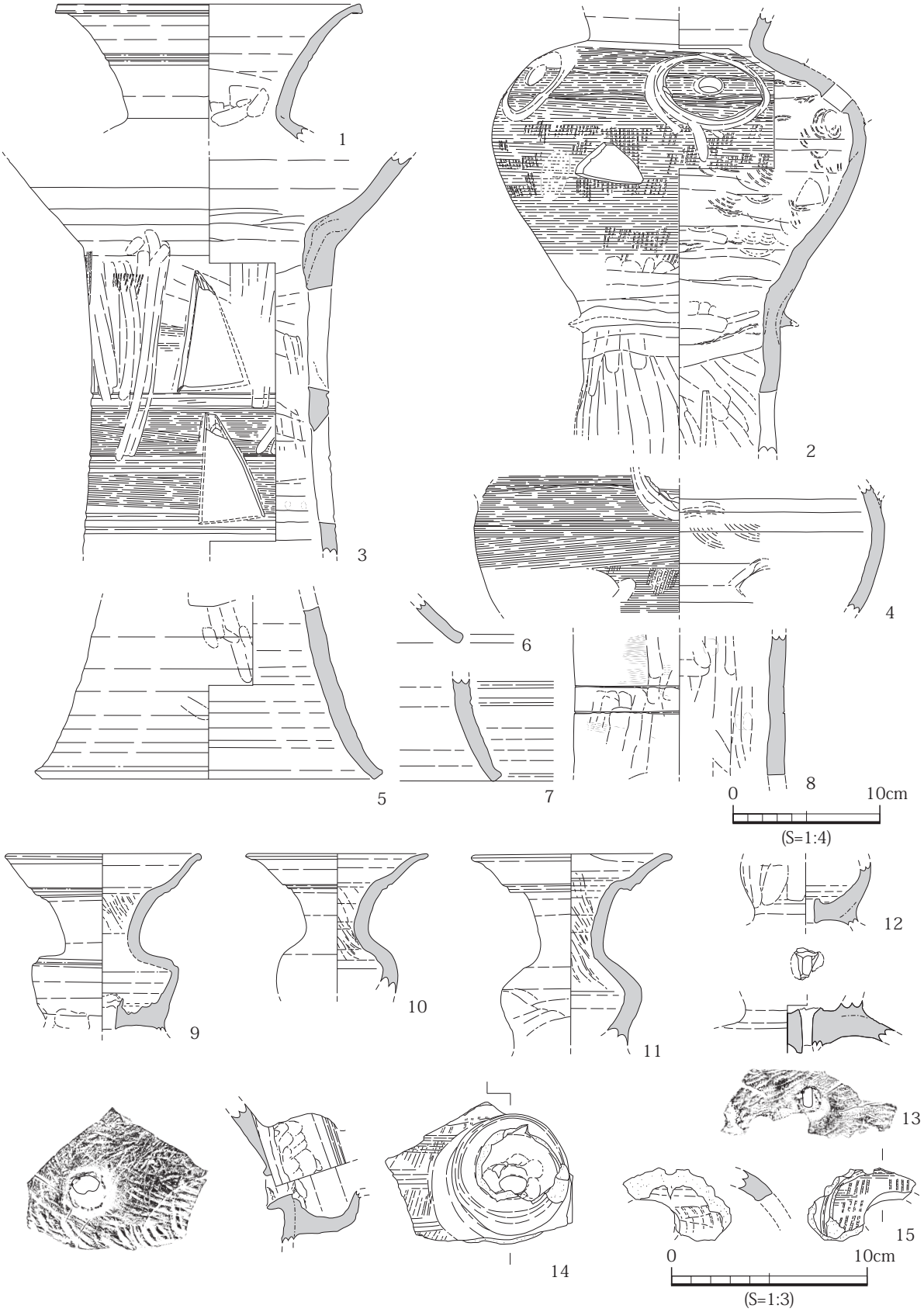
8 ～ 11 は装飾付器台と想定される資料で、9・10 は同一個体の可能性が高い。8 は周溝及び SK04 から出土したもので、復元口径 24.9㎝を測る。口縁部は外反して丸く収め、坏部外面には凹線によって区画された太い突帯によって幅 1.5㎝の文様帯を形成し、その中にハケ状原体小口による連続刺突文を充填している。口縁部と坏部内面には子壺が付着していた跡が認められる。9・10 は子持器台状の須恵器で、口縁部は T 字状に拡張し、外面には 2 条の沈線が認められる。坏部上面には広範囲に自然釉が付着しているが、一部付着していない部分があり、その部分には子壺状の須恵器が剝離した痕跡が認められることから、本来ここに子壺状の須恵器が付着していたことがわかる。内外面は基本的にヨコナデによって仕上げるが、8 に比べると 9・10 は総じて作りが粗い。11 は器台の脚端部と想定される資料で、2 条の沈線によって脚部と脚端部とを区画し、上方には方形または三角形状スカシの痕跡が認められる。12・13 は大甕の頸部及び胴部である。

第 54 図は須恵器子持壺である。総じて焼成は良好であり、胎土は黒色粒子を含まず白色粒子を微量含む精良なもので、魚見塚古墳出土の子持壺とは明らかに異なる。1 は親壺口縁で、頸部付け根から強く外反し、端部は段状口縁を呈さず、直立する狭い平坦面を形成する。頸部には 2 条の

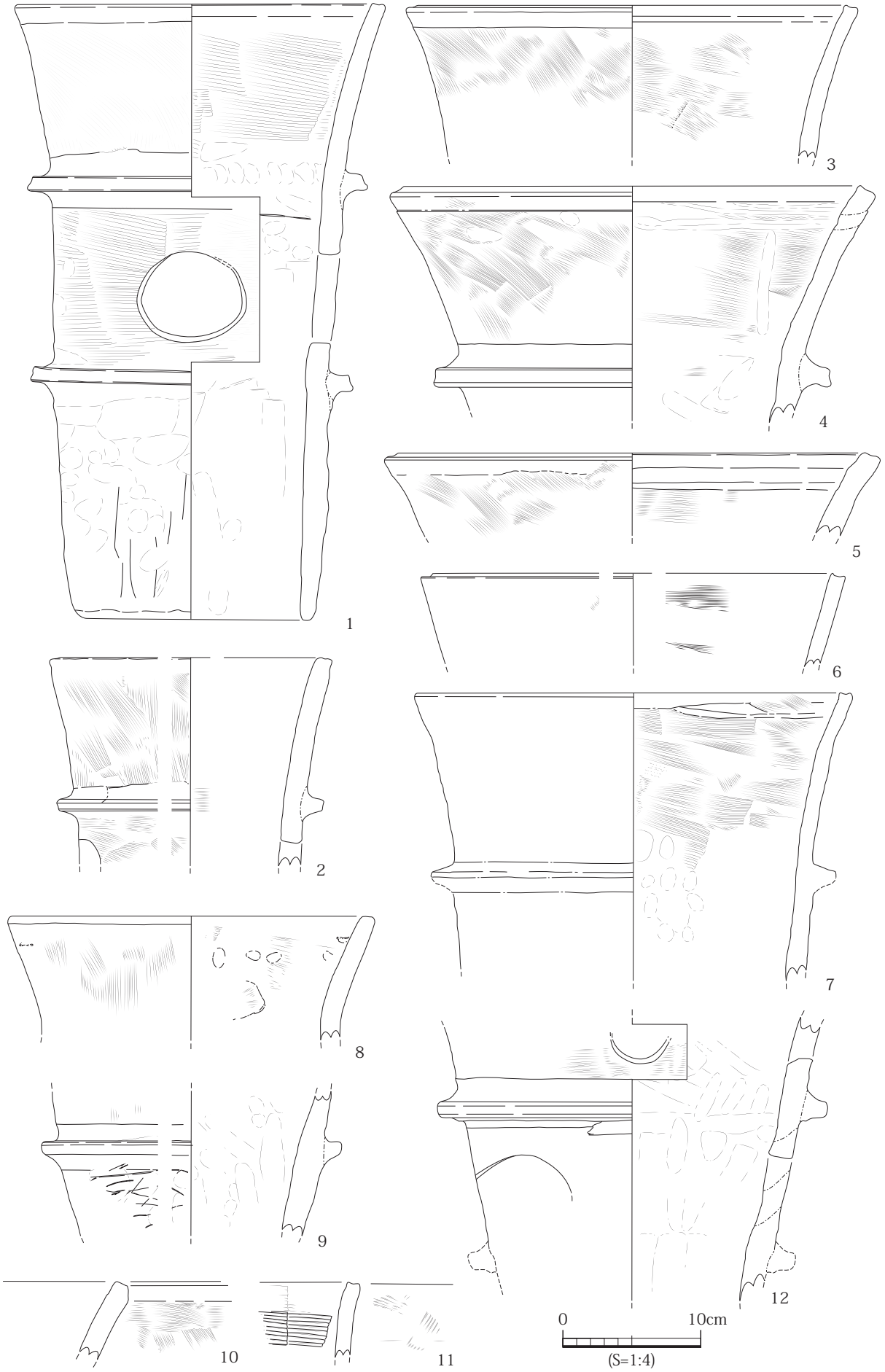


第 53 図　T3 出土遺物実測図（1）（1 ～ 7：S=1/3　8 ～ 13：S=1/4）

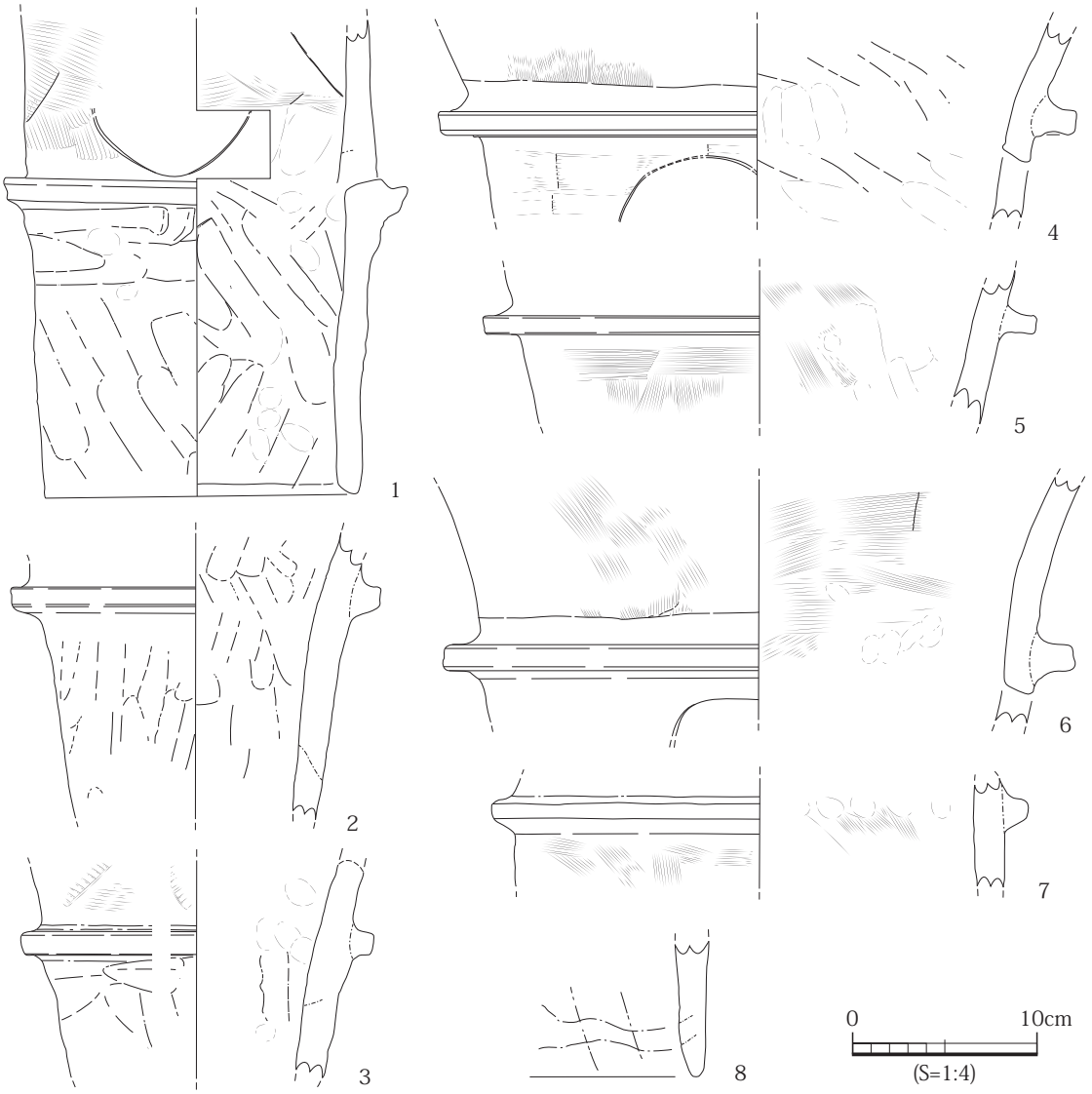
不明瞭な凹線が認められる。２は親壺から脚部上半にかけての資料で周溝内より出土した。親壺は胴部がよく張る大型のタイプで、外面は平行タタキを施しカキメで仕上げた後に肩部に別作りの子壺を貼り付けている。子壺は５個配置で子壺間の下方には三角形スカシを配している。親壺と脚



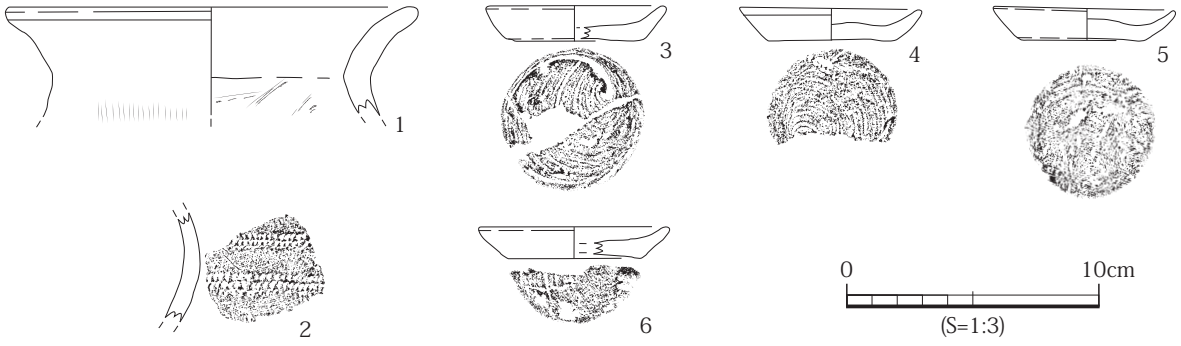
第 54 図　T3 出土遺物実測図（２）（1 ～ 8：S=1/4　9 ～ 15：S=1/3）



第 55 図　T3 出土遺物実測図（3）（S=1/4）



第 56 図　T3 出土遺物実測図（４）（S=1/4）



第 57 図　T2・T3 出土遺物実測図（S=1/3）

部との境には断面三角形状の突帯を貼り付け、脚部上半には３ないし４方向の長三角形スカシを配している。３は脚部上半の資料で、2 とは対照的に突帯を伴わない。脚部は上半部は粗いタテナデ、下半部はカキメで仕上げ、内面にもヨコナデが認められ、子持壺の脚としては珍しく水平方向の調整が顕著な資料である。脚部下半には２条１組の凹線文帯が３組存在する。脚部には上下段ともに三角形スカシが３ないし４方向、同一方向に穿たれている。４は親壺で、スカシの形状や調整・胎土は２と酷似し、同一個体の可能性が高い。５～８は脚部資料である。５～７はいずれも脚部

が緩やかに外反する。8 は 2 条の沈線により脚部を上下段に区画している。9 ～ 14 は子壺である。いずれも口縁部と頸部との境界は明瞭で、接合は柳浦 b 手法による。肩部はよく張るものとなで肩の両者が認められ、全体にヨコナデ調整が顕著に認められる。

第 55・56 図は埴輪である。埴輪は総て円筒埴輪で、口径から大型品（第 55 図 3 ～ 7）と小型品（同 1・2）があり、前者が 3 条 4 段、後者が 2 条 3 段の規格と考えられる。第 55 図 1 はほぼ完形に復元できた資料で、口径 26.0㎝、器高 44.8㎝を測る。2 条 3 段で口縁部と突帯間の長さがほぼ等しくて底部が高いプロポーションを呈し、意宇平野周辺域で主流の規格ではなく、安来平野または出雲平野と同一の埴輪規格のものである（田中 2012）。突帯は突出度が高く、上下とも下向きで倒立状態で貼り付けが行われたと考えられる。突帯が剥離した部分には、突帯間隔の割付線と考えられる凹線状の沈線が認められる。外面調整は口縁部はナナメハケ、二段目には B 種風のヨコハケを施す。底部外面には円柱状工具により上半には横方向、下半は縦方向のタタキ痕が認められる。4 は口縁端部外面にヨコナデによる段を設ける資料であり、何らかの工具を使用した可能性がある。突帯は下向きに貼り付けられている。7 は内面に対して外面の荒れが著しく、窯内での焼成時の変異である可能性がある。12 も突帯が下向きの資料である。

第 56 図 1 は 2 条 3 段の小型品と考えられる資料で底部高が高い。突帯は上向きで他に比べると突出度がやや低い。第 55 図 1 と同様に、底部外面上半には横方向、下半には斜め方向の円柱状工具によるタタキ痕が観察される。2 も 1 と同様に円柱状工具による底部タタキ痕が認められる資料であるが、タタキの方向が右上がりで一般的なタイプと異なる。3 は 1 と同様に底部外面上半に横方向のタタキ痕が認められる。4 ～ 6 は大型品で 5 は外面に B 種ヨコハケ状の静止痕が認められる。

第 57 図 1 は周溝上部から出土した土師器甕で、古墳時代後期のものであろう。3 ～ 6 は流土中より出土した中世土師器皿である。4 は耕作に伴う溝中より出土しており、この時期に古墳周辺がかなり改変されたことが窺える。

4. 平成 25 年度の調査

平成 25 年度の調査は、調査着手時からの懸案である墳形の確定を第一の目標に掲げ、前年度に調査を実施した T3 での知見を元に 4 箇所のトレンチを設定して実施した。当初は T3 北側の平坦部を全面調査する計画であったが、ケヤキの大木の存在や掘削土量の多さから部分的に調査するに留まった。具体的には、T3 で検出した墳端ラインの北東側延長上に設定した T4、前方部が西に延びる可能性を想定して設定した T5、T3 で検出した墳端のすぐ北の延長を確認するために設定した T6、T4 で確認した盛土の西側への広がりと墳端の検出を目指して東西方向に T7 を設定した。その後、T6 をさらに北側に拡張し、T7 を墳端確認のため可能な限り西側へ拡張したため、最終的には T6 と T7 は接続して同じトレンチとなった。

(1)第 4 トレンチ（第 58・59 図）

トレンチの概要（第 59 図）　T3 の北東、東側標高 21 m付近の平坦面に設定した、南北 7 m（拡張部含 10.5m）×東西 5 mのトレンチである。表土下 20.8 m付近で盛土と考えられる黄橙色土系及び黄橙色土が混在する黒色土系の土を検出した。基本的にはこの面で掘削を停止したが、墳丘構築状況を確認するため、西壁沿いのサブトレンチを設定し、深いところでは標高 19.2 m付近まで掘り下げ、盛土を確認した。地山は北側で 20.6 m、南側で 19.2 m付近で確認し、南北の間は谷

状に落ち込んでいた。つまり、前方部と後円部の間に小さな谷が東西に入り込んでいる状況となる。

この谷状の地形に堆積する盛土は、黒ボクに近い黒色土、黄橙色土系、両者が混在する土に大きく分けられる。盛土中からは須恵器や埴輪は一切出土せず、黒色土中から弥生土器が数点出土したのみである。サブトレンチ北端と南端では地山に沿うように橙色土と黒色土が混じる旧表土が認められた。盛土は後円部→前方部の順で構築されており、後円部から前方部に向かって、平面的に均すように土を盛っている状況が観察された。

トレンチ南端から１～４ｍには、旧表土を切って土坑状の落ち込みが掘り込まれており、完全に埋没しない段階でその上に盛土が行われている状況が認められた。土坑状落ち込み内からは須恵器の坏蓋の天井部（第 58 図 1）が出土している。性格等については不明であるが、墳丘築造前の何らかの祭祀行為の可能性も考慮される。

また、調査区南側の盛土上面からは、南北 2.5 ｍ×東西３ｍの範囲で石材がまとまって出土した。平坦面に集中する石材と、西壁沿いで検出した石材とでは、材質や大きさに違いがある。平坦面の石材は２箇所にまとまり、中央が落ち窪んでいることなどから、古墳に伴うものではなく中世以降の古墓の可能性もある。

第４トレンチ出土遺物（第 58 図）　1 はサブトレ内の土坑状の落ち込みから出土した坏蓋の天井部である。回転ヘラケズリが頂部まで及んでいるが浅く、大谷３期末～４期の資料である。2 は盛土中から出土した甕の口縁部で端部は欠いている。調整は風化の為不明だが、形態からみて弥生時代後期前半に属するものであろう。

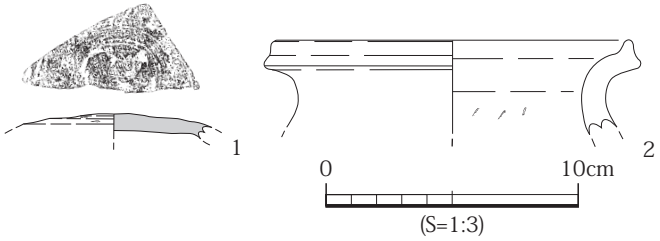
(2)第５トレンチ（第 60・61 図）

トレンチの概要（第 61 図）　T3 の北側、平坦部西側に設定した、南北４ｍ×東西２ｍのトレンチである。調査前は竹林で、南側の周溝部から一段高い段状の地形を呈していた。表土直下で赤褐色土系の土を検出し、その下部標高 20.3m 付近から下には黒褐色系の土が厚く堆積していた。サブトレンチでは標高 19.5 ｍ付近まで黒褐色土が確認できる。赤褐色土及び黒褐色土からは埴輪や須恵器片が出土するが、近世陶磁器類やセメント瓦も含まれることから、いずれの堆積土も近代以降の造成土であり、古墳の盛土は確認できなかった。当トレンチはその状況からみて当初の目的であった墳裾の検出は見込めなかったことから、地山を確認することなく調査を終了した。

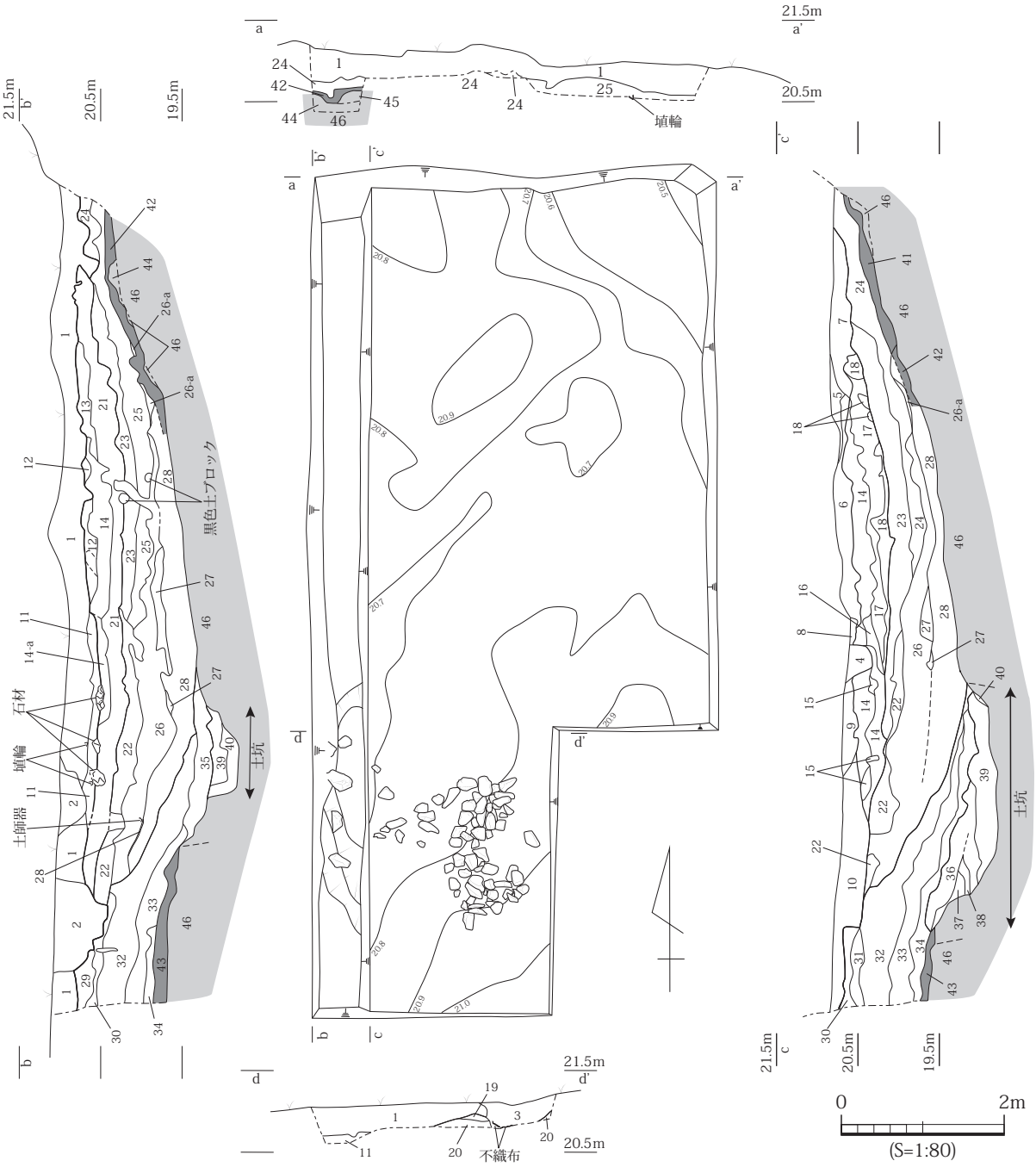
第５トレンチ出土遺物（第 60 図）　1 はサブトレ内から出土した須恵器子持壺の親壺口縁部である。復元口径 14.4㎝を測り、口縁端部は直立する段状を呈し、頸部には２条の沈線が施されている。

(3)第６・７トレンチ（第 62 ～ 66 図）

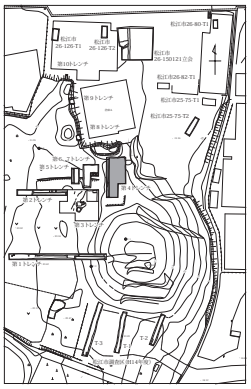
トレンチの概要（第 62 ～ 64 図）　T6・7 は、T3 で検出した墳端ラインの延長を検出することを目的として、T3 の北側、平坦部の T4 と T5 の間に設定した南北６ｍ×東西４ｍのトレンチである。上部は、表土以下標高 19.5 ｍまで中世から近代以降の造成土からなっている。トレンチ東側に向けて地山が傾斜して上がっていき、標高 20.1 ｍで旧表土がわずかに残るものの、盛土は全く削平されている。調査区東側では地山面（標高 19.2m 付近）において、南北方向の溝を数条検出した。上の造成土と後述する周溝埋土の境界面からは中



第 58 図　T4 出土遺物実測図　(S=1/3)



1	暗褐色土 7.5YR3/4	表土	24	黄橙色土 7.5YR7/8	前方部盛土
2	黒色土 10YR2/1(現代のゴミ穴)	撹乱	25	橙色土 7.5YR6/6	
3	黒色土 10YR2/1(現代のゴミ穴)		26	黒色土 N1.5/0(黒ボク土)	
4	黒褐色土 7.5YR3/1		26-a	黒色土 N1.5/0	
5	褐灰色土 5YR4/1	後円部～前方部盛土	27	黄橙色土 10YR8/6	
6	黄橙色土 7.5YR7/8		28	黒色土 N1.5/0(黒ボク土)	
7	明赤褐色土 5YR5/8		29	明赤褐色土 5YR5/8	後円部盛土
8	黒色土 N1.5/0(黒ボク土)		30	灰黄褐色土 10YR5/2	
9	褐灰色土 7.5YR4/1		31	黒色土 7.5YR3/1	
10	褐灰色土 10YR4/1		32	にぶい橙色土 7.5YR6/4	
11	黒褐色土 10YR3/2	流土	33	褐灰色土 7.5YR4/1	
12	褐灰色土 10YR5/1		34	にぶい黄橙色土 10YR6/3	
13	明褐色土 7.5YR5/6		35	黄橙色土 7.5YR7/8	
14	黒色土 10YR2/ 1		36	黒色土 7.5YR2/1	土坑埋土
14-a	黒褐色土 10YR3/1		37	明黄褐色土 10YR7/6	
15	にぶい褐色土 7.5YR5/3		38	褐灰色土 10YR4/1	
16	褐灰色土 7.5YR4/1		39	黒色土 10YR2/1	
17	明褐色土 7.5YR5/6	前方部盛土	40	褐灰色土 7.5YR4/1	
18	黒色土 N1.5/0		41	橙色土 7.5YR6/6	旧表土
19	黒褐色土 10YR3/1		42	黒色土 N1.5/0	
20	褐灰色土 10YR4/1		43	黒色土 10YR2/1	
21	明赤褐色土 5YR5/6		44	黄橙色粘質土 10YR7/8	地山
22	にぶい褐色土 7.5YR5/3		45	橙色土 5YR6/6	
23	褐灰色土 7.5YR4/1		46	黄橙色粘質土 7.5YR7/8	



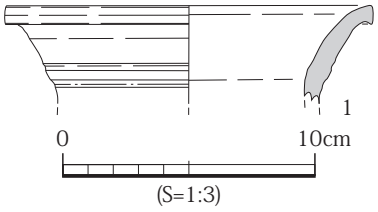
第 59 図　T4 実測図

世土師器小皿が数点出土しており、この時期に古墳の破壊を伴う大規模な造成が行われたと考えられる。

調査区西側では、地山面で検出した墳端ラインが、緩やかに弧を描いて西壁に向けて延びていく状況が観察された。T3 で検出した墳端ラインとの関係からみて、西側くびれ部と考えて間違いない（第 64 図）。さらにそのカーブの状況を見る限り、主丘部は方形ではなく円形であることもまず疑いない。また、昨年度までと同様に葺石は検出されなかった。

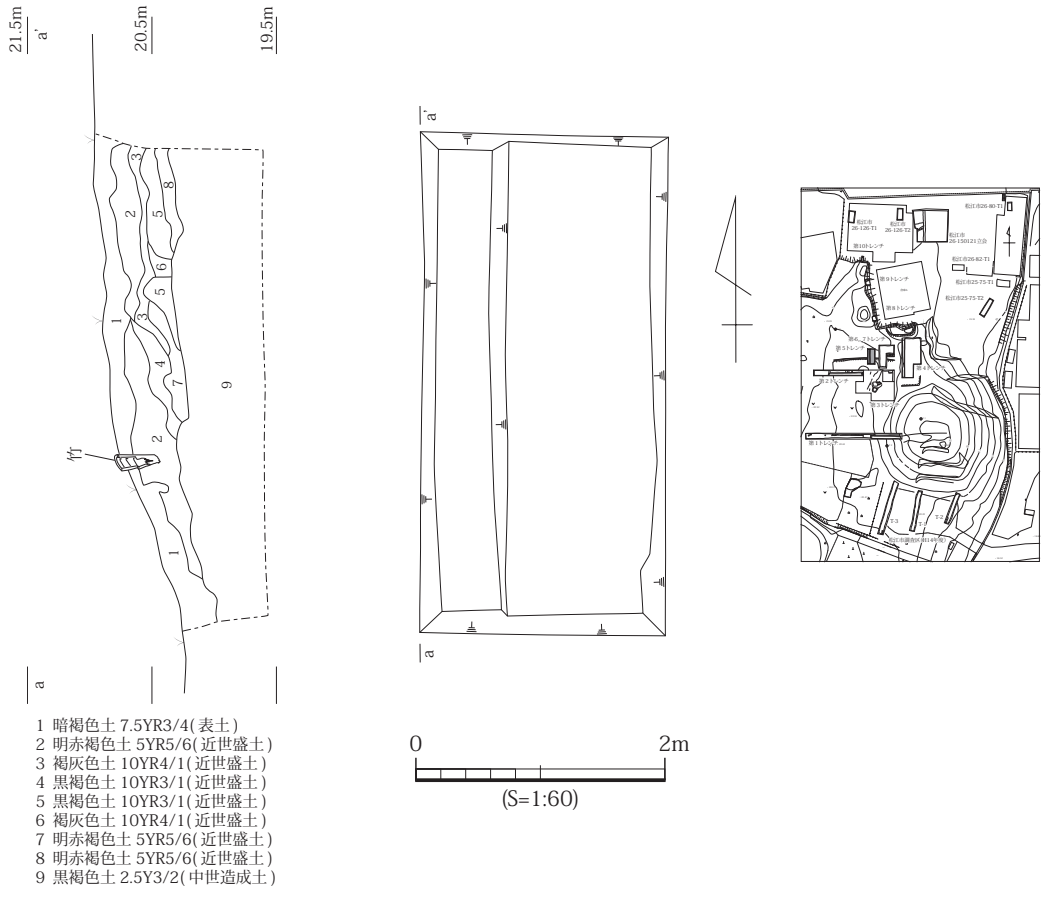
標高 19.5 m付近で検出した周溝埋土は、上から黒褐色土、暗褐色土、にぶい黄橙色粘質土の順で堆積しており、いずれの層からも埴輪、須恵器が出土しているが、特に上の２層の境界面で多く出土した。プラン的には、墳丘立ち上がり面に沿うように出土しており、T2・T3 での出土状況とほぼ同様な状況であった。

周溝底面は他の調査区と同様にマンガンバンド層を底面に設定している。ただ、トレンチ南端から 1.4 m～ 3.0 m付近ではマンガンバンド層を掘り抜いた落ち込みを検出した。同様の落ち込みは、昨年度までの調査でもいくつか確認しているが、性格については不明である。



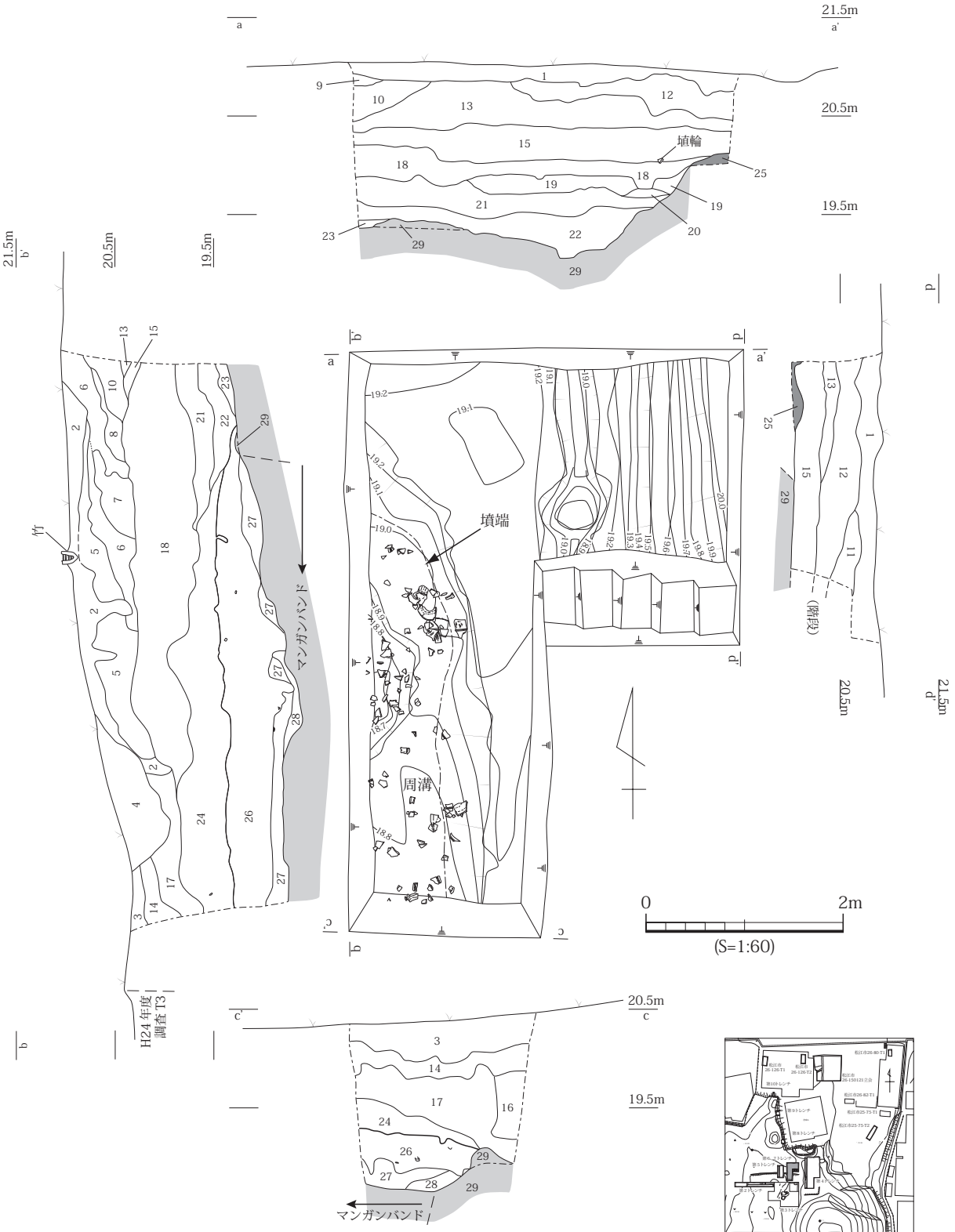
第 60 図　T5 出土遺物実測図　(S=1/3)

第６・７トレンチ出土遺物（第 65・66 図）第 65 図 1 ～ 14 は須恵器子持壺である。1・2 は親壺口縁部で、1 は頸部から緩やかに外反し、端部は幅狭の段状を呈する。頸部には２条の沈線を施す。2 は口縁端部に狭い面を形成しＢ型子持壷の口縁部に類似する。



1 暗褐色土 7.5YR3/4(表土)
2 明赤褐色土 5YR5/6(近世盛土)
3 褐灰色土 10YR4/1(近世盛土)
4 黒褐色土 10YR3/1(近世盛土)
5 黒褐色土 10YR3/1(近世盛土)
6 褐灰色土 10YR4/1(近世盛土)
7 明赤褐色土 5YR5/6(近世盛土)
8 明赤褐色土 5YR5/6(近世盛土)
9 黒褐色土 2.5Y3/2(中世造成土)

第 61 図　T5 実測図



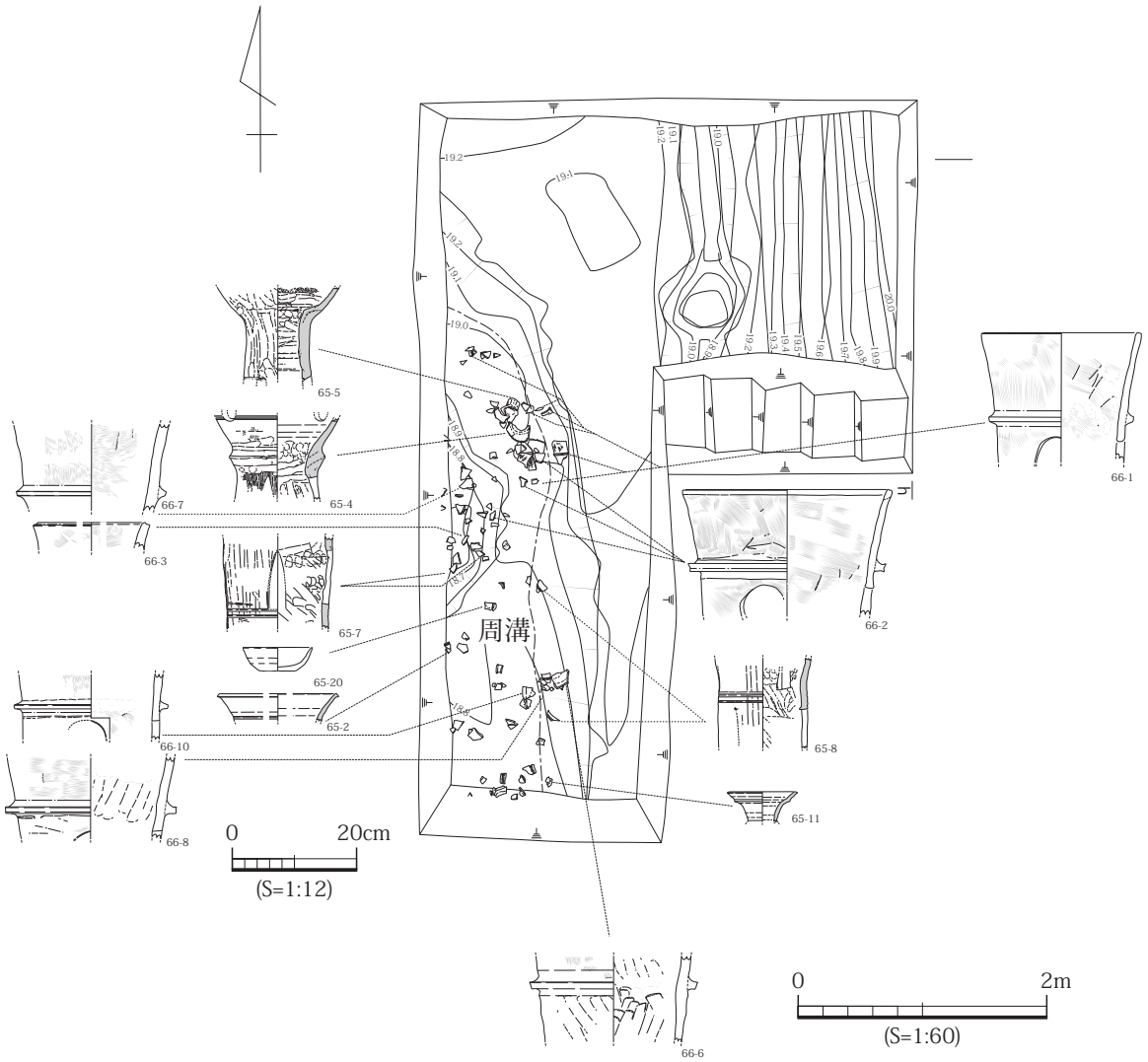
1 暗褐色土 7.5YR3/4	表土	15 褐色土 7.5YR4/3	中世以降造成土
2 灰褐色土 7.5YR5/2		16 黒褐色土 7.5YR3/2	中世？土坑
3 黒褐色土 7.5YR2/1		17 暗褐色土 7.5YR3/3	中世造成土
4 黒色土 7.5YR1.7/1	カクラン	18 灰褐色土 7.5YR4/2	
5 黄橙色土 7.5YR7/8	近世盛土	19 にぶい褐色土 7.5YR5/4	
6 暗褐色土 7.5YR3/2		20 灰褐色土 7.5YR4/2	
7 暗褐色土 7.5YR3/3		21 にぶい褐色土 7.5YR5/4	
8 暗赤褐色土 5YR3/3		22 褐色土 7.5YR4/4	
9 黒色土 7.5YR2/1		23 にぶい褐色土 7.5YR5/3	
10 暗褐色土 7.5YR3/3		24 褐色土 7.5YR4/4	
11 橙色土 7.5YR6/8		25 黒色土 10YR2/1(黒ボク土)	旧表土
12 黒褐色土 5YR3/1		26 黒褐色土 5YR3/1	周溝埋土
13 暗褐色土 7.5YR3/3		27 暗褐色土 10YR3/3	
14 黒褐色土 7.5YR3/3		28 にぶい黄橙色粘質土 10YR4/3	
		29 黄橙色粘質土 10YR7/8	地山

第 62 図　T6・7 実測図

４は親壺下半から脚部上半にかけての資料である。親壺下半には円形スカシを穿ち、親壺と脚部との境には、脚部の擬口縁を利用した断面三角形の低い突帯をめぐらす。脚部上半には長三角形状スカシを４方向に穿っている。５は同じく親壺下半から脚部上半にかけての資料であるが突帯を持たないタイプで、外面調整はタテナデが卓越する。脚部には中段付近に長三角形？スカシを３方向に穿っている。６はやはり突帯を持たないタイプで親壺胴部下半に三角形スカシを穿つ。９も突帯を持たないタイプで、脚部上半に３方向のスカシを穿つ。

７・８・10は脚部である。７は二条の沈線により脚部を上下に区画し、上下に長方形または長三角形状スカシを千鳥方向に穿つ。10は子持壺脚部として図化したが、土師質で円筒埴輪底部の可能性がある。脚端部には刻み状の圧痕が認められる。11 ～ 14は子持壺の子壺である。11・12は口縁部で、口縁部と頸部が明確に作り分けられ丁寧な回転ヨコナデで仕上げている。13・14は子壺の底部資料で、柳浦ｂ手法による穿孔が認められる。13の子壺内面には同心円状の深い沈線が認められ、調整時に何らかの工具を使用した可能性がある。

15は中型の壺頸部で、２条の沈線により区画し、波状文を充填する。波状文があるため壺としたが、形態や法量、焼成等からみて子持壺の親壺口縁部の可能性もある。16は表土中から出土した壺瓶類の肩部で自然釉が付着する。17は15に類似するが焼成はよい。18は表土中から出土し

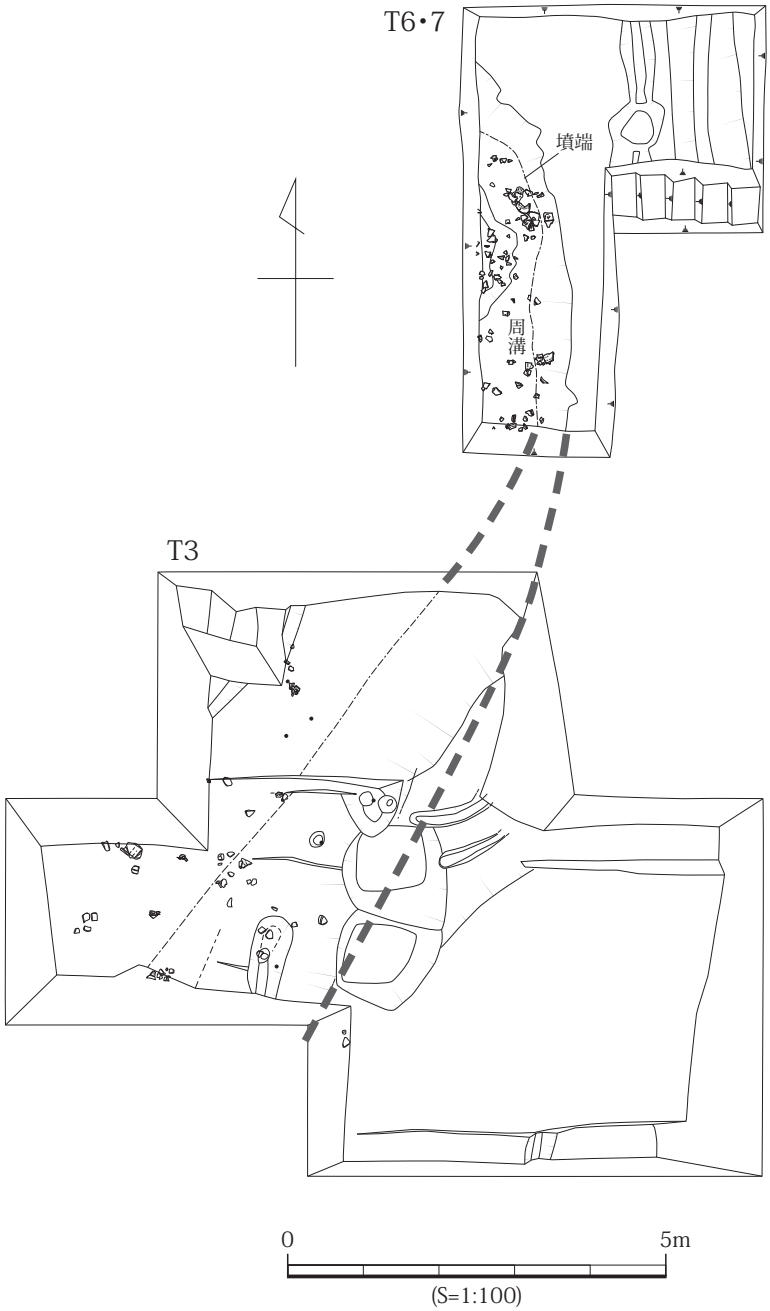


第63図　T6・7遺物出土状況

た坏身小片である。立ち上がりは比較的高く、端部を丸く収める。大谷 3 期の資料であるが、表土中出土のため古墳に伴うものかどうか判断できない。19 は大谷分類 B1 類の坏蓋である。20 は中世土師器坏で底部が比較的大きくやや内湾気味に立ち上がる。周溝内から出土した遺物では唯一新しい時期の資料であるが（第 63 図）、中世の造成時に混入した可能性が高い。

21 は表土から出土した皮袋形土器の胴部片である。胴部に皮袋の縫い目を表現した幅 1㎝の粘土紐を貼り付け、その上から外面全体に竹管文をランダムに施文している。県内では岩屋後古墳、山代二子塚古墳、安来市石田遺跡で出土例があり、大井窯跡群岩汐支群でも出土例があることから大井産の製品の可能性が高い。22 は同様に竹管文が施文されており、皮袋形土器の破片である可能性がある。

第 66 図は T6・7 から出土した埴輪である。1 は口縁部の法量からみて 2 条 3 段規格の資料と思われ、外面には比較的粗い原体によりタテハケ調整が行われている。突帯は比較的低く、上向きをなす。2 は口径 33.8㎝を測り、法量からみて 3 条 4 段規格の資料と想定される。調整は 1 とほぼ同じだが、1 とは対照的に細かなハケ原体を使用している。突帯は高く断面M字状をなし、上向きである。3 ～ 5 は円筒埴輪の口縁部である。いずれも直立する口縁で、3・5 はヨコナデにより口縁端部が凹面をなしている。6 は基底部及びその上段付近の資料で、外面には広く黒色の付着物が認められる。底部上段には円柱状工具による横方向のタタキ痕、その下には左上がり方向のタタキ痕が認められ、内面にも円柱状工具によるタタキないしは当具痕が存在する。突帯は下向きで貼り付けられている。8 は突帯間に連続的なヨコハケを丁寧に施す。突帯下には突帯割付線と想定される突帯貼り付け前の沈線が部分的に観察される。9 は比較的高くて細い突帯で、突帯下面にはヨコナデによる段が形成されている。10 も突帯下に割付状沈

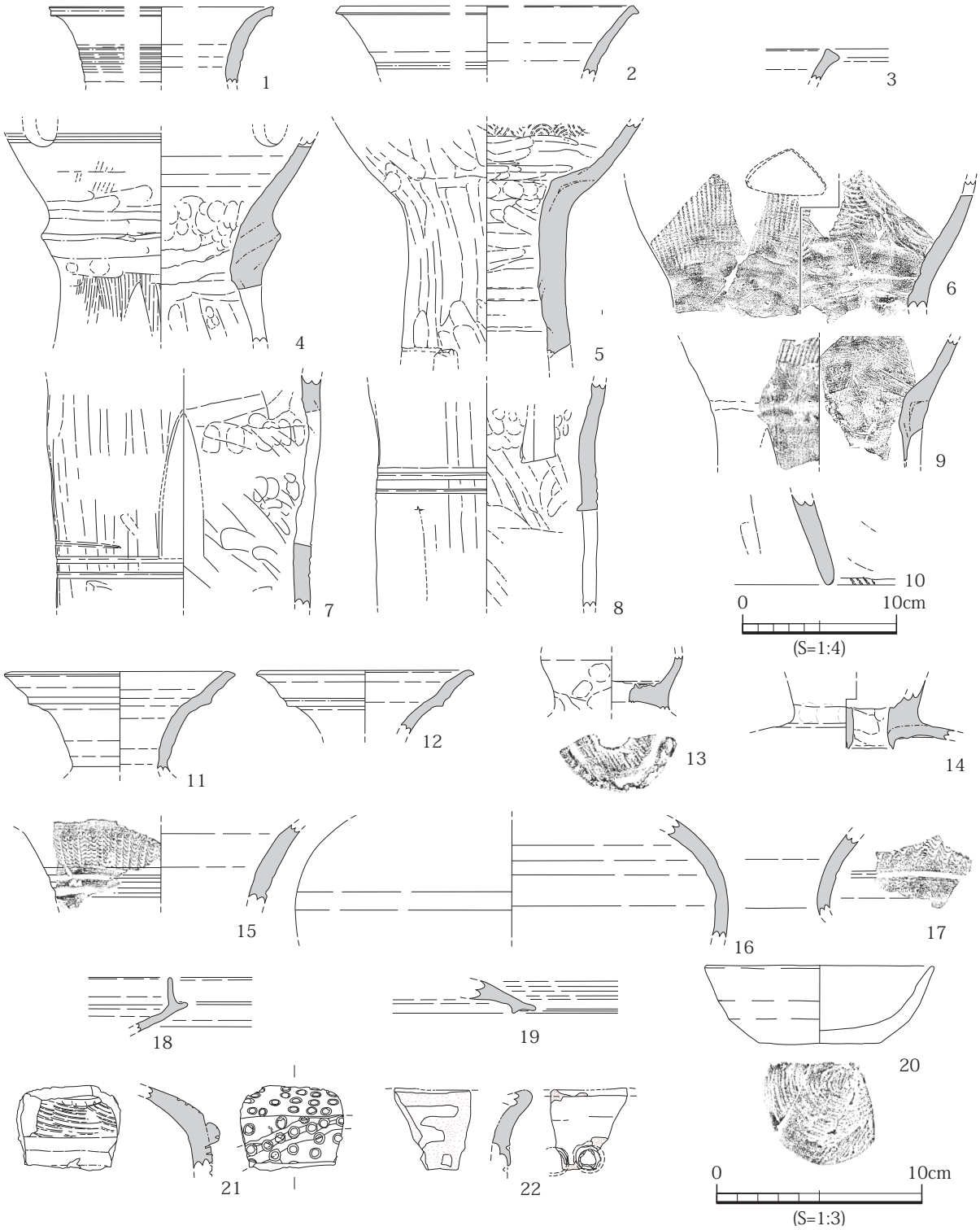


第 64 図　T3 と T6・7 との関係

線が認められる。11 は何らかの形象埴輪の破片と思われる。横方向に幅広で低い突帯を貼り付け、図面上で上から下への強いナデで突帯の一部を潰している。12 ～ 15 は底部資料で、13 は外面にタタキ痕ではなくタテハケを残し器壁が非常に厚く、形象埴輪である可能性が高い。15 は底面にハケ状工具の圧痕を残す。

5. 平成 26 年度の調査（第 67･68 図）

調査の経緯で述べたとおり、平成 25 年度の調査終了後の客員検討会議において、客員研究員から、前方部の墳丘構造や残存状況について追加調査をすべきとの指導があり、これに基づいて平成

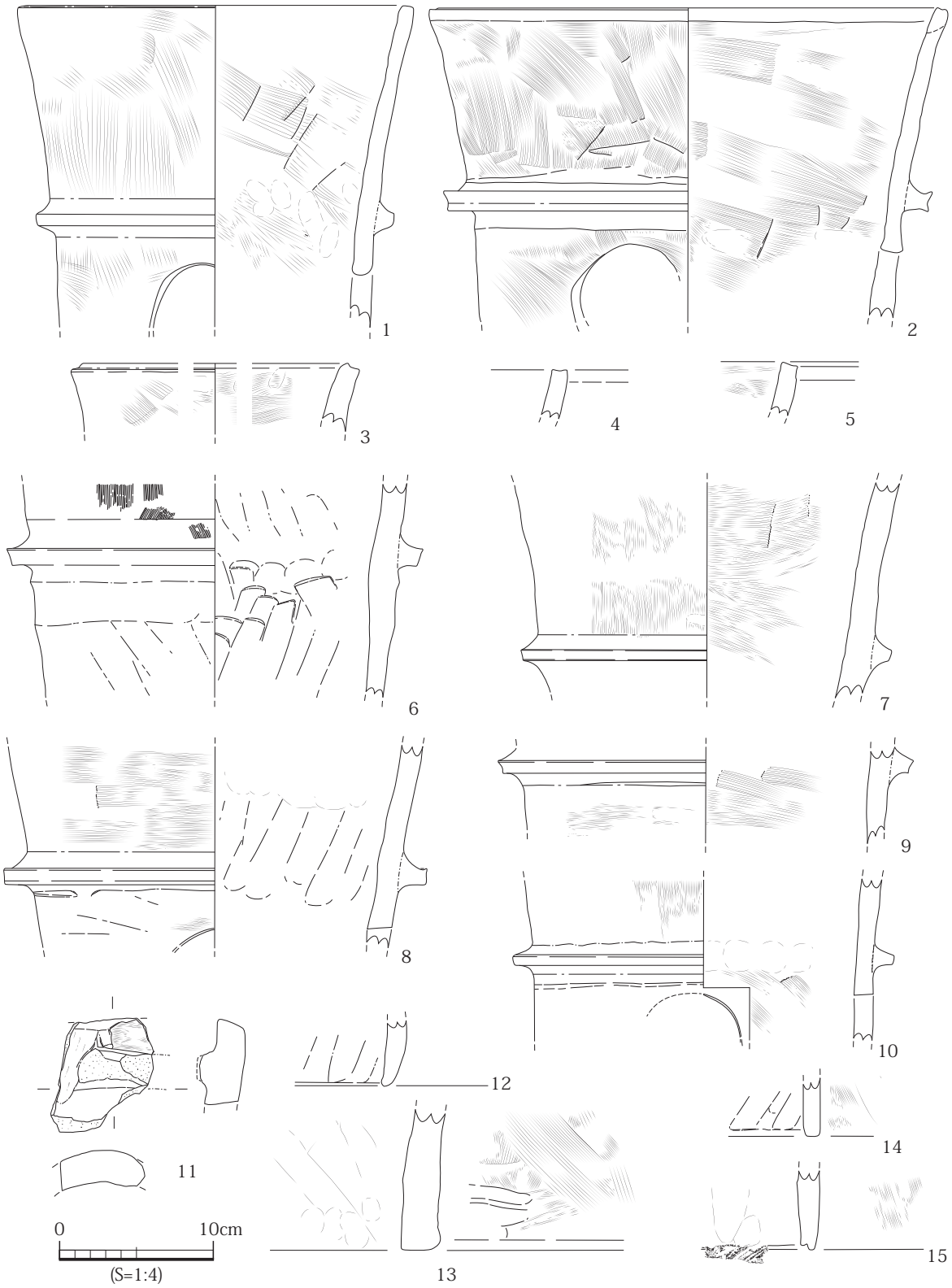


第 65 図　T6・7 出土遺物実測図（１）（1 ～ 10：S=1/4　11 ～ 22：S=1/3）

26 年度は倉庫 A によって削られている前方部崖面の断面確認調査を行った。

(1)第 8 トレンチ

T8 は平成 25 年度に調査を行った T6・7 の北側の L 字状にカットされた法面西壁に設定した。一辺 1.2 mのトレンチを設定し、法面表土を除去することにより土層観察を行った。その結果、表土直下約 1.5 mまでは黒色土や黄褐色系の土が厚く堆積しており、これらは、過去の各トレンチで



第 66 図　T6・7 出土遺物実測図（2）（S=1/4）

検出されていた後世の造成土に対応するものと考えられる。標高 19.6 mから 20 mにかけては黒褐色土系と黄褐色土系の土が互層状に堆積している状況が観察され、前方部盛土の可能性も考慮される。なお、埴輪小片と共に、須恵器小片が出土しているが時期や器種は不明である。

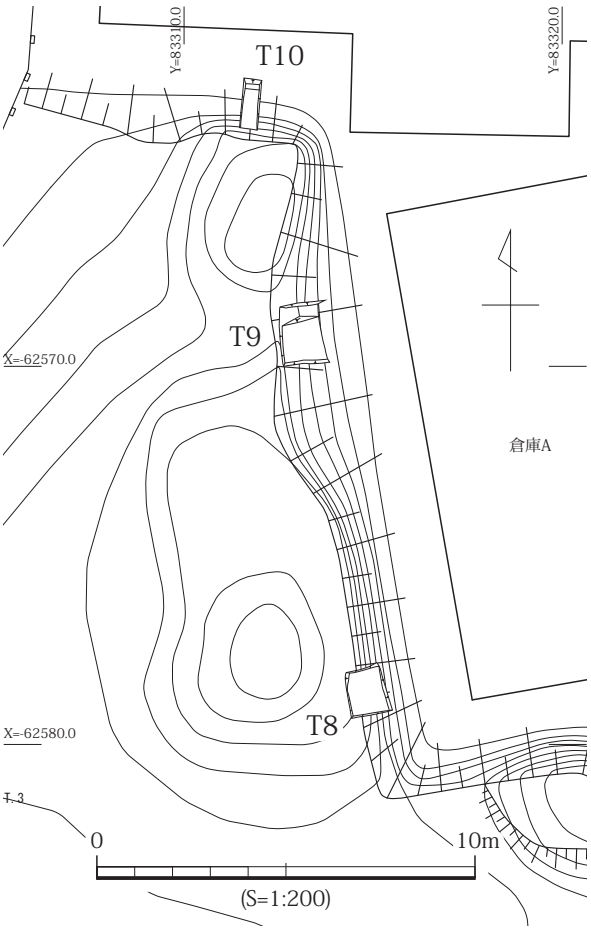
(2)第 9 トレンチ

T8 の北約 10 mの位置に設定した。約 1.5 mの厚みで黄褐色土が若干混じる黒ボク土が堆積しており、盛土や地山は検出されなかった。黒ボク土は盛土由来の流土とも考えられ、盛土は掘削位置よりさらに奥側に存在している可能性も想定される。遺物は出土していない。

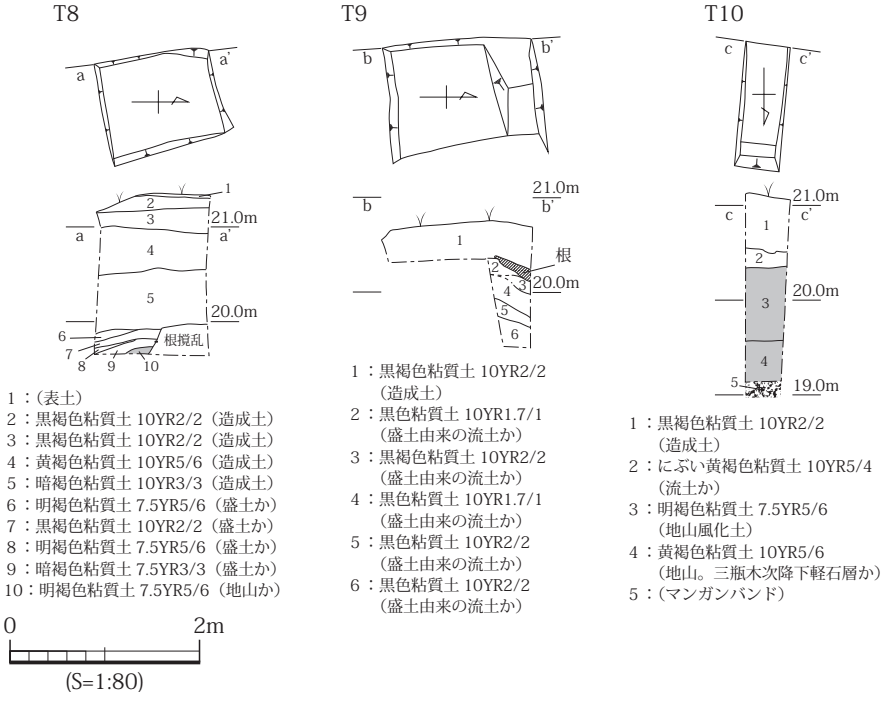
(3)第 10 トレンチ

T10 は北側法面の、西に向け屈曲しているコーナーから約 1.5 mほど西の位置に 60cm × 150cm の規模で設定したトレンチである。約 70㎝の表土及び流土の下層、標高 20.3 m付近で地山を検出した。地山は明黄褐色砂質粘土で当地一帯に広がっている三瓶木次降下軽石層と考えられる。その下の標高 19.1 m前後でマンガンバンド層を確認している。遺物は検出されていない。

以上、平成 26 年度の調査では断片的な知見しか得ることができなかったが、T10 の調査状況を鑑みれば、少なくとも前方部前端付近は地山削り出しによって造成された可能性が高い。



第 67 図　T8 ～ 10 調査区配置図



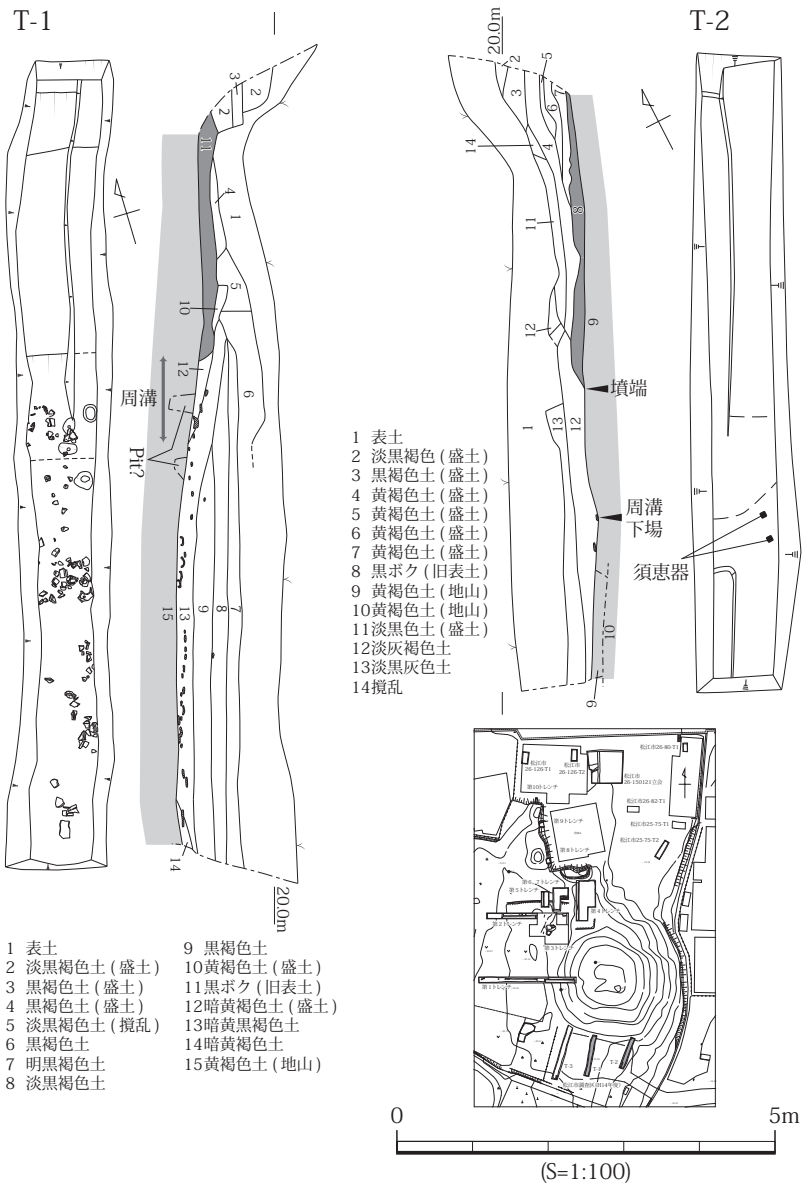
第 68 図　T8 ～ 10 実測図

第 3 節　松江市教育委員会実施の調査

第 1 節で述べたとおり、東淵寺古墳の周辺においては、県道八重垣神社竹矢線の拡幅事業や宅地造成などに伴い、これまで数多くの試掘確認調査が行われている（第 41 図）。これらの調査は試掘確認調査という調査の性格上、印刷された報告書として刊行されたものはなく、行政上の文書（終了報告）にとどまっている。今回、松江市教育委員会のご厚意により、当古墳の復元に重要だと思われる二つの確認調査について調査概要を収録させていただくことができた。最初の平成 14 年度の古墳南側で実施された確認調査は、その調査概報を一部改変・編集の上再録した。次の県道八重垣神社竹矢線拡幅に伴う立会調査成果については、調査日誌・図面を元に池淵が執筆し、調査担当である松江市まちづくり文化財課赤澤秀則氏らの校閲を受けた。以下その概要について述べておく。

1. 平成 14 年度の確認調査（平成 14 年 6 月 27 日～ 7 月 24 日；調査担当 飯塚康行氏）

東淵寺古墳は松江市大庭町地内、茶臼山の西側の台地上に存在する大型の前方後円墳である。（中略）この古墳の南側隣接地において、花木園の造成計画がなされたことから事前に試掘調査を実施することとなった。調査は南北方向にトレンチ 3 本を設定して人力で地山面まで掘り下げた。

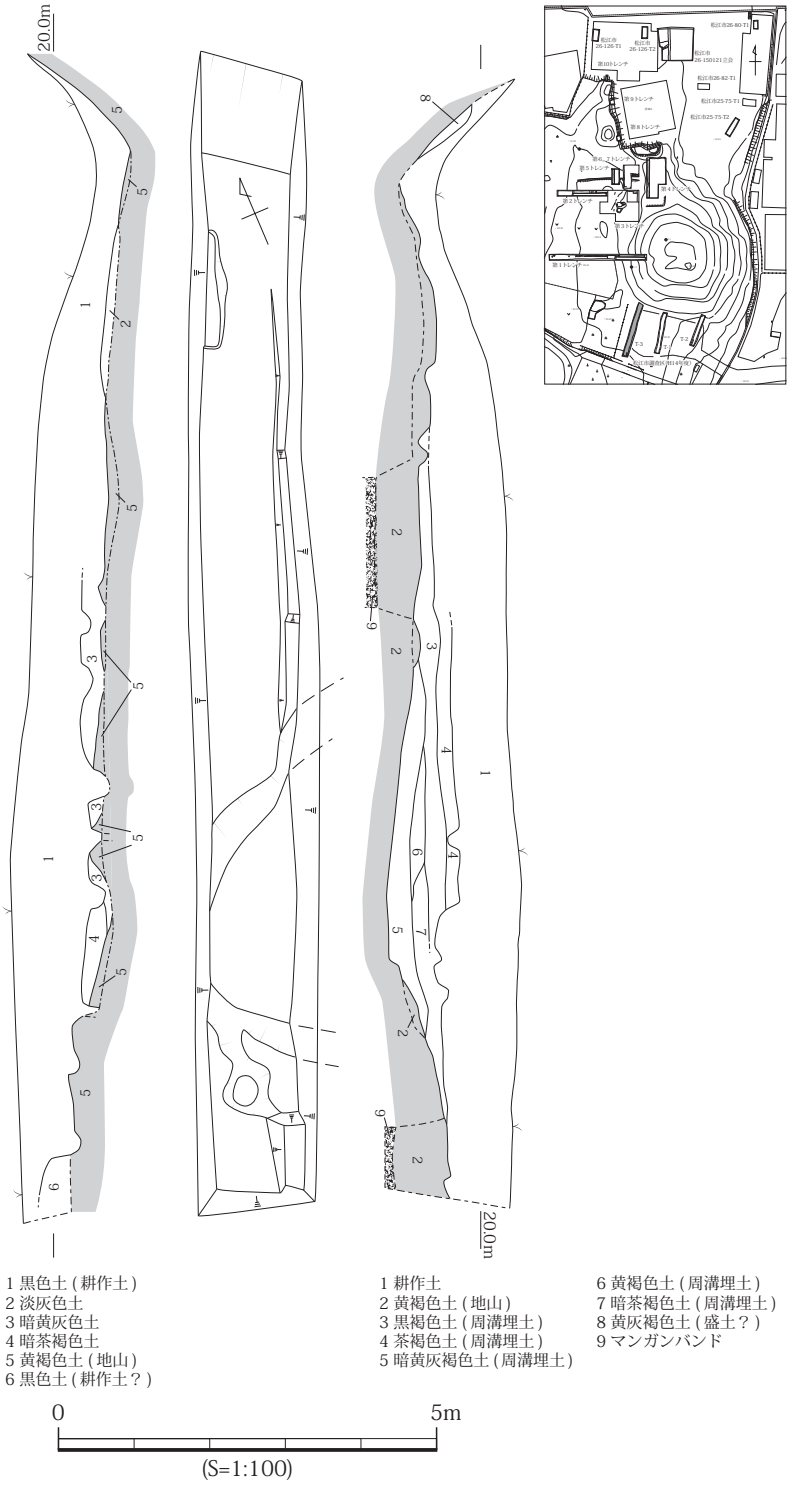


第 69 図　平成 14 年度松江市教育委員会調査 T-1・T-2 実測図

T-1（第 69 図）　幅 1.0 m、長さ 10.5 mの規模で設定したトレンチである。調査の結果、現地表面から約 56㎝の深さで埴輪片や須恵器片を含む黒褐色の包含層（7 層）が検出された。さらに掘り下げると墳丘側では黒褐色土と黄褐色土の斑層（2 ～ 4 層）が見られ、その下には旧表土層（11 層）が見られたことから東淵寺古墳の墳丘裾部であることが確認された。トレンチ南方にかけては墳丘盛土と旧表土は消えて地山面が下がる状況が見られ、多数の埴輪片や須恵器が検出されたことから、古墳の周溝

であることが推定された。周溝の幅は T-1 の範囲内では確定できなかったが、トレンチ南端部で黒褐色が薄くなる埋土（14 層）が見られることから、およそ７m程度の規模になるものと考えられる。周溝底から検出された遺物は円筒埴輪の外に人物や動物を模した形象埴輪片、子持壺片等が検出された。また同レベルで８世紀代の須恵器坏も検出された。

T-2（第 69 図）　幅１m、長さ８mの規模で設定したトレンチである。調査の結果、現地表面から 50㎝以下の深さでトレンチ北側では墳丘盛土と考えられる黒褐色土と黄褐色土の斑層（2 ～ 7、11 層）、トレンチ南側では埴輪片や須恵器片を含む黒灰色の周溝埋土（12・13 層）が検出された。周溝の規模は対岸部分が T-2 の範囲内で検出されなかったため不明である。



第 70 図　平成 14 年度松江市教育委員会調査 T-3 実測図

T-3（第 70 図）　幅 1.5 m、長さ 14 mの規模で設定したトレンチである。調査の結果、トレンチ南半では現地表面から約 60㎝以下の深さで形象埴輪や須恵器片を含む茶褐色～黒褐色の周溝埋土（東壁３～７層）が確認されたが、トレンチ北部では後世の畑の開墾により墳丘裾部は削平されている状況が見られた。

周溝の形状は、東から西へ向かって幅が狭まり、深さも浅くなっており、T-3 より西側で途切れるような状況が観察され、土橋の存在が推定された。

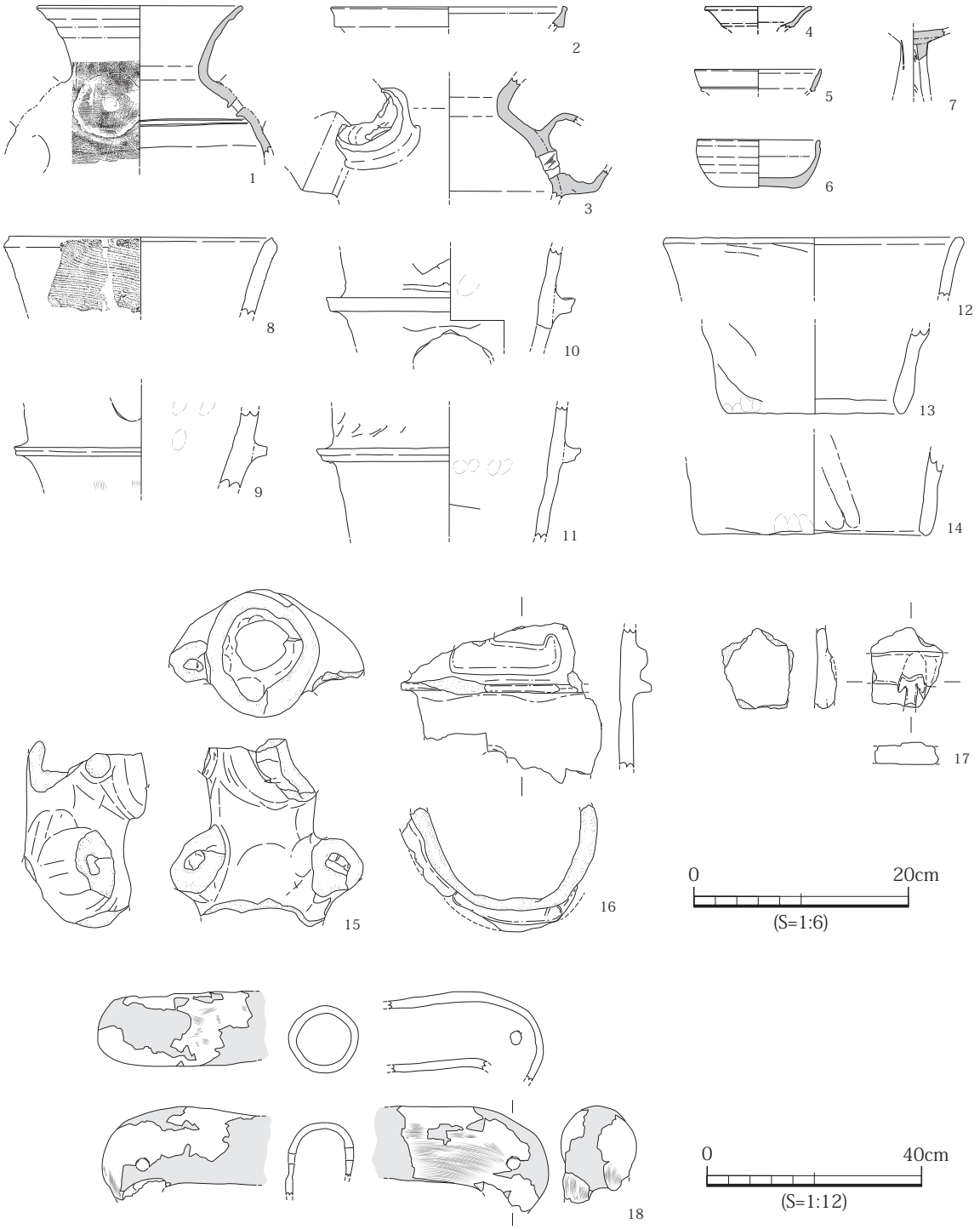
まとめ　調査の結果、それぞれのトレンチで東淵寺古墳の墳丘裾部及び周溝が確認された。後世の畑地耕作が現地表面から 50 ～ 60㎝の深さで行われていることにより、墳丘は一部削平を受けているが、T-1・T-2 ではその墳端部を確認することができた。周溝の規模は T-1 での調査結果からおよそ７m前後の規模になる

ものと推定される。従来東淵寺古墳が周溝を持つかどうか不明であったが、今回の調査でその存在が確認された意義は大きい。

出土した埴輪片は、通常の円筒埴輪の他に人物埴輪の頭部、動物（猪？）をかたどった形象埴輪が検出されている。また須恵器でも子持壺が検出されるなど、その内容は首長墓としてふさわしいものであり、出雲地方の古墳時代後期の動向を知る上で貴重な遺跡であると考えられる。

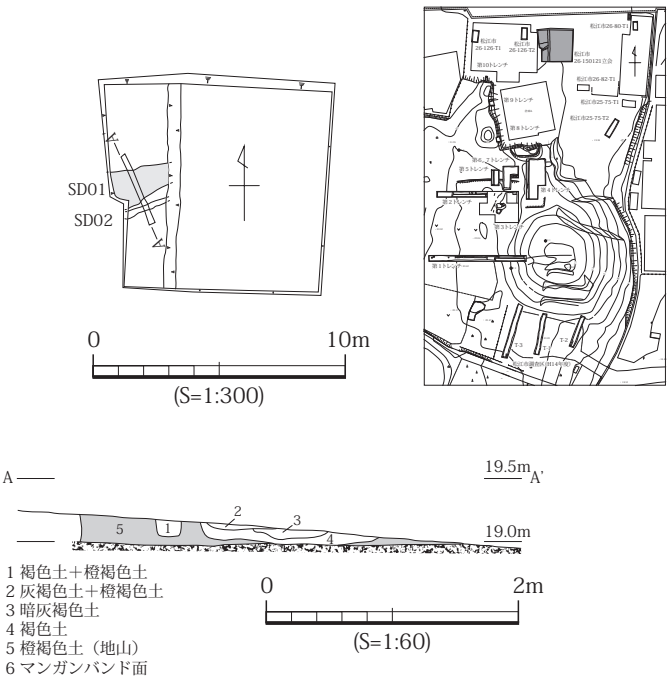
2. 平成 26 年度八重垣神社竹矢線拡幅に伴う立会調査

古墳北側を東西に走る県道八重垣神社竹矢線の拡幅事業に伴い、松江市教育委員会が平成 27 年 1 月 21 日に立会調査を行ったものである。調査箇所は倉庫 A の北東約 8 mの地点で、かつて当墳



第 71 図　平成 14 年度松江市教育委員会調査出土遺物実測図　（1 ～ 17：S=1/6　18：S=1/12）

の測量調査時の聞き取り調査で、前方部前端に想定されていた場所に近接する場所になる。8.5 m× 9 mの調査区内において、南西から北東に走る長さ 2.5 m、幅 1.4 mの溝（SD01）とそれに平行する長さ 1.7 m、幅 0.2 mの溝が検出された。SD01 は部分的に断ち割ったところ、深さ 12㎝で底面が確認された。底面の標高はほぼ 19.0 m前後で、マンガンバンドを底面としている。埋土は上層に灰褐色系の土、下層に褐色土が堆積していた。西側は調査区外に延びていくことが確認されたが、東側は攪乱の為に失われている。遺物は溝の精査中に埴輪小片が若干採取されている。



第 72 図　平成 26 年度松江市教育委員会立会調査区実測図

3. その他の松江市教育委員会による確認調査

この他にも松江市教育委員会によって前方部周辺を中心に多くの確認調査が行われている（松江市 26-126-T1、同 T2、松江市 26-80-T1、同 26-82-T1、松江市 25-75-T1、同 T2 など。第 41 図参照）が、そのほとんどは大規模な攪乱を蒙っており、古墳に伴う明確な遺構は確認されていない。

第 4 節　小結

1. 調査知見のまとめ

まず、4 か年にわたって調査してきて明らかになったことを簡単にまとめておく。

①墳形は T6・7 及び T3 で検出した墳端ラインから前方後円墳として復元される。

②墳丘は、下半部を地山削り出し、上半を盛土によって構築する。盛土は地山起源の黒色土（黒ボク層）と黄褐色土の混土層によって構成され、いわゆる土堤状盛土が認められる。

③段築は確認できないが、周辺の古墳の状況から二段築成の可能性がある。葺石は少なくとも下段（下半部）には存在しない。

④少なくとも、墳丘南側及び西側には断面箱堀状の大規模な周溝がめぐる。

⑤墳丘は南北に延びる丘陵の二つの瘤を後円部及び前方部として利用し、その間の谷は盛土で埋めている。

⑥各トレンチから須恵器子持壺、埴輪が出土し、両者を混在して樹立していたと思われる。

⑦須恵器子持壺は意宇地域に通有のＣ型（池淵 2004）で、魚見塚古墳とはタイプが異なる。埴輪には人物・動物などの形象埴輪が認められる。その他、皮袋形土器、装飾付器台などあまり例のない須恵器を墳丘祭祀に用いている。

2. 東淵寺古墳の墳丘形態について

ここでは測量図と各トレンチの所見から、当古墳の墳丘形態及び規模の検討を試みる。

先述のとおり、T3 及び T6・7 で検出した墳端ラインは緩やかに屈曲して北西へ延びており、くびれ部は鋭角をなさないことは明白である。この点から前方後方墳である可能性は否定される。また、T6・7 で検出した墳端ラインの北西延長には倉庫Ａを建てた際の残土が古墳状に隆起しているが、周辺地形測量図ではその西側に南東方向の谷が入り込んでいるようようにも観察され（第 40 図）、これが前方部西側の周溝痕跡である可能性もある。

その他、墳端が確認されているのは、T1 及び平成 14 年度松江市調査区（T-1 ～ T-3）である。T3 と T1 で検出された墳端から中心点Ｏを求め、これを半径として円を描くと、平成 14 松江市教育委員会調査区 T-1 で検出した墳端と概ね合致する（第 73 図・後円部復元ライン）。中心点Ｏは墳頂平坦面の中心からややずれているが、後円部の現況がかなり改変を受けていると理解すれば大きな問題はない。こうして復元された後円部径は 42 ｍ前後となる。ただ、この墳端ラインは平成 14 年度松江市調査区 T-3 で検出された周溝と合致しない。松江市 T-3 で検出された周溝は、後円部沿いをめぐらずに南西へ屈曲して途切れ、土橋状を呈している。この部分の解釈については第 6 章で再論するが、一種の別区であった可能性が高いと理解している。それ以外のトレンチでは大きな矛盾はないことから、当案を現段階における暫定的な後円部径と理解しておく。

問題は前方部の復元である。今回県教育委員会が調査したトレンチでは、くびれ部に相当する T6・7 の墳端ライン以外には前方部の形状に関するデータは得られていない。ただ、近年松江市が当古墳周辺で実施している確認調査において興味深いデータが得られている。平成 27 年 1 月 21 日に実施された立会調査がそれで（第 72 図）、現在の倉庫Ａの北東約 8 ｍの地点で南西から北東に走る幅 1.4 ｍの浅い溝（SD01）が検出されている。SD01 は長さ 2.5 ｍ程しか残っていなかったが、この溝の検出地点は本庄考古学研究室による聞き取り調査の際に、かつて前方部前端があっ

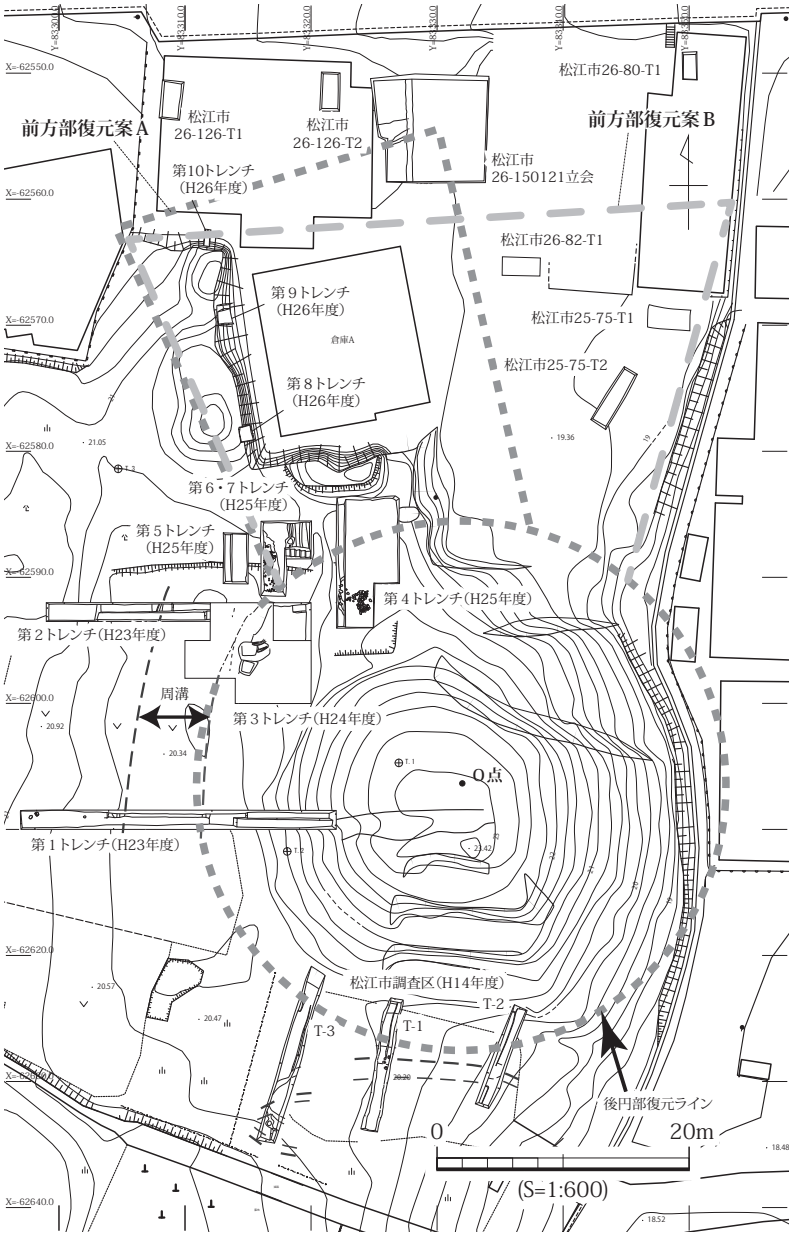
たとされる箇所に程近い場所である点が注目される。

SD01 の底面の標高は 19.0 ｍで、マンガンバンドを底面としている。各トレンチの周溝底面のレベルは、T3 や T6・7 で 18.5 ｍ～ 18.8 ｍ、T1 で 18.3 ｍ～ 18.5 ｍ、平成 14 松江市調査区で 18.7 ｍ前後で、他の調査区より若干高いが大きな矛盾はない。また、マンガンバンドを底面として設定している点も、T3 や T6・7 と整合的なあり方を示し、山代・大庭古墳群の周溝底面設定と通底する。

ただしあまりにも部分的な検出であり、遺物も埴輪がわずかに出土したのみで確証を欠く。また、これを仮に周溝底面とすると幅が狭すぎ、他のトレンチの所見と合致しない。ただ、これは周溝の大半が削平を受けて、たまたま最も深く掘り込まれていた箇所が検出されたとも解釈可能ではあり、現時点では前方部前端ラインの有力候補の一つとしてあげてよいだろう。

第 73 図は SD01 を前方部前端として、O 点から SD01 の延長ラインに直交する線を墳丘主軸に設定して前方部を復元したものである。これによると、全長は 70 ｍ前後に復元され、従来想定されていた規模よりやや大きくなる。これを仮に前方部復元案 A としておく。

もう一つの復元案は、古墳東側の低地と段丘の境界ラインが墳丘東側墳端を反映していると想定して復元した案で、仮に復元案 B としておく。B 案の根拠は、先に述べた東側の段丘端・水田部の形状（第 39 図）と、聞き取り調査にあった「前方部はかなり開く形態のものであった」との証言である。前方部前端は旧来の聞き取り証言による倉庫 A から 2 ｍ北の地点に措定しておく。B 案では全長約 67 ｍ、前方部幅 49 ｍとなり、前方部幅が後円部径を上回り、前方部がかなり発達したタイプとなる。このようなタイプの前方後円墳は後期の前方後円墳としては他地域では比較的よく見かけられるタイプであるが、出雲の大型前方後円墳で近似する事例は乏しい。また、それだけ大規模な前方部が本当に殆ど旧



第 73 図　東淵寺古墳墳丘復元想定図

状をとどめないほど破壊し尽くされてしまったのか、疑問が無いわけでもない。

現状ではどちらが有力かは明確にし難く、また全く別の前方部形態である可能性も当然十分にあり得ると思われるが、当面現段階の暫定案として両案を提示しておく。

3. 東淵寺古墳の築造時期について

各トレンチからは須恵器、埴輪が出土した。須恵器の大半は子持壺で、それに大甕が次ぐ。これらは他の山代・大庭古墳群と同様に墳丘祭祀に使用されたものであろう。その他の須恵器として、若干の蓋坏や高坏が出土している他、装飾付器台や皮袋形土器など、あまり類例のない製品が出土している点も注意され、当古墳の性格を考える上で重要である。

埴輪は大半が円筒埴輪であるが、形象埴輪らしい破片も若干出土した（第 45・66・71 図）。形象埴輪は平成 14 年度松江市教育委員会調査区では人物埴輪や動物埴輪が出土しており、後円部南西側に集中している点は注目される。円筒埴輪は 2 条 3 段と 3 条 4 段の二つのタイプがあり、底部調整を伴い川西Ⅴ期に属する（川西 1978）。内外面に円柱状工具によるタタキ・当具痕を残し、当地域では一般的な底部調整であるが、基底部が著しく長いプロポーションを呈している点や、逆位により突帯を貼り付けることによって突帯が下向きを呈する点、突帯貼付以前の割付沈線を有する点などは、意宇平野周辺の円筒埴輪とは異なった特徴を有する資料である [(2)]。

出土須恵器からみた当古墳の築造年代については第 6 章第 1 節で詳細な検討が行われているのでこれに譲るが、ここでは子持壺から当古墳の年代的位置づけについて若干の検討を試みる。

当古墳出土の子持壺は、①親壺口縁部が大きく開いて長く立ち上がり、端部に直立する狭い平坦面を持つ、②親壺は胴部がよく張り、子壺間に三角形・円形スカシを穿つ、③子壺は親壺に接合後外部から穿孔する柳浦ｂ手法を採用する、④脚部は上半部に長方形又は長三角形のスカシを穿つ、⑤子壺は 5 個配置構成をとる、といった特徴が認められる。こうした特徴は基本的には筆者分類のＣ型（意宇型）に属する（池淵 2004・2012）。

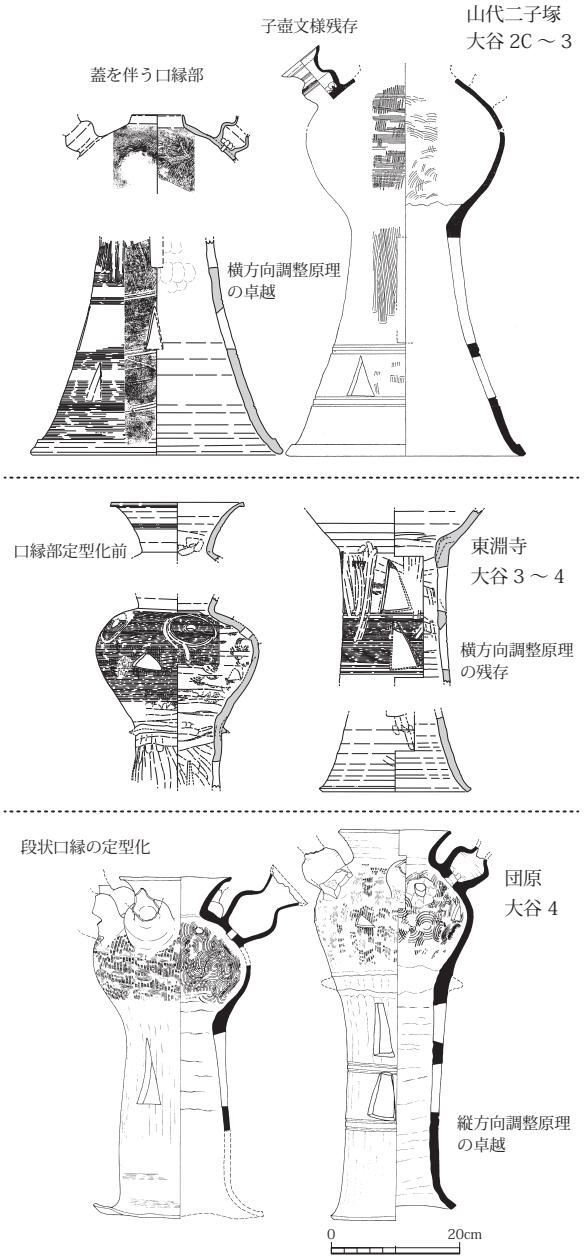
Ｃ型については、親壺スカシがないものや三角形のものを含み、子壺を 5 個以上配置するＣ 1 型、親壺スカシが円形に統一され、子壺を 4 個配置するＣ 2 型、子壺の退化が進行し親壺胴部の張りが弱く脚部に円形スカシを採用し、粗雑化・形骸化の進んだＣ 3 型に細分される。この型式分類案に関しては、親壺スカシの有無や口縁部分類が曖昧な点など、幾つか修正すべき点があるものの、基本的には大幅な変更は必要ないと考えている。東淵寺古墳出土資料は基本的にはＣ 1 型に属し、同タイプとしては山代二子塚、団原古墳、島田池 6 区 15 号横穴墓資料などがある。これらはいずれも意宇中枢部に位置し、製作地も大井窯跡であることから、各資料群の差異は年代差又は製作集団の違いに帰因するものと解釈できる。

表 2 はＣ型で比較的全容が判明している資料のうち、時期差をある程度反映していると思われる属性変化を整理したものである。各属性のうち、古相と考えられる属性を左、新しいと思われる属性を右側に示した [(3)]。

これをみるとその変化は漸移的であり、必ずしも明瞭な画期を形成しない。例えば親壺胴部は張りの強いタイプから弱いタイプへと変化するが、同一遺構で複数タイプが共存しており、これは突帯や脚部スカシについても同様である。とは言え、鐔状突帯や脚部円形スカシ、子壺単純口縁タイプが新しい段階で出現・増加する点は明白であり、Ｃ型の新古を分ける目安となると考えられる。Ｃ型新段階の細分については後日に期したい [(4)]。

表２　出雲型子持壺Ｃ型属性一覧

古墳・遺構名	須恵器（大谷 1994）	子持壺型式	親壺口縁部				親壺胴部形態			突帯				脚部スカシ			脚部調整		子壺形態		
			直口	外反	段状	その他	強	中	弱	無	三角	台形	鏨状	正三角	類長方	円	横主体	縦主体	複合文様有	複合文様無	単純
山代二子塚古墳	2c 期	C1	■				■			■				■	■		■		■	■	
岩汐窯跡 SX01 他		C1	■																■	■	
東淵寺古墳	3 ～ 4 期	C1		■	■		■			■	■				■	■	■	■		■	
中村 1 号墳	4 期古	C1			■			■		■					■			■		■	
団原古墳	4 期	C1		■	■		■	■		■		■			■		■	■		■	
島田池 6 区 15 号横穴墓	4 期	C1			■		■			■					■			■			
向山 1 号墳	4 期新	C2			■			■	■	■	■	■			■			■		■	■
島田池 1 区 3 号横穴墓	5 期	C2			■		■	■	■				■		■	■		■			■
菅田 19・20・22 号	5 期～	C2			■			■	■		■	■			■	■		■			■
山代方墳		C3			■	■		■			■		■		■	■	■	■			■
出西子丸古墳		C3			■				■				■					■		■	
的場横穴墓		C3							■						■			■			



第 74 図　出雲型子持壺Ｃ型比較図

東淵寺古墳資料の位置づけを考える際、鍵となる属性は親壺口縁部と脚部調整である。東淵寺古墳出土子持壺の親壺は、口縁部が長く大きく外反し、端部にわずかに平坦面をもつタイプ（外反口縁タイプ）と、段状口縁タイプが共伴する。従来Ｃ型の指標としていたのは段状口縁であるが、東淵寺古墳はそれがまだ定型化していない段階として位置付けることができる。この外反タイプ口縁は、魚見塚古墳や手間古墳のようなＢ型の口縁部と類似しており、両者の時期的近接性を示唆する。山代二子塚古墳資料の親壺口縁部は現在判明している資料は直口口縁タイプであり、外反口縁や段状口縁は知られていない。直口口縁タイプは基本的に蓋を伴うもので、Ｃ型に先行して存在するＡ型の影響のもと成立したと考えられ、従って東淵寺古墳資料より山代二子塚古墳資料が時期的に先行すると考えられる。これは山代二子塚古墳の子壺には施文する例が存在するのに対し、東淵寺古墳資料では存在しない点からも裏付けられる。

次に団原古墳資料との比較を試みる。団原古墳の親壺口縁部には外反口縁と段状口縁が共伴するが、口頸部の縮小傾向が看取され、東淵寺古墳より定型化した要素が窺える。さらに注目されるのは脚部外面調整である。Ｃ型の脚部外面調整は、基本的に粗いユビナデやタテハケな

ど、縦方向の調整を原則とするが、東淵寺古墳では脚部に横方向のカキメやヨコナデを全面的に施す資料が一定量存在する（第 74 図）。C 型で脚部横方向のカキメ調整を行う資料は当資料以外には基本的に山代二子塚資料しか存在しない。団原古墳資料にはわずかに部分的に脚部にヨコナデ・カキメを施す資料が存在するのみで、基本的には縦方向の調整にほぼ統一されている。

以上の点から、当古墳の子持壺は山代二子塚古墳資料と団原古墳資料との中間に位置付けられ、C 1 型でも比較的古い段階の資料と考えられる。この位置づけは他の須恵器や石室編年観とも矛盾しない。

〈註〉

（1）第 43 図は今岡利江氏の実測によるものであり、当該石造物に関する評価についても氏の御教示に基づく。

（2）当古墳の円筒埴輪の特徴及び位置づけについては田中大氏に全面的に御教示いただいた。

（3）各属性の分類基準は基本的に池淵 2004 を踏襲している。親壺口縁部のうち外反口縁としたタイプは前稿の単純口縁（長）としたタイプに相当する。

（4）ただし、私案では鐔状突帯や脚部円形スカシは既に C 2 型で一部出現している（島田池 I 区 3 号横穴墓など）。これは C 3 型は石室編年との整合性や子持壺全体の粗雑化（焼成、子壺接合法など）を指標としているためである。C 型新段階の細分案に関しては今後の課題としたい。

〈参考文献〉

池淵俊一 2004「出雲型子持壺の変遷とその背景」『考古論集』河瀬正利先生退官論文集刊行会
池淵俊一 2012「出雲の子持壺集成」『松江市史研究』3 号（松江市歴史叢書 5）松江市教育委員会
大谷晃二 1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第 11 集　島根考古学会
大谷晃二 1996「総括」『御崎山古墳の研究』島根県立八雲立つ風土記の丘
大谷晃二 2011「山陰」『講座日本の考古学 7 古墳時代 上』青木書店
勝部　昭 1993「正西道の検討」『出雲古代史研究』3 出雲古代史研究会
川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第 64 巻第 2 号
島根県教育委員会 2016『柳堀遺跡・茶臼遺跡・川原宮Ⅱ遺跡』
田中　大 2012「山陰地方における古墳時代後期円筒埴輪の様相」『中国四国前方後円墳研究会第 15 回研究集会後期埴輪の特質とその地域的展開』中国四国前方後円墳研究会
野津左馬之助 1924「島根縣内の古墳」『島根縣史』第 4 巻　島根縣
曳野律夫・松本岩雄・内田律雄・三宅博士 1989「松江市東淵寺古墳墳丘測量報告（上）」『島根考古学会誌』第 6 集　島根考古学会
柳浦俊一 1993「島根・鳥取県出土子持壺集成」『島根考古学会誌』第 10 集　島根考古学会
山本　清 1968「古墳文化」『新修島根県史 通史篇 1』島根県
山本　清 1971「山陰の須恵器」『山陰古墳文化の研究』山本清先生退官記念論集刊行会
渡辺貞幸 1986「山代・大庭古墳群と五・六世紀の出雲」『山陰考古学の諸問題 山本清先生喜寿記念論集』山本清先生喜寿記念論集刊行会
渡辺貞幸 2002「「大橋川の谷の古墳群」再考」『松江市手間古墳発掘調査報告・薬師山古墳出土遺物について』島根大学法文学部考古学研究室
渡辺貞幸・内田律雄・曳野律夫・松本岩雄 1991「出雲」『前方後円墳集成 中国・四国編』山川出版社

第 5 章　自然科学分析

第 1 節　魚見塚古墳発掘調査に先立つ高密度電気探査

渡辺正巳・岡田浩二（文化財調査コンサルタント株式会社）

はじめに

魚見塚古墳は島根県東部、松江市朝酌町矢田に位置し、大橋川を望む段丘上に立地する、6 世紀後半の前方後円墳である。当業務は、文化財調査コンサルタント株式会社が、島根県教育委員会からの委託を受け、石室の配置を想定する目的で実施・報告した調査報告書の概報である。

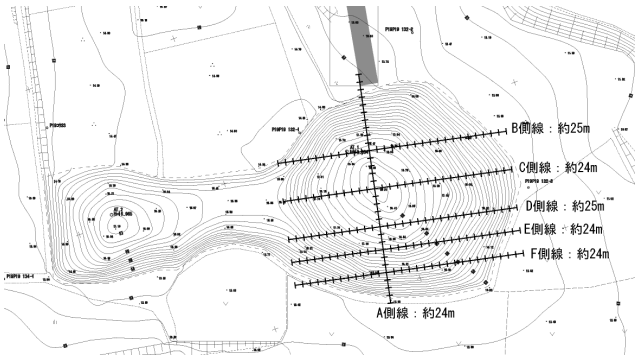
側線（測点）の配置

設定された側線の配置を第 75 図に示す。測線上に測点（電極）を 1m ピッチで配置した。羨道が南側に開口する可能性が高いとされることから、墳丘西側に側線を密に配置した。

測定方法

２極法で測定を行い、第 76 図のように電極を配置した。電極の設置間隔は 1m とし、１か所の電流電極に対し、電位の測定は 1m から 15 mまでの 15 通りに電極間隔を変化させて実施した。

解析には２次元解析を適用した。見かけ比抵抗疑似断面から地下構造の初期モデルを作成し、このモデル構造から理論的に計算される見かけ比抵抗値が、測定値に最も近くなるように、地下の比抵抗分布を最小二乗法により決定した（第 77 図）。



第 75 図　測線の配置

第 76 図　２極法の電極配置

測定結果

表３に側線ごとの測定データを示し、第 78 図に側線ごとの減衰曲線を示す。

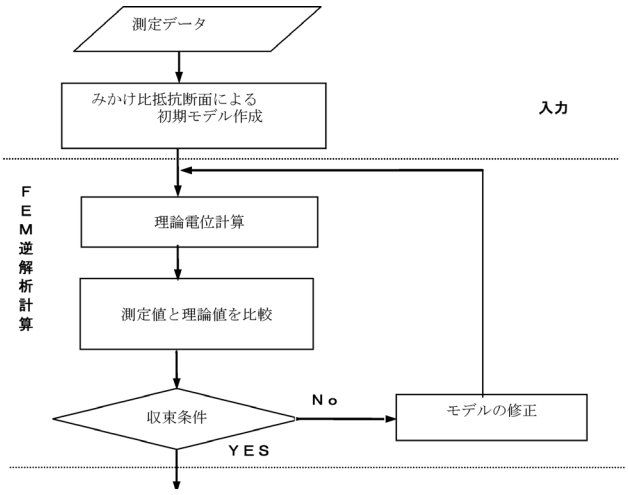
解析結果

1.　比抵抗断面図

第 79 図に、側線ごとの比抵抗断面図を示す。また、A 断面と B 断面にズレが生じていることから、それぞれに合わせて補正した図を、第 80 図に示す。

2. パネルダイアグラム

比抵抗値の高い部分を立体的に表現するために、第 81、82 図にパネルダイアグラ



第 77 図　２次元逆開析フロー

表３　測定データ（抵抗値Ω）

高密度電気探査測定データ(抵抗値Ω)A測線

電位電極間距離（m）＼測点番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
1.0	12.5110	8.9067	10.8930	23.8862	25.6989	18.4365	22.7731	22.0386	14.7214	22.6998	21.6005	18.0989	15.3829	15.9264	17.7946	23.0352	21.7146	18.2465	21.6222	24.4765	25.2836	34.3267	25.5768	26.1724	25.6656	13.3927	10.8471	12.2411	15.1938	15.1785
2.0	3.1183	3.1809	4.9322	8.3885	6.9804	6.9741	8.2438	6.5518	7.7035	8.4964	7.7587	7.2224	6.5156	6.7489	7.5898	8.5721	8.1408	8.1347	8.6804	9.3758	10.7428	10.0256	8.8166	9.1536	6.4414	4.3173	4.4342	5.4794	6.0973	
3.0	1.7272	2.1958	3.0983	3.7717	3.8916	4.0086	3.9772	4.2583	4.3829	4.7197	4.5302	4.2569	4.1562	4.4187	4.8838	5.1475	5.1174	4.9617	5.0488	5.6061	5.2828	5.0840	4.6814	3.7961	2.8926	2.5401	2.8181	3.2468		
4.0	1.3317	1.6759	2.0699	2.5766	2.6874	2.5453	2.9173	2.9337	3.0409	3.2554	3.1310	3.1103	3.1676	3.3631	3.5599	3.6923	3.5781	3.4054	3.5300	3.3566	3.2288	3.1613	2.4765	2.0410	1.8734	1.7980	1.9217			
5.0	1.0947	1.2884	1.6570	1.9794	1.9318	2.0403	2.2168	2.2680	2.3500	2.4546	2.4786	2.5389	2.6030	2.6791	2.7775	2.7764	2.6388	2.5750	2.3743	2.2742	2.2159	1.8760	1.4974	1.4096	1.3792	1.3077				
6.0	0.8932	1.0991	1.3855	1.5359	1.6225	1.6684	1.8173	1.8598	1.9039	2.0305	2.1028	2.1657	2.1776	2.1978	2.2060	2.1456	2.0803	1.8549	1.7261	1.6668	1.4326	1.2034	1.0823	1.0709	1.0306					
7.0	0.7859	0.9579	1.1495	1.3324	1.3818	1.4361	1.5490	1.5730	1.6447	1.7708	1.8431	1.8634	1.8449	1.8139	1.7747	1.7449	1.5626	1.4125	1.3250	1.1461	0.9678	0.8935	0.8439	0.8201						
8.0	0.7008	0.8245	1.0269	1.1665	1.2213	1.2651	1.3478	1.3938	1.4729	1.5812	1.6181	1.6094	1.5601	1.5011	1.4816	1.3526	1.2239	1.1178	0.9512	0.8052	0.7359	0.7071	0.6605							
9.0	0.6170	0.7544	0.9226	1.0500	1.0965	1.1299	1.2164	1.2698	1.3385	1.4085	1.4160	1.3825	1.3162	1.2802	1.1806	1.0826	0.9887	0.8283	0.6898	0.6244	0.5921	0.5592								
10.0	0.5684	0.6895	0.8457	0.9557	0.9931	1.0352	1.1206	1.1679	1.2103	1.2501	1.2320	1.1816	1.1356	1.0414	0.9634	0.8864	0.7457	0.6113	0.5438	0.5084	0.4759									
11.0	0.5255	0.6403	0.7802	0.8754	0.9187	0.9640	1.0399	1.0668	1.0870	1.0993	1.0646	1.0293	0.9373	0.8627	0.7999	0.6787	0.5582	0.4876	0.4476	0.4137										
12.0	0.4919	0.5967	0.7220	0.8151	0.8605	0.9010	0.9564	0.9655	0.9651	0.9578	0.9345	0.8578	0.7841	0.7235	0.6211	0.5135	0.4486	0.4043	0.3677											
13.0	0.4622	0.5595	0.6788	0.7683	0.8093	0.8346	0.8695	0.8649	0.8465	0.8453	0.7868	0.7239	0.6637	0.5680	0.4765	0.4164	0.3751	0.3360												
14.0	0.4343	0.5281	0.6419	0.7242	0.7524	0.7642	0.7816	0.7651	0.7525	0.7152	0.6676	0.6151	0.5255	0.4387	0.3885	0.3489	0.3123													
15.0	0.4119	0.5021	0.6078	0.6759	0.6920	0.6910	0.6950	0.6839	0.6419	0.6101	0.5707	0.4905	0.4091	0.3597	0.3277	0.2918														
16.0	0.3928	0.4773	0.5692	0.6234	0.6279	0.6174	0.6234	0.5869	0.5507	0.5234	0.4579	0.3840	0.3372	0.3045	0.2755															

高密度電気探査測定データ(抵抗値Ω)B測線

電位電極間距離（m）＼測点番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
1.0	11.4176	9.8709	8.7916	11.3005	10.2156	11.1943	12.6796	10.5742	15.4046	17.3102	23.2364	23.1736	21.8831	24.2411	25.3851	21.5192	25.1644	28.6840	21.2161	32.6475	28.8882	35.5200	37.7276	39.2840	41.2436	29.6807	28.2429	33.5148	17.4489	13.3309
2.0	4.3485	3.6925	3.9556	4.7714	4.7961	4.8784	4.3384	4.5355	5.6957	7.0508	8.2169	7.3963	8.4829	9.9096	9.3434	8.9341	11.3181	9.5545	9.8270	11.4502	11.7209	13.3284	14.1285	14.5023	10.8417	8.5837	8.9112	7.7418	5.3860	
3.0	2.2900	2.3286	2.5642	3.0587	3.0817	2.7048	2.6750	2.7925	3.6574	4.1011	4.2063	4.4271	5.1902	5.4614	5.3818	5.6594	5.7263	5.8518	5.5598	6.5323	6.5187	7.3530	7.5304	6.2734	4.9899	4.4708	4.0764	3.4050		
4.0	1.6025	1.6927	1.8831	2.1783	1.9601	1.8955	1.8973	2.1123	2.5757	2.6864	2.9936	3.2611	3.4287	3.6849	3.8974	3.5492	3.9941	3.8377	3.8038	4.2556	4.3214	4.6657	4.0977	3.4828	3.0930	2.6032	2.1980			
5.0	1.2274	1.3163	1.4333	1.4706	1.4344	1.4329	1.5191	1.6329	1.8877	2.1111	2.3919	2.4029	2.5733	2.8818	2.6948	2.7134	2.8546	2.8309	2.7844	3.0841	3.0708	2.9055	2.5542	2.3552	1.9856	1.5693				
6.0	0.9837	1.0400	1.0264	1.1208	1.1162	1.1825	1.2203	1.2812	1.5582	1.7732	1.8651	1.9238	2.1184	2.1289	2.1564	2.0813	2.2134	2.1792	2.1747	2.3306	2.1097	1.9602	1.8359	1.5994	1.2685					
7.0	0.7974	0.7758	0.8113	0.8957	0.9366	0.9736	0.9893	1.0966	1.3470	1.4413	1.5490	1.6422	1.6585	1.7639	1.7211	1.6943	1.7719	1.7672	1.7417	1.6962	1.5194	1.4746	1.3049	1.0646						
8.0	0.6124	0.6304	0.6669	0.7641	0.7819	0.8062	0.8624	0.9702	1.1248	1.2306	1.3502	1.3369	1.4158	1.4501	1.4381	1.4093	1.4770	1.4570	1.3404	1.2698	1.1878	1.0856	0.9000							
9.0	0.5119	0.5276	0.5639	0.6504	0.6663	0.7137	0.7751	0.8294	0.9807	1.0919	1.1268	1.1670	1.1943	1.2358	1.2224	1.2077	1.2401	1.1526	1.0355	1.0181	0.9035	0.7716								
10.0	0.4379	0.4655	0.4858	0.5550	0.5949	0.6469	0.6739	0.7359	0.8810	0.9297	0.9966	1.0037	1.0378	1.0669	1.0635	1.0411	1.0010	0.9156	0.8492	0.7896	0.6595									
11.0	0.3914	0.4089	0.4205	0.5005	0.5434	0.5693	0.6056	0.6700	0.7624	0.8329	0.8683	0.8850	0.9102	0.9397	0.9283	0.8600	0.8075	0.7617	0.6733	0.5873										
12.0	0.3482	0.3606	0.3825	0.4603	0.4824	0.5167	0.5560	0.5897	0.6896	0.7340	0.7726	0.7853	0.8104	0.8280	0.7761	0.7063	0.6779	0.6113	0.5106											
13.0	0.3084	0.3326	0.3699	0.4113	0.4421	0.4774	0.4950	0.5398	0.6136	0.6597	0.6909	0.7035	0.7225	0.6992	0.6436	0.6010	0.5532	0.4696												
14.0	0.2863	0.3111	0.3355	0.3786	0.4109	0.4292	0.4565	0.4861	0.5553	0.5948	0.6245	0.6308	0.6161	0.5845	0.5510	0.4927	0.4287													
15.0	0.2695	0.2848	0.3119	0.3539	0.3723	0.3981	0.4145	0.4441	0.5043	0.5413	0.5634	0.5424	0.5198	0.5036	0.4551	0.3865														
16.0	0.2486	0.2666	0.2936	0.3227	0.3470	0.3636	0.3810	0.4066	0.4615	0.4912	0.4878	0.4608	0.4509	0.4185	0.3596															

高密度電気探査測定データ(抵抗値Ω)C測線

電位電極間距離（m）＼測点番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
1.0	10.9721	17.9201	16.6384	11.8826	13.5753	14.7376	18.0089	17.4056	25.0957	25.7722	25.6831	22.5422	21.8519	18.7182	22.5131	18.7478	23.4853	18.8523	24.9889	17.9519	14.9072	20.2818	19.6184	23.6709	28.2753	27.9537	37.3262	24.5158	21.8404	23.3354
2.0	5.2720	6.6254	5.3636	4.9789	5.8411	6.5783	6.6848	7.1557	9.9961	10.3196	9.2374	8.7102	8.0450	8.3085	8.2171	8.2730	7.9180	7.6537	7.8350	7.5426	7.5082	7.7860	8.6204	10.7724	10.7632	10.7356	8.7346	7.2506	7.6552	
3.0	3.1495	3.2555	3.1260	3.1157	3.5852	3.4603	3.7496	4.2866	5.6312	5.2969	4.8750	4.6871	5.0277	4.7085	4.9983	4.5490	4.7900	4.5885	4.7497	4.8559	4.5137	4.9144	5.4652	5.9328	5.8857	4.6232	4.1236	3.8436		
4.0	1.9372	2.2032	2.1997	2.2460	2.2615	2.3171	2.6096	2.8916	3.3250	3.2330	3.0809	3.3056	3.3289	3.3531	3.2837	3.2977	3.4225	3.3517	3.5333	3.3376	3.3330	3.5942	3.6340	3.8507	3.2186	2.7477	2.5883			
5.0	1.4449	1.6529	1.6844	1.5782	1.6739	1.7813	1.9332	1.9609	2.2483	2.2577	2.3499	2.3948	2.5585	2.4788	2.5834	2.6046	2.6861	2.7032	2.6452	2.6245	2.6428	2.6476	2.6354	2.4141	2.1261	1.9028				
6.0	1.1410	1.3086	1.2406	1.2399	1.3594	1.4113	1.4260	1.4816	1.6931	1.8154	1.8202	1.9416	2.0104	2.0652	2.1483	2.1544	2.2468	2.1440	2.1661	2.1638	2.0721	2.0440	1.8211	1.7036	1.5501					
7.0	0.9344	0.9956	1.0031	1.0429	1.1187	1.1063	1.1491	1.2106	1.4223	1.4754	1.5400	1.6010	1.7302	1.7853	1.8331	1.8587	1.8414	1.8134	1.8379	1.7572	1.6680	1.4973	1.3559	1.2881						
8.0	0.7366	0.8211	0.8583	0.8807	0.9073	0.9300	0.9798	1.0632	1.2008	1.2848	1.3169	1.4138	1.5283	1.5618	1.6116	1.5663	1.5867	1.5718	1.5290	1.4498	1.2709	1.1525	1.0572							
9.0	0.6233	0.7136	0.7354	0.7323	0.7830	0.8156	0.8814	0.9343	1.0697	1.1271	1.1879	1.2735	1.3602	1.3959	1.3852	1.3749	1.3956	1.3357	1.2856	1.1331	1.0032	0.9199								
10.0	0.5499	0.6189	0.6213	0.6419	0.6974	0.7439	0.7897	0.8526	0.9565	1.0297	1.0843	1.1480	1.2276	1.2168	1.2287	1.2227	1.1988	1.1383	1.0218	0.9076	0.8109									
11.0	0.4845	0.5297	0.5506	0.5786	0.6425	0.6757	0.7295	0.7782	0.8837	0.9494	0.9895	1.0467	1.0818	1.0903	1.1026	1.0633	1.0319	0.9189	0.8284	0.7414										
12.0	0.4216	0.4737	0.4999	0.5366	0.5881	0.6291	0.6722	0.7272	0.8208	0.8732	0.9089	0.9314	0.9757	0.9849	0.9664	0.9235	0.8409	0.7525	0.6814											
13.0	0.3798	0.4320	0.4683	0.4996	0.5510	0.5841	0.6316	0.6816	0.7615	0.8076	0.8150	0.8467	0.8859	0.8713	0.8435	0.7598	0.6938	0.6239												
14.0	0.3504	0.4043	0.4333	0.4700	0.5138	0.5515	0.5939	0.6369	0.7068	0.7294	0.7443	0.7733	0.7863	0.7664	0.6996	0.6315	0.5780													
15.0	0.3306	0.3764	0.4086	0.4408	0.4868	0.5206	0.5578	0.5950	0.6419	0.6692	0.6830	0.6907	0.6952	0.6407	0.5852	0.5295														
16.0	0.3091	0.3563	0.3838	0.4193	0.4605	0.4908	0.5229	0.5441	0.5910	0.6161	0.6127	0.6137	0.5841	0.5386	0.4926															

高密度電気探査測定データ(抵抗値Ω)D測線

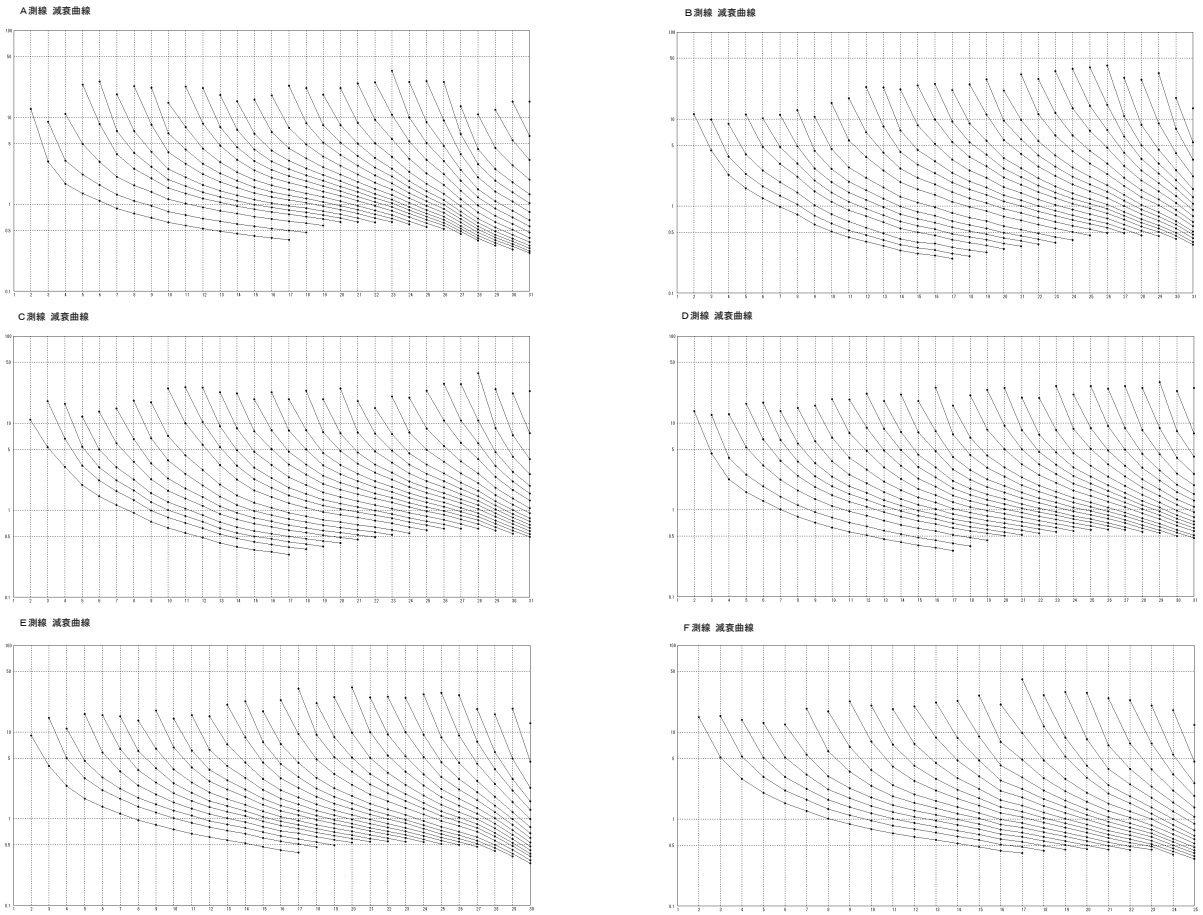
電位電極間距離（m）＼測点番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
1.0	9.0980	14.5219	10.8968	16.0636	15.6627	15.2552	13.5712	17.6097	14.3410	15.6669	15.1717	20.5959	22.5217	17.4059	23.3207	31.6340	21.4561	25.2714	32.7310	24.9438	25.5665	24.7651	27.1300	28.3404	26.7269	18.4517	16.0211	18.6724	12.6524	
2.0	4.0696	4.9754	4.6373	5.7891	6.3861	6.0483	6.4559	6.6472	6.1050	6.2113	7.1873	8.6411	7.6486	7.2618	9.4654	9.2848	8.7290	9.7745	9.9559	9.3863	9.9813	9.2534	8.6309	9.1309	7.7514	5.8916	4.9107	4.5510		
3.0	2.3936	2.9243	2.9829	3.5098	3.6203	3.8058	3.7101	3.9012	3.6774	4.0814	4.4454	4.4444	4.2800	4.4229	4.8462	5.1432	5.0848	5.0579	5.3717	5.2193	5.1154	4.5025	4.3956	4.3216	3.7297	2.8775	2.2770			
4.0	1.7097	2.1427	2.2288	2.4178	2.6157	2.5763	2.6058	2.7009	2.7740	2.9570	2.8748	2.9394	3.0081	2.9517	3.2690	3.4888	3.2870	3.3904	3.4877	3.2344	3.0330	2.8732	2.7258	2.5142	2.1095	1.5942				
5.0	1.3715	1.6998	1.7470	1.9127	1.9658	1.9831	1.9967	2.1687	2.1881	2.1473	2.1351	2.2610	2.2238	2.2419	2.4726	2.4969	2.4546	2.4732	2.4102	2.2025	2.1678	2.0232	1.7985	1.5607	1.2610					
6.0	1.1472	1.3713	1.4693	1.5369	1.6050	1.6104	1.6848	1.7869	1.7048	1.7038	1.7531	1.7873	1.7861	1.8223	1.9103	1.9720	1.9202	1.8564	1.7664	1.6969	1.6288	1.4221	1.1968	0.9909						
7.0	0.9655	1.1792	1.2403	1.3059	1.3550	1.4020	1.4432	1.4484	1.4138	1.4550	1.4586	1.4935	1.5074	1.4914	1.5798	1.6038	1.5155	1.4426	1.4198	1.3365	1.1899	0.9866	0.7999							
8.0	0.8517	1.0129	1.0849	1.1311	1.2038	1.2297	1.2120	1.2307	1.2384	1.2475	1.2571	1.2937	1.2718	1.2781	1.3290	1.3040	1.2215	1.1975	1.1476	1.0070	0.8486	0.6808								
9.0	0.7493	0.8936	0.9429	1.0155	1.0737	1.0532	1.0545	1.0952	1.0847	1.0981	1.1146	1.1199	1.1121	1.1054	1.1228	1.0750	1.0364	0.9894	0.8804	0.7337	0.6002									
10.0	0.6741	0.7974	0.8596	0.9151	0.9362	0.9293	0.9515	0.9714	0.9669	0.9855	0.9795	0.9934	0.9754	0.9428	0.9463	0.9235	0.8692	0.7726	0.6542	0.5295										
11.0	0.6103	0.7319	0.7830	0.8068	0.8350	0.8464	0.8548	0.8741	0.8767	0.8767	0.8796	0.8818	0.8428	0.8065	0.8248	0.7826	0.6883	0.5833	0.4793											
12.0	0.5654	0.6704	0.6977	0.7246	0.7655	0.7661	0.7755	0.7976	0.7867	0.7935	0.7876	0.7693	0.7280	0.7092	0.7073	0.6254	0.5266	0.4334												
13.0	0.5228	0.6038	0.6306	0.6772	0.6956	0.7028	0.7143	0.7197	0.7173	0.7143	0.6914	0.6645	0.6457	0.6139	0.5586	0.4832	0.3963													
14.0	0.4739	0.5498	0.5842	0.6200	0.6376	0.6482	0.6490	0.6583	0.6496	0.6321	0.6059	0.5910	0.5610	0.5011	0.4360	0.3665														
15.0	0.4352	0.5115	0.5376	0.5710	0.5903	0.5917	0.5967	0.5987	0.5781	0.5571	0.5420	0.5160	0.4612	0.3960	0.3336															
16.0	0.4074	0.4725	0.4970	0.5303	0.5404	0.5456	0.5448	0.5346	0.5117	0.5002	0.4754	0.4259	0.3671	0.3055																

高密度電気探査測定データ(抵抗値Ω)E測線

電位電極間距離（m）＼測点番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
1.0	9.0980	14.5219	10.8968	16.0636	15.6627	15.2552	13.5712	17.6097	14.3410	15.6669	15.1717	20.5959	22.5217	17.4059	23.3207	31.6340	21.4561	25.2714	32.7310	24.9438	25.5665	24.7651	27.1300	28.3404	26.7269	18.4517	16.0211	18.6724	12.6524	
2.0	4.0696	4.9754	4.6373	5.7891	6.3861	6.0483	6.4559	6.6472	6.1050	6.2113	7.1873	8.6411	7.6486	7.2618	9.4654	9.2848	8.7290	9.7745	9.9559	9.3863	9.9813	9.2534	8.6309	9.1309	7.7514	5.8916	4.9107	4.5510		
3.0	2.3936	2.9243	2.9829	3.5098	3.6203	3.8058	3.7101	3.9012	3.6774	4.0814	4.4454	4.4444	4.2800	4.4229	4.8462	5.1432	5.0848	5.0579	5.3717	5.2193	5.1154	4.5025	4.3956	4.3216	3.7297	2.8775	2.2770			
4.0	1.7097	2.1427	2.2288	2.4178	2.6157	2.5763	2.6058	2.7009	2.7740	2.9570	2.8748	2.9394	3.0081	2.9517	3.2690	3.4888	3.2870	3.3904	3.4877	3.2344	3.0330	2.8732	2.7258	2.5142	2.1095	1.5942				
5.0	1.3715	1.6998	1.7470	1.9127	1.9658	1.9831	1.9967	2.1687	2.1881	2.1473	2.1351	2.2610	2.2238	2.2419	2.4726	2.4969	2.4546	2.4732	2.4102	2.2025	2.1678	2.0232	1.7985	1.5607	1.2610					
6.0	1.1472	1.3713	1.4693	1.5369	1.6050	1.6104	1.6848	1.7869	1.7048	1.7038	1.7531	1.7873	1.7861	1.8223	1.9103	1.9720	1.9202	1.8564	1.7664	1.6969	1.6288	1.4221	1.1968	0.9909						
7.0	0.9655	1.1792	1.2403	1.3059	1.3550	1.4020	1.4432	1.4484	1.4138	1.4550	1.4586	1.4935	1.5074	1.4914	1.5798	1.6038	1.5155	1.4426	1.4198	1.3365	1.1899	0.9866	0.7999							
8.0	0.8517	1.0129	1.0849	1.1311	1.2038	1.2297	1.2120	1.2307	1.2384	1.2475	1.2571	1.2937	1.2718	1.2781	1.3290	1.3040	1.2215	1.1975	1.1476	1.0070	0.8486	0.6808								
9.0	0.7493	0.8936	0.9429	1.0155	1.0737	1.0532	1.0545	1.0952	1.0847	1.0981	1.1146	1.1199	1.1121	1.1054	1.1228	1.0750	1.0364	0.9894	0.8804	0.7337	0.6002									
10.0	0.6741	0.7974	0.8596	0.9151	0.9362	0.9293	0.9515	0.9714	0.9669	0.9855	0.9795	0.9934	0.9754	0.9428	0.9463	0.9235	0.8692	0.7726	0.6542	0.5295										
11.0	0.6103	0.7319	0.7830	0.8068	0.8350	0.8464	0.8548	0.8741	0.8767	0.8767	0.8796	0.8818	0.8428	0.8065	0.8248	0.7826	0.6883	0.5833	0.4793											
12.0	0.5654	0.6704	0.6977	0.7246	0.7655	0.7661	0.7755	0.7976	0.7867	0.7935	0.7876	0.7693	0.7280	0.7092	0.7073	0.6254	0.5266	0.4334												
13.0	0.5228	0.6038	0.6306	0.6772	0.6956	0.7028	0.7143	0.7197	0.7173	0.7143	0.6914	0.6645	0.6457	0.6139	0.5586	0.4832	0.3963													
14.0	0.4739	0.5498	0.5842	0.6200	0.6376	0.6482	0.6490	0.6583	0.6496	0.6321	0.6059	0.5910	0.5610	0.5011	0.4360	0.3665														
15.0	0.4352	0.5115	0.5376	0.5710	0.5903	0.5917	0.5967	0.5987	0.5781	0.5571	0.5420	0.5160	0.4612	0.3960	0.3336															
16.0	0.4074	0.4725	0.4970	0.5303	0.5404	0.5456	0.5448	0.5346	0.5117	0.5002	0.4754	0.4259	0.3671	0.3055																

高密度電気探査測定データ(抵抗値Ω)F測線

電位電極間距離（m）＼測点番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
1.0	14.9381	15.2569	13.8565	12.7782	12.2661	18.5715	17.3768	22.6087	20.2111	18.5180	19.8363	21.9304	22.7509	26.2868	20.7610	40.6776	26.4980	29.0185	28.2935	24.5011	23.3557	20.2718	17.9256	12.1504						
2.0	5.1357	5.2272	5.1047	5.1132	5.4917	6.0708	6.7907	7.8033	7.2138	7.3846	8.6083	8.5708	8.9050	7.7040	9.7994	11.5997	8.6776	8.3435	7.0587	7.4052	7.4363	5.5443	4.6074							
3.0	2.9075	3.0430	3.0428	3.2303	3.1212	3.5318	3.6781	4.0065	4.0953	4.4116	4.7328	4.7437	4.1262	4.8151	4.7520	5.2457	4.1133	3.7697	3.7803	3.7306	3.2883	2.5997								
4.0	2.0121	2.1250	2.2251	2.1991	2.2709	2.4133	2.4550	2.7466	2.8963	2.9554	3.1261	2.7949	3.0108	2.9561	2.9118	3.0036	2.4724	2.5137	2.3728	2.1330	1.8564									
5.0	1.5197	1.6670	1.6658	1.7369	1.7698	1.8372	1.9293	2.1432	2.1777	2.2212	2.1154	2.2210	2.1322	2.0992	2.0152	1.9655	1.8369	1.7525	1.5510	1.3602										
6.0	1.2420	1.3110	1.3763	1.4236	1.4501	1.5375	1.6161	1.7243	1.7398	1.6553	1.7671	1.6988	1.6370	1.5858	1.5045	1.5172	1.3647	1.2289	1.0646											
7.0	1.0113	1.1131	1.1655	1.2050	1.2603	1.3344	1.3685	1.4385	1.3718	1.4340	1.4184	1.3687	1.2989	1.2467	1.2251	1.1541	1.0033	0.8823												
8.0	0.8765	0.9616	1.0080	1.0659	1.1184	1.1590	1.1801	1.1753	1.2140	1.1929	1.1778	1.1210	1.0551	1.0411	1.0000	0.8613	0.7431													
9.0	0.7708	0.8454	0.9045	0.9580	0.9883	1.0178	0.9920	1.0564	1.0353	1.0157	0.9874	0.9312	0.8979	0.8544	0.7586	0.6435														
10.0	0.6858	0.7650	0.8196	0.8559	0.8790	0.8707	0.9019	0.9132	0.8951	0.8661	0.8323	0.8018	0.7632	0.6694	0.5875															
11.0	0.6263	0.6988	0.7388	0.7681	0.7623	0.7980	0.7913	0.7992	0.7734	0.7405	0.7239	0.6855	0.5969	0.5265																
12.0	0.5765	0.6343	0.6678	0.6719	0.7030	0.7062	0.7000	0.6970	0.6677	0.6496	0.6276	0.5458	0.4756																	
13.0	0.5265	0.5760	0.5892	0.6236	0.6264	0.6297	0.6201	0.6067	0.5912	0.5638	0.5025	0.4386																		
14.0	0.4822	0.5119	0.5483	0.5598	0.5620	0.5583	0.5446	0.5389	0.5178	0.4592	0.4077																			
15.0	0.4323	0.4782	0.4951	0.5053	0.5014	0.4930	0.4873	0.4830	0.4243	0.3762																				
16.0	0.4055	0.4341	0.4490	0.4533	0.4453	0.4429	0.4463	0.3916	0.3502																					



第 78 図　減衰曲線

ムを示す（A 側線、B 側線それぞれ補正を加えた断面図で作成。）。

石室の位置について

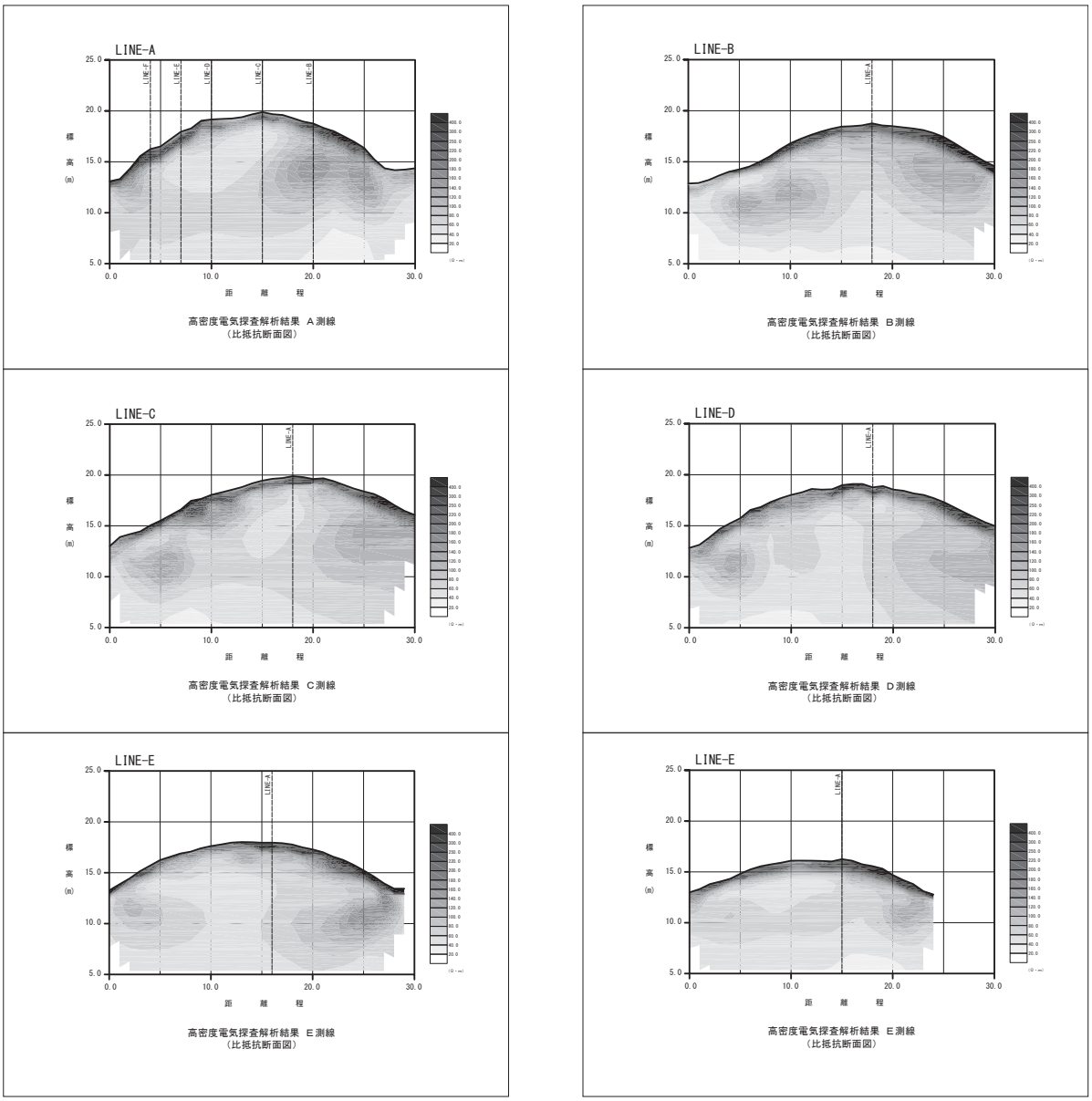
第 83 図に、比抵抗（垂直）断面図を基に作成した比抵抗（水平）断面図を示す（後円部の盛り上がりから、T.P.+14m の標高を設定し、A 側線、B 側線それぞれ補正を加えた断面図で作成。）。石室の状態を周囲が石で囲まれた空間と仮定すると、比抵抗断面では石室の部分は周囲に比べ高い抵抗値を示しているものと考えられる。①～⑤に羨道・石室の位置についての推定結果を示す（比抵抗断面図中に、→と②～⑤で示した。①は存在しなかったために、示していない。）。

①当初後円部の西側（A 側線 0.0 付近）に羨道の入り口があると推定されていたが、この部分には石室（中心）に続く高い比抵抗値を示す部分は存在しなかった。

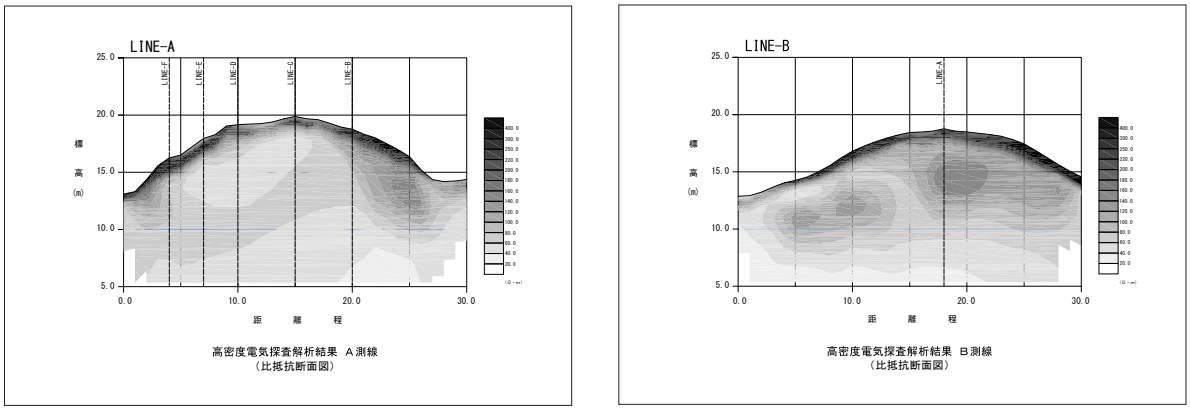
②東側（A 側線 25.0 付近）には比抵抗値の高い部分が認められ、中心に続く高い比抵抗値を示す部分が存在した。ただし、B 側線、C 側線ではこの部分が不明瞭であった。このため、A 側線に一致するように B 側線を補正した比抵抗（垂直）断面図が、第 80 図右、パネルダイヤグラムが第 82 図、比抵抗（水平）断面図が第 83 図右である。東側の側線は西側に比べ粗く設定されていたことから、比抵抗断面図では後円部北西の 1/4 で比抵抗が高く、羨道から石室のイメージとは異なっている。

③後円部の盛り上がりより低いものの、南北（B ～ F）側線の南側に高い部分が認められた。

④後円部の盛り上がりより低いものの、南北（E ～ F）側線の北側（前方部の付根付近）に高い部分が認められた。

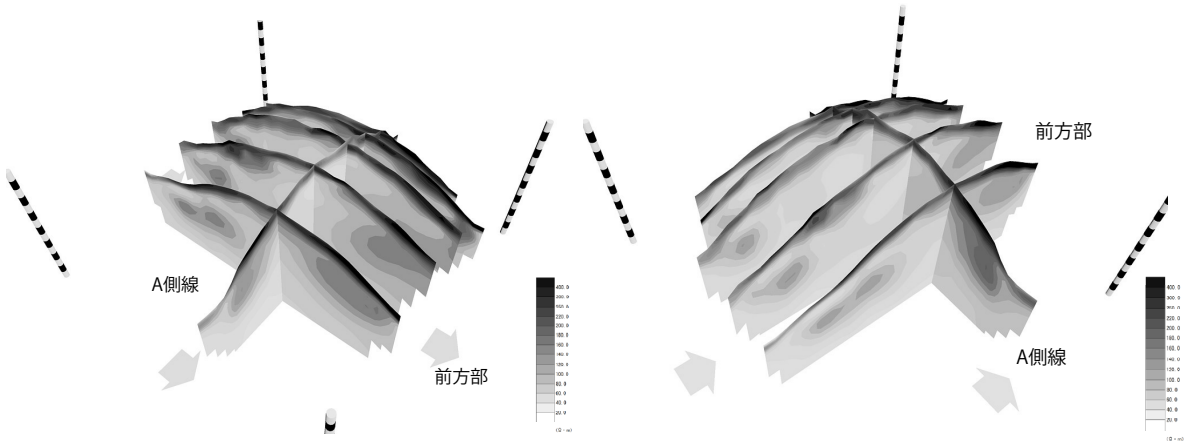


第 79 図　比抵抗（垂直）断面図

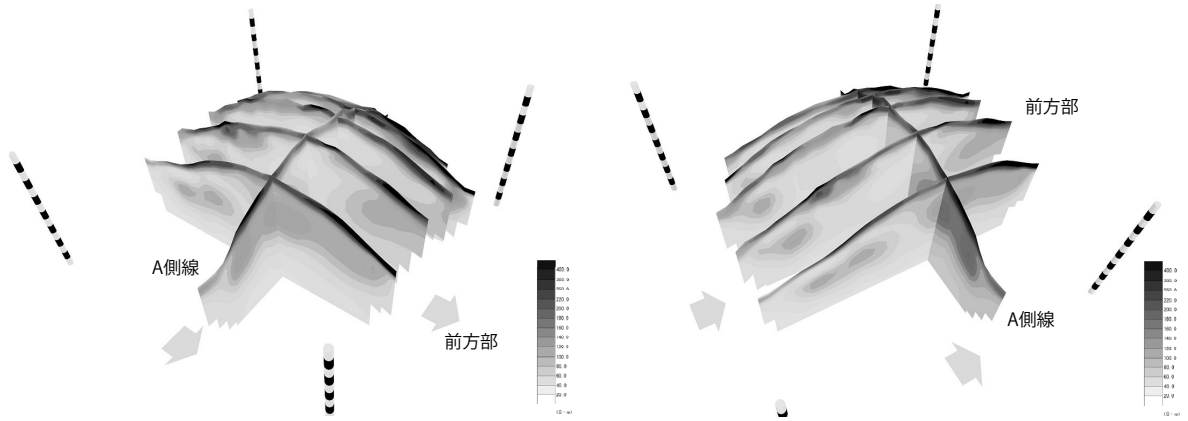


第 80 図　比抵抗（垂直）断面図（補正済）

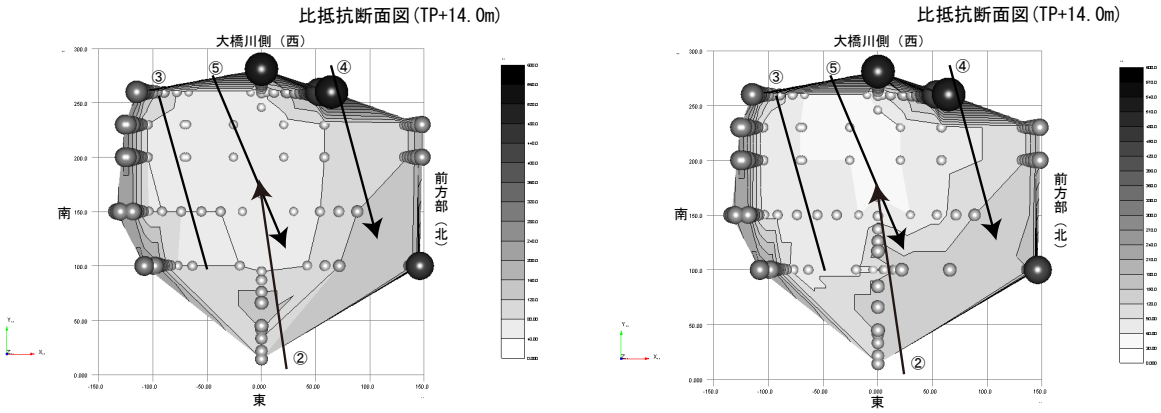
⑤上記の仮定について、石室、羨道をなしている石の風化状態や、石室、羨道の埋まり具合によって、周囲より比抵抗値が低いことも考えられる。この場合、当初予想通り西側やや南から中央に向かう低い比抵抗値を示す部分が羨道から石室を示している可能性が指摘できる。



第 81 図　パネルダイアグラム（A 測線補正）



第 82 図　パネルダイアグラム（B 測線補正）



第 83 図　比抵抗（水平）断面図　左；A 測線補正　右；B 測線補正　羨道・石室の推定軸線を→と②～⑤で示す。

まとめ

魚見塚古墳において、高密度電気探査によって古墳内部の羨道・石室の位置推定を試みた。測定結果を基に各種比抵抗断面図を作成し、羨道・石室を構成している石材に風化がなく、羨道・石室も埋まっていない場合の 3 ケース、羨道・石室を構成している石材の風化が激しく、羨道・石室が埋まっている場合の 1 ケースが、羨道・石室の位置として推定できた。

高密度電気探査は、ボーリング調査等と併用して地下構造を推定する手法である。今回は、石材や空洞の様子を仮説として設定し、高密度電気探査のみから地下構造（羨道・石室の位置）を推定した。このため、大きく異なる推定結果が得られた。

第6章　総括

第1節 出土須恵器からみた魚見塚古墳・東淵寺古墳の年代的位置づけ

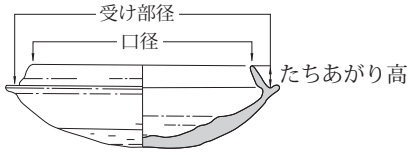
1. 研究史

須恵器は多くの古墳から出土することから、古墳の年代を決定する際に有力な指標とされる。魚見塚古墳・東淵寺古墳からも、各々一定量の須恵器が出土した。そこで、両古墳で出土した須恵器から、各古墳の年代的位置づけについて検討したい。

山陰の須恵器については、1960年に山本清が編年を提示して以来（山本1960）多くの研究がなされてきた(1)。とりわけ、古墳時代の須恵器研究としては、大谷晃二の提示した編年があげられる（大谷1994）。大谷は多くの器種について型式を整理し、それらの変遷を畿内との併行関係とともに示し、それまでの山陰の須恵器編年を細分した。現在、出雲における古墳時代研究では、その後の大谷自身による再検討を合わせ、この編年が使用されている（以下、大谷編年）。また、本報告書と関連する時期の須恵器編年については、その後の資料の増加を受けて坂本豊治が有蓋高坏・瓶・横瓶の編年を示している(2)（坂本2012。以下坂本分類）。特に、大谷編年で細分化されていた有蓋高坏を再整理して脚部形態とスカシから型式分類を示し、加えてかえり高（たちあがりの高さ）に着目してそれを細分した。これにより、大谷編年の蓋坏分類と併せて従来の出雲4期を前半と後半とに区分している。また、池淵俊一は出雲型子持壺の属性を詳細に分析し石棺式石室の編年も参照して、大谷編年と対応させた出雲型子持壺の編年を提示したが、ここでも出雲4期は新古に分けられている（池淵2004。以下、池淵分類）。このように古墳時代後期の編年は、大谷編年の提示以降の資料の増加や研究の進展に伴い細分化される傾向にある。魚見塚古墳・東淵寺古墳の年代を須恵器から位置付けるに際しても、現況を考慮する必要があろう。

2. 年代的位置づけの手法

大谷編年はその基軸を坏蓋の型式変化におき、坏蓋との共伴関係から各器種の組列の検証と編年を行っている。坏類は出土例が多いことから編年の指標として有効であるが、坏蓋の肩部・天井部調整のありかたや、特に口縁部形態といった指標は、観察者の判断にずれが生じる場合もある。そこで本稿では、坏蓋と同様に出土例が多く、坏蓋による編年を補完する材料となり得る坏身の変遷を追ってみたい。魚見塚古墳と東淵寺古墳が位置づけられる古墳時代後期の坏身の変遷は、口径の変化や底部ヘラケズリの粗雑化、立ち上がりが次第に低く内傾するという変化の方向で捉えられている(3)。したがって、坂本が有蓋高坏の分類で用いたかえり高を参考に、坏身の変遷を跡付ける。具体的には、たちあがりの高さ（たちあがり高）を数値化し、受け部径(4)の変化とたちあがり高の関係性を検討する。また、次第に内傾するとされるたちあがりの変化については、口径と受け部径から内傾率を算出し（受け部径／口径）、内傾率とたちあがりの高さの関係性も確認する。各部位の計測位置については第84図に示すとおりである(5)。その結果得られた坏身の変遷と大谷編年における坏蓋の変遷との関係を確認することで、たちあがり高の変化による坏身の変遷を検証したい。さらに、坏類と共伴する一括性の高い出土例から(6)各時期における器種構成を検討し、魚見塚古墳と東



第84図　各部位の計測位置

淵寺古墳で出土した須恵器の位置付けを試みたい。なお、対象とする地域は出雲東部（現在の松江市以東）である [7]。

3. たちあがり高からみた須恵器の変遷

受け部径とたちあがりの変化　前項で述べた方法で坏身の変遷を検討する際、有蓋高坏でも各部位の計測が可能である。そこでまず、有蓋高坏を坏と同様の方法で扱うことができるのか検証するため、一括性の高いと思われる資料の各部位の数値を一覧化したものが表 4 である [8]。これによると、伝宇牟加比売命御陵古墳例や上島古墳例のように明らかにたちあがり高に相違のある場合と、その他の例のように両者のたちあがり高がおおよそ一致している場合がある [9]。一括性のやや低い資料でも、有蓋高坏の型式変化などから考えて坏と高坏のたちあがり高がおおむね一致していると考えられる例も少なからずある [10] ため本稿では坏身と高坏の数値を一括して扱うが、高坏を位置づける際には出土状況などを十分考慮する必要がある [11]。

表 4　坏と高坏におけるたちあがり高の比較

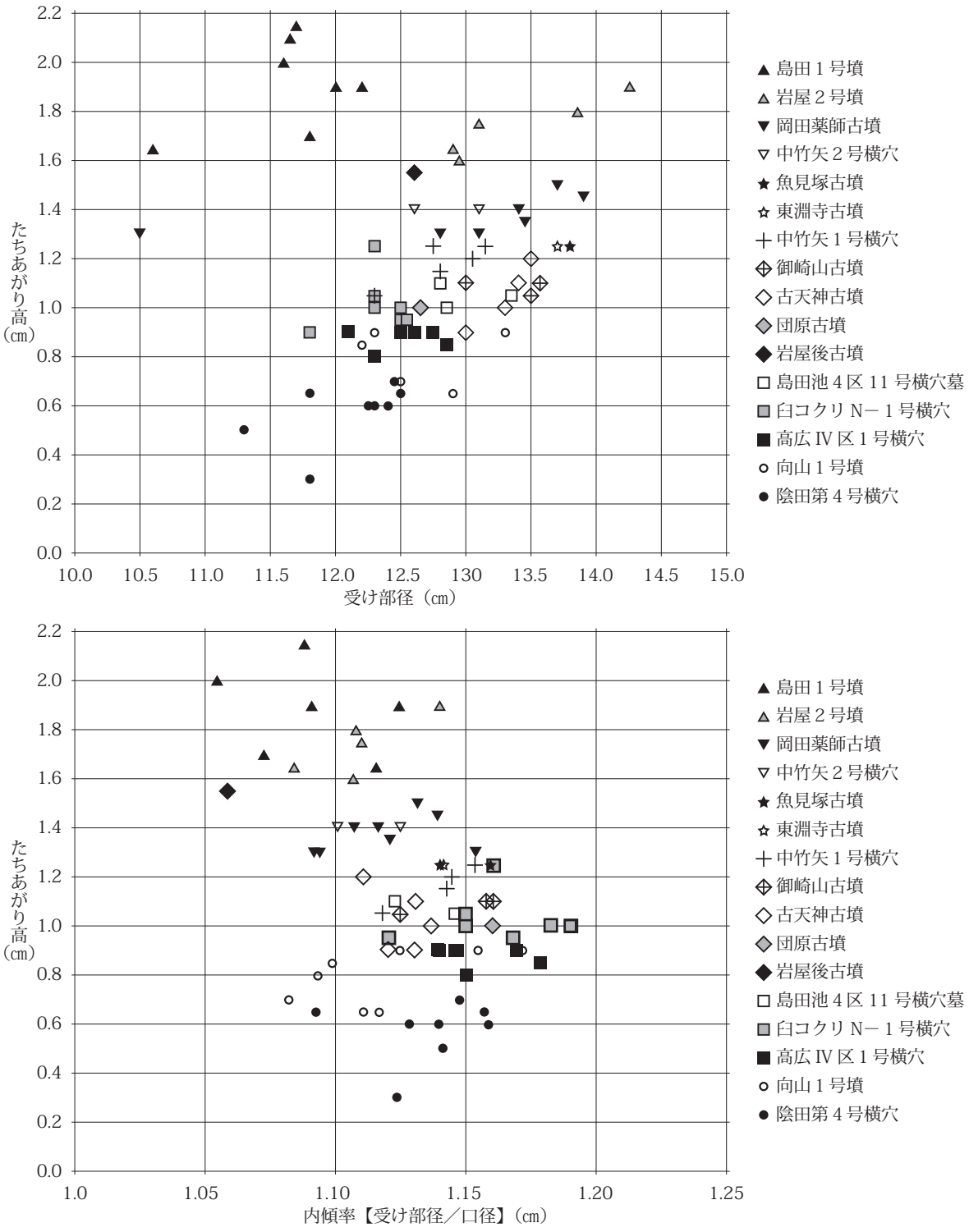
遺跡名	受け部径	口径	内傾率	たちあがり高	図版番号
伝宇牟加比売御陵古墳				1.85	第 15 図 12?
伝宇牟加比売御陵古墳	15.20	13.75	1.11	1.10	第 16 図 22
伝宇牟加比売御陵古墳	15.70	13.90	1.13	1.45	第 16 図 24
中竹矢 2 号墳	13.10	11.40	1.15	1.35	第 91 図 101
中竹矢 2 号墳	13.30	11.30	1.18	1.25	第 91 図 103
中竹矢 2 号墳		13.00	0.00		第 91 図 105
中竹矢 2 号墳	13.45	12.30	1.09	1.10	第 91 図 107
中竹矢 2 号墳	13.00	12.30	1.06	1.10	第 91 図 109
中竹矢 2 号墳	13.00	11.85	1.10	0.95	第 91 図 111
中竹矢 2 号墳	13.20	12.00	1.10	0.90	第 92 図 113
中竹矢 2 号墳	14.15			1.25	第 92 図 114
中竹矢 2 号墳				1.50	第 92 図 115
高広 I 区 1 号横穴	12.90	11.30	1.14	1.15	第 16 図 3
高広 I 区 1 号横穴	12.80	11.50	1.11	1.20	第 16 図 4
高広 I 区 1 号横穴	12.00	10.60	1.13	1.20	第 16 図 5
高広 I 区 1 号横穴	13.40	11.60	1.16	1.20	第 16 図 12
高広 I 区 1 号横穴	12.85	11.20	1.15	1.15	第 16 図 13
高広 I 区 1 号横穴	12.80	11.40	1.12	1.05	第 16 図 14
高広 I 区 1 号横穴	13.00	11.50	1.13	1.15	第 16 図 17
高広 I 区 1 号横穴	12.50	11.10	1.13	1.45	第 16 図 18
高広 I 区 1 号横穴	13.15	11.40	1.15	1.20	第 16 図 19
高広 I 区 1 号横穴	13.10	12.30	1.07	1.20	第 16 図 21
高広 I 区 1 号横穴	12.70	10.80	1.18	1.10	第 16 図 27
高広 I 区 1 号横穴	13.35	11.40	1.17	1.40	第 16 図 28
島田池 4 区 11 号横穴墓	12.80	11.40	1.12	1.10	第 136 図 2
島田池 4 区 11 号横穴墓	12.85	10.80	1.19	1.00	第 136 図 4
島田池 4 区 11 号横穴墓	14.40	11.65	1.24	1.05	第 136 図 8
上島古墳	13.30	11.50	1.16	1.30	第 4 図 39
上島古墳	14.00	12.45	1.12	1.25	第 4 図 41
上島古墳	14.40	11.85	1.22	1.50	第 4 図 43
上島古墳	14.30	12.70	1.13	1.70	第 14 図 2
上島古墳	12.60	10.95	1.15	1.45	第 14 図 4
上島古墳	13.80	11.85	1.16	1.70	第 14 図 6
上島古墳	14.40	12.75	1.13	1.50	第 14 図 12
上島古墳	13.50	11.75	1.15	1.45	第 14 図 13
上島古墳	13.10	11.55	1.13	1.50	第 14 図 16
築山 2 号墳周溝				1.25	第 23 図 1
築山 2 号墳周溝	12.85	11.20	1.15	1.05	第 23 図 2
築山 2 号墳周溝	12.90	11.30	1.14	1.25	第 23 図 3
築山 2 号墳周溝	12.80	11.00	1.16	1.25	第 23 図 4
築山 2 号墳周溝	12.60	11.10	1.14	1.20	第 23 図 5
築山 2 号墳周溝	12.40	10.85	1.14	1.10	第 23 図 6
築山 2 号墳周溝	12.55	10.90	1.15	1.15	第 23 図 7
築山 2 号墳周溝	12.80	11.50	1.11	0.95	第 23 図 8
築山 2 号墳周溝	12.80	11.10	1.15	1.20	第 23 図 9
築山 2 号墳周溝	12.60	11.10	1.14	1.20	第 23 図 10
築山 2 号墳周溝	12.60	11.00	1.15	1.05	第 23 図 11
築山 2 号墳周溝	12.45	11.00	1.13	1.10	第 23 図 12
築山 2 号墳周溝	12.50	11.20	1.12	1.20	第 23 図 27
築山 2 号墳周溝	13.20	11.50	1.15	1.25	第 23 図 29
築山 2 号墳周溝	13.50	11.40	1.18	1.25	第 23 図 37
築山 2 号墳周溝	13.20	12.30	1.07	1.05	第 23 図 38
築山 2 号墳周溝	13.29	11.90	1.12	1.25	第 23 図 39
築山 2 号墳周溝	13.20	9.60	1.38	1.15	第 23 図 40
築山 2 号墳周溝	13.95	11.55	1.21	1.35	第 23 図 41
築山 2 号墳周溝	13.80	11.25	1.23	1.20	第 23 図 42
築山 2 号墳周溝	13.80	11.55	1.19	1.25	第 23 図 43

※ 単位 ：cm、　　高坏

さて、第 85 図（上）を見ると、出雲 1 期に比定されている島田 1 号墳のたちあがり高が最も高く、受け部径はおよそ 11.5 ～ 12.5cmである。次にたちあがり高が高いのは岩屋 2 号墳で、受け部径は 12.9 ～ 14.3cmと大きくなっており、他はたちあがり高が低くなるにつれ受け部径が小さくなる左下がりの分布を示している。第 85 図（下）では、やや幅はあるが、たちあがり高が低くなるに従い内傾率は高くなる [12]。第 85 図で示されたたちあがりの変化は従来の坏身の口径変化と合致しており、坏身の時間的変化を反映していると考えられる。

たちあがり高からみた須恵器の変遷　そこで、たちあがり高の変化から坏身の組列を示し、坏蓋と数種の他器種を坏身との共伴関係から並べたものが第 86・87 図である [13]。坏身の組列を検証するため、坏蓋による大谷編年との対照を試みたい。

たちあがり高が 2.2 ～ 1.7cmと最も高い島田 1 号墳例は、 1 点を除き坏身口縁端部に段を有し、天井部や底部は広く丁寧にケズリがほどこされる。蓋の肩部には明瞭な稜、口縁端部には段を有する。坏身の内傾率は幅があるものの 1.1 未満が多くまっすぐたちあがり、これに対応するように坏蓋の肩部から口縁部は稜を境に下方へ強く屈曲する。次にたちあがり高が 1.9 ～ 1.6cmと高い伝宇牟加比売命御陵古墳や岩屋 2 号墳の坏身口縁端部には段がないが、坏蓋の口縁端部には段が認められる。肩部から口縁部



第 85 図　たちあがり高と受け部径・内傾率の変化

にかけては稜を境に下へ屈曲するが、その屈曲具合は島田１号墳よりもややゆるい。天井部や底部には丁寧なヘラケズリが施される。たちあがり高が 1.5 ～ 1.3㎝を示す坏身には大谷編年 A3 型の坏蓋が伴う。内傾率はさらに高くなるが 1.1 ～ 1.15 におさまり、蓋はこれに対応して肩部から口縁部にかけて稜が明瞭でなくなり、屈曲のゆるいやや丸みのある器形になる。ヘラケズリは丁寧なものが多いが、ケズリ残しがわずかに確認できるやや粗いケズリの資料もある。さらにたちあがり高が 1.3 ～ 1.1㎝程度に低くなると、対応する坏蓋は端部β類をもつ大谷編年 A4 型が散見されるようになる。内傾率は幅があり明確ではないが 1.15 前後。そして、たちあがり高が 1.1 ～ 0.8㎝

の坏身には端部分類βあるいはγ２類の蓋が伴う。蓋の端部を詳細に観察すると、強いナデによる凹線状を呈する場合などもあり、β類にもγ類にも分類しづらい資料もあるが、前段階には確認されたα類はみられなくなる。この段階では内傾率が 1.15 ～ 1.19 程度を示すものが多く、蓋は肩部に稜のない形骸化した沈線が表現され、身の内傾率に対応して口縁部へ向けて開いた器形となる。天井部や底部にはケズリ残しが認められる粗いケズリが施される。たちあがり高が 0.7㎝ともなると、坏身受け部径・蓋の口径は 12㎝前後と小さくなりヘラケズリは省略される。

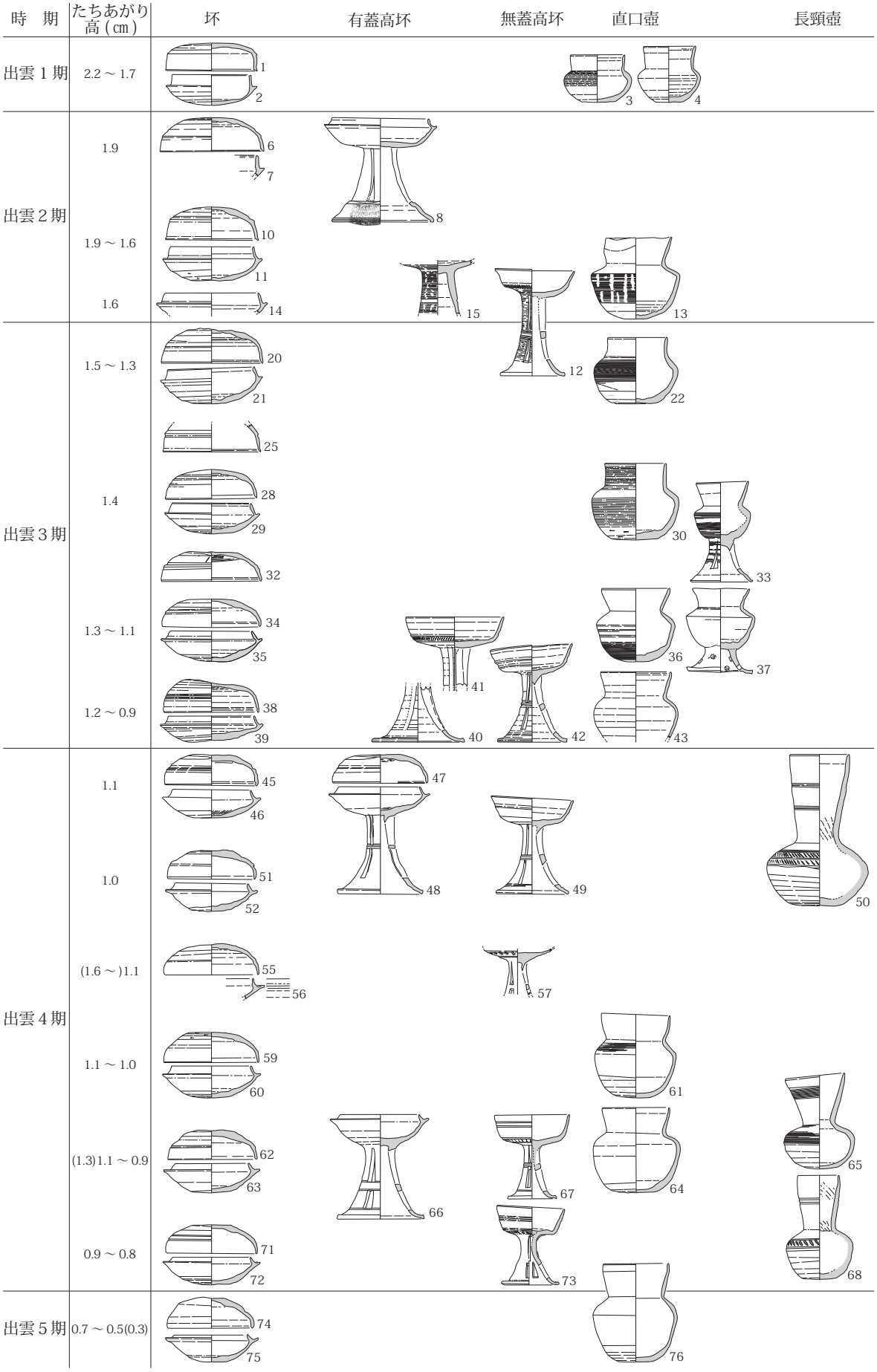
以上のように、たちあがり高を指標とした坏身の変遷は、大谷編年の坏蓋の変遷と対照させても先後関係に齟齬をきたすものではない。たちあがり高は、幅をもちつつも、ある程度編年の指標となることを示しているといえよう。そこで次に、魚見塚古墳と東淵寺古墳から出土した須恵器について坏類の変遷との併行関係を確認し、両古墳の相対的な位置づけをおこないたい。

4. 魚見塚古墳出土須恵器の年代的位置付け

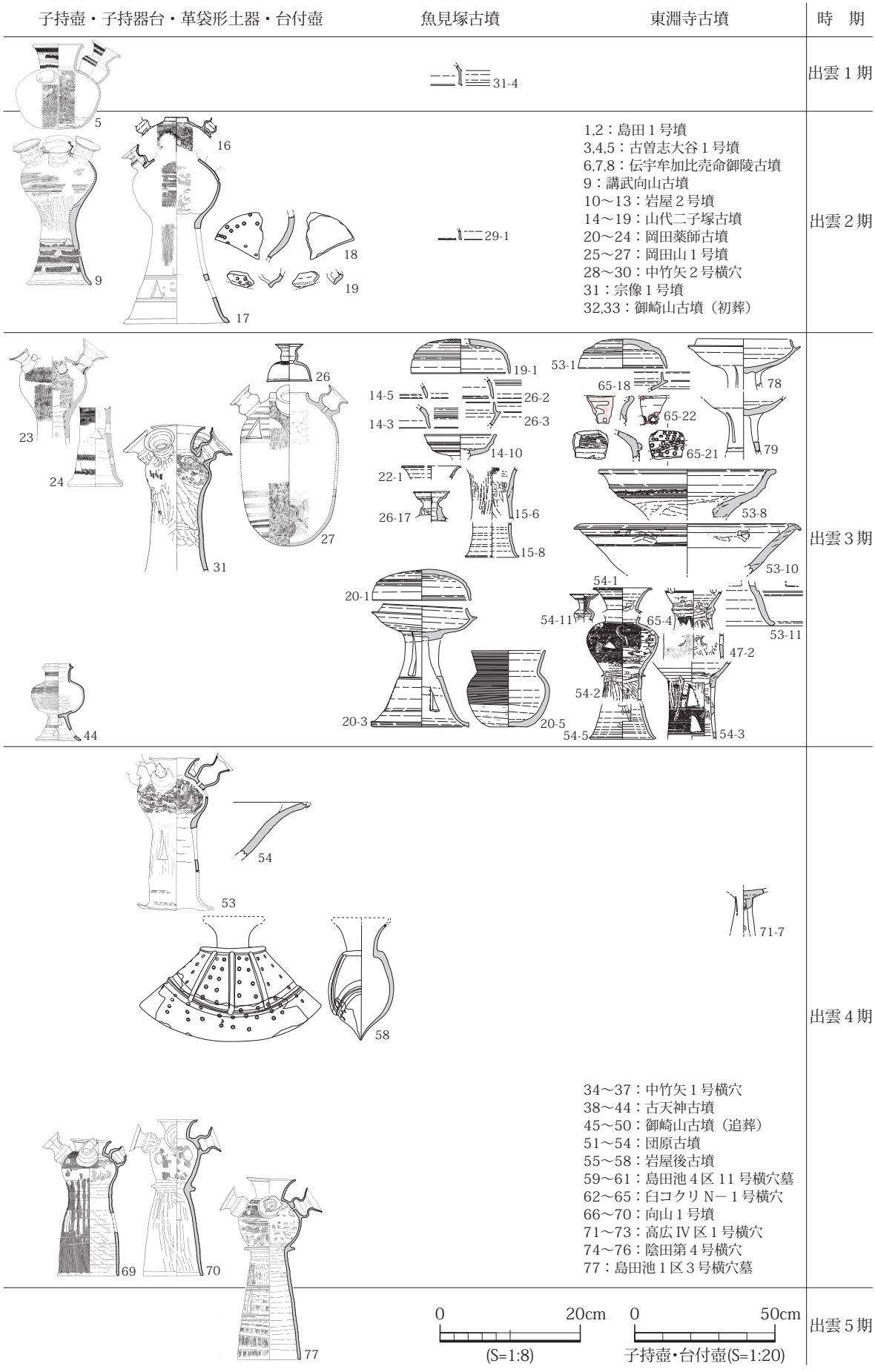
魚見塚古墳出土須恵器の概要　墳丘部分を主としたトレンチ調査であり、須恵器はその多くが明確な出土コンテクストを欠く資料である。そのなかで年代の手がかりとなる資料としては、SD02 から出土した蓋を伴う有蓋高坏各２点と直口壺１点がある。他に、複数の坏類の破片と、多くの出雲型子持壺片も出土した。また島根大学には、魚見塚古墳で表採された須恵器の甕と出雲型子持壺が所蔵されている（島根大学考古学研究会 1995）。

魚見塚古墳出土須恵器の位置づけ　SD02 で出土した有蓋高坏（第 20 図３・４）は坂本分類のⅢb 類にあたり、かえり高は２点ともに 1.3㎝を測る。脚部は長脚で２段３方三角形スカシを千鳥に配す。これに類する例は、宮内１号横穴出土例、高広Ⅰ区１号横穴出土例、中竹矢２号墳出土例がある。中竹矢２号墳出土遺物は出土状況から時期幅が短いものとされており、坏類のたちあがり高には２種あるが高い方で 1.3㎝を測る。宮内１号横穴については出土須恵器に時期幅があり、高広Ⅰ区１号横穴出土須恵器にも時期差がある可能性があるが、共伴する坏身のたちあがりは高いもので 1.2 ～ 1.5㎝である。高野２号横穴例も魚見塚例と似るが、たちあがり高が 1.5㎝とやや高く共伴する坏類からも魚見塚に先行する可能性がある。有蓋高坏とセットで出土した蓋（第 20 図１・２）は天井部のケズリが丁寧で肩部に稜はなく２条の沈線がめぐる。端部はβ類。セットの有蓋高坏のたちあがり高が 1.3㎝とやや高い様相であるため、蓋 A4 型の出現期に位置づけられよう。

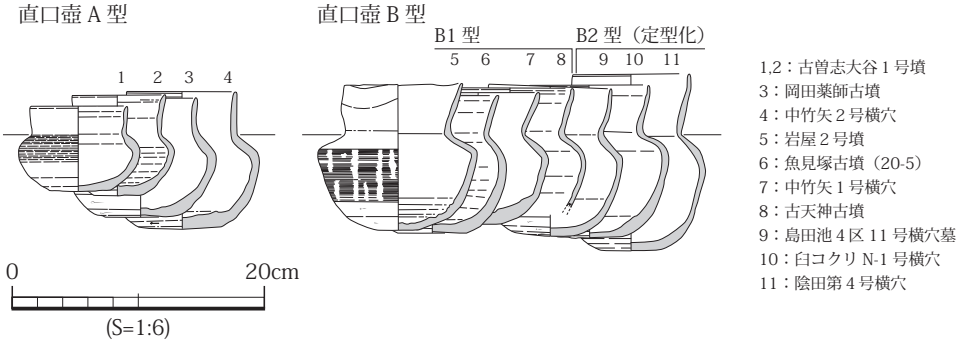
SD02 からは直口壺も出土した（第 20 図５）。短頸壺と呼称するには口頸部が長く、直口壺と呼称するには口頸部が外反している。この直口壺の位置づけを探るため、坏類と共伴する事例を第 86 図に並べた。さらに、器形の変化を確認するため、肩部を基準に横に並べたのが第 88 図である。小型の直口壺は出雲１期の古曽志大谷１号墳から認められるが、多くはやや大型の新しい段階の資料である。口頸部が直口するタイプと、やや外反するタイプとに分けられ、前者を A 型、後者を B 型とした。A 型は古曽志大谷１号墳出土例（第 88 図２）を祖型としているようだが、時期に隔たりがあり同列に位置づけられるかは不明確である。次第に口頸部が伸張し体部が大きくなっていく可能性はあるが、出土例が少なく変遷を明確にすることは困難である。B 型は口頸部が外反し肩部がはるものである。口頸部が伸張するとともに次第に外反がゆるくなり、口頸部上半がわずかに内湾する形で直口に近くなるようである。名実共に直口壺と呼べる段階は第 88 図９であろう。共伴する坏類の径は 13㎝をきり、蓋は肩部に稜がなく口縁部へ向かって開く器形で、坏身のたりあがり高は 1.1 ～ 1.0㎝。同じ 1.1㎝のたちあがり高をもつ御崎山古墳追葬段階には直口する頸部をも



第 86 図　出雲東部における須恵器の変遷と魚見塚古墳・東淵寺古墳（１）



第 87 図　出雲東部における須恵器の変遷と魚見塚古墳・東淵寺古墳（2）



第 88 図　直口壺の分類と変遷

つ長頸壺がある。たちあがり高 1.1㎝以下の坏類と直口系の壺は共伴する例が多く、おそらくこの時期に B 型が定型化し、長頸壺が登場すると思われる。この定型化以降の B 型を B2 型、これに先行するものを B1 型とする。魚見塚古墳で出土した直口壺は、定型化以前の B1 型に属する。

SD02 出土以外の須恵器を見ると、坏蓋はほとんどが小片であるがいくつかの型式が認められる。最も古い段階のものは第 31 図４で、肩部に明瞭な稜をもちやや外面に反った端部に沈線がめぐるα１類。第 29 図１は沈線がより端部へ寄るα２類。これらは各１点ずつの単発的な出土であり古墳築造以前のものであろう。一方、α３類やα４類の坏蓋端部片が一定量出土しており（第 14 図４～６、第 19 図１・２、第 26 図２）、古墳の築造年代に関わるものと思われる。たちあがりの残る坏身（第 26 図３）では、たちあがり高は 1.4㎝を測る。SD02 から出土した有蓋高坏とその蓋は、たちあがり高や蓋の特徴から、これら墳丘部分のトレンチで出土した坏蓋片よりやや後出するものである。SD02 は墳丘に立て並べられた子持壺が転落する以前に短期間で埋め戻されたと理解されるものであるが、築造時の坏類とは若干の時間差があることになる。

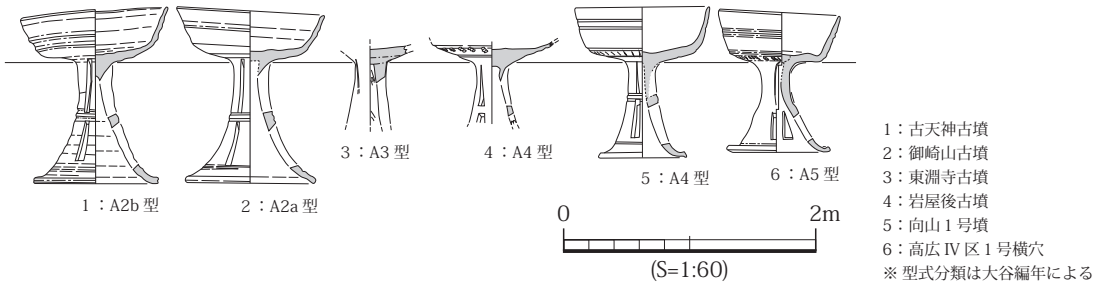
その他、多くのトレンチで表土や流土から出雲型子持壺が出土した。子持壺は島根大学所蔵資料を含め、池淵分類 B 型のみの出土である。同じ B 型の子持壺を出土した米子市宗像１号墳は築造時期が TK43 とされ追葬も確認されるが、初葬に伴うと考えられる坏蓋は口縁端部に段を有する A3a 型、坏身のたちあがり高は高いもので 1.4㎝を測る。

魚見塚古墳から出土した須恵器は、以上のことから、大きく新古に分けられ、古相は第 86・87 図に示されるかえり高 1.5 ～ 1.3㎝の坏と同時期に、新相はかえり高 1.3 ～ 1.1㎝の坏と同時期に位置づけられよう。

5. 東淵寺古墳出土須恵器の年代的位置付け

東淵寺古墳出土須恵器の概要　墳丘部分におけるトレンチ調査であるが、多くの須恵器が出土した。編年に有効な資料としては、わずかだが坏類がある。他の器種では周溝から多くの出雲型子持壺が、同じく周溝や墳裾付近の SK04 から高坏形器台が、表土からではあるが皮袋形土器が出土した。松江市教育委員会による調査では、出雲型子持壺の他、高坏の脚部片が出土している。本庄考古学研究室らにより報告された表採遺物のなかにも蓋、有蓋高坏、出雲型子持壺、甕がある（曳野ほか 1989）。他に、山内英樹により須恵器大甕も採集されている。

東淵寺古墳出土須恵器の位置づけ　出土した坏類で年代の手がかりとなるものには坏蓋と坏身片がある。坏蓋（第 53 図１）の端部はα４類であるが、部分的には端部が段をなしておらずβ類に近い。口径も 12.6㎝と小さく、天井部に凹凸が多くケズリも粗い。魚見塚古墳で出土した坏類より新しい要素である。坏身は表土出土の破片であるが（第 65 図 18）、たちあがり高が 1.3㎝とやや高い



第 89 図　無蓋高坏 A 型の変遷

薄手のものである。表採資料の有蓋高坏（第 87 図 78）は坂本分類のⅢ b 類で、受け部径 13.7㎝、たちあがり高 1.3㎝と坏部は魚見塚古墳 SD02 出土例と似る。ただ、脚部片（第 87 図 79）ではスカシの長さが魚見塚古墳のものより短いことから、脚部がやや短い可能性がある。坂本分類の有蓋高坏Ⅲ b 類は 3 期よりも 4 期前半の脚部が短くなっており、やや新しい要素である可能性がある。ただし、 4 期後半のⅢ b 類の資料に脚部が長いものがあるようで、断定はできない。

松江市教育委員会の調査で無蓋高坏が出土しているが（第 71 図 7）、これは脚部が非常に細く、スカシも上半は貫通せず下半がかろうじて貫通する切れ込み状のものである。大谷編年の長脚無蓋高坏 A 型に属するが、その細分型式のいずれにあたるか検討するため、坏類により変遷をたどることができる無蓋高坏 A 型を、坏底部を基準に横に並べて図示した（第 89 図）。 1 は 2 段 3 方スカシで脚端部にやや外傾する面をもつ A2b 型。 2 は 2 段 3 方スカシだが脚端部の丸い A2a 型である。上段スカシには貫通しないものや下方のみ貫通するものがある。大谷編年では、これに上段スカシが切れ目のみの A3 型、脚部の短小化が始まる A4 型、 2 方スカシとなる A5 型がつづく。第 89 図をみると、 4 ・ 5 では脚部に短小化が認められることから A4 型 (14) で、 6 は A5 型の基準資料である。東淵寺古墳出土の 3 は下段が欠損しているものの短小化は認められず、A3 型の範疇と思われる。これは、スカシの様相からは、たちあがり高 1.1㎝の坏身と有蓋高坏が出土している御崎山古墳追葬段階よりも新しく位置づけられることから、東淵寺古墳で出土した他の須恵器の時期よりも新しい。従って、追葬などの行為に伴う資料であろう。

器台や皮袋形土器は断片的な資料であり、年代的位置づけは困難である。一方、出雲型子持壺は、表採資料や松江市の調査で出土した資料から検討されてきたとおり池淵分類 C 型のみが出土している。詳細は第 4 章第 4 節にあるが、脚部の横方向調整の変遷などから、東淵寺古墳出土の子持壺は C 型のなかでも山代二子塚古墳例より新しく、団原古墳例よりも古く位置づけられる。このことは、各古墳出土の坏類のたちあがり高とも矛盾しない。

以上のことから、東淵寺古墳は魚見塚古墳と時間的な差はあまりないもののわずかに後出し、団原古墳よりは古い古墳であるといえよう。

6. 古墳時代後期の須恵器編年と魚見塚古墳・東淵寺古墳

従来、魚見塚古墳は出雲 3 期、東淵寺古墳は出雲 3 期あるいは 4 期に位置づけられており (15)、第 86・87 図で提示した須恵器の変遷も大谷編年の出雲 3 期から 4 期を中心に前後の時期を視野に入れたものである。本稿で試みた坏身の変遷が、坏蓋を指標とした大谷編年と先後関係では矛盾しないことは前項で確認したが、詳細にみると、時期比定に関わる部分で大谷編年と異なる部分もある。大谷編年と相違が認められるのは出雲 3 期と 4 期を分ける指標とされる坏類の A4 型である。大谷編年では坏類 A4 型を出雲 4 期の指標とし、出雲 4 期初頭に A3 型が残るとしているが、実際

は出雲３期と考えられてきた資料のなかに A4 型と A3 型が併存している様相が確認された。そのため、出雲４期の指標として A4 型の出現を重視するならば出雲３期は従来より短くなる。あるいは、従来出雲３期とされていた点を評価するならば出雲４期の比定に他の指標を求める必要が生じる。本来であれば、他地域の須恵器との併行関係や須恵器以外の遺物、埋葬施設なども関連する問題であり、慎重な検討が必要であるが、ここで本稿対象地域における須恵器自体の変遷から出雲３期と４期の時期区分の問題について考えてみたい。須恵器の編年をおこなう際には、その変遷のなかでの画期とそれに基づく時期区分が重要な問題となろう。

大谷編年の指標である坏蓋の分類基準には、肩部と天井部調整の様相とともに、端部の段の製作手法の変化による形態分類が用いられる。これはおおまかには、沈線により形成されていた端部の段にナデが大きく作用するようになり、さらには形骸化した沈線やナデは残りつつ段が消失し、端部の処理はナデが主体になっていく、という端部処理の変遷を表しており、過渡期には大谷分類に合致しないタイプも含め複数のタイプが併存する。このような変化は当然漸移的なもので、製作技術の省力化などが背景に考えられる。時期区分には新しい要素を指標とするのがセオリーであるが、ゆるやかな変化には線引きが難しく、新古の蓋坏が並存する時期には、追葬の問題もあり時期比定が難しい状況もおこりうる。そこで、別の指標として前項で検討した直口壺 B2 型について考えてみたい。直口壺 B 型のなかでも定型化した B2 型は出土量も多く山陰地方に特徴的な器種のようである。この型式の出土量が多いのは、横穴墓への埋葬の増加に伴って須恵器の出土量が増加していることと無関係ではないだろう。つまりこの時期に墓制の変化と連動した須恵器出土量の増加と、地域的特徴を備えた器種の定型化が起こっており、須恵器の変遷のなかで大きな画期と言えよう。しかし直口壺は坏類ほど出土頻度が高くなく指標として不向きな点は否めない。そこで、直口壺 B2 型と共伴する坏類、つまりたちあがり高が 1.1 ～ 0.8㎝程度の坏身を出雲４期の指標としたい。これに伴う坏蓋は A4 型と少数の A5・A6 型で、今回は検討対象としなかったが直口の長頸壺や提瓶が共伴する。出雲４期のなかでの新古の細分については十分に検討できなかったが、前項で取り上げた無蓋高坏 A 型の著しい脚部短小化・スカシの退化や、坂本 2012 の有蓋高坏の編年、池淵 2004 の出雲型子持壺の編年などを考慮すれば、たちあがり高 1.0 ～ 0.8㎝程度の坏身が出雲４期新相の指標となろう。

今回提示した古墳時代後期の編年案のなかで、魚見塚古墳と東淵寺古墳は出雲３期に位置付けられる。前述のように、東淵寺古墳出土須恵器には魚見塚古墳と比較してやや新相を示す特徴がみられるが、追葬などの行為に伴う資料以外は出雲４期まで下がるものではないと思われる。

註

(1) 本稿で取り上げる器種に関する編年では、萩本勝・佐古和枝 1984 が挙げられる。発掘調査された古墳・横穴墓群から出土した須恵器を詳細に検討し、各器種の組列とその組み合わせから６・７世紀の須恵器の編年を提示した。

(2) 提瓶も資料の増加を受けて再考の余地があるかもしれない。

(3) 田辺昭三 1981。

(4) 坏身の径については、坏蓋との対応を考慮し、たちあがり部分の口径ではなく受け部の径を用いる。

(5) 本稿では、受け部の最も低い部分であるたちあがりの付け根から最も高い部分までの高さをたちあがり高としており、坂本の定義したかえり高とは異なる。たちあがり高は、なるべく４カ所程度を計測し、歪みのない場所での最小値とした。

(6) 当該時期は横穴系の埋葬施設出土資料が圧倒的に多く、発掘調査や遺物自体の様相から追葬などの侵入行為が認められる例が多い。本稿では原則として、出土状況や遺物の様相から一括性が高い、あるいは追葬などが想定されてもごく短期間の行為と考えられる資料を検討材料とした。

(7) 出雲西部（現在の出雲市以西）については、受け部径とたちあがり高の関係や底部ヘラケズリ省略の様相（坏蓋天井部

のヘラケズリも同様）が東部とは異なる可能性があり、本稿では検討対象としなかった。
(8) 検討対象にできる資料数が少なかったため、ここでは出雲西部の資料も加えている。
(9) 中竹矢 2 号墳の坏身のたちあがり高は 2 種あるが、出土状況から時間的な隔たりは少ないとされており、高坏のたちあがり高は高い方の一群と一致する。
(10) 例えば、高野 2 号横穴出土例や宮内 1 号横穴例、中村 1 号墳が挙げられる。
(11) 坏と高坏のたちあがり高に相違のある例はどちらも検討対象のなかでは古い古墳のものであるが、検証に耐えうる資料が少なく、古相の高坏の特徴である確証はない。なお、受け部径は高坏が坏よりやや大きい例が多く認められる。
(12) たちあがり高が 0.7㎝以下になると内傾率に変化がなくなる。これは、この時期に内傾化が収束するわけではなく、たちあがりが極端に低くなったために受け部径と口径の差が小さくなった結果によるものである。
(13) 岩屋 2 号墳の坏類には 2 種あり若干の時期差が想定される。無蓋高坏は長脚 2 段スカシで、従来の高坏の編年観から初葬に伴うものではないと判断し、新相にあたる位置に配置した。また、御崎山古墳出土須恵器は初葬分と追葬分とに分けられている。ここでは、口径やたちあがり高から島根県教育委員会ほか 1996 で報告されているものとは異なる組み合わせで提示している。これは有蓋高坏を追葬とした坂本 2012 に近いものと考える。古天神古墳に関してはたちあがり高にやや高低差があり追葬が行われた可能性も残る。岩屋後古墳や臼コクリ N-1 号横穴で出土する、たちあがり高が他より突出して高い資料は、口径やケズリの様相から例外的なものであろう。陰田第 4 号横穴にはたちあがり高が 0.3㎝のものを含み一括性に問題があるが、ヘラケズリが省略される時期までは直口壺 B 型が残ると評価できるであろう。
(14) ただし、同じ A4 型でも上段スカシの貫通するもの（4）と貫通しないもの（5）がある。
(15) 池淵 2015、島根県教育委員会ほか 1996

参考文献・図版出典 (図版は一部改変し再トレースして掲載)

出雲市教育委員会 2007「Ⅰ . 上島古墳出土遺物の再調査報告」『出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書』第 17 集
出雲市教育委員会 2009『築山遺跡Ⅳ』出雲市の文化財報告 6　県道今市古志線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
池淵俊一 2004「出雲型子持壺の変遷とその背景」『考古論集　河瀬正利先生退官記念論集』河瀬正利先生退官記念事業会
池淵俊一 2012「出雲の子持壺集成」『松江市史研究』 3 号（松江市歴史叢書 5）松江市教育委員会
池淵俊一 2015「出雲の古墳編年について」『前方後方墳と東西出雲の成立に関する研究』島根県古代文化センター研究論集第 14 集
大谷晃二 1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第 11 集　島根考古学会
岡崎雄二郎 1983「松江・山代方墳採集の須恵器について」『松江考古』第 5 号
角田徳幸 1993「石棺式石室の系譜」『島根考古学会誌』第 10 集　島根考古学会
坂本豊治 2012「須恵器からみた中村 1 号墳」『中村 1 号墳』出雲市の文化財報告書 15　出雲市教育委員会
島根県教育委員会 1978『岩屋後古墳発掘調査概報』
島根県教育委員会 1983a「付載 . 古天神古墳測量調査」『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告Ⅱ』
島根県教育委員会 1983b『国道 9 号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』
島根県教育委員会 1984『高広遺跡発掘調査報告書』和田団地造成工事に伴う発掘調査
島根県教育委員会 1986『岡田薬師古墳』淞北台第二団地造成に伴う発掘調査報告
島根県教育委員会 1987『出雲岡田山古墳』
島根県教育委員会 1989a『古曽志遺跡群発掘調査報告書』朝日ヶ丘団地造成工事に伴う発掘調査
島根県教育委員会 1989b「 1 . 団原古墳」『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告Ⅵ』
島根県教育委員会 1994『臼コクリ遺跡・大原遺跡』一般国道 9 号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ
島根県教育委員会 1997a『岸尾遺跡・島田遺跡』一般国道 9 号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区Ⅴ
島根県教育委員会 1997b『島田池遺跡・鵜貫遺跡』一般国道 9 号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区Ⅷ
島根県教育委員会 2001a『岩屋遺跡・平床Ⅱ遺跡』中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 6
島根県教育委員会 2001b『山代二子塚古墳整備事業報告書』
島根県教育委員会・島根県立八雲立つ風土記の丘 1996『御崎山古墳の研究』八雲立つ風土記の丘研究紀要Ⅲ
島根大学考古学研究会 1995「「大橋川の谷の古墳群」をめぐって」『菅田考古』17 号
島根大学法文学部考古学研究室 2002『松江市手間古墳発掘調査報告・薬師山古墳出土遺物について』
田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
中村　浩 2001『和泉陶邑窯出土須恵器の型式編年』芙蓉書房出版
萩本勝・佐古和枝 1984「須恵器について」(『陰田』一般国道 9 号米子バイパス改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 米子市教育委員会)
東方仁史 2005「米子市宗像 1 号墳出土遺物について」『鳥取県立博物館研究報告』42　鳥取県立博物館
曳野律夫・松本岩雄・内田律雄・三宅博士 1989「松江市東淵寺古墳墳丘測量報告（上）」『島根考古学会誌』第 6 集
松江市教育委員会 1993『伝宇牟加比売命御陵古墳』松江市文化財調査報告書第 54 集
松江市教育委員会 1998『向山古墳群発掘調査報告書』松江市文化財調査報告書 77
柳浦俊一 1993「島根・鳥取県出土子持壺集成」『島根考古学会誌』第 10 集
山本　清 1960「山陰の須恵器」『島根大学開学十周年記念論集』
米子市教育委員会 1984『陰田』一般国道 9 号米子バイパス改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
渡辺貞幸 1983「松江市山代二子塚古墳をめぐる諸問題」『山陰文化研究紀要』第 23 号　島根大学
渡辺貞幸 1985「松江市山代方墳の諸問題」『山陰地域研究』第 1 号　島根大学山陰地域研究総合センター

第２節　出雲東部における魚見塚古墳・東淵寺古墳の歴史的位置

1. 意宇中枢部の３基の前方後円墳の特徴

３基の特徴と共通性　本節では、魚見塚古墳と東淵寺古墳及び両古墳に近い場所でほぼ同時期に築かれた手間古墳も含め、これら３基の後期前方後円墳が出雲東部地域で如何なる歴史的位置を占めているのか若干の見通しを述べてみたい。

３基に共通する特徴としては、①３基ともほぼ同規模で全長 65 m前後である、②前方後円墳という古墳時代後期の意宇中枢域では極めて稀な墳形を採用している、③単独で立地し、従属墳を伴わない、④墳丘祭祀に出雲型子持壺を用いる、⑤墳丘下段に葺石を持たないなど墳丘築造方法が共通する、等の点があげられる。特に①、②はこれら３古墳の性格を考える上で極めて重要である。ここでは、まず出雲における 60 m級の前方後円墳の持つ意味を改めて問い直してみたい。

60 m級の古墳の意味　表５は出雲部の 40 m以上の前方後円墳を規模順に並べたものである[(1)]。大念寺古墳を除けば、前・中期に属する前方後円墳の多くが 60 m前半代に集中している点を容易に確認でき、出雲の古墳時代中期は等質的かつ緩やかな「首長連合の時代」と評価されている（渡辺 1986）。これらは全長では若干のバラツキがあるが、後円部径を比較すると概ね 35 ～ 38 m前後にまとまる傾向が指摘できる[(2)]。このような墳丘規模の枠組の初現は、出雲における前方後円墳の出現である廻田１号墳及び上竹矢７号墳段階まで遡及する。つまり、当地における出現期前方後円墳の墳丘規模、即ち後円部径 35 m前後、全長 60 m前後という墳丘規模が、その後の出雲各地の最高首長墓の目安として歴代踏襲されていた可能性が考えられるのである。

このように、上記の３基の前方後円墳が中期以来の伝統的な墳丘規模の枠組を採用している点は興味深い。つまり、意宇の地に６世紀後葉に相次いで築かれた３基の前方後円墳は、中期以来の出雲各地における伝統的在地首長という地位を表象するため、意図的にこのような墳丘規模を採用していたものと想定されるのである[(3)]。

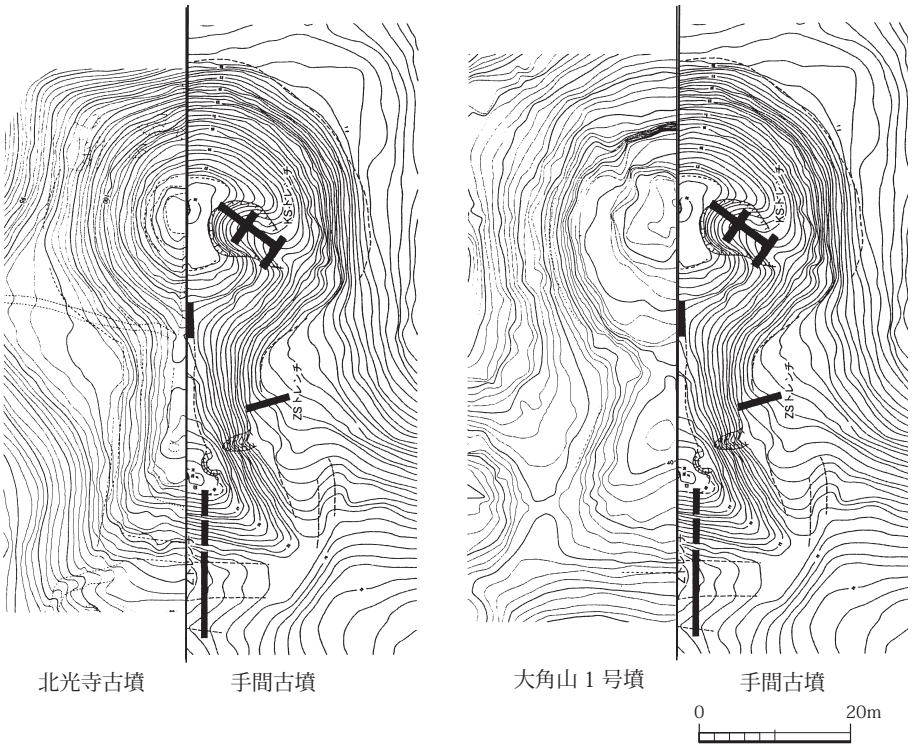
中期の前方後円墳と後期の前方後円墳　次に、この３基の古墳が前方後円形という墳形を選択するに至った経緯を考えてみたい。第 90 図は、手間古墳と６・７期に属する前方後円墳である北光寺古墳と大角山古墳の平面プランを同一縮尺で比較したものである。

当然のことながら墳丘規模や段築数・墳丘高はそれぞれ異なっており、これらが同一設計プランに基づくものと言うつもりはさらさらない。しかし、100 年近い時期差があるにもかかわわず、前方部の広がり具合やくびれ部の形状など、全体のプロポーションは非常によく似ていて、魚見塚古墳や手間古墳が長らく前半期の前方後円墳と認識されてきたのも頷ける。少なくとも平面プランに関しては、同時期における畿内の前方後円墳の影響をそこに見出すことは不可能に近い[(4)]。つまり、手間古墳（恐らくこれとほぼ同一プランを志向する魚見塚古墳も）は、中期の出雲部の前方後円墳の平面プランをモデルとして設計された可能性が高い。

表５　出雲の大型前方後円墳

古墳名	所在地	全長	後円部径	時期	備考
大念寺古墳	出雲市	91	46	10	
東淵寺	松江市	71	42	10	本文Ａ案の場合の数値
手間古墳	松江市	66	42(32)	10	括弧内は基壇を除く数値
北光寺	出雲市	64	38	6	報告書中の数値
上竹矢７号	松江市	63.9	36.3	3	
魚身塚	松江市	62	35.8	10	後円部径最大とした場合
大角山	松江市	61.4	33	7	
廻田１号	松江市	57.3	37	4	
井の奥４号	松江市	57	42	8	
神庭岩船山	出雲市	50	32.8	8	測量図からの読み取り値
報恩寺４号	松江市	50	31.1		
扇廻	松江市	47.5	26.7		
清瀬山１号	安来市	45.6	28.7		
毘売塚古墳	安来市	41.8	32.8	6	

このように、少なくとも手間・魚見塚古墳



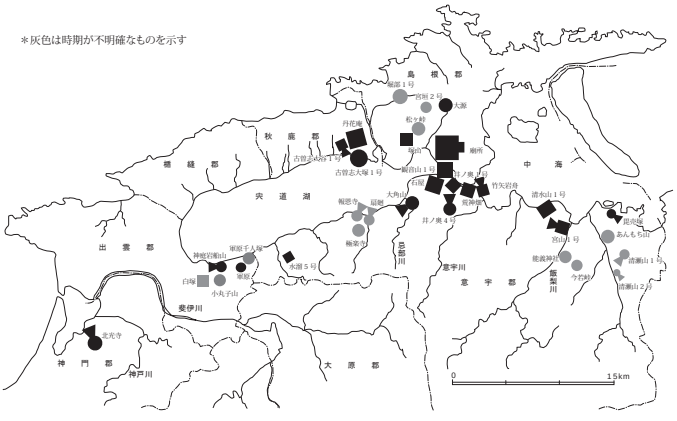
第 90 図　手間古墳と中期前方後円墳との比較（左；北光寺、右；大角山）

に関して言えば、墳丘規模だけでなく墳形に関しても、先行する古墳時代中期の前方後円墳のプランを継承しているのであり、こうした出雲各地における中期の 60 m級前方後円墳がかつて担っていた、出雲内部での地域社会における何らかの身分秩序を表徴する為、意図的に採択されたと考えられるのである。

中期前方後円墳の意味

では、出雲における古墳時代中期の前方後円墳という墳形に表象されていた意味とは何であろうか。第 91 図には出雲における古墳時代中期の主要古墳の分布を示した。既に多くの論者が指摘するとおり（内田 1980 ほか）、古墳時代中期には出雲東部では方丘原理、出雲西部では円丘原理が卓越し、前方後円墳は出雲平野、玉湯、乃木、飯梨川東岸など特定地域に分布し、出雲東部中枢では極めて稀薄な存在であり、45 m以上の大型古墳では井ノ奥 4 号墳が確認できるにすぎない（仁木 2014 ほか）。井ノ奥 4 号墳は周溝・外堤を伴う前方部の短い前方後円墳で極めて畿内色の濃い古墳である。古墳時代中期の大橋川の谷の大型方墳は畿内の大王墓陪冢と類似する点が指摘されており（仁木 2015）、当古墳も基本的には大王墓陪冢の墳形変化に連動するものとして理解可能で、他の中期前方後円墳とは別個に取り扱うべきであろう（池淵 2015b）。

また、当該期の前方後円墳が玉作遺跡の分布域と一致する点も注意される。特に玉湯の花仙山周辺では扇廻古墳や報恩寺 4 号墳など 50 m級の前方後円墳が集中し、乃木の大角山 1 号墳の近くには福富Ⅰ遺跡、安来市毘売塚古墳の近くには大原遺跡が位置するなど、大規模な玉作遺跡に隣接して前方後円墳が所在する。大谷晃二や米田克彦は、これらの首長が玉製品の流通に関与し王権との結びつき強め、首長権力を強めたものと評価しており（米田 2002・大谷 2011）、基本的には首肯すべき見解であろう。



第 91 図　出雲における古墳時代中期の主要古墳

おける最高首長の墳形として採用されている、③玉製品の貢納などを通じて倭王権と直接的な交通関係を保持していた首長、といった被葬者像が想定できそうである[(5)]。

以上の点から、手間古墳など古墳時代後期の3基の前方後円墳についても、先述した前代の伝統的前方後円墳の規模・墳形を意図的に継承していたとの理解に基づけば、基本的にはこうした中期前方後円墳被葬者像、即ち非意宇的な性格を受け継いだ首長像が想定できるのではなかろうか。

2. 意宇への中枢化現象とその評価

意宇平野周辺の古墳集中化　第92図に意宇平野周辺における6世紀の古墳分布を示した。一目瞭然なとおり、わずか3㎞四方に大庭・山代古墳群や有古墳群、大草古墳群など多数の古墳が集中的に築造されている状況が読み取れる。さらに、それらが最高首長層、中小首長層、有力農民層というように墓域が階層別かつ計画的に配置されている点も重要である（大谷1997）。

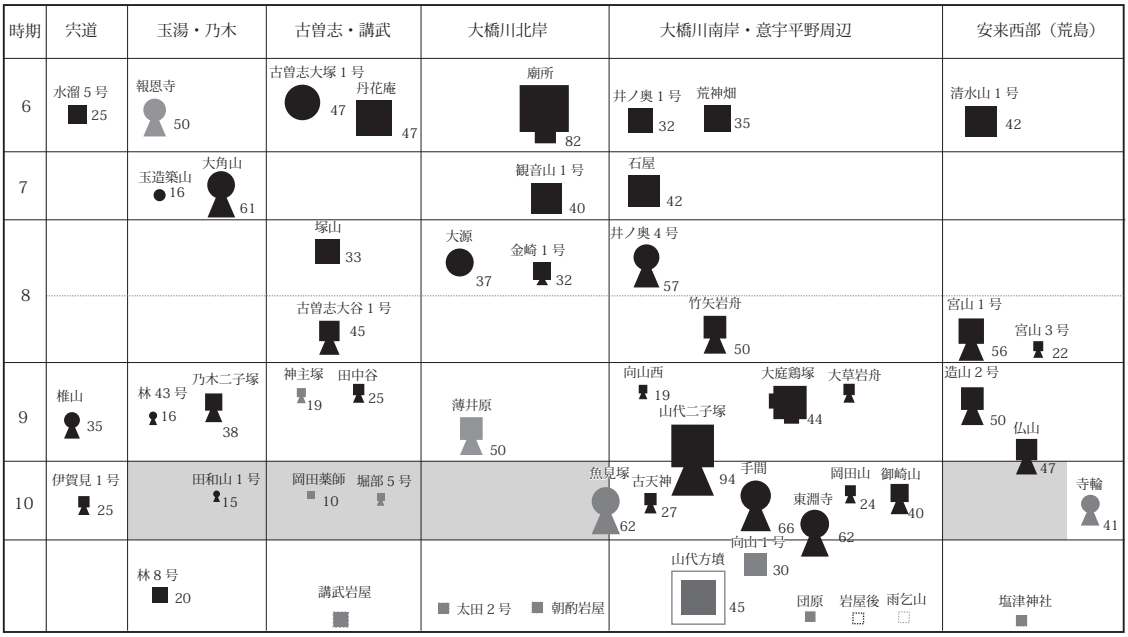
このように限られた領域内において、それに見合わない多数の首長墓が集中する現象についてはこれまで何度か言及されてきた。大谷晃二は特に有古墳の特異性に着目し、その被葬者を出雲東部の最高首長を輩出した一族の傍系も含む有力首長層と想定する（大谷1996）。確かに当古墳群の墳丘規模に比して優秀な副葬品を備える特徴を理解するには有力な仮説と言える。

ただ、有古墳群内の各古墳は基本的に単独で立地し、従属墳を伴わない点で向山西古墳群等の周辺の先行する中小首長墳とはやや性格を異にする。むしろ古墳立地上の特徴は5世紀の大橋川沿岸の大型古墳の立地と共通し（池淵2012）、帰属共同体から分離され首長のみが別個に墓域を求めた結果である可能性が高い。こと先述の3古墳に関しては、先述のとおり出雲内において同等規模の前方後円墳は基本的に各地の最高首長墓であり、その分布状況から律令期の一郡ないし半郡程度の支配領域が想定される。これら3古墳と最高首長の山代二子塚古墳の被葬者はほぼ同一世代と考えられ、これらの首長の生産基盤総てを意宇平野周辺内で収めることは極めて難しい。

以上の点から、6世紀後半に意宇平野周辺に集中する古墳群の中には、意宇平野を基盤とする首長だけでなく、広く出雲東部各地の首長層が含まれているとの見方、即ち出雲東部各地の首長がこの時期に当地周辺に結集していた可能性が高いと考える（松尾・平石2015）。

第92図　意宇平野周辺の6世紀代の主要古墳

どの範囲から結集しているのか　第93図に出雲東部の主な首長墓の動向を示した。かつて渡辺貞幸が指摘したとおり、山代二子塚古墳の築造を前後して出雲東部各地の首長墓が縮小する傾向を認めることができる（渡辺1997・大谷2011）。具体的には、島根郡では薄井原古墳を最後に50m級の首長墓が築造停止する。秋鹿郡でも同様に古曽志大谷1号墳の築造後には有力首長墓は築かれない。南の意宇郡では、荒島で宮山1号墳－造山2号墳－仏山古墳と継続的に築かれてきた首長墓が10期に断絶する。玉湯・乃木も乃木二子塚古墳の築造後は目立った首長墓が存



＊グレーは埴輪を伴わない古墳を示す

第 93 図　出雲東部における５・６世紀の首長墓の変遷

在しない。その西の宍道では９～ 10 期にかけて椎山古墳－伊賀見１号墳が継続的に築かれており、意宇郡の他地域とはやや様相を異にする。

このように、首長墓系列の分析からは 10 期段階に出雲東部で広く有力首長墓が欠落する現象を確認できる。これはこの時期に出雲東部各地の首長墓規模が縮小したとの見方も可能であるが、具体的にそれに対応する首長墓の存在を指摘することは難しい。現状では、総てではないにせよこれらの地域のうち幾つかの地域の首長墓については、墓域を自らの生産基盤から離れて意宇中枢部に求めた可能性が高いのではなかろうか。こうした首長墓の結集化現象は、５世紀の大橋川沿岸の大型古墳に認めることができ、同様な観点から後期古墳についても５世紀よりもさらに広い範囲で首長墓の結集化が図られたものと理解できる（池淵 2012・2015a）。

８世紀の意宇郡の特殊性　『出雲国風土記』の新造院建立記事をみると、意宇郡以外では寺院が所在する郷の豪族が造営しているのに対し、意宇郡のみは出雲神戸出身でありながら山代郷北新造院を建立した日置君や南新造院を建立した飯石郡少領の出雲臣弟山など、郷さらには郡を越えた建立が確認される（平石 1996）。このように８世紀段階においては、意宇中枢域には他地域出身の首長が地盤を持っていた様相が確認でき、意宇中枢域である山代郷の特殊性が窺える。これまで述べてきた当該期の意宇中枢への古墳結集化の背景には他地域出自の首長墓が含まれると想定する仮説の最大の根拠は、８世紀にはこのような意宇中枢の非在地性が読み取れる点にある。以下、このような仮説が成り立ち得るか、個別の事例に即して検討してみたい。

岡田山１号墳と額田部臣氏　当古墳の被葬者像を探るうえで重要なのは、やはり額田部臣大刀の存在である。武廣亮平は額田部臣は本来大原郡を基盤とする在地首長であったが６世紀に意宇勢力に擬制的同族として取り込まれた結果、大草の地に奥津城が営まれたと解釈する（武廣 1995）。また深澤太郎は岡田山１号墳の被葬者が大原郡出自の「額田部」であることを前提として、小論で述べるような意宇に他地域出自の首長が集結する意宇地域の求心性を論じている（深澤 2008）。刀は所有者が変化することから岡田山の被葬者が「額田部臣」であるとは即断できないとの慎重論

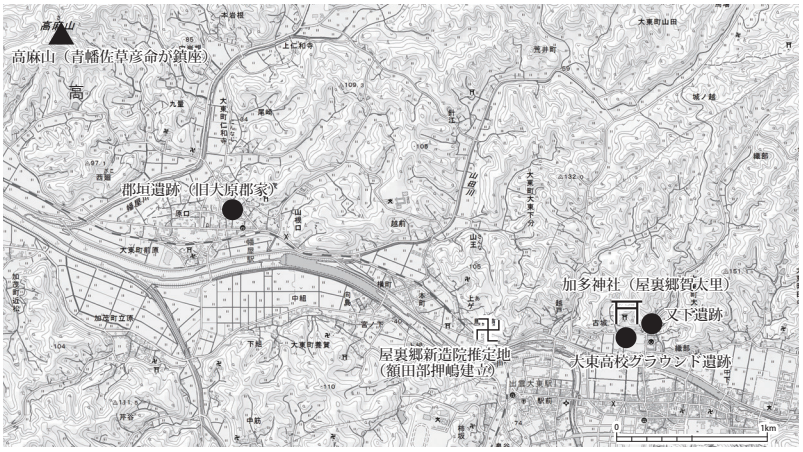
は当然だが（山本・松本 1988）、当人が保持してこそはじめて意味を持つという銘文入刀剣の呪的性格を考慮すれば（田中 2002）、被葬者の候補として「額田部臣」を最有力候補としてあげることは許されるだろう。

この点に関して幾つか傍証をあげておく。『出雲国風土記』には当古墳が所在する大草郷の地名起源として青幡佐草日古命が鎮座する故と記されるが、『出雲国風土記』にはこの青幡佐草日古命は大原郡高麻山にも鎮座するとされる。この高麻山は大原郡の少領であった額田部臣押嶋が建立した屋裏郷新造院に隣接することから、屋裏郷を地盤とする額田部臣氏と大草郷との関連が指摘されている（第 94 図；島根県古代文化センター 2014）。また額田部氏の地盤である大原郡屋裏郷は、『出雲国計会帳』には「屋裏郷賀太里」とみえ、「賀太里」は現在の雲南市大東町に所在する加多神社付近に比定される（加藤 1957）。同神社の前には古墳時代中期では意宇郡以外では唯一となる玉作遺跡である大東高校グラウンド遺跡が所在する。そしてその隣接地の又下遺跡においても 6・7 世紀に玉作を行っていた可能性が高く、玉作遺跡が花仙山周辺に集約化された古墳時代後期段階では極めて例外的な存在である。つまり屋裏郷一帯は 5 世紀以降意宇地域と特殊な関係を恒常的に維持してきた地域であると言える（第 94 図）。こうした点からみても、大原郡を地盤とする首長が意宇の地に埋葬された可能性は一定の蓋然性をもつものと理解されよう。

飯石郡と意宇　今少し、意宇への古墳を結集させた首長層の範囲を考えてみたい。

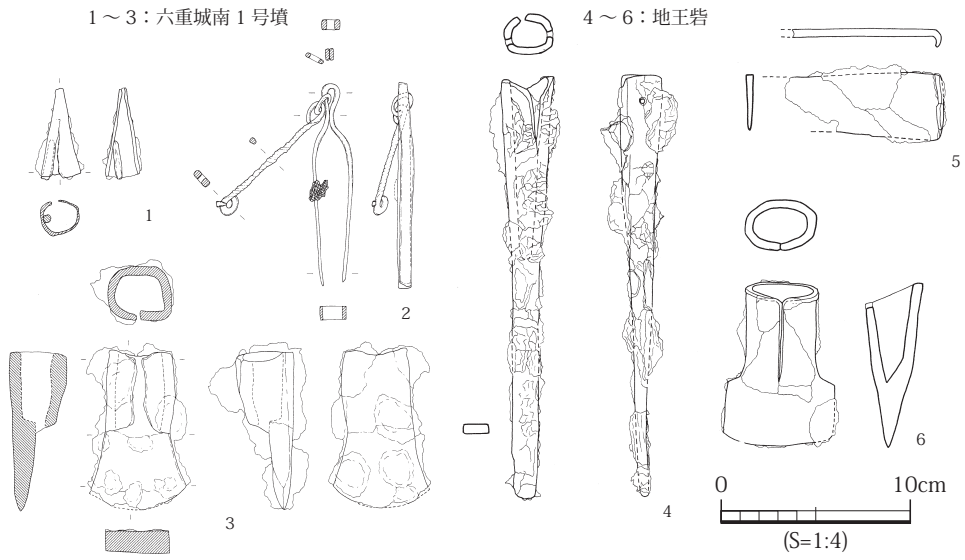
『出雲国風土記』には、先述のとおり意宇郡新造院（南新造院）は飯石郡少領の出雲臣弟山が建立したと記され、弟山は後に出雲国造となっている。松江市大庭町黒田畦遺跡からは「云石」の墨書土器が出土し、豪族居館又は飯石郡関連の出先機関の存在が想定されている（丹羽野・原田 2009）。以上の点から、8 世紀には出雲臣氏が飯石郡内に別業を持っていた可能性が高い[(6)]。

問題はこうした両地域間の関係がいつまで遡及するかだが、ここで注目されるのは雲南市三刀屋町六重城南 1 号墳の存在である。当古墳は山間部に所在する径 5 m程の小墳であるが、周溝内から鑷子状鉄製品や鉄鐸など渡来系の鉄器が出土している（第 95 図 1 ～ 3；米田 2009）。特に鉄鐸は鍛冶具との共伴関係が多い点から、鉄器生産に関わった鍛冶祭祀に関する渡来系遺物と理解されている（村上 2004・米田 2009）。また同じ雲南市三刀屋町に所在する地王砦跡では、1 辺 10 m程の小墳からⅠ式有肩鉄斧（野島 1995）や大型の袋状鑿など優秀な鉄製工具が出土しており、渡来系遺物とは言えないまでも最先端の鉄器文化に関与可能な被葬者の存在を暗示する（同 4 ～ 6；三刀屋町教育委員会 1989）。



第 94 図　額田部臣氏関連地図

問題はなぜこのような奥出雲の山間部から渡来系遺物が出土するのかという点である。当時の一般的な対外交渉のあり方や 5 世紀の遺跡の様相を鑑みれば、渡来人自らの意志で当地に移住したとは考えにくく、彼らは倭王権の対外交渉に関わった列島各地の首長の関与のもと渡来し、その膝



第 95 図　六重城南 1 号墳・地王砦出土鉄器

下で組織化されたと見るのが妥当であろう。

近年の調査により、5 世紀の意宇平野周辺に渡来系遺物が集中し、渡来人が後の出雲臣に繋がる有力首長のもと編成されていた事実が明らかにされつつある（角田 2008）。出雲の渡来系遺物は 5 世紀では意宇平野や川津平野など出雲東部に集中し、出雲西部では稀薄である。この点から、当該期の出雲における朝鮮半島との交渉窓口のイニシアティブは出雲東部の首長層にあったとみてよい（池淵 2014）。以上の点を鑑みれば、5 世紀の出雲国内において渡来人が出雲各地の別個の政治勢力によって招来・定住したとは考えにくい。すなわち当地の渡来人集団は、意宇平野を基盤とする有力首長によって鉄生産開発を目的に入植させられたと考えるのが妥当ではなかろうか。

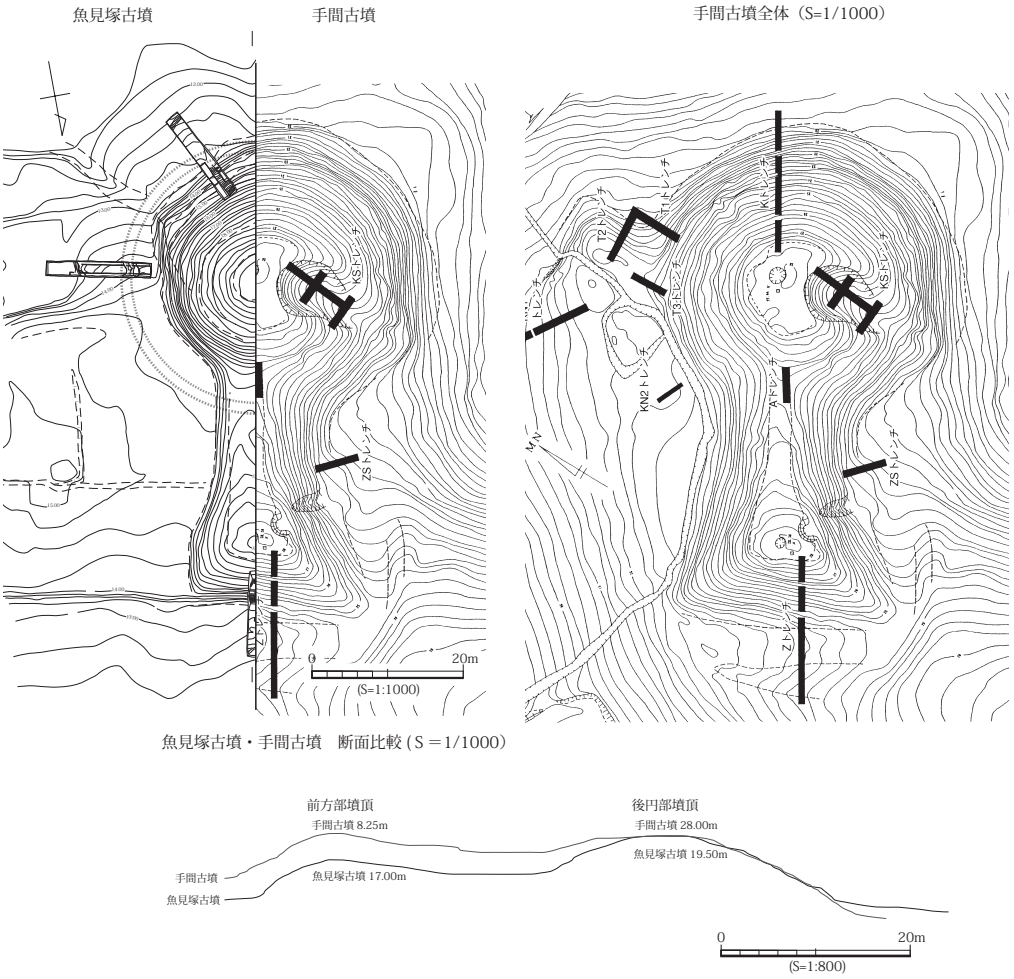
以上、根拠薄弱ではあるが、『出雲国風土記』から読み取れる意宇と飯石郡との関係は 5 世紀後半まで遡及する可能性が高く、よって飯石郡に根拠地を持つ首長が意宇中枢に埋葬されていた可能性も場合によってはあり得ると考える。

3. 魚見塚・手間・東淵寺の被葬者像

分析の視点　以上、意宇の地に他地域の首長墓が含まれる可能性について述べてきたが、ここで問題となる 3 基の古墳の出自について具体的な検討を試みる。これら 3 古墳のうち埋葬施設や副葬品については、わずかに手間古墳で断片的な様相が知られているのみで手掛かりは非常に限定されている。従って、ここでは主として墳形と立地及び墳丘祭祀に関わる埴輪・子持壺を主たる検討対象とする。特にその立地については、これら 3 基の前方後円墳は山代・大庭古墳群、有古墳群、大草古墳群のいずれにも属さず、それぞれ単独で特徴的な場所に立地しており、その占地には何らかの意味があったと考えられる。

魚見塚古墳と手間古墳　最初に指摘しうるのは、魚見塚古墳と手間古墳との密接な関係である。まず立地についてみると、両者は直線距離では約 1㎞離れているが、大橋川を挟み南北に対称的に立地している（第 92 図）。築造時期がほぼ同時期であることを勘案すれば、両者は相互を意識した立地であった可能性が高い。

次に墳丘形態の比較を試みたい。第 96 図は両古墳のプラン及び立面を比較したものである。両古墳は同じ 60 m級であっても規模は若干異なり墳端は整合しないが、これは魚見塚古墳の東側が



第 96 図　魚見塚古墳・手間古墳の比較

古墳背面にあたるため最下段が省略化されているためであり、手間古墳の最下段を省略したプランと魚見塚古墳とは比較的よく似ている。また後円部及び前方部平坦面の平面位置がほぼ一致している点が注意される[(7)]。なお立面は前方部の高さが大きく異なるが、これは丘陵と台地という立地条件の違いによるところが大きい。

さらに注意されるのは墳丘造作上の共通性である。魚見塚古墳の場合、古墳の背面となる東側は、後円部 1 段目が全周せずに後円部中央部で緩い段を形成し、後円部の北半分と前方部側は墳丘 1 段目に相当する部分の地山掘削を省略化している。一方手間古墳においても西側では後円部一段目が全周せず中央付近で造出状地形をなし、それより前方部側は一段目を省略しており、魚見塚古墳と共通する墳丘造作が認められるのである[(8)]。丘陵部に立地する古墳において背面となる部分の墳丘下段を省略する手法は前期以来よく見られる手法ではあるが、同時期に後円部の同じ位置から省略化が行われている点は、古墳の設計規格において両者間に緊密な関係があったことを推察させる。

この他、両者の共通性として指摘しうるのは、両古墳から出土している子持壺の存在である。両古墳から出土している子持壺はＣ型（意宇型）が卓越する意宇中枢部において、両者とも例外的にＢ型を採用している点が注目される。ただし、魚見塚古墳出土のＢ型子持壺には親壺にスカシが認められ、Ｂ型としては異質である。親壺スカシはＣ型の特徴の一つで、この点からみると当資料はよりＣ型に近いと言えるが、それ以外の形態や製作技法は手間古墳資料と非常に類似する。両古墳において意宇中枢で主流のＣ型ではなくあえて傍流のＢ型が採用されている点は、出雲東部におけ

る政治秩序内での両古墳の微妙な立ち位置を反映している可能性が高い。

以上述べてきたように、両古墳は築造時期や築造場所とともに墳丘プランや墳丘築造方法、墳丘祭祀において高い共通性が認められ、両者が極めて緊密な関係のもと築造されたことは明白である。このように大橋川を挟んでほぼ同時期に同型的な古墳が相次いで築かれた背景には、同型的な古墳を築かしめた上位権力、具体的に言えば山代二子塚古墳に代表される出雲東部の最高首長層の関与を想定するのが穏当であろう。

手間古墳の場合　では、具体的に手間古墳・魚見塚古墳はどの地域出自の首長墓と考えられるのか、まず手間古墳について検討を試みる。当古墳の立地を見ると、5 世紀の大橋川の谷の古墳群内に築かれている。この付近は『出雲国風土記』に「朝酌促戸」と記載された地域で、出雲で最も重要な交通要衝であった。当古墳はその中でも東端の、中海から宍道湖方面へ進入する入口付近に立地しており、東側からの景観を意識した占地である点が注意される。

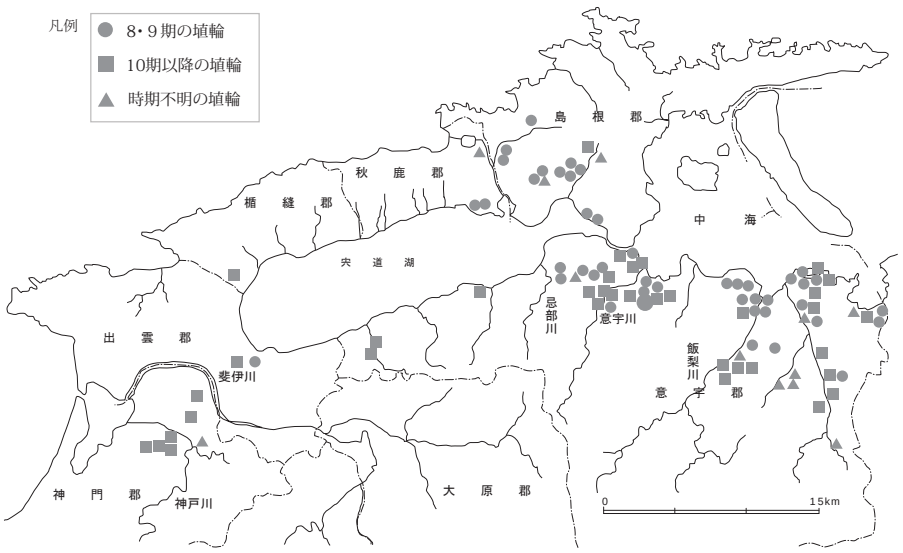
さらに重要な手掛かりとなるのは先述の子持壺の存在である。当古墳出土の子持壺は先述のＢ型に属し、意宇中枢で主流のＣ型とは時期的には共存するが、互いの形態的・技術的接点が殆ど見られない点から、地域差又は工人集団差を反映している可能性が高い。ちなみに出雲最大の窯場である大井窯跡群では、岩汐窯跡や山津窯跡でＣ型子持壺がまとまって出土しているが、現在のところＢ型は 1 点も出土していない。現状ではＢ型の出土例は乏しいが、当古墳及び魚見塚古墳を除くと、伝伯太町及び米子市宗像 1 号墳など分布が安来・米子など東に偏在する（池淵 2004）。

また、魚見塚古墳のＢ型子持壺の胎土は黒色粒子を多量に含む特徴を持ち、Ｃ型とは肉眼でも明確に識別できる。黒色粒子を比較的多く含み類似する特徴を持つ胎土は門生窯跡群の資料に散見される（島根県教育委員会 1998）。現在胎土分析を実施中でその結果を待ちたいが、Ｂ型は大井産ではなく、門生窯跡群など安来平野周辺が産地であった可能性も考慮されるのではなかろうか。

もう一つの手がかりは、横穴式石室に用いられた石材である。手間古墳の横穴式石室は後世に徹底的な破壊を蒙っているが、盗掘坑中から大量の凝灰岩岩屑が出土し、なかには切石材も認められる。これらは横穴式石室の石材として使用されたもので、分析の結果荒島石であることが判明している（渡辺 2002）。「荒島石」を埋葬施設に使用した事例については守岡正司の検討があり、氏によれば荒島石の利用は古墳時代後期初頭までは基本的に安来平野のみに限定され、出雲 4 期以降に盛行する石棺式石室の段階になって永久宅後古墳や太田古墳群、客山横穴墓群など広域での移動が認められるようになるという（守岡 1996）。こうした状況の中、6 世紀後半段階で石棺ではなく石室構築材として荒島石を多用している当古墳のあり方は極めて特異であると言える。

このように、子持壺や石室石材からみて、当古墳の被葬者が荒島地域の首長層と極めて緊密な関係にあったことは間違いない。先述のとおり荒島の首長墓系列は、宮山 1 号－造山 2 号－仏山と推移し、当古墳の段階に一端途絶した後、出雲 4 期には塩津神社古墳が再び出現する点からみて、一歩踏み込んで当古墳の被葬者の有力候補として荒島地域の首長を充ててみたい。

魚見塚古墳の場合　次に魚見塚古墳について検討を試みる。まず立地について見てみた場合、この時期の大型古墳としては唯一大橋川の北岸に立地している点が注目される。この場所は基本的には大橋川の谷の古墳群内に位置し、その首長墓系譜を意識した立地であると言えるが、5 世紀代に大型古墳が継続的に営まれていた西尾町周辺の首長墓系列からはかなり離れて孤立的に位置しており（第 6 図）、古代の「朝酌渡」推定地の隣接地でかつ古代枉北道推定地のすぐ西に立地する点は



第 97 図　出雲における 8 ～ 10 期の埴輪出土古墳の分布

重要である。いわば、意宇郡から島根郡中心部に至る入口を扼していると言え、当古墳被葬者と島根郡中心部との強い関係性が窺える。

次に出土遺物からの検討を試みる。魚見塚古墳の墳丘祭祀で特徴的な点は、他の 2 古墳と異なり墳丘祭祀で子持壺のみを使用し、埴輪を全く使用していない点である。出雲全体を見渡しても当該期の大型古墳で埴輪を出土していない古墳は稀であり、特筆される現象と言える。

第 97 図は出雲における前方後円墳編年 8 期以降の埴輪出土古墳の分布を示した。これを見た場合、意宇郡では 8 期から中部～東部にかけて爆発的に埴輪出土古墳が増加し、特に安来平野周辺では 10 m程度の小規模墳でも埴輪が普及するようになる。この傾向は 10 期になっても継続し、出雲 4 期まで普遍的に埴輪祭祀が行われている。一方の橋北では、8 期で埴輪出土古墳が増加するものの、金崎古墳群や奥才古墳群など特定の古墳群に限定される。そして 9 期後半から 10 期になると、薄井原古墳のような大型古墳を含め、橋北では埴輪の使用はほぼ停止してしまう（第 93・97 図）。唯一出雲 4 期の太田 1 号墳から円筒埴輪が出土しているが、当古墳群は島根郡内では例外的に石室に荒島石が使用されるなど意宇と特別な関係が認められる古墳群であり、特殊事例と見なしてよい。

このように､出雲における埴輪祭祀はその生産も含めて意宇郡を中心として行われたものであり、島根郡など橋北地域ではいち早く埴輪祭祀を停止してしまった可能性が高い。以上の点から、魚見塚古墳の場合も出雲 3 期で埴輪祭祀を停止している点からみて、橋北地域の後期古墳の墳丘祭祀の特徴を備えているものと言えよう。

以上、当古墳の被葬者については、立地や墳丘祭祀上の特徴から橋北地域を地盤とする首長の墓であった可能性が高い。具体的な地域に限定するのは難しいが、薄井原古墳以降首長墓が欠落する川津・持田平野一帯がその有力候補地として想定される。

東淵寺古墳の場合　東淵寺古墳の墳丘形態は今のところ前方後円墳である以上のことは不明なため、立地及び出土埴輪・須恵器から検討を行いたい。まず須恵器であるが、子持壺は他の 2 古墳とは異なり、C 型という大井産の意宇中枢の主流型式を採用している点が注意される。既に述べたとおり、当古墳出土資料は山代二子塚古墳に後続するタイプであり、当古墳被葬者と意宇の最高首長層との密接な関係が窺える。皮袋形土器も山代二子塚古墳や岩屋後古墳など意宇中枢での出土があり、さらに岩汐窯跡で出土していることから他地域的な様相は確認できない (9)。このように須恵器から見た場合、当古墳の被葬者は意宇中枢に帰属する首長のようにも思われる。

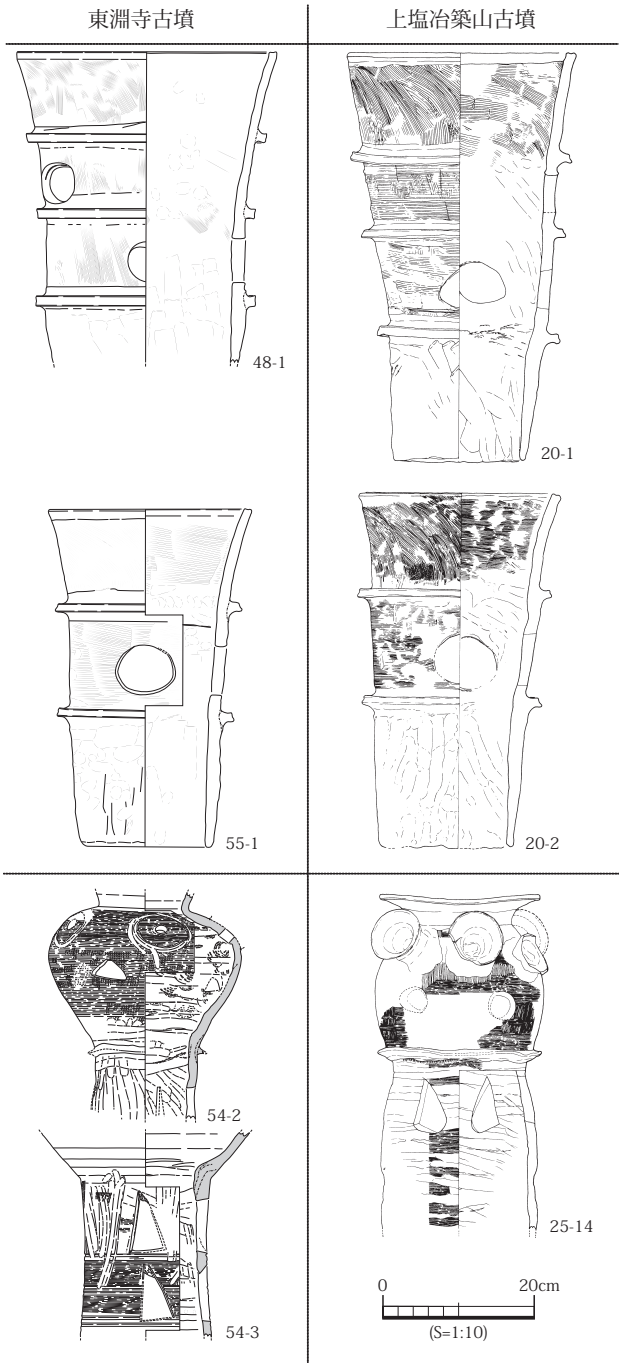
しかし埴輪はこうした様相とは若干状況を異にする。当古墳の埴輪は、底部調整は意宇中枢と同

様な円柱状工具によるタタキ調整を共有しつつも、基底部が非常に長く口縁部と突帯間が等しいという規格を有する点、倒立技法による突帯貼付のため突帯が下向きになる点、凹線による突帯間隔設定技法が認められる点など、意宇中枢では極めて特異な埴輪群として位置付けられる（田中 2012）。

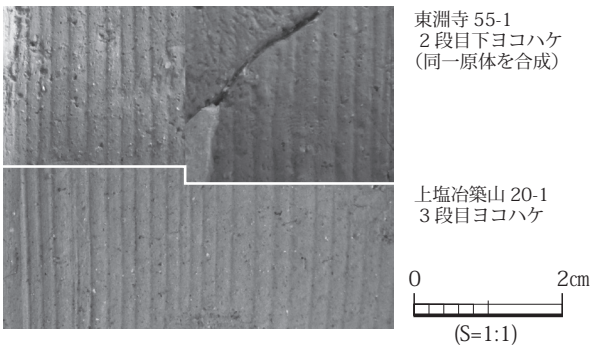
当古墳と酷似する埴輪群は出雲市上塩冶築山古墳にみられる[(10)]。特に報文中で赤色系円筒埴輪とされた一群（高橋 2004）は先に述べた東淵寺古墳出土埴輪の特徴と一致するほか、胎土・色調も酷似する（第 98 図上段）。さらにハケメパターン（廣瀬 2015）の一部が一致する点から見て（第 99 図）、これらは同一の工人集団による製品の可能性が極めて高い[(11)]。これらの埴輪群の製作地については現時点では明らかにし得ないが、当古墳の被葬者が上塩冶築山古墳の被葬者と緊密な交通関係を維持していたことは疑いない。

また上塩冶築山古墳からは子持壺が出土している（第 98 図下段）。当古墳出土の子持壺は出雲東部の子持壺の本質的規範を遵守せず製作技術基盤も異なる点から在地産と判断されるが、子壺配置や親壺及び脚部スカシ配置からみてＣ１型をモデルとした製品であると考えられる（池淵 2004）。上塩冶築山古墳の子持壺の脚部外面調整はヨコナデ・ヨコハケ等の横方向の調整原理が卓越しているが、こうした特徴はＣ１型では山代二子塚古墳と東淵寺古墳以外には認められない。この点から東淵寺古墳出土の子持壺がそのモデルとなった可能性も考慮されよう。

次に当古墳の立地に注目してみたい。当古墳の南側は古代山陰道（正西道）推定地となっており（平石 2009）、後円部南側の里道も道Ｂとしてその候補の一つとされている（勝部 1993）。このように、当古墳の立地は山陰道沿いに西から意宇中枢部へ至る玄関口を意識した占地と言えよう。



第 98 図　東淵寺・上塩冶築山古墳出土の埴輪・子持壺



第 99 図　東淵寺・上塩冶築山古墳出土埴輪のハケメパターン

以上述べてきたように、当古墳の被葬者は、出雲西部の最高首長との密接な交通関係が認められる点、意宇中枢への西の玄関口に立地するという点、そしてC型子持壺や皮袋形土器にみられるように基本的には意宇中枢首長層の要素を備えている点などを考慮すれば、意宇地域の首長である一方、出雲西部の最高首長との交通関係を有していたという被葬者像が想定できる。具体的にどの地域の首長かまでは明言できないが、大谷3期段階（10期）の首長墓の分布状況を鑑みれば、玉湯川（玉作川）流域から忌部川（野代川）にかけての意宇郡西部地域がその候補として想定されよう。

4. 結語

以上、意宇中枢周辺に位置する3基の前方後円墳についてその位置づけを試みてみた。無論、個々の論証は十分なものではなく、埋葬施設や副葬品も不明な現段階において、こうした想定を行うことは無謀かもしれない。ただ、当該期の意宇平野周辺における首長墓集中化現象という様相を読み解くうえでの一つの作業仮説としての意義はあると認識している。

なお、特定地域への首長墓集中化という現象は、当該期の意宇中枢に限ってみられる現象ではなく、先述のとおり5世紀の大橋川沿岸においても先駆的形態が看取されるし、規模は全く異なるが古墳時代初頭のオオヤマト古墳群の形成も多分に同様な現象と想定され、各時代において起こりうる現象と考えられる。

こうした首長層の結集化現象がいかなる要因で生じるかは当然それぞれの事例で異なっており、個別に実証的な検討が必要となるが、一言述べておくと外圧的要因によってこうした現象が生じる傾向を認めることができそうである。当該事例について言えば、当地に首長墓が集中する6世紀後半には、出雲平野の今市塩冶古墳群・古志古墳群・刈山古墳群や淀江平野の向山古墳群・瓶山古墳群など、程度の差こそあれ同様な首長墓結集化現象を認めることができ、それらは同根の事由に基づくものであった可能性が非常に高い。こうした山陰各地における首長層結集化・再編化の背景として如何なる要因が考えられるのか、そしてそれに対しどのような歴史的評価を与えることができるのか、今後の具体的な研究の進展が望まれる。

〈註〉

(1) 古墳の計測データは、基本的には本庄考古学研究室2004及び同2005に基づくが、東淵寺と魚見塚については本報告の数値に基づいているほか、測量図の読み取り値から一部改変した箇所がある（備考参照）。

(2) 手間古墳は後円部径がやや大きいが、これは基壇を含めた数値で、後円部3段分の径は32.5 mで、他の古墳とほぼ一致する。

(3) ちなみに前方後方墳の場合には、出現期の松本3号墳の全長50 m、後方部辺30 mという枠組みが踏襲され、中期末の宮山1号墳や竹矢岩舟古墳などの前方後方墳の再出現の際にもその目安とされていた可能性が考えられる。

(4) 対照的に石見部の小丸山古墳は9期の畿内の前方後円墳プランをモデルに築造された可能性が濃厚である（曳野1988）。また出雲でも出雲市妙蓮寺山古墳のように、前方部が高所に位置して前方部が大きく開き、岡山県江崎古墳との類似性が指摘されるような、他地域との関連が想定される事例も存在する。

(5) 内田律雄は出雲における前方後円墳の分布と『出雲国風土記』に記載されている正倉の位置が一致する事例が多い点から、これらの前方後円墳について屯倉を所管する県主的な王権と直結する被葬者像を想定する（内田1980）。屯倉の設置時期はさておき、特に中期前方後円墳の分布と『風土記』記載の正倉が一致する事例が多い点は注目に値する。

(6) 平石充は出雲国造と意宇郡大領兼帯慣例の検討より、出雲臣廣島と弟山が別な基盤によっており、族長位の継承は広く傍系親族間における移動がみられたと理解する（平石1996）。飯石郡に基盤を持つ首長が意宇に別業を持っていたとも理解可能であるが、いずれにせよ両地域間に密接な関係があったことは間違いない。

(7) 魚見塚古墳の後円部最上段には径10 m程の円丘が載っており、これを除いた場合の比較に基づく。

(8) なお、手間古墳の造出状地形は、形象埴輪が集中して出土している点から一種の墳丘別区的な存在として理解することができる。東淵寺古墳の後円部南西側の周溝が途切れる土橋状の遺構についても付近で形象埴輪が出土している点から同様な理解が可能かもしれない。このような別区の存在は米子市向山4号墳や岩屋古墳などにも認められ、北部九州と山陰との広域的な地域間交流の中でその位置づけを検討する必要があろう。いずれにせよ手間古墳の造出状遺構は一

義的には墳丘下段省略化の工程に組み込まれた所産と理解できる。

(9) ただし装飾付器台は団原古墳例以外では当地で類例を見出し難く、他地域系の須恵器である可能性はある。

(10) 東淵寺古墳及び上塩冶築山古墳出土の円筒埴輪の評価については、田中大氏に全面的に御教示いただいた。

(11) 当古墳の埴輪のハケメについて、今回試験的に上塩冶築山古墳資料と比較したところ、２種類のハケメパターンの一致が認められた。ハケメ原体全体が復元できた訳ではなく、他人の空似の可能性も否めないが、両古墳の胎土や技法など他の特徴が酷似する点、特にともに大型白色粘土粒を含む胎土を共有する点からここで取り上げた。いずれにせよ、東西出雲の代表的後期古墳間でハケメパターンが共有されることが事実ならば派生する問題は大きく、本格的な検討は今後の課題としたい。

〈参考文献〉

池淵俊一 2004「出雲型子持壺の変遷とその背景」『考古論集　河瀬正利先生退官記念論集』河瀬正利先生退官記念事業会
池淵俊一 2012「古曽志大塚古墳群の位置づけ」『松江市廟所古墳発掘調査報告書 附 古曽志大塚古墳群、平廻古墳』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター
池淵俊一 2014「土器からみた古墳時代中期の東西出雲」『倭の五王と出雲の豪族』島根県立古代出雲歴史博物館
池淵俊一 2015a「出雲の古墳編年について」『前方後方墳と東西出雲の成立に関する研究』島根県古代文化センター
池淵俊一 2015b「出雲における中・後期前方後方墳の成立と展開」『前方後方墳と東西出雲の成立に関する研究』島根県古代文化センター
内田律雄 1980「出雲の前方後円墳について」『山陰史談』16 山陰歴史研究会
大谷晃二 1996「総括」『御崎山古墳の研究』島根県立八雲立つ風土記の丘
大谷晃二 1997「「出雲国」の支配者たち」『古代出雲文化展図録』島根県教育委員会・朝日新聞社
大谷晃二 2011「山陰」『講座日本の考古学 7 古墳時代 上』青木書店
角田徳幸 2008「出雲国府下層の古墳時代集落」『島根考古学会誌』第 25 集 島根考古学会
勝部　昭 1993「正西道の検討」『出雲古代史研究』第 3 号出雲古代史研究会
加藤義成 1957『修訂出雲国風土記参究』今井書店
島根県教育委員会 1998『門生黒谷Ⅰ遺跡・門生黒谷Ⅱ遺跡・門生黒谷Ⅲ遺跡』
島根県古代文化センター 2014『解説　出雲国風土記』今井出版
高橋智也 2004「上塩冶築山古墳出土の円筒埴輪について」『上塩冶築山古墳』出雲市教育委員会
武廣亮平 1995「額田部臣と部民制」『古代王権と交流 7　出雲世界と古代の山陰』名著出版
田中　大 2012「山陰地方における古墳時代後期円筒埴輪の様相」『後期埴輪の特質とその地域的展開』中国四国前方後円墳研究会
田中史生 2002「渡来人と王権・地域」『倭国と東アジア』吉川弘文館
仁木　聡 2014「出雲西部の豪族たち」『倭の五王と出雲の豪族』島根県立古代出雲歴史博物館
仁木　聡 2015「巨大方墳の被葬者像」『前方後方墳と東西出雲の成立に関する研究』島根県古代文化センター
丹羽野裕・原田敏照 2009「豪族居宅の復元」『出雲国府周辺の復元研究』島根県古代文化センター
野島　永 1995「古墳時代の有肩鉄斧をめぐって」『考古学研究』第 41 巻第 4 号 考古学研究会
曳野律夫 1988「墳丘からみた小丸山古墳の年代」『島根考古学会誌』第 5 集 島根考古学会
平石　充 1996「八・九世紀の出雲臣について」『出雲古代史研究』第 6 号 出雲古代史研究会
平石　充 2009「山陰道の復元」『出雲国府周辺の復元研究』島根県古代文化センター
廣瀬　覚 2015「埴輪生産組織の諸相とその背景」『古代王権の形成と埴輪生産』同成社
深澤太郎 2008「出雲「額田部臣」再考」『國學院雑誌』109 巻 11 号
本庄考古学研究室 2004「出雲の主要古墳一覧（改訂版）」『島根考古学会誌』第 20・21 集合併号 島根考古学会
本庄考古学研究室 2005「出雲の主要古墳一覧（補遺Ⅰ）」『島根考古学会誌』第 22 集 島根考古学会
松江市教育委員会・(財) 松江市教育文化振興事業団 1995『黒田畦遺跡発掘調査報告書』
松尾充晶・平石充 2015「東西出雲の覇権－山代二子塚古墳の出現－」『松江市史 通史編 1 自然環境・原始・古代』松江市
三刀屋町教育委員会 1989『要害の首塚・地王砦発掘調査報告書』
村上恭通 2004「古墳時代における鍛冶具副葬古墳と被葬者像」『考古論集』河瀬正利先生退官記念事業会
守岡正司 1996「来待石を使った古墳」『宍道町歴史叢書 1 』宍道町教育委員会
山本　清・松本岩雄 1988「総括」『出雲国岡田山古墳』島根県教育委員会
米田克彦 2002「島根県安来市大原遺跡における玉生産」『古代文化研究』10 島根県古代文化センター
米田克彦 2009「六重城南 1 号墳出土の鉄製品について」『六重城南遺跡・瀧坂遺跡・鉄穴内遺跡』島根県教育委員会
渡辺貞幸 1986「山代・大庭古墳群と五・六世紀の出雲」『山陰考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念論集刊行会
渡辺貞幸 1997「出雲の方墳、出雲の前方後方墳」『古代出雲文化展図録』島根県教育委員会・朝日新聞社
渡辺貞幸 2002「まとめと若干の考察」『松江市手間古墳発掘調査報告・薬師山古墳出土遺物について』島根大学法文学部考古学研究室

表６　魚見塚古墳　遺物観察表

Fig	№.	調査区	地点	層位	種別	器種	遺存	口径	器高	底径	胎土	焼成	色　調		備　考
14	1	T2		2層	須恵器	坏蓋	小片	-	1.4～	6.2	1㎜以下の白色粒・黒色粒少量	良好	灰色	外：N5/0 内：N6/0	坏身の可能性あり
14	2	T2		2層	須恵器	坏蓋	小片	-	1.4～	7.3	1㎜以下の白色粒・黒色粒少量	良好	灰色	N6/0	坏身の可能性あり
14	3	T2			須恵器	坏蓋	小片	-	3.1～	-	1㎜以下の白色粒微量	良好	灰色	外：10Y5/1 内：N6/0	口縁端部：γ２類か
14	4	T2		2層	須恵器	坏蓋	小片	-	1.9～	-	0.5㎜以下の白色粒少量	良好	灰色	外：N4/0 内：N6/0	口縁端部：β類に近い
14	5	T2		2層	須恵器	坏蓋	小片	-	1.7～	-	0.5㎜以下の白色粒少量	良好	灰色	外：10Y5/1 内：N6/0	口縁端部：α３～４類
14	6	T2			須恵器	坏蓋	小片	-	1.7～	-	0.5㎜以下の白色粒少量	良好	外：暗灰色 内：灰色	外：N3/0 内：N5/0	口縁端部：α３～４類
14	7	T2		2層	須恵器	坏身	1/2 以上	-	3.0～	6.2	1㎜以下の白色粒・黒色粒多量	良好	外：灰色 内：灰白色	外：7.5Y6/1 内：7.5Y7/1	
14	8	T2		2層	須恵器	坏身	1/2 以上	-	1.4～	6.0	1㎜以下の白色粒・黒色粒多量	良好	外：灰色 内：灰白色	外：5Y5/1 内：5Y7/2	坏蓋の可能性あり
14	9	T2			須恵器	坏身	小片	-	1.8～	-	0.5㎜以下の白色粒・黒色粒多量	良好	外：灰色 内：灰白色	外：7.5Y6/1 内：7.5Y7/1	
14	10	T2			須恵器	無蓋高坏	1/4 以上	(10.2)	3.2～	-	2㎜以下の白色粒多量、1㎜以下の黒色粒中量	良好	外：オリーブ黒色 内：灰色	外：7.5Y3/1 内：7.5Y4/1	
14	11	T2			須恵器	高坏	1/4	-	4.7～	-	1㎜以下の白色粒・黒色粒多量	不良	灰色	10Y5/1	３方スカシ
14	12	T2			須恵器	甕	小片	-	16.0～	-	1㎜以下の砂粒多量、黒色粒なし	良好	オリーブ灰色	2.5GY6/1	
14	13	T2		2層	須恵器	甕	小片	-	4.05～	-	1㎜以下の白色粒少量、黒色粒なし	良好	灰色	外：N5/0 内：N6/0	
14	14	T2		2層	須恵器	甕	小片	-	5.4～	-	1㎜以下の白色粒少量、黒色粒なし	良好	灰色	外：N5/0 内：5Y6/1	
14	15	T2		2層	須恵器	甕	小片	-	9.3～	-	2㎜以下の白色粒少量、黒色粒なし	良好	灰色	N5/0	
14	16	T2		2層	須恵器	甕	1/8	-	10.5～		2㎜以下の白色粒少量、黒色粒なし	良好	灰色	外：7.5Y5/1 内：N5/0	
14	17	T2		2層	須恵器	甕	1/16	-	4.8～	-	2㎜以下の白色粒少量	良好	灰色	外：N5/0 内：N6/0	
14	18	T2		2層	須恵器	甕	1/6	-	3.5～	-	1㎜以下の白色粒少量	良好	灰色	外：N6/0 内：N6/0	
14	19	T2		2層	須恵器	甕	1/8	-	4.1～	-	1㎜以下の白色粒少量、黒色粒なし	良好	灰色	N6/0	
14	20	T2		2層	須恵器	壺又は甕	1/4	-	2.4～	-	1㎜以下の白色粒少量、2㎜以下の黒色粒多量	良好	灰色	7.5Y6/1	
14	21	T2		2層	須恵器	甕	小片	-	14.9～	-	1㎜以下の白色粒少量	良好	灰色	外：N6/0 内：N4/0	
15	1	T2		2層	須恵器	子持壺	1/6	-	5.7～	-	1㎜以下の白色粒少量、黒色粒多量	良好	灰色	外：N5/0 内：N6/0	
15	2	T2		2層	須恵器	子持壺	1/8	-	4.1～	-	1㎜以下の白色粒少量、黒色粒多量	良好	灰色	外：N5/0 内：N6/0	
15	3	T2		2層	須恵器	子持壺	1/6	-	8.0～	-	1㎜以下の白色粒・黒色粒少量	良好	灰色	外：N4/0 内：N5/0	
15	4	T2		2層	須恵器	子持壺	1/6	-	9.3～	-	1㎜以下の白色粒少量、黒色粒多量	良好	灰色	外：5Y5/1 内：5Y6/1	
15	5	T2		2層	須恵器	子持壺	1/4	-	11.0～	-	1.5㎜以下の白色粒少量、1㎜以下の黒色粒多量	やや不良	灰色	外：N5/0 内：N6/0	
15	6	T2		2層	須恵器	子持壺	1/4	-	18.2～	-	1㎜以下の白色粒・黒色粒少量	良好	灰色	外：N4/0 内：N6/0	
15	7	T2		2層	須恵器	子持壺	全周	-	17.2～	-	1㎜以下の白色粒少量、黒色粒多量	良好	灰色	7.5Y6/1	
15	8	T2		2層	須恵器	子持壺	1/8	-	12.2～	(18.4)	1㎜以下の白色粒少量、黒色粒多量	不良	外：灰色 内：灰白色	外：10Y6/1 内：N7/0	
15	9	T2		2層	須恵器	子持壺	小片	-	3.1～	-	0.5㎜以下の白色粒微量、黒色粒多量	良好	外：灰色 内：灰白色	外：7.5Y5/1 内：N7/0	親壺円形スカシ
15	10	T2		2層	須恵器	子持壺	1/12	-	4.4～	-	1㎜以下の白色粒微量、黒色粒多量	やや不良	灰白色	外：5Y6/1 内：N7/0	親壺円形スカシ
15	11	T2		2層	須恵器	子持壺	小片	-	4.6～	-	0.5㎜以下の白色粒微量、黒色粒多量	良好	灰色	外：N5/0 内：N6/0	親壺円形スカシ
15	12	T2		2層	須恵器	子持壺	1/8	-	3.7～	-	0.5㎜以下の黒色粒少量	不良	外：灰色 内：灰白色	外：N6/0 内：N7/0	
15	13	T2		2層	須恵器	子持壺	1/4	-	5.0～	-	0.5㎜以下の白色粒少量	やや不良	灰白色	7.5Y7/1	
15	14	T2		2層	須恵器	子持壺	1/4	-	3.8～	-	1㎜以下の白色粒・黒色粒多量	良好	灰色	外：N4/0 内：N5/0	
15	15	T2		2層	須恵器	子持壺	1/3	-	8.0～		2㎜以下の白色粒・黒色粒多量	良好	灰色	7.5Y6/1	柳浦ａ手法
15	16	T2		2層	須恵器	子持壺	1/4	-	5.0～	-	1㎜以下の白色粒少量	良好	灰色	外：N4/0 内：N6/0	柳浦ａ手法
15	17	T2		2層	須恵器	子持壺	1/4	-	4.8～	-	0.8㎜以下の白色粒少量	良好	外：灰色 内：灰白色	外:7.5Y6/1 内：N7/0	柳浦ａ手法
15	18	T2		表土	土師器	竈	庇片	-	3.0～	-	1㎜以下の白色粒多量、赤色粒少量含み、粗い	良好	外：黄橙色 内：黄褐色	外：10YR7/4 内：10YR5/3	
19	1	T3		盛土 上面	須恵器	坏蓋	1/8	(14.0)	5.0～	-	1㎜以下の白色粒・黒色粒少量	良好	灰色	7.5Y6/1	口縁端部：α３類
19	2	T3		表土	須恵器	坏蓋	小片	-	3.6～	-	1㎜以下の白色粒・黒色粒多量	良好	外：灰ｵﾘｰﾌﾞ 内：ｵﾘｰﾌﾞ黄	外：5Y6/2 内：5Y6/3	口縁端部：α４類か
19	3	T3		表土	須恵器	子持壺？	1/5	(10.4)	4.3～	-	1㎜以下の白色粒微量、黒色粒少量	良好	外：灰色 内：灰黄色	外:N4/0 内：2.5Y6/2	
19	4	T3 墳丘		表土	須恵器	子持壺	小片	-	5.2～	-	1㎜以下の白色粒少量、黒色粒多量	良好	外：灰ｵﾘｰﾌﾞ 内：灰色	外：5Y4/2 内：5Y6/1	親壺円形スカシ
19	5	T3		盛土 上面	須恵器	子持壺	1/8	-	7.8～	(19.0)	1㎜以下の白色粒・黒色粒多量	良好	灰色	7.5Y6/1	大きく歪む

Fig	No.	調査区	地点	層位	種別	器種	遺存	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調		備考
19	6	T3		表土	須恵器	子持壺	1/6	-	12.2～	(26.4)	1㎜以下の白色粒少量、黒色粒多量	不良	灰白色	N7/0	大きく歪む
19	7	T3		表土	須恵器	子持壺	1/12	-	-	(22.2)	1㎜以下の白色粒微量、黒色粒多量	良好	外：灰色 内：灰白色	外：N6/0 内：5Y7/2	親壺口縁部の可能性あり 大きく歪む
19	8	T3 他	東墳丘	上層 ・表土	須恵器	子持壺	1/12	-	3.0～	(24.0)	1㎜以下の白色粒少量、黒色粒多量	良好	灰色	外：N5/0 内：5Y6/1	
19	9	T3		2層	須恵器	子持壺	1/8	(13.0)	5.5～	-	1㎜以下の白色粒・黒色粒多量	良好	灰色	外：7.5Y5/1 内：7.5Y6/1	
19	10	T3		表土	須恵器	子持壺	1/6	(11.5)	3.6～	-	1㎜以下の白色粒微量、黒色粒多量	良好	外：灰色 内：灰黄～灰色	外：N4/0 内：2.5Y7/2～N6/0	
19	11	T3 東墳丘		表土	須恵器	子持壺	1/12	(12.0)	4.0～	-	0.5㎜以下の黒色粒少量	良好	外：灰色 内：灰黄色	外：5Y4/1 内：2.5Y6/2	
19	12	T3 東墳丘		表土	須恵器	子持壺	1/6	(12.4)	2.9～	-	1㎜以下の砂粒中量、黒色粒多量	良好	灰色	7.5Y5/1	
19	13	T3		1層	須恵器	子持壺	胴部全周	-	6.5～	-	1㎜以下の黒色粒多量	良好	灰色	外：7.5Y5/1 内：7.5Y6/1	柳浦a手法
19	14	T3	SD02 上	上層	須恵器	子持壺	小片	-	2.1～	-	0.5㎜以下の白色粒少量	良好	灰色	外：5Y5/1 内：5Y6/1	柳浦a手法
19	15	T3		表土	土師器	高坏	小片	-	1.6～	-	1.5㎜以下の白色粒やや多く、マーブル状	良好	橙色	5YR6/6	接合法γ
19	16	T3 北		表土	土師器	高坏	小片	-	1.4～	-	2㎜以下の白色粒中量含み、マーブル状	良好	橙色	5YR7/8	接合法γ
19	17	T3 付近		表採	弥生土器	高坏 器台	1/12	-	2.0～	(16.0)	0.5㎜以下の白色粒微量	良好	橙色	7.5YR7/6	
19	18	T3 墳丘		表土	土師器・ 弥生土器	甕	取手片	-	8.4～	-	2㎜以下の白色粒多量、1㎜以下の赤色粒少量	良好	外：浅黄橙色 内：にぶい黄橙色	外：10YR8/4 内：10YR7/4	
20	1	T3	SD02		須恵器	有蓋高坏 蓋	完形	14.0	4.5	-	2㎜以下の白色粒多量	良好	灰色	N6/0	第20図3の蓋か 口縁端部β類
20	2	T3	SD02		須恵器	有蓋高坏 蓋	完形	13.9	4.6	-	2～3㎜の白色粒少量、2㎜以下の白色粒多量	良好	灰色	N6/0	第20図4の蓋か 口縁端部β類
20	3	T3	SD02		須恵器	有蓋高坏	完形	13.9	17.6	13.7	1㎜以下の白色粒少量	良好	灰色	外：N6/0～7.5Y5/1 内：N6/0	第20図1の身か 2段3方千鳥三角形スカシ
20	4	T3	SD02		須恵器	有蓋高坏	完形	13.8	17.6	14.0	2.5㎜以下の白色粒少量	良好	外：灰～灰白色 内：灰色	外：N5/0～5Y7/2 内：N6/0	第20図2の身か 2段3方千鳥三角形スカシ
20	5	T9	SD02	1・2 層	須恵器	直口壺	1/2 以下	(10.4)	10.9	5.4	1㎜以下の白色粒多量	良好	灰色	外：N6/0～7.5Y4/1 内：N6/0	
20	6	T3	SD02		弥生土器 土師器	低脚坏	1/2	-	2.3～	4.7	2㎜以下の白色粒多量	良好	外：橙色 内：黄橙色	外：7.5YR7/6 内：7.5YR7/8	草田5期～
20	7	T3	SD02		弥生土器 土師器	低脚坏	1/4	-	2.0～	3.8	2㎜以下の白色粒多量	良好	外：にぶい黄橙色 内：橙色	外：10YR7/4 内：7.5YR7/6	草田5期～
20	8	T3	SD02		土師器	注口土器	注口片	-	3.0～	-	2㎜以下の白色粒多量	良好	橙～明黄褐色	5YR6/8～10YR6/6	草田4～6期
20	9	T3	SD02		石器	スクレーパー	完形	長径3.8	短径2.3	厚1.4	黒曜石製		黒色	5B1.7/1	重量12.5g
22	1	T3 北拡張		表土	須恵器	子持壺	1/8	(20.6)	4.6～	-	1㎜以下の白色粒微量、黒色粒多量	良好	外：灰色 内：灰黄色	外：5Y4/1 内：2.5Y6/2	
22	2	T3 北拡張		表土	須恵器	子持壺	1/12	(21.0)	4.2～	-	1㎜以下の白色粒・黒色粒少量	良好	灰色	外：5Y4/1 内：7.5Y6/1	
22	3	T3 北拡張		表土	須恵器	子持壺	小片	-	3.9～	-	0.5㎜以下の白色粒・黒色粒少量	良好	灰色	10Y6/1	親壺円形スカシ
22	4	T3 北拡張		表土	須恵器	子持壺	1/6	-	19.6～	-	1㎜以下の白色粒・黒色粒少量	不良	灰白色	5Y7/1	
22	5	T3 北拡張		表土	須恵器	子持壺	1/6	-	6.2～	-	1㎜以下の白色粒少量、黒色粒多量	良好	外：浅黄色 内：灰色	外：2.5Y7/3 内：N5/0	
22	6	T3 北拡張		表土	須恵器	子持壺	1/8	-	5.5～	(30.4)	1㎜以下の白色粒微量、黒色粒多量	不良	灰白～灰黄色	2.5Y8/1～7/2	
22	7	T3 北拡張		表土	須恵器	子持壺	1/4	-	18.4～	-	1㎜以下の白色粒少量、黒色粒多量	良好	灰色	外：N5/0 内：10Y6/1	
22	8	T3 北拡張		表土	須恵器	子持壺	1/6	(12.9)	5.3～	-	1㎜以下の白色粒・黒色粒少量	良好	灰色	外：N5/0 内：5Y5/1	
22	9	T3 北拡張		表土	須恵器	子持壺	1/3	11.2	3.5～	-	1㎜以下の砂粒中量、黒色粒多量	良好	外：灰色 内：灰オリーブ色	外：7.5Y4/1 内：7.5Y4/2	
22	10	T3 北拡張		表土	須恵器	子持壺	1/4	-	8.5～	-	1㎜以下の白色粒少量、2㎜以下の黒色粒多量	良好	灰色	N5/0	柳浦a手法
22	11	T3 北拡張			須恵器	子持壺	1/6	-	5.3～	-	1㎜以下の白色粒少量	良好	灰色	N6/0	
22	12	T3 北拡張		表土	須恵器	子持壺	1/4	-	5.1～	-	1㎜以下の白色粒・黒色粒多量	良好	外：灰色 内：灰オリーブ色	外：5Y5/1 内：5Y5/2	
22	13	T3 北拡張		表土	須恵器	子持壺	1/4	-	5.7～	-	0.5㎜以下の白色粒微量、1㎜以下の黒色粒多量	良好	灰色	外：N5/0 内：5Y6/1	
22	14	T3 北拡張		表土	須恵器	子持壺	1/12	-	3.0～	-	1㎜以下の白色粒・黒色粒少量	良好	灰色	7.5Y6/1	柳浦a手法
22	15	T3		旧表土	須恵器	坏身	1/12	(13.8)	2.7～		1㎜以下の白色粒多量	良好	灰色	外：10Y5/1 内：10Y6/1	
22	16	T3		旧表土	土師器	高坏	小片	-	5.3～	-	1㎜以下の白色粒中量	良好	橙色	7.5YR6/6	外面赤彩残存
26	1	T5		表土	須恵器	坏蓋 坏	1/8	-	1.4～	-	1㎜以下の白色粒微量	良好	外：灰色 内：灰白～灰オリーブ色	外：5Y4/1 内：5Y7/1～5/2	
26	2	T5・6		表土	須恵器	坏蓋	小片	-	2.8～	-	1㎜以下の白色粒少量	良好	灰色	N6/0	A3a型 口縁端部：α類
26	3	T5			須恵器	坏身	小片	-	3.4～	-	0.5㎜以下の白色粒微量	良好	外：灰色 内：灰白色	外：7.5Y6/1 内：5Y8/1	
26	4	T5		1層	須恵器	甕	小片	-	14.2～	-	1㎜以下の白色粒多量	良好	外：灰オリーブ色 内：灰色	外：7.5Y5/2 内：7.5Y6/1	

Fig	No.	調査区	地点	層位	種別	器種	遺存	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調		備考
26	5	T6		表土	須恵器	子持壺？	1/4	-	6.8 ～	-	1.5㎜以下の白色粒・黒色粒少量	良好	外：オリーブ灰色 内：灰～灰白	外：10Y6/2 内：5Y5/1 ～ 7/2	
26	6	T5・6 拡張		2 層	須恵器	子持壺	1/8	-	2.7 ～	-	1㎜以下の白色粒中量、黒色粒多量	良好	灰色	7.5Y6/1	
26	7	T6		表土	須恵器	子持壺	小片	-	-	-	1㎜以下の白色粒少量、黒色粒多量	良好	灰色	外：5Y4/1 内：5Y5/1	
26	8	T6		表土	須恵器	子持壺	1/4	-	7.6 ～	-	1㎜以下の白色粒・黒色粒少量	良好	外：灰黄～暗オリーブ色 内：灰色	外：2.5Y6/2 ～ 7.5Y4/3 内：5Y6/1	
26	9	T6 拡張		表土	須恵器	子持壺	1/6	-	8.3 ～	-	1㎜以下の白色粒少量、黒色粒多量	不良	灰白色	5Y7/1	
26	10	T6		表土	須恵器	子持壺	小片	-	5.0 ～	-	0.5㎜以下の白色粒・黒色粒少量	良好	灰色	外：N4/0 内：N6/0	親壺円形スカシ
26	11	T6		表土	須恵器	子持壺	1/6	-	5.4 ～	(16.2)	1㎜以下の白色粒・黒色粒多量	良好	外：灰～灰黄 内：灰色	外：N5/0 ～ 2.5Y6/2 内：5Y5/1	
26	12	T6 東 T9		1 層 表土	須恵器	子持壺	1/7	-	3.9 ～	(24.0)	1㎜以下の白色粒少量、黒色粒多量	良好	灰色	外：N6/0 内：10Y6/1	
26	13	T6		表土	須恵器	子持壺	1/6	-	6.8 ～	-	2㎜以下の白色粒・黒色粒多量	良好	外：灰オリーブ～灰黄色 内：灰色	外：5Y5/2 ～ 2.5Y7/2 内：5Y6/1	
26	14	T5・6 拡張		2 層	須恵器	子持壺	1/8	-	5.0 ～	(25.6)	1㎜以下の白色粒少量、2㎜以下の黒色粒多量	不良	灰白色	外：7.5Y7/1 内：7.5Y8/1	
26	15	T5・6 拡張		表土	須恵器	子持壺	1/12	(12.6)	2.3 ～	-	1㎜以下の白色粒少量	良好	外：灰色 内：にぶい黄	外：5Y4/1 内：2.5Y6/3	
26	16	T3・T5		表土	須恵器	子持壺	1/6	(10.8)	3.0 ～	-	1㎜以下の黒色粒多量	良好	灰色	外：N4/0 内：N6/0	
26	17	T6		表土	須恵器	子持壺	体部全周、口縁 1/8	(12.7)	10.7 ～	-	2㎜以下の黒色粒多量	良好	外：灰色 内：灰オリーブ色	外：7.5Y6/1 内：7.5Y6/2	柳浦 a 手法
26	18	T5		表土	須恵器	子持壺	1/6	(12.8)	4.7 ～	-	1㎜以下の白色粒少量、黒色粒多量	不良	灰白色	外：5Y8/1 内：5Y7/1	
26	19	T6		表土	須恵器	子持壺	1/10	(11.7)	4.3 ～	-	1㎜以下の白色粒微量、黒色粒少量	良好	外：灰色 内：灰黄～灰色	外：N4/0 内：2.5Y7/2 ～ N6/0	
26	20	T5		表土	須恵器	子持壺	1/12	(12.0)	2.8 ～	-	1㎜以下の黒色粒多量	良好	外：灰色 内：灰黄色	外：N4/0 内：2.5Y7/2	
26	21	T5・6 拡張		2 層	須恵器	子持壺	1/8	(12.8)	3.9 ～	-	1㎜以下の白色粒少量、黒色粒微量	良好	外：灰～オリーブ黒色 内：灰色	外：7.5Y6/1 ～ 3/2 内：7.5Y5/1	
26	22	T6		表土	須恵器	子持壺	1/4	-	3.6 ～	-	1㎜以下の白色粒少量、黒色粒多量	良好	外：灰～灰オリーブ色 内：灰～黒色	外：7.5Y6/1 ～ 4/2 内：5Y5/1 ～ 7.5Y2/1	柳浦 a 手法
26	23	T5		1 層	須恵器	子持壺	1/4	-	5.5 ～	-	1㎜以下の黒色粒多量	良好	灰色	5Y6/1 ～ N4/0	柳浦 a 手法
26	24	T5 拡張			須恵器	子持壺	1/4	-	4.7 ～	-	1㎜以下の白色粒少量、黒色粒多量	良好	外：灰～灰オリーブ色 内：灰色	外：7.5Y6/1 ～ 5/2 内：7.5Y5/1	柳浦 a 手法
27	1	T5・6	NSST	旧表土	弥生土器	壺又は甕	1/12 以下	-	2.9 ～	-	1㎜以下の白色粒多量	良好	外：浅黄色 内：明黄褐色	外：2.5Y7/4 内：10YR7/6	
27	2	T5・6	ST	旧表土	弥生土器	高坏	小片	-	3.5 ～	~	1㎜以下の白色粒多量	良好	外：にぶい黄橙色 内：灰白色	外：10YR7/3 内：2.5Y8/2	脚部内面棒状軸痕
27	3	T5			弥生土器 土師器	甑	取手片	-	3.6 ～	-	2㎜以下の白色粒多量	良好	橙～にぶい黄橙色	5YR6/6 ～ 10YR7/4	
27	4	T5・6	NSST	旧表土	石器	敲石	完形	長径 13.7	短径 8.1	厚 2.3					重量 304g
27	5	T5・6	NSST	旧表土	石器	不明石製品		長径 8.9	短径 8.5	厚 8.3					重量 452g 直線 4 条刻む
29	1	T7		表土	須恵器	坏蓋	小片	-	1.8 ～	-	0.5㎜以下の白色粒微量	良好	灰色	10Y6/1	口縁端部：α 2 類
29	2	T7		表土	須恵器	甕	小片	-	5.1 ～	-	2㎜以下の白色粒多量、黒色粒少量	不良	灰白色	外：2.5Y8/1 内：2.5Y8/2	
29	3	T7		表土	須恵器	甕	小片	21？	2.6 ～	-	0.5㎜以下の白色粒微量	良好	外：灰～オリーブ黒色 内：灰白色	外：N6/0 ～ 5Y3/1 内：7.5Y7/1	
29	4	T7		表土	須恵器	甕	小片	17？	2.5 ～	-	0.5㎜以下の白色粒微量	良好	外：灰色 内：灰白色	外：5Y4/1 内：5Y7/2	
29	5	T7		表土	須恵器	甕	小片	-	4.3 ～	-	0.5㎜以下の白色粒微量	不良	灰白色	外：2.5Y8/1 内：2.5Y8/2	
29	6	T7		1 層	須恵器	甕？	小片	-	2.0 ～	-	1㎜以下の白色粒・黒色粒多量	不良	灰白色	外：5Y8/2 内：5Y7/1	子持壺の可能性あり
29	7	T7		表土	須恵器	甕	小片	-	9.3 ～	-	1㎜以下の白色粒微量	良好	灰色	外：5Y4/1 内：N6/0	
29	8	T7		表土	須恵器	甕	小片	-	4.1 ～	-	1㎜以下の白色粒少量	良好	外：暗灰色 内：灰色	外：N3/0 内：N4/0	
29	9	T7		表土	須恵器	子持壺	1/4	-	12.6 ～	-	0.5㎜以下の白色粒微量、1㎜以下の黒色粒多量	不良	外：灰黄色 内：灰白色	外：2.5Y7/2 内：2.5Y7/1	
29	10	T7		表土	須恵器	子持壺	小片	-	5.0 ～	-	0.5㎜以下の白色粒微量・黒色粒中量	良好	灰色	外：10Y6/1 内：N6/0	親壺円形スカシ
29	11	T7		表土	須恵器	子持壺	小片	-	5.6 ～	-	0.5㎜以下の白色粒微量・黒色粒多量	良好	灰色	10Y6/1	親壺円形スカシ
29	12	T7		2 層	須恵器	子持壺	1/2	-	5.0 ～	-	1㎜以下の白色粒・黒色粒多量	良好	灰色	7.5Y6/1	柳浦 a 手法
29	13	T7	ST	2 層	弥生土器	壺又は甕	小片	-	2.9 ～	-	2㎜以下の白色粒多量	良好	橙色	外：7.5YR7/6 内：7.5YR6/6	草田 2 期
31	1	T8		墳丘	須恵器	子持壺	1/6	-	11.2 ～	-	1㎜以下の白色粒少量、黒色粒多量	不良	灰黄色	2.5Y7/2	
31	2	T8 付近		排土	須恵器	子持壺	1/3	-	5.4 ～	-	2㎜以下の白色粒少量、黒色粒多量	良好	灰色	外：7.5Y4/1 内：7.5Y5/1	柳浦 a 手法
31	3	T8 付近		排土	須恵器	子持壺	体部全周	-	6.0 ～	-	1㎜以下の白色粒・黒色粒多量	良好	灰色	外：7.5Y6/1 内：7.5Y5/1	柳浦 a 手法
31	4	T8		墳丘	須恵器	坏蓋	小片	-	3.0 ～	-	0.5㎜以下の白色粒微量	良好	灰色	N5/0	口縁端部：α 1 類

Fig	No.	調査区	地点	層位	種別	器種	遺存	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調		備考
31	5	T8	SI02	1層	弥生土器	高坏	小片	-	1.4～	-	1㎜以下の白色粒多量	良好	浅黄橙色	外：7.5YR8/6 内：10YR8/4	接合法α　草田５期～
31	6	T8	ST		弥生土器	甕	小片	-	2.2～	-	1.5㎜以下の白色粒多量	良好	外：にぶい黄褐色 内：浅黄橙色	外：10YR5/3 内：7.5YR8/6	草田２～３期
31	7	T8		墳丘	弥生土器	甕	小片	-	3.1～	-	2㎜以下の白色粒多量	良好	外：にぶい黄橙色	10YR7/4	草田２～３期
32	1		くびれ部	表採	須恵器	子持壺	小片	肩部で27?	4.9～	-	1㎜以下の白色粒少量、黒色粒多量	良好	灰色	外：10Y6/1 内：N6/0	柳浦ａ手法
32	2			排土	須恵器	甑	小片	-	2.65～	-	0.5㎜以下の白色粒微量	良好	外：灰色 内：灰白色	外：N4/0 内：5Y7/1	

表７　東淵寺古墳　遺物観察表

Fig	No.	調査区	地点	層位	種別	器種	遺存	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調		備考
44	1	T1	周溝	８層	須恵器	坏身	1/6	(9.3)	3.45～	-	1㎜以下の白色粒少量	良好	灰色	外：5Y6/1 内：N7/0	
44	2	T1		５層	須恵器	長頸壺？	1/6	-	4.9～	-	1㎜以下の白色粒少量	良好	灰色	5Y6/1	
44	3	T1		２層	須恵器	壺	1/5	-	2.9～	9.1	1㎜以下の白色粒少量	良好	灰色	外：5Y5/1 内：5Y6/1	
44	4	T1		14層	須恵器	蓋	つまみ片	-	-	-	0.5㎜以下の白色粒・橙色粒多量	良好	外：灰黄褐色 断：灰色	外：10YR6/2 断：N6/0	
44	5	T1		３層	須恵器	壺	小片	-	2.8～	-	0.5㎜以下の白色粒微量	良好	外：黒褐色 内：灰色	外：2.5Y3/1 内：5Y5/1	
44	6	T1		排土	須恵器	壺	小片	18？	2.0～	-	0.5㎜以下の白色粒微量	良好	外：ｵﾘｰﾌﾞ灰 内：灰色	外：5Y3/1 内：5Y4/1	
44	7	T1		４層	土製品	土錘		最大径2.8	7.3～	-	2.5㎜以下の砂粒多量	良好	にぶい黄橙色	10YR7/4	
44	8	T1		７層	須恵器	甕	小片	-	-	-	1㎜以下の白色粒やや多量	良好	灰色	外：N5/0 内：N5/0	
44	9	T1		２層 ７層	須恵器	子持壺	1/8	-	13.2～	-	1㎜以下の白色粒多量	良好	灰色	N5/0	三角形又は長台形状スカシ
44	10	T1		４層 表土	須恵器	子持壺	1/5	-	8.1～	-	0.5㎜以下の白色粒多量、２㎜以下も微量	良好	外：暗青灰色 内：青灰色	外：5PB4/1 内：5PB6/1	３段以上４方千鳥長方形又は長三角形状スカシ
45	1	T1		８層	埴輪	形象	脚部片？	-	13.5～	-	2㎜以下の砂粒多量	良好	橙色	外：7.5YR6/8 内：7.5YR8/6	
45	2	T1		７層	埴輪	円筒	1/6	-	9.3～	(18.6)	2㎜以下の白色粒・橙色粒多量	良好	橙色	5YR6/8	外面：ナデ 内面：円柱状当具痕
47	1	T2		表土	須恵器	子持壺	小片	12？	2.1～	-	0.5㎜以下の白色粒微量	やや不良	灰色	5Y5/1	
47	2	T2		黒色土 表土	須恵器	子持壺	1/6	-	8.6～	-	1㎜以下の白色粒少量	良好	灰色	5Y5/1	円形スカシ
47	3	T2		黒色土	須恵器	子持壺	1/4	-	14.0～	-	1㎜以下の白色粒微量	良好	灰色	5Y5/1	長三角形又は長台形スカシ
47	4	T2		表土	須恵器	子持壺	小片	-	5.8～	-	1㎜以下の白色粒少量	良好	灰色	外：10Y6/1 内：N5/0	親壺円形スカシ、脚部長方形？スカシ
47	5	T2		表土	須恵器	子持壺	小片	-	4.6～	-	0.5㎜以下の白色粒微量	良好	灰色	外：N4/0 内：5Y6/1	２段以上長方形状スカシ
47	6	T2		表土 排土	須恵器	子持壺	1/5	-	4.6～	12.6	3㎜以下の白色粒・赤色粒少量	良好	外：灰ｵﾘｰﾌﾞ 内：灰色	外：5Y5/1 内：N6/0	
47	7	T2		表土	須恵器	子持壺	小片	-	5.1～	-	0.5㎜以下の白色粒微量	良好	灰色	外：N5/0 内：N6/0	
47	8	T2		排土	須恵器	子持壺	小片	-	6.0～	-	1㎜以下の白色粒微量	良好	灰オリーブ	5Y6/2	
47	9	T2	周溝他	黒色土 表土	須恵器	子持壺	1/10	-	2.0～	(32.4)	2㎜以下の白色粒微量	良好	灰色	外：5Y5/1 内：5Y6/1	
47	10	T2	周溝他	黒色土 表土	須恵器	子持壺	小片	-	8.8～	-	1㎜以下の白色粒少量	良好	灰色	7.5Y6/1	
47	11	T2	周溝	黒色土	須恵器	子持壺	1/2	-	6.5～	-	1㎜以下の白色粒少量	良好	灰色	外：5Y5/1 内：5Y6/1	柳浦ｂ手法
47	12	T2		表土	須恵器	壺	小片	-	1.9～	-	1㎜以下の白色粒微量	良好	灰色	外：N4/0 内：5Y5/1	
48	1	T2		茶色土	埴輪	円筒	1/3以下	(34.0)	41.2～	-	2㎜以下の砂粒多量、5㎜以下の粘土ブロック含む	良好	橙色	5YR6/8	口縁～胴部：タテハケ 基底部：板状又は円柱状工具タタキ
48	2	T2		黒色土	埴輪	円筒	1/6	-	13.2～	-	2㎜以下の砂粒多量、3㎜以下の粘土ブロック含む	良好	橙色	5YR6/8	ナナメハケ
48	3	T2		黒色土	埴輪	円筒	1/6	-	11.0～	-	2㎜以下の砂粒多量、5㎜以下の粘土ブロック含む	良好	橙色	5YR6/8	外面：ナナメハケ、内面：ナデ
48	4	T2	周溝	黒色土	埴輪	円筒	小片	-	8.4～	-	1㎜以下の砂粒多量	良好	橙色	5YR6/8	板状工具のアタリ
53	1	T2・T3	周溝他	黒色土 ２層 排土	須恵器	坏蓋	1/2	12.6	5.2	-	1㎜以下の白色粒・黒色粒多量	良好	外：暗灰～灰色 内：灰色	外：N3/0～N5/0 内：N6/0	口縁端部：α４類か
53	2	T2・T3		表土 排土	須恵器	坏身	1/8	(10.5)	(4.1)	4.0	3㎜以下の白色粒	良好	外：灰ｵﾘｰﾌﾞ 内：灰色	外：5Y6/2 内：5Y6/1	受部径：12.0㎝
53	3	T3		２層	須恵器	壺	1/4	-	3.5～	-	1㎜以下の白色粒少量	良好	灰色	外：10Y5/1 内：N6/0	
53	4	T3		２層	須恵器	蓋？	小片	-	1.5～	-	1㎜以下の白色粒・黒色粒微量	良好	外：褐灰色 内：灰色	外：N6/0 内：N6/0	
53	5	T3		表土	須恵器	高坏	小片	-	3.3～	～	1㎜以下の白色粒多量	良好	灰色	外：N5/0 内：7.5Y5/1	３方スカシ
53	6	T3		２層・３層	須恵器	長頸壺	1/5	-	9.2～	-	2㎜以下の白色粒	良好	灰色	外：7.5Y4/1 内：7.5Y5/1	
53	7	T3	周溝		須恵器	粘土塊	小片	長径6.1	短径1.6	厚0.8	1㎜以下の白色粒微量	良好	外：灰色 内：灰白色	外：N6/0 内：N7/0	装飾付須恵器接合粘土又は子持壺胴部突帯か

Fig	№	調査区	地点	層位	種別	器種	遺存	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調		備考
53	8	T3	SK04 周溝		須恵器	装飾付器台	1/3	24.9	6.8～	-	1㎜以下の白色粒・黒色粒少量	良好	灰色	外：7.5Y5/1 内：7.5Y6/1	口縁部・坏部内面に剥離痕
53	9	T3			須恵器	装飾付器台	1/6	(29.8)	6.2～	-	1㎜以下の白色粒少量、赤色粒微量	良好	灰色	外：7.5Y6/1 内：10Y5/1	口縁部に剥離痕 53-10 と同一個体か
53	10	T3		9層	須恵器	装飾付器台	1/7	(29.9)	7.2～	-	1㎜以下の砂粒、3㎜大の白色粒少量	良好	灰色	外：10Y6/1	口縁部に剥離痕 53-9 と同一個体か
53	11	T3		2層	須恵器	器台	小片	-	5.8～	-	0.5㎜以下の白色粒微量	良好	外：灰 内：灰色	外：N5/0 内：N6/0	スカシ（形状不明）
53	12	T3		排土	須恵器	甕	小片	-	6.1～	-	1㎜以下の白色粒少量	良好	灰色	外：N4/0 内：N5/0	
53	13	T3	周溝	2層	須恵器	甕	小片	-	10.1～	-	0.5㎜以下の白色粒微量	良好	外：灰色 内：灰色	外：5Y4/1 内：N6/0	
54	1	T3	周溝他	2・3・9層	須恵器	子持壺	1/3	20.5	9.2～	-	1㎜以下の白色粒	良好	灰色	外：N4/0 内：5Y5/1	
54	2	T3	周溝他	2層他	須恵器	子持壺	2/3以下	-	31.6～	-	1㎜以下の白色粒少量	良好	外：青灰色 内：青灰色	外：5B5/1 内：5B5/1	子壺５個配置、親壺５方三角形スカシ、柳浦ｂ手法
54	3	T2・T3	周溝他	黒色土他	須恵器	子持壺	1/3	-	27.1～	-	3㎜以下の白色粒少量	良好	灰色	7.5Y5/1	脚部２段以上３～４方三角形スカシ
54	4	T3	周溝他	2層	須恵器	子持壺	1/6	-	8.8～	-	2㎜以下の白色粒微量	良好	灰色	外：N4/0 内：10Y5/1	親壺三角形スカシ（子壺より下段に千鳥配置）
54	5	T3			須恵器	子持壺	1/5	-	12.2～	22.7	1㎜以下の白色粒多量	良好	灰色	7.5Y6/1	スカシ（形状不明）
54	6	T3		排土	須恵器	子持壺	小片	-	3.1～	-	0.5㎜以下の白色粒微量	良好	灰色	5Y5/1	
54	7	T3		排土	須恵器	子持壺	小片	-	7.0～	-	1㎜以下の白色粒微量	良好	灰色	外：N5/0 内：N6/0	断面小豆色
54	8	T3		2層	須恵器	子持壺	1/6	-	9.6～	-	1㎜以下の白色粒少量	良好	灰色	外：7.5Y5/1 内：7.5Y6/1	沈線より下段にスカシ（形状不明）
54	9	T3	周溝	9・10層	須恵器	子持壺	3/4	9.8	9.1～	-	1㎜以下の白色粒	良好	灰色	外：7.5Y4/1 内：7.5Y5/1	柳浦ｂ手法
54	10	T3	周溝	2層	須恵器	子持壺	1/4	8.9	7.1～	-	1㎜以下の白色粒微量	良好	灰色	7.5Y4/1	
54	11	T3	周溝	10層	須恵器	子持壺	1/2	9.8	10.0～	-	1㎜以下の白色粒多量	やや不良	外：にぶい褐 内：灰ｵﾘｰﾌﾞ	外：7.5YR5/3 内：5Y6/2	
54	12	T3		2層	須恵器	子持壺	1/4	-	3.0～	-	1㎜以下の白色粒少量	良好	灰色	外：7.5Y4/1 内：7.5Y5/1	柳浦ｂ手法
54	13	T3		表土	須恵器	子持壺	小片	-	2.8～	-	2㎜以下の白色粒やや多量	良好	灰色	外：7.5Y5/1 内：7.5Y6/1	子壺底部～親壺の穿孔：長方形、柳浦ｂ手法
54	14	T3	周溝他	9層	須恵器	子持壺	5/6	-	7.2～	-	1㎜以下の白色粒・黒色粒微量	良好	外：青灰色 内：灰白色	外：5PB6/1 内：2.5Y7/1	底なし子壺、柳浦ｂ手法
54	15	T2・T3		表土 排土	須恵器	子持壺	小片	-	3.8～	-	0.5㎜以下の白色粒微量	良好	外：灰色 内：灰色	外：10Y5/1 内：N6/0	子壺底部部分の親壺穿孔大きい
55	1	T2・T3	周溝	3・9層	埴輪	円筒	胴部全周	26.0	44.8	16.2	2㎜以下の砂粒多量、4㎜以下の粘土ブロック多量	良好	明赤褐色	5YR5/8	ナナメハケ、ヨコハケ 基底部：円柱状工具タタキ
55	2	T3			埴輪	円筒	1/8以下	-	15.1～	-	2㎜以下の砂粒多量	良好	橙色	7.5YR6/8	ナナメハケ
55	3	T3	東壁ベルト		埴輪	円筒	1/4	31.0	11.2～	-	2㎜以下の砂粒多量、5㎜以下の粘土ブロック多量	良好	外：橙色 内：明赤褐色	外：7.5YR6/8 内：5YR5/8	ナナメハケ
55	4	T3	周溝南ST	2・9層	埴輪	円筒	3/8以下	33.0	17.3～	-	2㎜以下の砂粒多量、10㎜以下の粘土ブロック含む	良好	明褐色	7.5YR5/8	ナナメハケ
55	5	T3	周溝・ST	2層・撹乱土	埴輪	円筒	1/4	(34.0)	6.0～	-	2㎜以下の砂粒多量、粘土ブロック含む	良好	外：明褐色 内：橙色	外：7.5YR5/8 内：7.5YR6/6	
55	6	T3		2層	埴輪	円筒	1/8以下	(30.6)	6.8～	-	2㎜以下の白色粒多量	良好	橙色	外：5YR7/8 内：7.5YR6/8	
55	7	T3	ST・ベルト	9層	埴輪	円筒	1/2	30.0	20.9～	-	1㎜以下の砂粒多量、粘土ブロック含む	良好	橙色	外：7.5YR6/8 内：5YR6/8	
55	8	T3	周溝		埴輪	円筒	1/8	(26.0)	9.0～	-	2㎜以下の砂粒多、7㎜以下砂粒・粘土ブロック含	良好	橙色	7.5YR6/6	タテハケ
55	9	T3		9層	埴輪	円筒	1/8	-	10.5～	-	5㎜以下の砂粒多量、2㎜以下の粘土ブロック多量	良好	橙色	外：5YR6/8 内：7.5YR6/6	タテハケ
55	10	T3		表土	埴輪	円筒	小片	-	5.6～	-	2㎜以下の砂粒多量、粘土ブロック含む	良好	橙色	5YR6/6	ナナメハケ
55	11	T3		2層・撹乱土	埴輪	円筒	小片	-	5.5～	-	2㎜以下の砂粒多量、粘土ブロック含む	良好	橙色	7.5YR6/6	
55	12	T2・T3		9層	埴輪	円筒	1/4	-	20.5～	-	2㎜以下の砂粒多量、粘土ブロック含む	良好	外：明褐色 内：橙色	外：7.5YR5/8 内：7.5YR6/8	
56	1	T3	周溝・ST	2・3・9層	埴輪	円筒	1/2以上	-	25.9～	(16.5)	2㎜以下の砂粒多、10㎜以下の浅黄橙色ブロック多	良好	明赤褐色	2.5YR5/8	胴部：ナナメハケ 基底部：タタキ
56	2	T3		3層	埴輪	円筒	1/6	-	14.7～	-	1㎜以下の砂粒多量	良好	明褐色	7.5YR5/8	基底部：円柱状工具タタキ
56	3	T3			埴輪	円筒	1/6以下	-	12.0～	-	2㎜以下の砂粒多量、5㎜以下の粘土ブロック多量	良好	黄橙色	7.5YR7/8	胴部：ナナメハケ 基底部内面：円柱状タタキ
56	4	T3	SK04	3・9層	埴輪	円筒	1/6	-	11.0～	-	2㎜以下の砂粒多量、粘土ブロック含む	良好	外：明褐色 内：橙色	外：10YR5/6 内：5YR6/8	タテハケ・ハケ状工具によるナデのちヨコナデか
56	5	T3		2層	埴輪	円筒	1/4以下	-	8.4～	-	2㎜以下の砂粒多量	良好	橙色	5YR6/8	ヨコハケ（静止痕あり）のちタテハケ
56	6	T2・T3	北拡張他	2層・黒色土	埴輪	円筒	1/4以上	-	13.0～	-	2㎜以下の砂粒多量、粘土ブロック含む	良好	橙色	7.5YR6/6	ナナメハケ
56	7	T3		2層	埴輪	円筒	1/4以下	-	5.9～	-	2㎜以下の砂粒多量、2㎜以下の粘土ブロック含む	良好	橙色	外：5YR6/8 内：7.5YR7/6	ナナメハケ
56	8	T3		2層・撹乱土	埴輪	円筒	小片	-	7.4～	-	1㎜以下の白色粒・橙色粒多量	良好	橙色	外：5YR7/8 内：5YR6/6	
57	1	T3	周溝	9層	土師器	甕	1/4	(16.2)	4.3～	-	2㎜以下の砂粒多量	良好	にぶい黄橙色	10YR7/4	
57	2	T2		排土	弥生土器	壺	小片	-	4.3～	-	1㎜以下の砂粒多量	良好	外：浅黄色 内：黄灰色	外：2.5Y7/4 内：2.5Y5/1	刺突文
57	3	T3 北拡張		2層	土師器	Ⅲ	1/4以上	6.9	1.4	4.8	2㎜以下の砂粒多量、6㎜以下の粘土ブロック含む	良好	橙色	外：7.5YR7/6 内：7.5YR6/6	内外面 1/2 程度の範囲にスス付着
57	4	T2	周溝	黒色土	土師器	Ⅲ	2/3	7.1	1.3	4.7	1㎜以下の砂粒中量	良好	にぶい黄橙色	10YR5/3	内外面スス付着
57	5	T2		黒色土	土師器	Ⅲ	ほぼ完形	7.2	1.3	4.7	2㎜以下の砂粒多量、5㎜以下の粘土ブロック含む	良好	橙色	7.5YR7/6	内外面 1/2 程度の範囲にスス付着
57	6	T3 北拡張		2層	土師器	Ⅲ	1/2	7.5	1.2	5.2	1㎜以下の砂粒多、2㎜以下の浅黄橙色ブロック含	良好	橙色	7.5YR7/6	
58	1	T4 拡張	ST 内落込み	黒ボク	須恵器	坏蓋	小片	-	1.0～	-	白色粒微量、黒色粒多量	良好	灰色	5Y6/1	
58	2	T4 拡張		上部黒色土（盛土）	弥生土器	甕	1/8	(14.0)	3.8～	-	2㎜以下の砂粒多量	良好	黄橙色	10YR8/8	

Fig	No.	調査区	地点	層位	種別	器種	遺存	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調		備考
60	1	T5	ST	暗褐色造成土	須恵器	子持壺	1/6	(14.4)	3.9～	-	2㎜以下の白色粒少量	良好	灰色	外：N4/0 内：N6/0	
65	1	T6		暗褐色造成土	須恵器	子持壺	1/8	(14.5)	5.0～	-	1㎜以下の白色粒やや多量	良好	灰色	N5/0	
65	2	T6・T7	周溝	黒色土	須恵器	子持壺	1/12	(19.0)	4.5～	-	1㎜以下の白色粒少量	良好	暗灰～暗赤灰色	N3/0～5R3/1	
65	3	T6		暗褐色土	須恵器	子持壺？	小片	-	2.0～	-	1㎜以下の白色粒少量	良好	灰色	N5/0	
65	4	T6・T7	周溝	黒色土	須恵器	子持壺	1/2	-	13.2～	-	1㎜以下の白色粒多量	良好	青灰色	外：5B6/1～5/1 内：5B6/1	親壺２方以上円形スカシ、脚部４方三角形又は涙滴形スカシ
65	5	T6・T7	周溝	黒色土	須恵器	子持壺	全周	-	15.0～	-	1㎜以下の白色粒・黒色粒多量	良好	外：暗青灰色 内：灰色	外：5B3/1 内：7.5Y6/1	脚部３方形状不明スカシ
65	6	T6・T7	周溝	暗褐色土他	須恵器	子持壺	1/5	-	8.3～	-	1㎜以下の白色粒微量	良好	灰色	外：N5/0 内：N6/0	親壺三角形スカシ
65	7	T6 T7	周溝	暗褐色土他	須恵器	子持壺	1/6	-	15.1～	-	1㎜以下の白色粒・黄色粒多量	良好	灰色	N5/0	脚部上段４方長三角形又は長方形スカシ、下段４方形状不明スカシを千鳥配置
65	8	T2 T6 T7	周溝	暗褐色土他	須恵器	子持壺	1/3	-	14.6～	-	1㎜以下の白色粒・黄色粒多量	良好	灰色	外：N6/0 内：N4/0	脚部２段以上３方千鳥形状不明スカシ（長方形又は長三角形か）
65	9	T6・T7		暗褐色土	須恵器	子持壺	1/4	-	8.2～	-	1㎜以下の白色粒少量	良好	外：暗青灰色 内：灰白色	外：5PB4/1 内：N7/0	脚部３方三角形？スカシ
65	10	T6		暗褐色造成土	須恵器？	子持壺？	小片	-	5.9～	-	1㎜以下の白色粒多量	不良	外：灰黄色 内：灰色	外：2.5Y6/2 内：10Y6/1	断面：橙～灰色 底部：ハケ状工具調整
65	11	T6・T7	周溝	黒色土	須恵器	子持壺	1/6	(10.5)	4.9～	-	0.5㎜以下の白色粒多量	良好	灰～暗赤灰色	N5/0～5R4/1	
65	12				須恵器	子持壺	1/4	10.0	3.0～	-	2㎜以下の白色粒多量	良好	灰色	外：N4/0 内：7.5Y5/1	
65	13	T6		暗褐色土	須恵器	子持壺	1/3	-	2.6～	-	1㎜以下の白色粒微量	良好	外：灰色 断：赤灰色	外：N4/0 断：5R5/1	柳浦ｂ手法
65	14	T7	周溝	黒色土	須恵器	子持壺	1/6	-	3.3～	-	1㎜以下の白色粒微量	良好	外：灰色 断：暗赤灰色	外：N5/0 断：5R4/1	柳浦ｂ手法
65	15	T7		表土	須恵器	壺	1/6	-	3.9～	-	0.5㎜以下の白色粒微量	やや不良	灰色	外：10Y6/1 内：5Y6/1	子持壺の可能性あり
65	16	T7		表土	須恵器	壺瓶類	1/8	-	5.7～	-	1㎜以下の白色粒・黒色粒少量	良好	灰～灰オリーブ色	5Y6/1～5Y5/3	
65	17	T6		表土	須恵器	壺？	小片	-	3.9～	-	1㎜以下の白色粒微量	良好	灰色	外：N5/0 内：10Y6/1	
65	18	T7 拡張		表土	須恵器	坏身	小片	-	2.7～	-	1㎜以下の白色粒微量	良好	灰色	N6/0	
65	19	T7		暗褐色造成土	須恵器	坏蓋	小片	-	1.6～	-	1㎜以下の白色粒少量	良好	灰色	外：5Y5/1 内：5Y6/1	大谷分類Ｂ１型
65	20	T6 T7	周溝	黒褐色土	土師器	坏	1/3	(11.0)	3.8～	(6.0)	0.5㎜以下の白色粒・黒色粒多量	良好	にぶい黄橙～黒色	10YR7/4～10Y2/1	内外面スス付着
65	21	T7		表土	須恵器	皮袋形	小片	-	4.2～	-	1㎜以下の白色粒微量、黒色粒多量	良好	灰黄～暗オリーブ色	2.5Y7/2～5Y4/3	
65	22	T7		表土	須恵器	皮袋形？	小片	-	4.0～	-	1㎜以下の白色粒少量	良好	灰白色	N7/0	口縁部内面に剥離痕
66	1	T6・T7	周溝	黒色土	埴輪	円筒	1/3以上	(24.4)	21.0～	-	1㎜以下の砂粒多量、1㎜以下の粘土ブロック含む	良好	橙色	5YR6/8	タテハケ
66	2	T6・T7	周溝	黒色土	埴輪	円筒	3/8以下	33.8	20.5	-	2㎜以下の砂粒多量、4㎜以下の粘土ブロック含む	良好	明赤褐色	5YR5/8	ナナメハケ
66	3	T6	周溝	黒色土	埴輪	円筒	1/8	(27.0)	4.4～	-	1㎜以下の砂粒多量、5㎜以下の粘土ブロック含む	良好	明赤褐色	5YR5/8	ナナメハケ
66	4	T7		造成土	埴輪	円筒	小片	-	3.1～	-	2㎜以下の白色粒少量	良好	明赤褐色	5YR5/8	内外面：ナデ
66	5	T6	周溝	黒褐色土	埴輪	円筒	小片	-	3.5～	-	2㎜以下の白色粒・黒色粒少量	良好	明赤褐色	5YR5/8	外面：ナデ 内面：ヨコハケのちナデ
66	6	T6・T7	周溝	黒色土	埴輪	円筒	1/4	-	13.9～	-	2㎜以下の白色粒少量	良好	明赤褐色	5YR5/8	上段：タテハケ 基底部：タタキ
66	7	T6・T7	周溝	黒色土	埴輪	円筒	1/8	-	14.0～	-	2㎜以下の黒・白色粒多、5㎜以下のブロック少	良好	明赤褐色	5YR5/8	タテハケのちナデ
66	8	T6・T7	周溝	黒褐色土	埴輪	円筒	1/6	-	13.2～	-	1㎜以下の白色粒少量	良好	明赤褐色	5YR5/8	ヨコハケ、ナデ
66	9	T7		表土	埴輪	円筒	1/8	-	6.3～	-	2㎜以下の白色粒少量	良好	外：にぶい赤褐色 断：明赤褐色	外：5YR5/4 断：5YR5/8	ヨコハケ
66	10	T6・T7	周溝	黒色土	埴輪	円筒	1/6	-	10.5～	-	2㎜以下の白色粒少量	やや不良	外：橙色 内：明褐色	外：7.5YR6/8 内：7.5YR5/8	タテハケ タガ不整形
66	11	T6・T7	周溝	黒色土	埴輪	形象	小片	-	7.4～	-	2㎜以下の白色粒微量	良好	明赤褐色	5YR5/6	一部突帯正面を強くナデつける ヨコハケ
66	12	T7		暗褐色土	埴輪	円筒	小片	-	4.2～	-	1㎜以下の白色粒少量	良好	橙色	2.5YR6/8	
66	13	T7		表土	埴輪	形象？	小片	-	9.2～	-	1㎜以下の白色粒・橙色粒多量	良好	外：明赤褐色 内：褐色	外：5YR5/8 内：7.5YR4/4	ナナメハケ、ヨコナデ 基底部タタキなし
66	14	T6・T7	周溝	黒色土	埴輪	円筒	小片	-	3.8～	-	1㎜以下の白色粒・橙色粒多量	良好	明赤褐色	5YR5/8	底端部カット
66	15	T7	周溝	黒色土	埴輪	円筒	小片	-	5.2～	-	2㎜以下の白色粒・橙色粒多量	良好	橙色	5YR6/8	ナナメハケ 底面ハケ状工具アタリ

凡例：口径・底径値の（　）は遺存状況が 1/6 以下であることを示す。単位は㎝、ST はサブトレンチを示す。
弥生土器・古式土師器の分類は、赤澤秀則 1992「出土遺物・時期」『南講武草田遺跡』鹿島町教育委員会による。
須恵器の分類は、大谷晃二 1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第 11 集による。
土師器の分類は、松山智弘 1991「出雲における古墳時代前半期の土器の様相―大東式の再検討―」『島根考古学会誌』第８集による。